

ラオスの国民形成と言語ナショナリズム

— 植民地時代から社会主義革命まで（1893-1975年） —

「一橋大学審査博士学位論文」

2009年6月

一橋大学大学院言語社会研究科

博士課程

学籍番号 LD0122

矢野順子

目 次

目次	1
凡例	4
地図	5
はじめに	6
0-1 問題意識	6
0-2 ラーオ語とタイ語	8
第1章 先行研究と本論考における課題設定	10
1-1 定義—言語ナショナリズム	10
1-2 言語とナショナリズム	11
1-2-1 ナショナリズム論と言語—コミュニケーション機能と象徴機能	12
1-2-2 ベネディクト・アンダーソン—想像の共同体の言語	15
1-2-3 大ノ小言語ナショナリズム	18
1-2-4 植民地支配と言語	20
1-3 ラオス研究史	23
1-3-1 ラオス・ナショナリズム	23
1-3-2 ラーオ語ナショナリズム	26
1-4 本研究の視角	27
1-5 研究方法と資料	29
1-5-1 研究方法	29
1-5-2 論文に使用する資史料	31
1-5-3 論文の構成	31
第2章 「ラオス」の誕生—国境線の設定とラーオ人の分断	33
2-1 ラーンサーン王国の繁栄と分裂	33
2-2 シャムとフランスの国境交渉—「ラーオ語」の境界設定	34
2-3 「失地」回復と大タイ主義	36
2-4 大タイ主義への対応—ラオス刷新運動の展開	37
2-5 ラーオ・イサラ運動	38
2-6 ラオス内戦—「30年闘争」と分裂するラーオ語	39
第3章 フランス植民地時代（1893—1945）	41
3-1 ラーオ語正書法とタイ語正書法	41
3-2 フランス人による「ラーオ語」認識—言語の序列化	45

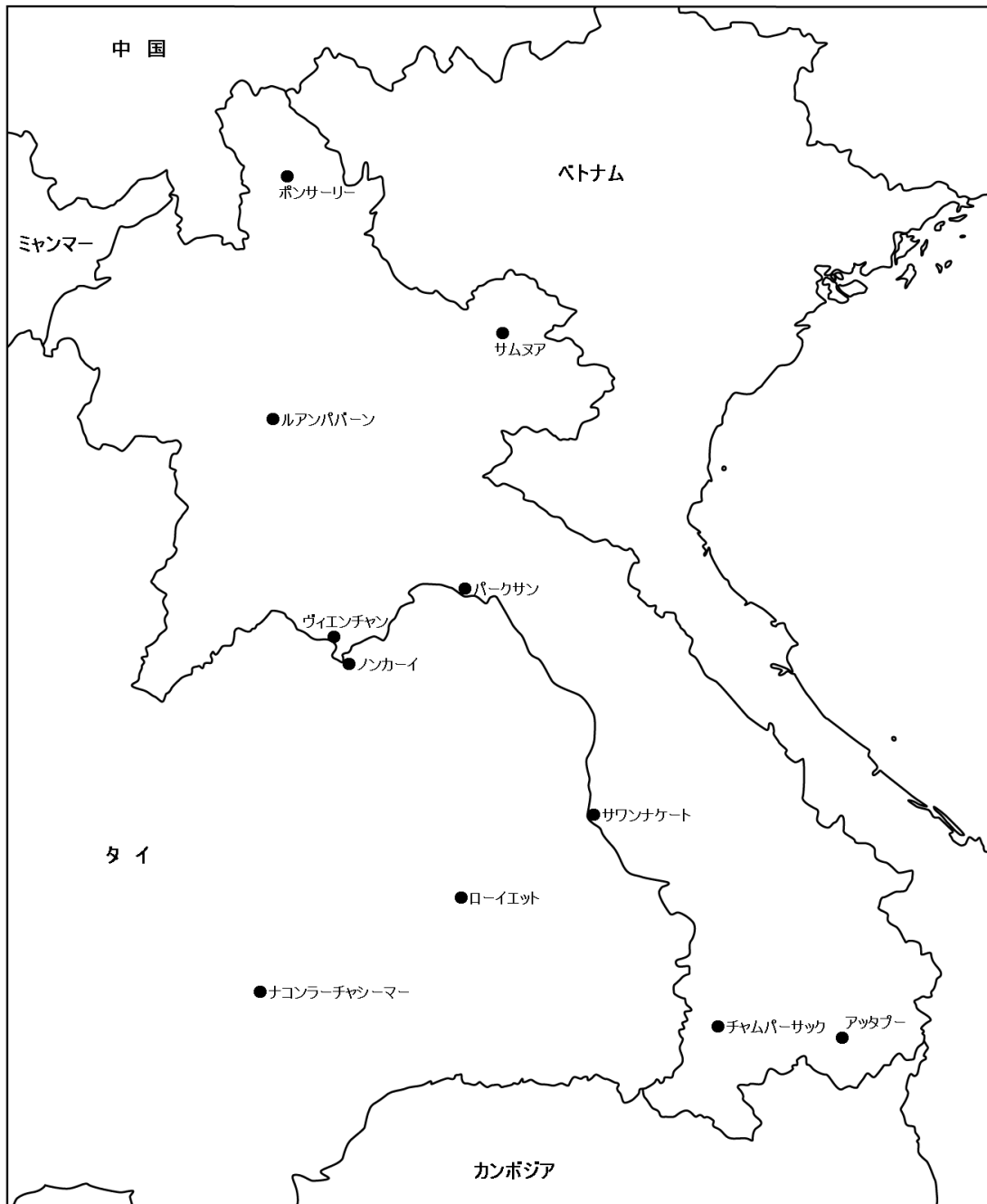
3-2-1	フランス人によるラーオ語出版物	45
3-2-2	ラーオ語とタイ語の序列化	48
3-2-3	ラーオ語の「再建」と「保護者」フランス	52
3-3	ラーオ語正書法論議	55
3-3-1	議論の開始	55
3-3-2	語源型正書法と仏教教育の近代化	57
3-3-3	音韻型正書法—序列の逆転	60
3-3-4	ローマ字化をめぐって—文字ナショナリズムの高まり	67
3-4	語彙の問題—新語と正書法	70
3-5	国民の言語、国民の文字、ラオス国民	75
第4章 ラオス王国政府		79
4-1	ラーオ語標準化へ向けて—ラオス文学委員会の設置	80
4-1-1	1949年の国王令	80
4-1-2	ラオス文学委員会	80
4-1-3	『文学（ワンナカディーサーン）』	82
4-1-4	文字ナショナリズム—「文明的な」ラオス国民とラーオ文字	83
4-1-5	文学委員会の任務—言語の独立と国家の独立	85
4-1-6	ラーオ語正書法を巡る攻防	86
4-2	ラーオ語の「歴史」—「ラーオ語族 Sakun Phasa Lao」の形成	91
4-2-1	ラーオ語、ラーオ族の「起源」—「ラーオ語族」	92
4-2-2	ラーオ語の「歴史」—「没落」と「復興」	93
4-2-3	タイ人は「ラーオ系民族」か？	95
4-2-4	マハー・シラーと王国政府エリート—教育的バックグラウンド	95
4-3	言語による階層分化	97
4-3-1	『サート・ラーオ』新聞と言語ナショナリズムの昂揚	97
4-3-2	ラオス・ロイヤルアカデミー	99
4-4	雑誌『パイ・ナム』	101
4-4-1	世俗教育とフランス語	102
4-4-2	仏教教育とフランス語	106
4-4-3	タム文字か、ラーオ文字か—「国民の文字」をめぐって	108
4-5	ラーオ語かタイ語か—否定的同一化	112
4-5-1	新しい娯楽とタイ語	112
4-5-2	「パーサー・パーシァ」	114
4-6	王国政府の言語ナショナリズム	119

第5章	パテート・ラーオー「武器」としてのラーオ語	121
5-1	パテート・ラーオのラーオ語教育政策	122
5-1-1	ラーオ語教育政策の開始	123
5-1-2	内戦の激化とラーオ語教育の進展「武器」の普及	127
5-2	ラーオ語—唯一の「武器」	133
5-2-1	ローマ字化の不採用と国民的特徴	133
5-2-2	語彙の整備とスパークウォン	134
5-2-3	プーミー・ウォンウィットトの『ラーオ語文法』	135
5-3	ラーオ語が運んだイデオロギー—道徳（クンソムバット）教科書	142
5-3-1	愛国心形成プロセス、ラーオ語という土台	144
5-3-2	諸民族の団結	147
5-4	プロパガンダとしてのラーオ語教育	150
5-4-1	小説『母語』	150
5-4-2	ラーオ語教育—もうひとつの「武器」	152
5-4-3	「武器」の行方—中立への期待と挫折	155
5-5	パテート・ラーオの言語ナショナリズム	158
第6章	言語ナショナリズムの展開	161
6-1	フランス植民地時代—植民地支配下の言語ナショナリズム	161
6-2	王国政府—分裂する言語ナショナリズム	162
6-3	パテート・ラーオー革命と言語ナショナリズム	163
	おわりに	167
	主要参考文献	171
	謝辞	183

凡 例

1. ラオス人の人名、地名などは原則としてラーオ語の発音に近い形でカタカナ表記した。
2. ラオス人の地名、ラーオ語書名のローマ字表記、引用箇所のローマ字表記に関しては、原則として、アメリカ議会図書館の翻字法である ALA-LC 方式に拠った。ただし、母音の /**u**/ と /**ε**/ に関しては、フォントの関係から、それぞれ **ue**、**e** と表記した。また、/?/ は ALA-LC 方式では ‘であるのを直接母音からはじめるかたちに変更した。母音に関しては、長短の区別はつけていない。ALA-LC 方式(<http://www.loc.gov/catdir/cpsd/romanization/lao.pdf>)。また、人名や地名、雑誌・新聞名で慣例となっている表記がある場合はそちらを採用した。
(例：ラーオ・ニャイ Lao Nyai→Lao Nhay)
3. 本論文中でとくにラーオ語、タイ語の語彙の綴りについて説明する際のローマ字表記は、実際に使われている文字を再現するために、一部で 2 とは異なる表記を採用した。具体的には頭子音となる場合の /**c**/ が ALA-LC 方式では **ch** となるのに対し **c** に、/?/ は ‘であるのを直接母音からはじめるかたちに変更し、末子音 /**y**/ も ALA-LC 方式では **i** が採用されているのを **y** とした。また母音の長短も、文字を重ねることによってあらわした。例えば「先生」“アーチャー”は ALA-LC 方式では ‘**āchān** となるのに対し、**aacaan**(ラーオ語)**aacaary** (タイ語) とあらわした。
* パーリ語、サンスクリット語は母音の上に線を引いて長母音をあらわした。
(例：ā)

ラオス地図



はじめに

0-1 問題意識

ラオスは19世紀後半に、シヤムとフランスの間でなされた国境交渉の結果、はじめて近代的な国境線で区切られた領域として出現することとなる。今日のラオスは、このときに区切られた領域を継承したものであり、これは過去にこの地域に存在した、いかなる王国の領域とも完全には一致するものではない。ラオスは国土の大半が山岳地帯という地理的条件に加えて、14世紀に建国されたラーオ族最初の統一王朝とされる、ラーンサーン王国は、18世紀初頭にはルアンパバーン（北部）、ヴィエンチャン（中部）、チャムパーサク（南部）の3王国へと分裂し、18世紀末までにはすべてがシヤムの属国となっていたという歴史的背景もあって、もとより国内の地方割拠性が強い。そしてさらに言語、習慣を異にする少数民族の存在、言語的・民族的に近似した隣国タイとの関係など、複雑な問題が絡み合い、現在にいたるまで、その国家建設は困難をきわめてきた。

第二次世界大戦後、アジア・アフリカ諸国が次々と独立を達成するなか、ラオスは1953年に「ラオス王国」として、フランスからの完全な独立を達成する。しかし、独立運動の過程で生じた左右両派への分裂が、独立後も解消されることはなく、1975年まで「30年闘争」とも呼ばれる内戦状態がつづいた。そしてその結果、ラオスの国家建設は、王国政府（右派）とパテート・ラーオ（左派）の対立する両陣営において、異なる理想のもとにすすめられることとなり、その際、両者がともに重視したのが、ラーオ語を国民語としてつくりあげ、国民統合の求心軸として据えていくことであった。

一般に、言語が国民形成に果たす役割としては、コミュニケーション手段としての媒介能力と、国民がその言語を共有することに何か特別な価値を見出すような、国民統合の象徴としてのシンボリックな機能のふたつが挙げられる。この二つの見方を橋渡しするようなナショナリズム論に、ベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)の「想像の共同体」論がある[アンダーソン 1997]。かつてカール・ドイッチュ(Karl Deutsch)は、現実におこなわれる「社会的コミュニケーション」に国民形成の基礎を見出した[Deutsch 1953]。これに対してアンダーソンは、出版資本主義の発展による共通の出版語の普及が、見ず知らずの読者の間に「想像上のコミュニケーション」の場を提供し、国民という「想像の共同体」の出現が可能となったのだとする。そしてその際、アンダーソンは、出版語が「何語であるか」は問題ではないとして、言語の排他性を否定し、包括性を強調している。

言語の包括性に注目した、アンダーソンのモデルは、ラテンアメリカやアフリカ諸国など、言語が争点とならなかったナショナリズムのケースを論じるには有効であり、また出版語の流通が、国民形成にあたって重要な役割を果たしてきた

ことは、もはや否定することはできないであろう。しかし一方で、包括性を過度に強調することは、国民語の「境界」が生成される過程において、シンボリックな機能が果たす役割を過小評価することにもなりかねない。例えばアンダーソンのモデルでは、ラオスにおけるタイ語出版物の流通は、ラーオ語出版物を上回るほどであったにもかかわらず、タイ語は「ラオス国民」を想像する媒体とはなりえなかった、という事実をうまく説明することができない。ラオスにおいて、タイ語が「ラオス国民」の形成になんらかの役割を果たしたとすれば、人びとがタイ語との区別をとおして、ラーオ語、ラオス国民を想像するという、「否定的同一化」の媒体として機能していたということであり、このことはまた、旧宗主国語であるフランス語についても同様である。ラオスの歴史をみると、タイ語、フランス語からのラーオ語の言語的独立は、つねに第一の課題として掲げられてきており、タイ語やフランス語の使用には、強い抵抗が存在した。これは「ラーオ語」に「ラオス国民」の政治的独立の象徴としての役割を求めた、強い言語ナショナリズムによるものにほかならず、このことは正書法や語彙の整備など、言語のコミュニケーション機能に関わる領域にも影響を及ぼしてきた。

以上を踏まえたうえで、本論文では、植民地時代以降、ラーオ語がラオスの国民語として形成されていく過程が、ラオスの国民形成にどのように関わるものであったのか、明らかにすることを目的とし、考察をおこなっていく。その際、国民語のシンボリックな機能が、コミュニケーション手段としての言語の「あり方」にどのような影響を及ぼすのか、ふたつの機能の関わりに注目し、ラーオ語の「境界」とともに、ラオス国民の境界が生成されていく様子を描きだしていく。そして植民地時代、フランスによって着手されたラーオ語を「つくる」作業が、パテート・ラーオと王国政府にどのように継承されていったのか、両者の比較をとおして、明らかにしていきたい。結論を先取りして言えば、ラーオ語の形成はタイ語、フランス語からの言語的独立をはかるかたちですすめられていった。タイ語に関しては、植民地時代、「保護者フランス」のもとで、ラーオ語をタイ語の下位におく、言語の序列が構築されるが、それは間もなく、ラーオ人エリートたちによって覆されることとなる。以後、ラーオ語の形成は、タイ語からの差異化を第一にすすめられることとなり、タイ語はいわば、人びとがそれをとおして、ラーオ語の実像をつくりあげていく、「否定的同一化」の触媒としての役割を果たしていった。一方、フランス語に対しては独立後、王国政府エリートたちのフランス語重視が、言語を要因とした社会的不平等を増進させ、人びとの間に言語ナショナリズムを昂揚させていくこととなった。そしてこの言語ナショナリズムを利用して、巧みなプロパガンダを展開したことが、パテート・ラーオが最終的な勝利をつかむ一因ともなったことを示し、王国政府側の言語ナショナリズムが、パテート・ラーオへと取り込まれていく様子を浮き彫りにする。パテート・ラーオに関しては、さらに少数民族へのラーオ語普及に際して、進歩的なラーオ族という言説が

つくりあげられ、ラーオ族主体の国民統合を補強する役割を果たしていたことを明らかにする。

なお「ラオス」は「ラーオ」と表記する方が、実際の現地の発音により近いものとなる。しかし、「ラオス」という名称が国名として日本において定着していること、またラオスは多民族国家であり、ラオス国民をラーオ人とすると、それが主要民族ラーオ族の人を指すのか、ラオス国民全体を指すのかが不明瞭なものとなってしまのおそれがある。そのため、本論文では国民と国民名に関しては「ラオス」を採用した。一方、言語に関してはラーオ族の言語が、ラオスの国民語となっている、ということを示す意味で「ラーオ語」を採用した。以下、最初にラーオ語とタイ語の関係について、簡単に説明したうえで、第1章において、先行研究を批判的に検討していくこととしたい。

0-2 ラーオ語とタイ語

第1章に進む前に、本論文にとって重要となる、ラーオ語とタイ(Thai)語の関係について、ごく簡単に説明しておきたい。ラーオ語とタイ語は、タイ・カダイ(Tai-Kadai)語族のタイ(Tai)諸語南西タイ(Southwestern Tai)語群に分類され、両者の違いは方言ほどのものでしかないとされている¹[鈴木 1998: 115]。ともに単音節声調言語であり、基本的な語は一音節語で、音節全体に音の高低の抑揚である声調がかかる。音韻体系についていえば、子音と声調の表れ方にいくつか相違点があるものの、母音体系は全く同じである[表 0-1]。

例えば、ラーオ語もタイ語も「行く」は同じく“パイ”であるが、タイ語が平坦な声調/*pay*/であるのに対し、ラーオ語では低めに始まって高く上がり/*pǎy*/となるなどの違いがある。また、タイ語に存在する子音の/*r*/がラーオ語にはなく、例えば数字の「百」はタイ語では“ローイ”/*rǒy*/であるのに対し、ラーオ語では“ホーイ”/*hǒy*/となるように、ラーオ語では/*h*/か/*l*/に対応する。そして、この/*r*/を表わす子音字をラーオ文字に含めるかどうか、ラーオ語の正書法を議論するにあたって、つねに争点となってきた。

今日、テレビ放送、音楽、出版物などをおおしての、ラーオ語へのタイ語の影響が著しい。そうしたなか、ラーオ語では本来“ホーイ”であるはずの数字の「百」が、タイ語の影響で“ローイ”/*lǒy*/、となってしまうなど、タイ語の影響を受けて、変容したラーオ語の語彙が多数みられるようになっている²。現在、ラオスでは小

¹ 現地語ではタイ諸語のタイは無気音、タイ王国のタイは有気音の違いがある。本論文では必要に応じて、タイ諸語、タイ系民族を指す場合は、**Tai**、タイ王国のタイ語、タイ人を指す場合は、**Thai**を付すことにする。タイ系民族について、詳しくは第2章で後述する。

² すなわち、本来、/*h*/に対応するはずが、タイ語の影響により/*l*/に対応するようになったものである。現在でもラオスの学校では、「百」は“ホーイ”と教えているが、市場の売り子や町中の人びとは大半が“ローイ”と発音している。

さな子供であっても、タイ語をほぼ問題なく理解することができるとされ、筆者が留学中もラオスの子供たちが、タイ語の語彙を口にするのを頻繁に耳にした。

文字に関しても、ラーオ語とタイ語ではインド系の、非常によく似た形態の文字がその表記に用いられている[表 0-2]。

[表 0-1] ラーオ語、タイ語の音韻体系

<p>1) ラーオ語</p> <p>子音/p, t, c, k, ʔ, ph, th, kh, b, d, m, n, ɲ, ŋ, f, s, h, l, w, y/</p> <p>母音/i, e, ɛ, ɯ, ə, a, u, ɔ, o/</p> <p>声調/33//21/52//34//25/(/22/)</p>
<p>2) タイ語</p> <p>子音/p, t, c, k, ʔ, ph, th, ch, kh, b, d, m, n, ɲ, f, s, h, l, r, w, y /</p> <p>母音/i, e, ɛ, ɯ, ə, a, u, ɔ, o/</p> <p>声調/33//11//52//45//25/</p> <p>* 末子音はタイ語、ラーオ語ともに/p, t, k, ʔ, m, n, ɲ, w, y/</p> <p>子音結合/pr, pl, phr, phl, tr, kr, kl, kw, khr, khl, khw/は、タイ語には存在するが、ラーオ語には一部、正書法上は存在するものがあるが、音韻としては存在しない。</p>

出典：[上田・木口 1998][鈴木 1998]をもとに筆者が作成。

[表 0-2] タイ語とラーオ語で同一内容を記したもの

タイ語	ラーオ語
<p>จำปาเมืองลาว</p> <p>โด้ดวงจำปา เวลาชมน้อง นึกเห็นพันช่อง</p> <p>มองเห็นหัวใจ เสาขึ้นได้ ในกลิ่นเจ้าหอม</p>	<p>ຈຳປາເມືອງລາວ</p> <p>ໂອ້ດວງຈຳປາ ເວລາຊົມນ້ອງ ນຶກເຫັນຜົນຊ່ອງ</p> <p>ມອງເຫັນຫົວໃຈ ເຮົານຶກຂຶ້ນໄດ້ ໃນກິ່ນເຈົ້າຫອມ</p>

出典：[Phitsanu 2002: 123-124]をもとに筆者が作成。

第1章 先行研究と本論考における課題設定

1-1 定義 - 言語ナショナリズム

ナショナリズムについての様々な定義のなかで、今のところ最も有力といえるのが、「ナショナリズムとは、第一義的には、政治的な単位と民族的(national)な単位とが一致しなければならないと主張する一つの政治的原理である」[ゲルナー2000: 1]とした、ゲルナー(Gellner)の定義であろう。この定義は「民族(nation)」の存在を前提とするが、しかし「民族」とは何かを定義することもまた、ナショナリズムの定義と同じぐらい、困難が伴うものである。ゲルナーは「民族」を、ナショナリストのいうような、原初的な自明の存在などではなく、「国家と同じように偶然の産物であって、普遍的に必然的なものではない」とする[ゲルナー2000: 11]。そして「当座しのぎで一時的なもの」と断ったうえで、次の二つを「民族」の定義として挙げている。

- ① 二人の男は、もし彼らが同じ文化を共有する場合に、そしてその場合にのみ、同じ民族に属する。その場合の文化が意味するのは、考え方・記号・連想・行動とコミュニケーションとの様式から成る一つのシステムである。
- ② 二人の男は、もし、彼らがお互いを同じ民族に属していると認知する場合に、そしてその場合にのみ、同じ民族に属する。換言するならば、民族〔ネイション〕は人間が作るのものであって、民族とは人間の信念と忠誠心と連帯感によって作り出された人工物なのである[ゲルナー2000: 12]

しかしゲルナー自身も認めているように、「文化」という概念もまた、それが何を指すのかについて、明確な定義が存在するわけではない。「考え方・記号・連想・行動とコミュニケーションとの様式から成る一つのシステム」であるという「文化」について、ゲルナーは後の箇所、以下のように説明している。

ナショナリズムとは、文化と政治体とを一致させ、文化にその自前の政治的屋根を、しかも一つの文化に一つだけの屋根を与えようと努めることである。つかまえておかない概念である文化は、故意に定義されないままであった。しかし、少なくとも暫定的に受け入れられる文化の基準は、言語であろう。それは必須というのではないが、少なくとも文化の十分な試金石であろう。言語の違いは必ず文化の相違を伴うこと（必ずしもその逆は言えないが）をしばらくの間認めようではないか[ゲルナー2000: 73-74]。

これは「民族的単位と政治的単位」の一致を求めるといって、冒頭のナショナリズム

ムの原理」を言い換えたものといえ、ここでゲルナーは、暫定的なものではあるが、言語が文化の「試金石」であることを認めている。「民族」がここでは「文化」と言い換えられており、とすれば先のナショナリズムの原理を、言語的＝政治的＝民族的単位的一致を目指す政治原理、として言い換えることが可能といえよう。もともと「必ずしもその逆は言えないが」と断っていることから明らかなように、ナショナリズムを近代以降の現象とみるゲルナーは、「言語」を決して原初的な意味で用いているわけではない。本論文では、言語もまた「つくられる」ものであるということを前提とした上で、この言語＝政治（国家）＝民族(国民)の一致を目指す原理を「言語ナショナリズム」と定義することとしたい。

以下、本論に入る前に、言語とナショナリズム、そしてラオスに関する既存の研究を概観し、本論文の位置づけを行うこととする。

1-2 言語とナショナリズム

偉大なるかのヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダーは 18 世紀末にこう宣言している。「あらゆる民^{フォルク}は国民であり、それ自身の国民的性格とそれ自身の言語をもつ」このすばらしく狭小なヨーロッパ的国民概念、私有財産的言語と結合した国民の概念は、19 世紀ヨーロッパにおいて広範な影響力をもち、さらにより狭く、ナショナリズムの性格に関する後年の理論化に影響を及ぼしてきた[アンダーソン 1997: 121]。

言語とネイションの関係に宿命性を見出し、固有の言語の有無を、「ネイションであること」の尺度基準とする、いわゆる民族言語型ナショナリズムは、その起源をドイツのヘルダー(Herder)に辿るのが通説となっている[Wright 2000][Edwards 1985][Myhill 2006][Fishman 1972]。ヘルダーの思想はその後、フィヒテ(Fichte)たちによって継承され、19 世紀以降、ヨーロッパのナショナリズム運動に大きな影響を与えた。しかしホブズボーム(Hobsbawm)が、

国民的言語とは、ほとんど常に半ば人工的に作られたものであり、時には現代ヘブライ語のように、実質的に創案されることもある。だから、国民的言語は、ナショナリストの神話が想定していること、つまり、国民的言語は民族的文化の原初からの基盤であり、民族的精神の母型である、という想定とは正反対のものである。それらはたいてい、実際に話されている多数の言葉から、標準語を設定しようとして作り出されたものである[ホブズボーム 2001: 67-68]。

と述べているように、言語、とりわけ「国民語」が人工的に「つくられる」存在であることは、現在、アカデミックな領域において、もはや自明の「常識」となっ

ている。本節では、まずナショナリズム研究の中で言語がどのように扱われてきたのか、ごく簡単に概観したうえで、近代主義の代表的人物である、ベネディクト・アンダーソンの議論、大/小言語ナショナリズム、植民地支配と言語の各項目について、先行研究を批判的に検討していくことにしたい。

1-2-1 ナショナリズム論と言語ーコミュニケーション機能と象徴機能

ネイションとナショナリズムをめぐっては、これまで様々な議論がなされてきた。しかしながら、ハッチンソン(Hutchinson)とスミス(Smith) が指摘するように、いまだこの二つの概念についての決定的な定義は存在せず、このことは、ナショナリズム研究の大きな障壁となっている[Hutchinson & Smith 1994: 4]。その結果、言語とナショナリズムに関しても、言語をネイションの尺度基準とするものから、言語はナショナリズムや国民形成と本質的にかかわりをもたないとするものまで、多様な見解が交錯し、いまだ共通の了解を得るにいたってはいない。

ナショナリズム論における主要な対立軸としては、ネイションの起源を近代以降とみるか、前近代に遡るかという、いわゆる近代主義と原初主義の対立が挙げられる。現在では、ネイションを近代化過程の中で「つくられる」ものととらえる前者が、優勢となっている。例えば、近代主義の代表的人物であるゲルナーは、ナショナリズムを、農耕社会から産業社会への移行に伴って必然的に生じたものであるとし、アンダーソンは、出版資本主義の発展が、出版語を共有する人びとの間に、特定の連帯感を醸成し、ネイションという新しい「想像の共同体」の出現を可能にしたのだとする[ゲルナー 2000][アンダーソン 1997]。しかし、近代主義の過度な強調は、産業化や都市化を契機に、あたかも白紙の状態から、突然ネイションが出現するかのような印象を与えることにもなる。こうした傾向に対して、例えばスミス(Smith)は、近代的ネイションには前近代のエトニと呼ばれる原型があるという見方を提起して、産業化の必然によりネイションが出現したとするゲルナーを批判した[スミス 1999]。またトンチャイ(Thongchai)も、アンダーソンのようにネイションが「想像の共同体」であるとすれば、その想像に際して、前近代社会との摩擦が存在したはずであり、古い媒体との摩擦をとおして、ネイションが「想像され」ていく過程に注目する必要性を指摘している[トンチャイ 2003]。

一方、近代主義者のなかでも、社会学的手法をとるアンダーソンやゲルナーと異なり、ナショナリズムを人間と社会、政治との複雑な相互作用によって生み出される教義と捉え、「教義としてのナショナリズム」という観点を打ち出したのがケドゥーリー(Kedourie)である[黒宮 2002: 135]。ケドゥーリーは、

ナショナリズムは 19 世紀初頭にヨーロッパで創り出された教義である。[中略]

この教義によると、人類は本来的にもろもろの民族〔ネイション〕にわかれており、諸民族はそれと確認できる一定の特徴によって識別されうるものである。したがって唯一の正統な統治形態は民族の自治だということである[ケドゥーリー 2000: 1]。

として、教義としてのナショナリズムの起源を 19 世紀ドイツのロマン主義思想に求めた。この教義において、諸ネイションを識別するための「一定の特徴」が言語であることは、ケドゥーリーが後の箇所でも、フィヒテを引用しながら、次のように述べていることから明らかである。

民族〔ネイション〕がその存在を認められる尺度基準というものは言語のそれである。同一の言語を話すグループは一個の民族として認められ、また一つの民族は一つの国家を形成すべきなのである。ある特定の言語を話すグループの人びとは、その言語を保持する権利を主張することができるということにとどまらない。むしろ、そのような民族であるところの 1 グループは、もしそれが一つの国家に形成されないとすれば、民族であることをやめるだろうということなのである[ケドゥーリー 2000: 65]。

ケドゥーリーは、このような言語の強調が、言語を以前とは異質のもの、すなわち言語をめぐって「人びとが簡単に殺し合い絶滅し合おうとする、政治的争点に変質」させ、「国際社会の秩序ある機能」を極めて困難なものとした[ケドゥーリー 2000: 68]、とナショナリズムに否定的な評価を与えている。

ケドゥーリーに対しては、ドイツを中心とした個別的な事例を、ナショナリズム一般として議論を展開している点、彼の定義がいわゆる民族言語型ナショナリズムを記述したに過ぎないなどの批判がある[黒宮 2002: 140][Smith 1971]。なかでもスミスは、ケドゥーリーが、言語を重視することで、ナショナリズムのネガティブな側面を強調しすぎていることを問題視した。そしてケドゥーリーへの反証として、

アフリカでは、ネイションと言語共同体の一致が主張されることはほとんどない。これはさらなる“バルカン化”を防ぐためだけではなく、書き言葉の伝統や聖典の教育制度のような、言語を統合力へと転換するファクターが著しく欠落しているからである。ギリシア、イスラエル、ビルマ、パキスタン、インドネシアなどのようなケースでも、宗教がより有力な自己規定として、ナショナル・アイデンティティのためのより深遠で、より確実な土台を提供している。一般的に言って、言語的尺度が社会的に重要なのはヨーロッパと（ある程度）中東においてのみである[Smith 1971: 18-19]。

とし、世界各地で言語がナショナリズムの争点とならないケースが存在することを指摘している。

たしかに、フィヒテに代表される 19 世紀ドイツのナショナリズム・イデオロギーによって、ナショナリズムを定義しようとしたケドゥーリーの手法には問題がある。しかしスミスにしたがえば、ヨーロッパと中東以外の地域、すなわち、本論文が対象とするラオスを含む、東南アジア地域のナショナリズムにおいても、言語は重要ではないということになり、これは明らかに事実とは異なっている。例えばラオスでは、隣国タイとの関係において、ラーオ語は「ラオス」独自のナショナル・アイデンティティの拠り所として、常に重視されていた。タイからの文化的独立という観点において、ラオスとタイの主要民族であるラーオ族とタイ族はともに上座仏教を信仰しており、宗教のみでは、ラオスの独自性を主張するには十分ではなかったのである。

ライト(Wright)は、ナショナリズム論の理論家たちの間で、国民形成における言語の役割を過小評価する傾向が見られることを指摘する[Wright 2000]。一般に、言語が国民形成に果たす役割としては、コミュニケーション手段としての実際的役割と、国民統合の象徴としての役割が挙げられる[Wright 2000][Edwards 1985]。ライトは、前者を強調するものは、言語の役割に肯定的であるのに対し、後者に重点をおくものは、否定的な評価を下す傾向があるとする[Wright 2000: 63-64]。そしてこの要因のひとつとして、民族言語型ナショナリズムがかつて、人種主義とも結びついたという、「負の歴史」を挙げている。

ドイッチュ以降、ゲルナー、アンダーソンら近代主義の理論家たちが、程度の差はあれ、ともに近代化に伴うコミュニケーション手段としての、言語の役割の変化を重視していた一方、ケドゥーリーが、言語ナショナリズムを否定的に捉えていたことを鑑みれば、ライトの指摘は妥当といえる。しかしこうした傾向に対して、ホブズボームが「確かに、言語は、実際の使用の問題よりもその象徴的意味が大きければ大きいほど、社会工学における課題としてますます意識されるようになる」[ホブズボーム 2001: 144]というように、象徴的意味が、ときに語彙の「土着化」のような、言語の体系に直接、影響を及ぼすこともありうるということを、思い起こす必要がある。したがって、言語の象徴性を単なるナショナリストの妄想や「つくりもの」として、切り捨ててしまえば、ネイションと言語の関係を考察するうえで、不十分なものになってしまうおそれがある。すなわち、ここではそうした「象徴的意味」を否定的なものとして退けるのではなく、それがコミュニケーション手段としての言語の「あり方」に、どのような影響を及ぼすのか、両者の関係を明らかにすることこそが重要なのである。

もっとも、それだけでは十分ではない。ホブズボームは、ナショナリストの「情熱」に対して、そもそも、「話したり、書いたり、理解したりすることなど眼中にない熱情であり、文学精神とさえ一切関係がない」と懐疑的である[ホブズボーム

2001: 144]。これは少々言い過ぎであるとしても、彼が「教育と行政において公的承認を受け、それらの公的権威を後ろ盾にすることができなかつたならば、どうやって家庭や地域で使っている言葉を国民的文化あるいは世界的文化において支配的な諸言語に対抗できる言語に変えていくことなどできるであろうか」[ホブズボーム 2001: 145]といったとき、それは全く正しい。「いずれにしろ言語に基づくナショナリズムがその核心において問題にするのはコミュニケーションでもなければ文化ですらなく、権力や地位や政策やイデオロギーである」[ホブズボーム 2001: 142]とするように、言語ナショナリズムは、究極的には権力や政治の問題なのである。とくに、植民地状況においては、支配者の言語と土着語の関係は、しばしば脱植民地化の政治闘争とも密接に関わってくる。というのも、ナショナリストが「我々の言語」を国民語とするためには多くの場合、「支配者の言語」を追放しなければならなかつたからである。

以上、ナショナリズムと言語の関係を考察するにあたって、コミュニケーション能力と象徴性という、二つの機能のかかわりを見る必要があることについて述べてきた。次に、このことを念頭においたうえで、ベネディクト・アンダーソンの議論を、批判的に検討していくことにしたい。

1-2-2 ベネディクト・アンダーソン—想像の共同体の言語

ガーナ・ナショナリズムはその国民語がアシャンティ語ではなく英語なので、インドネシア・ナショナリズムほどほんものではないなどということを示唆するのはなにもない。ときにナショナリスト・イデオログがやるように、言語を、国民というものの表象として、旗、衣装、民族舞踊その他と同じように扱うというのは、常に間違いである。言語において、そんなことよりずっと重要なことは、それが想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築するというその能力にある[アンダーソン 1997: 210-211]。

前節で述べたとおり、ネイションとナショナリズムに関して、これまで様々な議論がなされてきた。そうしたなか、今日、もっとも有力といえるのが、国民(nation)を「イメージとして心に描かれた」、「想像の共同体」であるとした、ベネディクト・アンダーソンの定義であろう。アンダーソンは、言語が「想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築する」能力をもつとして、国民を「想像する」うえで、言語に重要な役割を与えている。それではアンダーソンにおいて、言語がどのようにして「想像の共同体」=国民の創出に関わると考えられたのであろうか。

上の引用箇所から、アンダーソンが先に述べた 2 つの機能のうち、象徴機能よりもコミュニケーション能力の方に、重きをおいているということが出来るだろう。しかしアンダーソンのモデルは、ドイツユのような、現実におこなわれる

社会コミュニケーションを前提とする立場とは異なっている [Deutsch 1953]。彼にとって言語が重要なのは、出版資本主義の発展とともに形成された「出版語」が、新聞や近代小説といった新しい媒体をとおして流通し、たとえ現実には一度も出会ったことのない相手であったとしても、読者の間に同一の時間と空間を構成する国民としての意識を醸成させる、想像上のコミュニケーションを構築する能力にあった。その意味で、アンダーソンのモデルは、コミュニケーション能力と象徴能力の橋渡しのものといえる。しかしながら一方で、アンダーソンもナショナリストの言説に見られるような、言語を国民の表象として扱うことは、「常に間違い」であると退けている。「モザンビークのポルトガル語、インドの英語のような言語についてまわる唯一の疑問符」は、教育によって政治的に十分なだけの二重言語の普及がみられるかどうかということであり [アンダーソン 1997: 211]、国民語が「何語であるか」は、本質的な問題ではなかったのである。

たしかに、ガーナやモザンビークなど、多くのアフリカ諸国において、旧宗主国語が国民語として採用されている事実を鑑みれば、アンダーソンの議論はだいたいにおいて正しい。しかしひとたび、植民地時代以降のラオスの歴史に目を向けてみれば、そこには決して、出版資本主義の発展だけでは説明することのできない、複雑な言語状況があった。実際、ラオスにおいて、出版市場での利益のみを追求するのであれば、宗主国語であるフランス語と、さらに同系統でラーオ語と非常に近い関係にあるタイ語を、国民語として採用する選択肢もありえた。植民地支配を受けることのなかったタイでは、タイ語の標準化がいち早く進められ、20世紀初頭までには、タイ語の教科書や辞書、新聞も発行されていた。したがってタイ語を採用すれば、ラーオ語の標準化に必要な経費と時間を削減できるだけでなく、国境を越えて、広範な読者を獲得できるという利点があった。しかし現実のラオスの言語政策では、ラーオ語をタイ語といかに異なる言語として「つくりあげて」いくかということが、常に課題として意識され、このことはラーオ語の正書法や語彙の選定にも強い影響を与えていた。

我々はいかなる言語でも習得することができる。しかし、言語の習得には人生のかなりの部分を必要とする。新しい征服のたびに、人生の残りの日々は減っていく。人が他者の言語に入っていくことを制限するのは、他者の言語に入っていくからではなく、人生には限りがあるからである。こうして、すべての言語は一定のプライバシーをもつことになる [アンダーソン 1997: 243]。

アンダーソンのこの言葉は、最後の一文を除いて、全くそのとおりであろう。しかしラーオ語とタイ語のように、両言語の母語話者であれば、習得するのにほとんど学習を必要としないような、言語の場合はどうであろうか。ラーオ語の存在にとってタイ語が脅威と感じられたのは、両言語の「近さ」ゆえに、「一定のプライ

バシー」をたもつことが困難と考えられたからであろう。であるとすれば、

国民を、歴史的宿命性、そして言語によって想像された共同体と見れば、国民は同時に開かれかつ閉ざされたものとして立ち現われる[アンダーソン 1997: 239]。

ということばは、少なくともラオスとタイの関係については、当てはまらない。アンダーソンにとって国民が「閉ざされている」ということが、ただ「バベルの宿命—誰もすべての言語を学ぶほど長生きすることは出来ない—」のみによるのであるならば、ラオス国民とタイ国民の間は、「閉ざされている」とはいえないからである。

言語は排斥の手段ではない。原則として、誰でも、どの言語でも学ぶことができる。それどころか、言語は本質的に包摂的であり、誰もすべての言語を学ぶほど長生きすることはできないという、あのバベルの宿命だけによって制約されている。ナショナリズムを発明したのは出版語である。決してある特定の言語が本質としてのナショナリズムを生み出すのではない[アンダーソン 1997: 211]。

アンダーソンと同様、筆者も「特定の言語が本質としてのナショナリズムを生み出す」というような、本質主義的な立場には同意しない。しかしながら、それでは新聞、雑誌、教科書などの出版物、テレビやラジオをとおして、ラオスの人びとが日々、タイ語に接しているにもかかわらず、タイ語は「ラオス国民」を想像する媒体とはなりえていない、という事実が意味することは何か。否、もしタイ語が「ラオス国民」を想像するにあたって、なんらかの役割を果たしてきたとすれば、それはトンチャイ(Thongchai)のいうところの「否定的同一化 negative identification」によって、逆説的に「ラオス国民」の想像に貢献した、ということができるかもしれない。エドモンド・リーチ(Edmund Leach)は高地ビルマの事例から、「ひとつの民族が自らを規定するのは、他の民族との違いによってであり、部族が共有しているとされるしかじかの特徴によってではない、後者は社会学の作りあげた仮構にすぎない」と指摘する[リーチ 1987][Leach 1970][トンチャイ 2003: 26]。トンチャイはこうした、他者との相違に基づいた自己規定のあり方を「否定的同一化」と呼び、国民をめぐる言説の多くが、国民としての同一性と、他国民との対立という二つの側面から成り立っているのだとした[トンチャイ 2003]。

これにしたがえば、メコン川を越え、ラオスへと流入するタイ語をラーオ語から区別する作業もまた、ラーオ語の「実像」を浮かび上がらせ、「我々の言語」として想像する、「否定的同一化」のひとつということができるのではないだろうか。何がラーオ語であり、ラーオ語ではないかを選別することは、必然的に「我々の

言語＝ラーオ語」と「彼らの言語＝タイ語」の間に境界を設ける作業となる。そしてこれが「ラオス国民」と「タイ国民」の境界と同一視されたとき、それがたとえ「つくられた」ものであれ、言語は国民の表象となって、シンボリックな境界を形成することになる。ラーオ語の正書法や語彙をめぐる議論が、何よりもタイ語との差異化を念頭に進められたことは、こうした表象性が、ときにコミュニケーション手段としての言語のあり方や、アンダーソンの重視する出版語の形成にも、決定的な影響を及ぼすことを示している。そしてこのことは、ラーオ語に限ったことではなく、社会言語学でいう「アウスバウ言語」にある程度、共通してみられる現象であることが推測される³。

したがって、言語が国民形成に果たす役割を考察するにあたって、言語の表象性を「常に間違い」であるとするのは、「間違い」である。言語の「排他性」ではなく、「包摂性」に注目したアンダーソンの視点は斬新なものではある。しかし「否定的同一化」のケースは、そうした「包摂性」がアンダーソンの想定したようなモデルどおりに、「想像の共同体」の形成に作用しないケースがあることを示している。

1-2-3 大/小言語ナショナリズム

これまで、出版資本主義の発展を軸としたアンダーソンのモデルでは、表象性とコミュニケーション能力の相互作用により、国民語が「つくられて」いくプロセスが、国民形成に及ぼす作用を見落とししてしまう可能性があることについて述べてきた。ここで再度、強調しておきたいのは、このとき「表象性」が意味するのは、国民と言語の間に原初的紐帯を見出すような、ヘルダー的な民族言語型ナショナリズムによるものではない、ということである。筆者は、「出版語」の流通が国民の想像を可能にしたとする、アンダーソンのモデルに、基本的には同意している。しかしそれだけで、すべてが説明できるわけでもない。タイ語の流通が、「否定的同一化」によって、逆説的にラーオ語の形成を促進したということは、「出版語」としてのタイ語が、アンダーソンが意図したのとは違う方法で、「ラオス国民」想像の触媒として作用してきた、ということの意味している。

隣接する言語との差異化が図られるケースは、例えばチェコ語とスロバキア語など、ラーオ語とタイ語以外にもヨーロッパを中心に数多く存在する。方言の連続体を成す地域で、ある変種が「言語」か「方言」かを決定するのは多くの場合、言語学的な基準によるのではなく、政治的・社会的要因による [Myhill 2006]。社会言語学者のハインツ・クロス(Heinz Kloss)は、隣接する言語との差異を強調することによって、人工的につくられた言語を「アウスバウ言語 *Ausbau Sprache*」と呼んだ[Kloss 1967]。少なくとも、植民地時代以降のラーオ語の「近代化」は、タイ語との差異化を中心に進められたといえることから、ラーオ語もアウスバウ言語の一

³ アウスバウ言語については次項で説明する。

種と考えることができるだろう。

マイヒル(Myhill)は、アウスバウ言語との関連から、ハンス・コーン(Hans Kohn)以来の、西のシヴィック・ナショナリズムと東のエスニック・ナショナリズムという二分法において、後者が否定的に捉えられてきたことを批判した⁴[Myhill 2006]。マイヒルは、ヨーロッパ、中東を対象とした研究のなかで、アウスバウ言語のような、隣接する言語変種との差異を強調することによってつくられた言語を「小言語 small language」、ドイツ語、アラビア語のように、相互理解が不可能なほどの方言差を含むにもかかわらず、一つの「言語」にカテゴライズされている言語を「大言語 big language」とした[Myhill 2006]。マイヒルによると、ここで言う大・小とは、話者数による区別ではなく、その内部に抱える方言変種の数によって決定される [Myhill 2006: 12]。マイヒルは、小言語にもとづくナショナリズムは、民族自決の原則のもと、ヨーロッパ、中東において「民族解放」という、肯定的な結果をもたらしたのに対し、大言語に拠るナショナリズムは、汎ゲルマン主義や汎テュルク主義といった、否定的な結果をもたらしたとして、この二つを明確に区分する必要があるとした[Myhill 2006: 12]。彼はシヴィック・ナショナリズムに対して、エスニック・ナショナリズムが否定的に捉えられてきたのは、エスニック・ナショナリズムがもっぱら「大言語」ナショナリズムと結び付けて、考えられてきたためだとする。そして大・小の区別をすることなしに、エスニック・ナショナリズム、言語ナショナリズムを一括して否定的に捉えてきた、ナショナリズム論の傾向を批判した[Myhill 2006]。

しかしマイヒルのこの主張は、民族解放を求める「被抑圧民族」のナショナリズムを「良いナショナリズム」、膨張主義に代表される「抑圧民族」のナショナリズムを「悪いナショナリズム」と区別する、ナショナリズムの区別論を言語に引き写しただけのもののように思われる。ナショナリズムを善悪に区分する二分法は、「被抑圧民族」「抑圧民族」の区別が必ずしも固定的なものではない、などの問題点を含んでいる[塩川 2008: 185]。言語を大・小に区別しようという、マイヒルの主張には、これと同様の欠点が見受けられる。例えば、ラオスの言語ナショナリズムは、旧宗主国語フランス語とタイ語からの「解放」という点からみれば、「肯定的な小言語ナショナリズム」ということになる。しかし、タイ(Thai)が国内外のタイ(Tai)系民族との連帯を掲げた「大タイ主義」と呼ばれる膨張主義政策に乗り出したとき、ラオスにおいても、それに対抗するかたちで「大ラオス主義」の主張が掲げられた。このことは、「小言語」にもとづくナショナリズムであっても、状況に応じて「大言語」ナショナリズムへと転化する可能性を孕んでいることを示している。また事実上、完全な単一民族国家など、存在しえないなか、小言語ナショナリズムを無

⁴ コーンは西のナショナリズムは合理主義・啓蒙主義・リベラリズム・民主主義と結びついたのであるが、それ以外の地域でのナショナリズムはドイツを筆頭としてしばしば非合理主義・ロマン主義・排他性に傾いたのだとする [Kohn 1944]。

条件に「善」であるとするのは、各国内の少数言語話者の存在を過小評価することにもなりかねない。マイヒルの議論は、言語ナショナリズム＝悪という単純化を覆そうとするものではあったが、大言語＝悪、小言語＝善とする、新たな単純化に陥ってしまっているといわざるを得ない。さらに小言語ナショナリズムを過度に肯定的に捉えることは、民族と言語の間に本質的なつながりを見出すような原初主義的な視点にもつながることになる。マイヒルが対象としたヨーロッパ、中東と違い、植民地支配を経験したラオスでは、「ラーオ語」という枠組み自体、支配者フランスによって設定されたものであり、このことをどう評価すればよいのかという問題もある。

大/小言語ナショナリズムへの分類は、言語のシンボリックな側面に肯定的な意味を見出そうとする試みともいえる。しかしながら、二つを明確に区別することは、そもそも不可能である。いかなる言語ナショナリズムも潜在的に善悪の二面性を含むことを認めたいうえで、それとコミュニケーション手段としての言語の役割との関係を検討していくことが必要であろう。

1-2-4 植民地支配と言語

欧米諸国による植民地化は、アジア・アフリカの諸地域に、道路や鉄道などのインフラの敷設や教育制度の整備など、西洋近代の装いを施した。いわゆる「植民地的近代化」をどのように評価すべきかについては、非常に難しい問題である。ここでは、「近代化＝善」という価値判断を離れ、伝統的社会秩序の崩壊と、新しい社会構造の形成を「近代化」と呼ぶのであれば、それが本国の利益のためであっても、植民地にも「近代化」が進められていたということができるといえる。塩川の立場をとることにしたい[塩川 2009: 86]。言語に関しても、欧米の植民地化は、アジア・アフリカ地域の諸言語の「近代語化」をもたらすこととなった。ラオスにおいて、ラーオ語の形成が宗主国フランスによって着手されたということは、ヨーロッパのアウスバウ言語との大きな違いでもあり、これは前項の大/小ナショナリズムの評価ともかかわってくる問題であろう。

言語学と植民地主義の関係については、フランスの社会言語学者、ルイ＝ジャン・カルヴェ(Louis-Jean Calvet)による研究がある。カルヴェの『言語学と植民地主義：ことば喰い小論』は、近代言語学と植民地事業の関係を明らかにした、先駆的な研究といえる。カルヴェは 19 世紀以降の近代言語学の発展が、インド・ヨーロッパ諸言語＝支配者の言語と原住民語の関係を階層化し、人種主義と一体化して、植民地支配正当化の根拠を提供したという事実を浮き彫りにした [カルヴェ 2006]。しかし支配者による、被支配者の言語の抑圧・排除の過程に重点がおかれたカルヴェの記述では、被支配者の側が、自らの言語に付与された「劣等言語」という言説をどのように克服し、言語の近代化に関わったかという点について、

ほとんど触れられてはいない。また、支配者の言語対被支配者の言語という、二項対立による分析では、支配者の言語と原住民諸語の階層化は描けても、植民地勢力による原住民諸語の序列化とその影響について、十分な分析がなされているとは言い難い。カルヴェの研究対象が、アフリカ中心であったことを考慮すれば、やむをえないことともいえるが、植民地支配が植民地に残した言語的痕跡は、支配・被支配の二項対立で説明しきれるほど、単純なものではない。ラオスにおいても、フランスの植民地支配は、フランス語とラーオ語の関係のみならず、ラーオ語とタイ語の関係をも規定し、その後の言語ナショナリズムの発展に大きな影響を与えていった。

一方、植民地的近代化の過程における、被支配者の主体性を追求したものとしては、インドを対象としたパルタ・チャタジー(Partha Chatterjee)の研究がある。チャタジーは『国民とその破片 *The Nation and Its Fragments*』の第1章を、「誰の想像の共同体か? *Whose Imagined Community?*」と名づけ、アンダーソンがアジア・アフリカのナショナリズムを欧米のナショナリズムの「海賊版」としたことについて、痛烈に批判している。

私はアンダーソンの議論に対して、一つ中心的な不満がある。もしも、残りの世界[アジア・アフリカ]のナショナリズムが、ヨーロッパやアメリカによって、準備されたいくつかの“モジュール”型から、彼らの想像の共同体を選択しなければならないのだとしたら、彼らに想像の余地は残されているのだろうか? 歴史は、植民地独立後[ポストコロニアル]の世界にいる我々に、ただ近代性[モダニティ]の永遠の消費者となるよう、運命付けてきたように思われる。歴史の唯一かつ真の主体である、ヨーロッパとアメリカだけが、我々に代わって植民地の教化と搾取、さらには我々の脱植民地抗争と植民地独立後の苦難の台本さえも描きだしてきたのである。さらに我々の想像さえもが、永遠に植民地化されたままではなければならないことになってしまう[Chatterjee 1993: 5]。

チャタジーは、反植民地ナショナリズムを経済や政治、科学技術などの物質領域(material domain)と、宗教、言語、家族生活などの精神領域(spiritual domain)に区分し、前者を“ソトの領域”、後者を“ウチの領域”とした。そして植民地支配下であっても、反植民地ナショナリストは、精神領域における自己の優位性を説き、主体的に独自の近代化を進める一方、物質領域に対しては、西洋の優位性を認め、西洋近代の政治・経済システムを積極的に導入しようとしたとする。

物質領域において、西洋技術の模倣に成功をおさめればおさめるほど、自己の精神文化の独自性を守る必要が増すことになる。私は思うにこの手順は、アジア、アフリカの反植民地ナショナリズムの基本的特徴なのである[Chatterjee 1993: 6]。

チャタジーにおいては、精神領域はいわば、物質領域での西洋モデルの近代化を中和するものとして位置づけられ、この二つの関係こそが、アジア・アフリカのナショナリズムの根本にあると考えられたのである。しかしながら、このことは精神領域には何の変化も生じないということの意味するものではない。チャタジーは、反植民地ナショナリズムが、精神領域から植民地勢力を完全に追放することができたとき、

ナショナリズムは最も強力で、創造的で、歴史的に重要なプロジェクト、すなわち西洋のものではない“近代的な”国民文化をつくるプロジェクトを開始する。もし、国民が想像の共同体であるのだとすれば、まさにそれはそこに誕生するのである[Chatterjee 1993: 6]。

とする。しかし、それではここでいう、非西洋的で近代的な国民文化とは、どのようなものなのであろうか。チャタジーが精神領域を代表するものとして挙げた、言語に関する記述を検討すると、それが西洋の影響を完全に排除したものではないことがわかる。例えばチャタジーは、19世紀にカルカッタで生まれたベンガル語の新しい散文体への、近代ヨーロッパ諸語の影響を認めている[Chatterjee 1993: 52]。このことから、彼のいう「非西洋的で近代的な国民文化をつくるプロジェクト」とは、精神領域から西洋の要素を追放することではなく、西洋のモジュールを選択的に土着の要素と混合し、独自の「国民文化」へと変換していくものとして、解釈するのが適切であろう。チャタジーにおいて重要であったのは、「国民文化」をつくる主体が支配者ではなく、反植民地ナショナリスト自身、ということにあった。

チャタジーの精神/物質（ウチ/ソト）という二分法に関しては、この二つの領域を明確に区分することが可能なのかなど、いくつかの疑問が残る。チャタジーが、精神領域に分類した言語について、植民地状況のなか、被支配者が言語の近代語化を支配者から完全に独立したかたちで進めることは、多くの場合難しいだろう。また、ナショナリストが自らの文字を捨て去り、ローマ字化を目指す行為も、精神領域での西洋の優位を認めたものと捉えることもできる。しかし多少の問題点を含むにせよ、反植民地ナショナリストが主体的に西洋の要素を取り入れながら、「国民文化」を形成していく過程に注目するというチャタジーの手法は、ラオスの言語ナショナリズムを分析する上でも有効なものといえる。

1-3 ラオス研究史

ラオスは第二次世界大戦後、1975年まで「30年闘争」とも言われる内戦状態が続いた。長期の戦乱に加え、75年の体制変換後に焚書が行われたこともあり、多くの貴重な資料が失われた。現在もラオスには公文書館はなく、東南アジアの中でもあらゆる分野において、最も研究の遅れた地域となっている。近年、研究者の数は上昇傾向にあるが、開発、農業、文化人類学などの分野が中心で、文献研究に従事する研究者の数は、著しく少ない。また政治的な制約や経済的な事情により、ラオス人研究者の育成も進んでおらず、いまだラオス人による近・現代史の学術的研究は、皆無に近い状況にある。したがって、ここで検討する先行研究は、必然的に外国人によるラオス研究が中心となる。以下、限られた先行研究の中から、ラオスのナショナリズムとラーオ語に関する研究を検討し、本研究の意義を示すことにしたい。

1-3-1 ラオス・ナショナリズム

ラオスのナショナリズムに関する既存の研究は、フランス植民地時代(1893~1945)、内戦期(1946~1975)、1975年のラオス人民民主共和国成立以降の大きく三つに時代区分をすることができる。ここでは本研究が対象とする、フランス植民地時代と内戦期についての研究を見ていくこととする⁵。

スチュワート・フォックス(Stuart-Fox)が「[1945年の時点でラオスには]少数民族はいうまでもなく、低地ラーオ族を結び付ける⁶、いかなる想像の共同体も存在しなかった」[Stuart-Fox 1997: 60]とするように、フランス植民地支配は、ラオスに何らナショナルなまとまりももたらさなかった、とするのが定説となってきた。ラオスに対して「愚民政策」をとったフランスは、ラーオ人向けの教育制度の整備に力をいれず、原住民官吏としてはベトナム人を採用していた。さらに民族間の反目を利用した「分割統治」が実施され、こうしたフランスの政策が、ナショナリズムの登場を妨げた、とするのが一般的な説明となっていた。しかし近年、イヴァルソンや菊池の研究により、1940年代初頭にナショナリズム運動が表面化する以前から、言語の標準化などをおして、ラーオ人エリートの間で文化的なナショナリズムが芽生えていたことが明らかとなっている[Ivarsson 2008][菊池 1997a][菊池 1997b]。とくに、タイ側とフランス側の資料を用いて入念な研究を行ったイヴァルソンは、フランスの植民地的「知」の構築と、タイの「失地」回復要求、ラー

⁵ 他に植民地時代をディエン・ビエン・フーの戦いでフランスが最終的に敗北する1954年までとする立場、フランス連合内でのラオス王国の独立が認められた1949年までとする立場、ラオスが完全独立を達成した1953年までとする立場がある。本研究では、1946年のフランスの再植民地化完成時に内戦につながる対立の起源があるとの立場から、植民地時代を1945年までとした。

⁶ 低地ラーオ族とは、主要民族ラーオ族を含むラオス国内に住むタイ(Tai)系諸民族を指す。

オ人ナショナリストの関係を描き出した点で、貴重な研究といえる。本研究の植民地時代に関する分析も、イヴァルソンの研究によるところが大きい。

内戦時代に関しては、左派パテート・ラーオ勢力のナショナリズムにもっぱら焦点があてられ、王国政府側のナショナリズムが注目されることはまれであった。パテート・ラーオの支配領域は、北部山岳部の少数民族居住区域が中心で、内戦を有利に戦うためには、少数民族を動員する必要があった。そのため、菊池が「[パテート・ラーオは] 内戦という支配地区すべてのラオス人にとって共通の歴史的経験を利用して、国民としての一体感を形成し、国民統合を進めた。戦いのなかで大衆的基盤を持つナショナリズムが培われた」とするように、パテート・ラーオは戦闘を通じて、ラーオ族主体の国民統合にある程度成功をしたとの評価が与えられてきた[菊池 2002: 169][Stuart-Fox 2002][Christie 1979][Zasloff 1973]。しかしこれらの研究では、少数民族の統合に成功したという「結果」が強調されるのみで、その過程において、実際にどのような統合のイデオロギーが形成され、機能していたのかという点について、ほとんど明らかにされていない。国民統合の主要な手段といえる教育政策についても、ランガー(Langer)とウドム(Udom)による、概説的な研究があるのみで、パテート・ラーオの教科書の分析など、踏み込んだ研究はなされていない[Langer 1971][Udom 1994]。

一方、グラント・エバンス(Grant Evans)は、パテート・ラーオが少数民族の統合に成功したとする「定説」について、

おそらく、近年のラオス史のなかでもっとも根強い誤解は、パテート・ラーオの勝利を少数民族の動員に帰し、王国政府の敗北を、メコン川沿い低地の都市部にとどまったためであるとするものである[Evans 2002: 134]。

と批判する。エバンスは、こうした視点が何ら持続的な調査にもとづいたものではなく、様々な評者によって繰り返し述べられることによって、真実味を帯びてきたものに過ぎないと切り捨てる。しかしその根拠として、彼は「少数民族がラオスの近代史で重要な役割を演じたのは、彼らの居住地がラオスとベトナムの間で自然の国境を成している、山岳地帯に沿っていたためである」という以上のことを述べていない[Evans 2002: 134]。これが意味するのが、少数民族が、戦略的に重要な地域に居住していただけで、戦闘に積極的に参加したわけではない、ということであるならば、エバンスの説明は、十分に納得のいくものとはいえない。現実には、初期の段階より、パテート・ラーオの革命闘争への少数民族の協力は指摘されているし[Pholsena 2006: 4]、パテート・ラーオの幹部にも、ファイダーン(Faydang)やコマダム(Kommadam)など、少数民族出身者が参加していた。ポンセナー(Pholsena)が指摘しているように、勝利の要因を少数民族の動員のみを求めるべきではないにせよ、少数民族がパテート・ラーオの戦闘において、一定の役割

を果たしたことは、認めるべきであろう [Pholsena 2006: 4]。

エバンスはさらに、ラオスでは主要民族ラーオ族が全人口の 40～50%を占めるに過ぎないという「定説」に対しても、「ラーオ化」の進んでいるタイ(Tai)系民族とラーオ族の区分を疑問視し、タイ系民族をラーオ族に含めれば、全人口の 60～70%に達すると反論する [Evans 2002: 134]。たしかに、ラオス国内に住むモン・クメール語系、チベット・ビルマ語系などの少数民族と比べれば、ラーオ族とタイ系民族の違いは少なく、ラーオ族主軸の国民統合への抵抗は比較的少ないといえる。しかしこうした見方は、タイ系民族の独自性を軽視し、彼らの「ラーオ化」を自明のものとする視点にもつながりかねない。例えば、タイ・ルー族や黒タイ族は、ラーオ文字とは異なる独自の文字を保持しているなど、生活風習において、ラーオ族とは違う側面を持ち合わせている。ラオスの国民形成を考察するにあたって、ラーオ族の少なさを過度に強調するべきではないにしても、タイ系民族とラーオ族を同一視することは、強引なものといわざるをえない。

王国政府側のナショナリズムについては、前近代に 3 王国に分裂していたことに起因する地域主義、アメリカの援助による汚職と賄賂などにより、国民形成は遅々として進まなかったとして、これまで大した関心が払われてこなかった。しかし王国政府においても、1960 年代には独立後に教育を受けた世代の間で、ナショナリズムが高まりをみせるようになる。これは政府官僚の汚職、教育面でのフランス語の支配とそれに起因する社会的不平等の増長などへの対抗というかたちであらわれ、戦闘的なナショナリズムというよりは、文化的なナショナリズムとしての色彩が濃いものであった。とりわけこの時期、フランス語の偏重とタイ語の影響に対して、言語ナショナリズムが強まり、新聞や雑誌には、ラーオ語の擁護を訴える記事が頻繁に掲載された。こうした動きは、パテート・ラーオのプロパガンダにも利用され、「奴隷的・植地的な」王国政府の教育と「国民的な」パテート・ラーオのラーオ語教育という二項対立のもと、王国政府の若者たちをパテート・ラーオへと引き付ける一因ともなった。この時期のナショナリズムについては、エバンスが『ラオス小史 *A Short History of Laos*』の中で、1960 年代から 70 年代にかけて、都市部に知識層が形成され、古典文学の出版やラーオ語雑誌の創刊など、知識人による活発な活動が見られるようになったことを指摘している。エバンスはこれらの現象が都市部のみに限定されたものとしながらも、「国家の政治・経済的な方向性のみならず、感性を決定するのは、良くも悪くも都市部の社会集団である」として、その重要性を強調している [Evans 2002: 152]。しかしエバンスも、当時の様子を概観しているのみで、例えばこうした王国政府側の社会変化と、パテート・ラーオの革命戦略とのかかわりについては、全く述べられていない。内戦期のラオスには、パテート・ラーオの「戦うナショナリズム」と王国政府側の「文化ナショナリズム」が交わる側面が存在したのであり、このことは少数民族の動員という問題とともに、パテート・ラーオ勝利の要因の一つとしても、

無視できないものといえるだろう。

1-3-2 ラーオ語ナショナリズム

ラオスのナショナリズムにおいて、言語は常に、タイに対する「ラオス」の独自性を示す切り札として、位置づけられてきた。タイとラオスの主要民族タイ(Thai)族とラーオ族はともにタイ(Tai)系民族に分類され、言語的にも宗教や生活習慣などにおいても、類似点が多い。そのため、「ラーオ語」を「タイ(Thai)語」と異なる「言語」としてつくりあげていくことは、「ラオス」のナショナル・アイデンティティを構築していくうえで不可欠なプロセスと考えられたのである。こうした事情から、これまでのラオスの言語ナショナリズムに関する研究は、主としてタイ語との関係から論じられてきた。しかしその結果、もう一つの争点であったフランス語との関係について、十分な検討がなされてこなかったという問題がある。このことを認識したうえで、以下、ラオスの言語ナショナリズムに関する研究を検討していくことにしたい。

フランス植民地時代に関しては、先述のイヴァルソンと菊池がフランス極東学院文書を用いて、植民地下での正書法論議から、当時の国民形成について分析している[菊池 1997b][Ivarsson 1999; 2008]。イヴァルソンも菊池も、これまでほとんど研究されてこなかった、ラーオ語の近代語化の草創期を明らかにした、先駆的な研究といえる。しかし菊池は、語源型と音韻型という対立する二つの正書法のうち、前者をただ「古の素晴らしい伝統」を反映させたものと捉え[菊池 1997b: 81]、その背景にある仏教近代化への要求を見落としている。一方、イヴァルソンは、正書法だけではなくフランスの文化政策全般を視野に入れた、より充実した分析をおこなっている。しかしイヴァルソンの考察も、フランスの植民地言語学、インド・ヨーロッパ語優位のヨーロッパ中心主義的言語観をラーオ人ナショナリストがいかに克服しようとしたかという点にまでは、考察が及んでいない。

内戦時代の言語問題については、エンフィールド(Enfield)による研究がある[Enfield 1999][Enfield 2007]。エンフィールドは、植民地時代から現在までの正書法の変遷を紹介するなかで、内戦期については、パテート・ラーオと王国政府、両者の動きについて、検討している。しかしパテート・ラーオに関しては、プーミー・ウォンウィチット(Phumi Vongvichit)の『ラーオ語文法 *Vainyakon Lao*』を用いた分析がなされているのみで、革命闘争において、言語がどのように利用されたのか、具体的な考察には至っていない。一方、王国政府に対しても、音韻型・語源型の正書法の対立に言及しているものの、そうした対立の背景にある、当時の社会状況との関係が検討されていない。また、エンフィールドは語源型の正書法を伝統主義、音韻型の正書法を進歩主義とする二分法をとっている[Enfield 2007]。しかし、語源型支持の背景には、仏教教育の近代化という狙いがあり、彼らがタム文

字の放棄を意図していたことを考慮すれば、単に伝統主義と呼ぶのは不適切であろう⁷。

タイとラオスの言語政策の比較を行ったものとしては、カイズ(Keyes)の研究をあげることができる。カイズはタイについて、1890年代に始まった言語政策が、国内に言語的多様性を残しつつも、90%以上の国民が十分な国民語運用能力をもつという状況を生み出し、タイ語がナショナル・アイデンティティの最も重要な基盤となっていると評価する[Keyes 2003: 178]。一方、ラオスに対しては、植民地時代後期より、国民語形成に着手されたが、内戦や国内の通信網の未整備などが言語政策の実施を妨げ、ラーオ語が国民統合の基礎としての役割を担えていないとする[Keyes 2003: 178-179]。確かに、現在のラオスには未だ、ラーオ語を解さない少数民族が存在している。しかしカイズのラオスについての記述は、イヴァルソンなどの先行研究を、時系列的にまとめて政策の展開を追っただけの、概説的なものにとどまっており、一次資料を入念に検討したうえでの見解とは言い難い。特に、内戦期に関する分析をほとんどすることなしに、「1954年から1975年の長い戦争の間、言語問題は急を要する問題ではなかった」と述べているのは[Keyes 2003: 202]、パテート・ラーオの革命運動において、言語が重要な役割を果たしたことを考えれば、到底受け入れられるものではない。ラーオ語が国民統合の基礎としての役割を担えているかどうか、判断をするのは難しい問題であり、詳細な検討なしに結論を出すべきものではないだろう。

これらの先行研究の共通点として指摘できるのは、いずれの研究もラオスの言語ナショナリズムを、タイ語からの差異化の過程として捉えているということである。正書法の議論や語彙の選定など、ラーオ語の標準化において、タイ語との関係が常に問題となっていたのは事実である。しかしそのことに加えて、フランスの植民地支配を経験したラオスの国民語形成においては、フランス語との関係も決して看過することの出来ない重要性をもっていた。とりわけ内戦期、王国政府でフランス語が公用語としても、高等教育の教授言語としても、圧倒的な優位を保っていたということは、王国政府の社会に深刻な亀裂を生み出した。この亀裂が、フランス語の支配に不満を持つ人びとを、パテート・ラーオ支持に向かわせる一因となったことは、前項の最後で述べたとおりである。したがってラオスの言語ナショナリズムは、タイ語とフランス語という、二つの言語からの独立を目指す過程として捉え、考察することが必要なのである。

1-4 本研究の視角

これまで、第2節ではナショナリズムと言語、第3節ではラオスに関する先行

⁷ タム文字とは、主としてパーリ語の仏教経典の記述に用いられていた文字。ラーオ文字と同じインド系文字ではあるが、系統を異にする。

研究を検討してきた。ここではその結果、明らかとなった問題点を指摘し、本研究の意義を示すこととする。

ナショナリズム研究において、これまで、国民形成における言語の象徴性を強調することは、否定的に捉えられる傾向があった。その一方で、コミュニケーション機能に対しては、近代化に伴うコミュニケーション手段の変化をネーション創出の中心的要因とする立場から、比較的肯定的な評価が与えられてきた。象徴性とコミュニケーションという2つの機能は、ときに密接に関わりあうものであり、前者が後者の機能を制限することもありうる。したがって、言語の象徴性を完全に否定してしまえば、ラオスのような、隣接言語をそのまま用いてもコミュニケーション上、ほとんど支障をきたすことがないようなケースを、うまく説明することができない。

マイヒルによる大/小言語ナショナリズムの二分法は、言語の象徴性に肯定的な価値を見出そうとする試みであった。しかし現実には、たいていの言語ナショナリズムは、大/小どちらにもなり得る潜在性を秘めており、このような単純化は、言語の象徴性が「つくられる」際の様々な力学を、覆い隠すこととなってしまう。また、「小言語ナショナリズム」=「民族自決」=「善」とする、マイヒルの楽観視も大いに疑問を感じるものである。多民族国家の言語ナショナリズムをどう捉えるかなど、この二分法には多くの問題を指摘でき、適切なものとは言いがたい。

植民地支配と言語の問題に関して、カルヴェの研究は、欧米の植民地事業に近代言語学がいかに貢献したかを明らかにした点で評価できる。しかし、支配言語/被支配言語の二項対立による分析に終始し、植民地支配が土着の諸言語の关系到及ぼした影響については、ほとんど考慮されていないという問題がある。また、支配言語による被支配言語の抑圧と排除の過程に焦点が当てられているため、被支配者が自らの母語に付された「劣等言語」という「評価」をどのように克服し、地位上昇を図ったかという点についても、検討がなされていない。

これに対してチャタジーは、植民地状況において、被支配者が主体的に言語の近代化に取り組む側面に注目している。西洋の要素を選択的に取り入れて、被支配者が言語の近代化を図るプロセスに、植民地支配下での国民形成を見出す視点は、本研究においても有効なものといえる。しかし一方で、彼の精神/物質という反植民地ナショナリズムの二分法は、完全には同意できるものではない。

以上が、これまでの考察で明らかとなった、言語とナショナリズムに関する先行研究上の問題点である。本論文ではこれらの課題を克服するため、ラーオ語がラオスの国民語として「つくられる」過程を、コミュニケーションと象徴性、二つの機能の相互作用に注目し、明らかにしていきたい。具体的には、前者は正書法や語彙の整備など、コミュニケーション手段として言語の機能に関わる領域を、後者は言語の「伝統」や「歴史」といった、言語イデオロギー構築に関わる領域を指す。そして、ラオス研究の中でもとくに未着手となっている、内戦期の言語ナシ

ヨナリズムについて、王国政府、パテート・ラーオ、両者の比較をとおして、包括的に検討していくことを目指したい。その際、本論文では以下の視点を重視して、考察をおこなっていく。

植民地時代、フランスは支配言語(フランス語)/被支配言語(ラーオ語)の優劣だけではなく、タイ語/ラーオ語の関係をも序列化した。この背景には、保護者フランスのもとでラーオ語を「再生」することで、「旧支配者」であるタイの脅威から「ラオス」を守ろうという、植民地支配正当化の意図が隠されていた。1点目はこうした状況のもと、ラーオ人エリートが、フランスによって与えられた評価をどのように克服し、タイ語とラーオ語の地位逆転を図ったのかという点に着目する。これによって、ラーオ人エリートがフランスの支配下、ある程度の主体性をもってラーオ語の近代化に関わり、言語ナショナリズムを醸成していくプロセスを浮き彫りにすることができると考えている。

2点目は植民地時代から王国政府、パテート・ラーオのそれぞれの体制下での正書法や語彙に関する議論に焦点を当てる。そして音韻型/語源型という正書法をめぐる対立はあれ、どの立場もタイ語との差異化を最重視し、タイとのシンボリックな境界としての機能をラーオ語に担わせようとしていたことを描き出す。そうすることで、コミュニケーション手段としての言語の機能が、象徴性への要求によっていかに左右されるものであるかということを示す。これはまた、「否定的同一化」を促す触媒としてのタイ語の役割に注目し、アンダーソンのいう「出版語」のモデルが、必ずしも彼の意図したとおりに作用するわけではない、ということを示明することでもある。

3点目は、2点目がいわば対タイ語の言語ナショナリズムの分析であったのに対し、先行研究ではほとんど扱われてこなかった、フランス語との関係に着目する。そして王国政府において、フランス語がラーオ語の地位上昇を妨げ、社会階層の分化をも引き起こしていた構図を描き出し、このことが王国政府の人びとを、パテート・ラーオへと引き寄せる要因となっていた事実を明らかにする。これはパテート・ラーオの「戦うナショナリズム」へと、王国政府の「文化ナショナリズム」が取り込まれていく過程を明らかにすることでもあり、従来のラオス研究で言及されてこなかったものである。

4点目はパテート・ラーオの国民統合におけるラーオ語の位置づけを検討する。そして先行研究で未着手のままであった、パテート・ラーオの少数民族政策におけるラーオ語の役割を考察する。

1-5 研究方法と資料

1-5-1 研究方法

本論文では、19世紀末に始まるフランスの植民地時代(1893-1945)から、1975年

の社会主義革命までの約 80 年間を考察の対象とする。

フランス植民地時代については、フランス人により編纂されたラーオ語の辞書類や文法書、会話集などを分析し、フランス人がラーオ語とシャム(タイ)語の関係をどのように比較・序列化していったのかを描き出す。次に、フランスがラーオ語に与えた評価に対するラーオ人の対応を、当時の正書法をめぐる議論や新聞記事などから検討する。

内戦期に関しては、王国政府とパテート・ラーオについて、それぞれ検討をおこなう。

王国政府については、正書法に関する政策的な動きを、文学委員会やアカデミーの議事録から追い、同時に文学委員会・アカデミーの「公式の」正書法に対する、一般の人びとの意見を新聞や雑誌記事から抽出する。そして王国政府においても、植民地時代以来の正書法をめぐる対立が継続していたことを示したうえで、その要因を当時の教育制度、社会状況などとの関係から考察する。また、メコン川流域の都市部を支配領域とした王国政府においては、映画やラジオなどの「新しい娯楽」をとおしてのタイ語の影響も深刻化していた。そうしたなか、1960年代に入ると、フランス語重視の政府への反発とともに、タイ語の脅威からラーオ語を守ろう、とする言語ナショナリズムが高まりをみる。こうした動きを、新聞や雑誌の記事から追い、タイ語、フランス語からの言語的「独立」を目指すかたちで、言語ナショナリズムが展開していく様子を浮き彫りにする。

一方、パテート・ラーオに関しては、内部での正書法を巡る対立は、少なくとも筆者が入手した資料上には存在しない。個人的には反対のものがいたとしても、規律を重んじ、指導部の命令が絶対であったパテート・ラーオでは、反対の意見を表明することは難しかったのであろう⁸。そのため、正書法に関してはラオス愛国戦線中央委員会書記長であったプーミー・ウォンウィットットの『ラーオ語文法』について、その主な特徴と王国政府側との差異を検討する。パテート・ラーオにおいては、教育政策・言語政策が革命戦略と一体化しており、フランス語を教授言語とする王国政府の「奴隷的・植民地的」教育に対抗し、全レベルの教育をラーオ語で行う「愛国的」な教育制度の確立が目指された。本論文では、先行研究からパテート・ラーオの教育政策史を追い、さらにカイソン・ポムウィハン(Kayson Phomvihhan)やスパーヌウォン(Suphanuvong)らの演説から、パテート・ラーオの幹部がラーオ語を革命戦略のなかに、どのように位置づけていたのかを考察する。そしてラーオ語が、解放区に向けては少数民族を統合してのラオス国民形成の基礎として、王国政府に向けては、人々をパテート・ラーオに引き付けるプロパガンダの材料として利用されていたことを、教科書、小説などの分析をとおして明らかにする。

⁸2004年の筆者が留学時、パテート・ラーオ仏教組織の元メンバーへのインタビューで、彼自身、個人的にはプーミーの正書法には反対であったことを述べていた。

最後に、以上の作業から浮かび上がった植民地時代、王国政府、パテート・ラーオの 3 つの体制における国民形成と言語ナショナリズムの関係について比較・検討する。そして政治的・社会的な状況が異なっているにもかかわらず、一貫してラーオ語の「独立」がラオスの政治的独立と同一視されていたこと、したがって国民語の役割をタイ語やフランス語が代わることは不可能であったことなどを述べて、むすびとする。

1-5-2 論文に使用する資史料

本論文では、文献資料の分析を中心とし、文献の不足を補うために適宜、関係者へのインタビューなどにより得られた情報を加えた。一次資料については、ラオス国立図書館、ラオス国立大学、教育科学研究所(以上、ラオス)所蔵の資料に加え、コーネル大学図書館(米国)、チュラロンコン大学図書館、タマサート大学図書館(以上、タイ)、ハノイ国家図書館、東南アジア研究所、ベトナム社会科学院(以上、ベトナム)、広西民族大学(中国)所蔵の資料を使用した。このほかに、個人所蔵の資料や筆者がヴィエンチャンの古書店で購入した資料、京都大学、東京大学、東京外国語大学など、日本国内の大学図書館所蔵資料がある。

植民地時代に関しては、フランス人植民地官僚や宣教師、教師などによるラーオ語辞書、文法書、会話集、ラーオ人によるものとしては、マハー・シラー・ウィーラウォンの『ラーオ語文法 *Vainyakon Lao*』、さらに初のラーオ語紙である『ラーオ・ニャイ(大ラオス)*Lao Nhay*』新聞などを用いる。

王国政府については、文学委員会の機関紙『文学 *Vannakhadisan*』、教育省の機関紙『教育 *Sueksathikan*』、アカデミーの議事録、日刊紙『サート・ラーオ(ラオス国民)*Sat Lao*』、月刊誌『パイ・ナム *Phay Nam*』を中心に、当時の教科書や文学委員会の出版物などを用いる⁹。

パテート・ラーオについては、プーミー・ウォンウィットットの『ラーオ語文法』、政治綱領、ラオス愛国戦線とラオス人民党の会議報告書、党幹部の伝記、解放区で使用されていた教科書類、プロパガンダ小説、ベトナム人義勇兵の回顧録などを用いる。パテート・ラーオに関しては資料の入手が困難であったため、ベトナム人元義勇兵や当時のパテート・ラーオ教育政策担当者などへのインタビューも行った。

1-5-3 論文の構成

第 1 章である本章では、先行研究を批判的に検討し、本研究の意義を述べた。

第 2 章では、ラオスの国民語形成において、なぜタイ語とフランス語からの「独

⁹ パイ・ナムとは竹の一種の名称。

立」がつねに問題とされたのか、その歴史的背景を探るため、前近代から内戦時代にいたるまでのこの地域の歴史を概観する。

第3章では、フランス植民地時代のラーオ語をめぐる動きを分析する。第1節では、前提として、ラーオ語正書法とタイ語正書法の違いを解説する。第2節では、19世紀以降、フランス人によって編纂されたラーオ語の辞書、会話集を概観し、フランス人がラーオ語の「境界」を設定して以来、ラーオ語とタイ語をどのように序列化していたのかを検討する。第3節では、正書法論議におけるそれぞれの立場を紹介し、ラーオ人エリートたちがフランス人によって与えられたラーオ語とタイ語の序列の変換をはかる過程を描き出す。第4節では、『ラーオ・ニャイ』新聞上での語彙に関する議論から、発音どおりに綴る方法がラオス独自の方法として認められていく様子を描く。そして第5節では、第3章を振り返り、植民地時代の国民形成と言語ナショナリズムの関係について考察する。

第4章では、王国政府における言語ナショナリズムの展開について検討する。第1節ではラオス文学委員会におけるラーオ語標準化の過程を、正書法の問題から考察する。第2節ではラーオ語の象徴性にかかわるものとして、ラーオ語にどのような「歴史」がつけられていたのか明らかにする。第3節では、王国政府のフランス語重視が、人びとの反発を生む一方、一般の人びとの間に言語ナショナリズムが醸成されていく様子を描き出す。第4節では、雑誌『パイ・ナム』の分析をとおして、フランス語の存在が具体的にどのような社会問題を引き起こしていたのか、教育問題に焦点を当て、考察する。そして第5節では、タイ語の影響が深刻化していた様子を、『パイ・ナム』のコラム「パーサー・パーシア」の分析をとおして浮き彫りにする。第6節では、第4章の内容をもとに、王国政府における言語ナショナリズムの展開をフランス語、タイ語との関係から考察する。

第5章においては、パテート・ラーオの革命闘争と国民形成、ラーオ語の関係を分析する。第1節では、パテート・ラーオの教育政策を概観する。第2節では、パテート・ラーオの言語政策を紹介し、プーミー・ウォンウィットットの『ラーオ語文法』の分析をおこなう。第3節では、道徳教科書を分析し、少数民族を含めた国民統合とラーオ語の関係を考察する。第4節では王国政府へのプロパガンダ活動を、プロパガンダ小説などから分析し、その効果を王国政府の学生誌などから検討する。

第6章では植民地時代、王国政府、パテート・ラーオの言語ナショナリズムの展開を、その共通点、相違点、相互の関係について検討し、むすびとする。

第2章 「ラオス」の誕生—国境線の設定とラーオ人の分断

ラオスはインドシナ半島の内陸国で、北に中華人民共和国、北西にミャンマー連邦、東にベトナム社会主義共和国、南にカンボジア王国、西にタイ王国の5カ国と国境を接している(地図参照)。総人口は、2006年の世界銀行統計によると580万人であり、国内には主要民族であるラーオ族のほか、言語や習慣を異にする多くの少数民族が居住している。2000年8月のラオス政府の発表では、国内の民族数は49とされている[安井 2003: 173]。ラーオ族は、インド、ベトナム、中国、ビルマ(ミャンマー)、そしてタイ、ラオスに広く分布する、いわゆるタイ(Tai)系民族のひとつで、タイ王国の主要民族であるタイ(Thai)族もここに含まれる。混乱を避けるため、欧米語文献では前者をTai、後者をThaiとして区別されることが多く、本論文でもタイ系民族、タイ族に言及する際、必要に応じてこのローマ字表記を併記することにする。本章では、この地域の歴史について概観し、ラーオ語にとってなぜタイ語が脅威とされてきたのか、その歴史的背景を探ってみることにしたい。

2-1 ラーンサーン王国の繁栄と分裂

タイ(Tai)系民族は、11世紀に起こったとみられる集団的大移動の結果、長い時間をかけて、現在のそれぞれの居住地域へと移住してきたものと考えられている。その故地に関しては、従来はアルタイ山脈や中国南部などから南下してきたとする「南下説」が主流であったが、近年の言語学者たちの研究では、今日のベトナム東北部と中国の広西壮族自治区の境界付近とする仮説が有力となっている[飯島 1999: 137]。そしてこのうち、メコン川流域へと移住したグループと、チャオプラヤー川流域へと移住したグループが、それぞれ今日ラーオ族、タイ(Thai)族と呼ばれる人々の遠い祖先、ということになるのであろうか。後者は長らく「シャム」の名で呼ばれ、チャオプラヤー大平野を中心に諸王朝を築きあげていた。現在のタイ王国は、1782年にチャクリによって開かれた、ラタナコーシン朝が継承されてきたものである[石井 1999: 268]。

ラーオ族に関しては、14世紀にラーオ族最初の統一王朝とされるラーンサーン王国が、ルアンパバーンを都として建国された。ラーンサーン王国は16世紀、セーターティラート王の治世にヴィエンチャンに遷都し、17世紀のスリニャウオンサー王の時代に最盛期を迎えている。しかしスリニャウオンサー王の死後、王位継承争いが起こると、王国はルアンパバーン(北部)、ヴィエンチャン(中部)、チャムパーサク(南部)の3王国へと分裂し、1770年代末には、これら3王国のすべてがシャムの属国となっていた[Stuart-Fox 1997: 13]。1827年には、ヴィエンチャ

ン国王アヌが、シャムの役人が治めるナコンラーチャーシーマーを一時占領するが、間もなくシャム軍により討伐されてしまう¹⁰[飯島 1999: 347-348]。そしてその結果、ヴィエンチャンの町は徹底的に破壊され、住民の多くがシャムの支配下の土地へと強制移住をさせられた[飯島 1999: 348]。現在の東北タイの住民には、このときにヴィエンチャンから移住させられた人も少なくない。以後、ヴィエンチャンは王統が途絶え、チャムパーサク王国も、シャムの直接の支配下におかれることになる[飯島 1999: 348]。

2-2 シャムとフランスの国境交渉―「ラーオ語」の境界設定

こうして、19世紀半ばまでには、ラーオ人の諸王国はすべて、シャムの支配下へとおかれていた。1860年代になると、インドシナの植民地化に乗り出していたフランスが、この地域にも進出を開始し、またイギリスもインドからビルマへと植民地化を進めていた。フランス、イギリスの植民地争いは、排他的な国境線によって区切られた領域という、従来この地域にはなかった新しい領土概念を持ち込み、シャムとの間で熾烈な領土争いを繰り広げていく。そして1893年10月に、フランス・シャム条約が結ばれると、メコン川を国境線として左岸地域がフランス領とされ、ここにフランス領「ラオス」が誕生した。その後、フランスとシャム、中国、イギリスとの間での数度に渡る交渉を経て、20世紀初頭には「ラオス」と周辺諸国の国境線がすべて決定されていった。フランス統治下のラオスは10の省に分けられ、ルアンパバーン王国も省の一つとして、王の名誉的ならびに儀礼上の特権を伴う統治権が認められた¹¹[飯島 1999: 355]。

新たにフランス領「ラオス」となった領域は、それ以前に存在したどの王国の領域とも完全には一致せず、いわば植民地支配によって「つくられた」領域であった。こうした歴史は、植民地期にはフランスをラオスの「保護者」として描き出すことにも貢献し、フランスがいなければ「ラオス」は存在しなかったとするような、植民地支配正当化の論理へと利用されることともなった。しかしこのときの国境決定が、ラーオ人の意志を全く無視するかたちで、シャムとフランスの間で「勝手に」なされたものであることを、忘れてはならない。ラーオ人たちは、メコン川右岸にも広く居住していたのであり、以後、彼らは一方は「ラオス人」、もう一方は「タイ人」と呼ばれ、別々の「国民」としての道を歩んでいくことになる。そして、これは彼らの言語に関しても同様であった。

1905年、東北タイのローイエット生まれのラーオ人で、後にラオスに渡り、『ラーオ語文法』や『ラーオ語辞書』などを編纂した、マハー・シラー・ウィーラウオン(以下、マハー・シラー)は、植民地化へといたる一連の出来事について、次の

¹⁰ ナコンラーチャーシーマーは東北タイの地名である。

¹¹ 一方、チャムパーサク王国はフランスの直接統治となった。

ように記している。

1828年にヴィエンチャンのアヌ王が、タイ〔シャム〕軍に敗北して捕らえられ、バンコクで投獄されたのちにお亡くなりになると、ラオス王国の全域がタイの直接の支配下におかれた。それ以降、国の統治も、人民の教育も、仏教風習の実践も、仏教教育も少しずつ衰退していった。1893年にはフランス人がやってきて、メコン左岸のラーオの地をすべて、タイから奪いとっていった。それをみたタイは、西暦1899年にかつてはラーオの領土であったイサーン地方の領域をすべてタイの領土とし（当時はシャムと呼ばれた土地である）、ラーオ人であった人びとをタイ人とすることを宣言した〔強調原文〕。

以後、メコン右岸のラーオ人 *Khon Lao* はタイ国民 *Sat Thai* となり、タイ人 *Khon Thai* となり、タイ文字 *Nangsue Thai* だけを学習するようになった。ラーオ文字 *Nangsue Lao* とタム文字 *Nangsue Tham* に関しては、最初のうちは、読み書きのできるものがいたが、タイ政府が郡教育長管轄下の学校を各地へ拡大していくにつれ、すべての寺院で実施されていた、ラーオ文字（彼らはタイ・ノーイ文字と呼んだ）とタム文字の教育は次第になくなり、現在は全く行われなくなってしまった。これが古来より、イサーン地方のラーオの領土全体に広く普及していた、ラーオ文字とタム文字の最期であった〔Sila 1995: 28-29〕。

ここでマハー・シラーが「ラオス王国」と記しているのは、この文章が書かれた1973年の時点での、ラオスの国名のことを指しているものと思われる¹²。この文章からは、東北タイ出身のマハー・シラーにとって、フランスの植民地支配が「保護者」であるどころか、メコン右岸（東北タイ）のラーオ人の「タイ人化」を促進したものであるとして、受け止められていたことが読み取れる。1889年には、シャムが中央集権化を進めるなかで、東北地域に設置していた州、「ラーオ・カーオ州」を「東北（ターワンオークチアンヌア）州」へと改称するという事件が起きている¹³〔田中 2006: 164〕。これは、マハー・シラーの言うような、領土上の取り決めではなかったが、州名から「ラーオ」をはずした背景には、この地域の住民がラーオ人ではなく、「タイ人」であることを示そうとする政治的な意図があった。その意味で、マハー・シラーが「タイ人とすることを宣言した」と解釈しているのは正しい。当時、フランスは仏領「ラオス」の住民とメコン右岸の住民との同質性を主張して、

¹² アヌ王の戦争のあと、ルアンパバーン王国は「朝貢国」として、一定の自治を認められていたため、ラオス王国全域がシャムの「直接の」支配下におかれたとするのは若干事実と反する。

¹³ ラーオ・カーオ州はウボンラーチャターニーを中心とした州。ターワンオークチアンヌアとはタイ語で「東北」の意。この名称が長すぎるという理由から、1901年にパーリ語・サンスクリット語起源のイサーン（東北）州に改称された。その他、ラーオの名前を冠する州には、ノーンカーイ方面のラーオ・プアン州、チェンマイを中心とするラーオ・チェン州などが存在したが、これらの州もそれぞれ「北方州」「西北州」に改称されている〔田中 2006: 163-164〕。

メコン右岸へと触手を伸ばそうとしていた[田中 2006: 163-164]。そのため、フランスの領土的要求を拒絶し、この地域をシャムにとどめておくには、ラーオ人を「タイ人化」し、ラオスのラーオ人と東北タイの住民が異なる民族であることを、明確にしておく必要があったのである。そしてその際に取りられたのが、タイ語、タイ文字による教育をとおしての「タイ人化」であり、1910年以降、東北地域へのタイ語、タイ文字教育が本格的に導入されるようになる[田中 2006: 169]。1905年生まれのマハー・シラーは、東北地方でラーオ文字、タム文字が捨て去られ、タイ語、タイ文字へと置き換えられていく過程を目の当たりにしつつ、成長した世代であった。

このように、フランスが持ち込んだ国境線は、かつてなだらかな方言の連続体をなしていた地域に、否応なしに言語上の「国境線」を持ち込むこととなった。そしてこれが一言語＝一国家＝一国民を原則とする、シャムの近代国家建設とむすびついたとき、タイ語、タイ文字による教育は、「ラーオ人」を「タイ人」へと統合していくための、不可欠なプロセスとなっていった。「ラーオ語」は、メコン右岸ではもはや「ラーオ語」ではなくなり、「タイ語」の「東北タイ方言」、ないしは「イサーン語（東北語）」としての道を歩むこととなったのである。

2-3 「失地」回復と大タイ主義

こうして大国の思惑により、当事者たちのあずかり知らぬところで、ラーオ人たちは二つの国民へと分断されていった。もっともこの時点で、シャムをフランスと同等の「大国」と呼ぶことには無理があるだろう。しかしマハー・シラーがラーオ人の没落を、アヌ王の敗北にまでさかのぼっていることから分かるように、ラーオ人にとって、シャムはフランスの到来する以前からの支配者であった。そしてこの「旧支配者」は、今や欧米を手本に近代化を急いでいた。日本の明治維新とよく比較されるように、シャムでは欧米の植民地化に対抗するため、19世紀半ばのモンクット王（ラーマ四世王）の治世より、近代国家建設が着手されていた。そうした「旧支配者」の姿が、フランスの植民地下で少しずつ育ちつつあった、ラーオ人エリートたちにとって、脅威と見られていたことは想像に難くない。言語に関しても、タイ語正書法の標準化はモンクット王の治世よりはじめられ、1920年代には、教科書局によって正書法や近代語彙が検討され、辞書が出版されるなど[Ivarsson 2008: 128]、タイ語の「近代化」が着々と進められていた。

一方、シャムにとって「ラオス」は、フランスによって奪われた「失地」であり、国境線が決定された後も、その領土的要求が消え去ったわけではなかった。シャムの失地回復への思いは、1938年から44年までのピブーン(Phibun)政権において、「大タイ(Tai)主義」とむすびついた、失地回復運動へと発展していくことになる[Ivarsson 2008: 60]。ピブーンは、1939年6月にシャムからタイ(Thai)へと国名を改

称するが、この背景にはラーオ族を含めたタイ(Tai)系民族と、クメールまでをもタイ(Thai)国民として取り込もうとする、膨張主義的なねらいがあった¹⁴[Ivarsson 2008: 60]。そして第二次世界大戦が勃発し、1940年6月にドイツに降伏したフランスが弱体化すると、タイはラジオ放送やビラを利用して、インドシナ向けの反仏宣伝活動をおこない[菊池 2002: 151-152]、11月にタイ・フランス間に国境紛争が勃発、1941年5月、タイは「失地」の一部回復に成功した¹⁵[菊池 2002: 152]。

2-4 大タイ主義への対応—ラオス刷新運動の展開

この一連の事件は「旧支配者」、すなわちタイ(シャム)が「ラオス」にとって脅威であり続けていることを、ラーオ人たちに改めて示すものといえた。しかし一方で、フランスの支配を嫌い、タイの反仏宣伝に共鳴してタイへと渡ったラーオ人もわずかながら存在し¹⁶、このことは、フランスに大きな危機感を抱かせることとなった。そこでフランスは、大タイ主義のラオスへの浸透を防ぎ、ラオスを植民地として維持していくため、ラオス刷新運動(ラーオ・ニャイ運動)と呼ばれる文化運動を推進していく[菊池 2002: 153]。ラオス刷新運動では、フランスは大タイ主義の脅威からラオスを守る「保護者」とされ、フランスの庇護のもと、タイとは異なる「ラオス人」としての国民意識を醸成することが目指された。そして1941年1月には、運動の発信装置として、初のラーオ語紙である『ラーオ・ニャイ *Lao Nhay*』新聞が創刊されている[菊池 2002: 153]。『ラーオ・ニャイ』紙では、ラーオ語の正書法や近代語彙の問題、ローマ字化の議論などが掲載され、言語においても「ラーオ語」を「タイ語」とは異なる言語として確立していこうとする、積極的な試みがみられた。さらに同紙では、方言差の問題や少数民族へのラーオ語教育にも言及されており、「ラオス人」エリートの間で、「ラオス」全域を覆う均質な国民語として、ラーオ語をつくる必要性が認識されるようになっていた様子がうかがえる。

1945年3月には日本軍の仏領インドシナ処理により、フランスはインドシナから一時撤退を余儀なくされる。4月には、名目的なものではあったが、ルアンパバーン王国の独立が宣言され、これを契機に、ラオス各地で抗仏独立の気運が高まりを見せる¹⁷。そうしたなか、「ラオス人」のナショナリズムは次第にフランスの庇護を離れ、自らの国家を渴望するようになっていく。

¹⁴ 実際には1902年の条約文のなかにすでに「タイ」がシャムに代わって国名として用いられていた[Baker and Pasuk 2005: 64]。

¹⁵ ルアンパバーンのメコン右岸とチャムパーサクの一部がタイ領となった。

¹⁶ このなかには、ウン・サナニコーンやマハー・シラー・ウィーラウオンなどがいた。彼らは東北タイで抵抗勢力を組織し、1945年のラーオ・イサラ運動に参加した。マハー・シラーは1975年、一連の事件を『10月12日の歴史』にまとめている[Sila 1975]。

¹⁷ この時点でルアンパバーン王国の統治権は「ラオス」全土に及ぶものではなかった。

2-5 ラーオ・イサラ運動

第二次世界大戦が終了し、インドシナに政治的空白期が生じると、ペッサラート(Phetsarath)¹⁸をはじめとする各地の抵抗勢力は、日本によって与えられた「独立」を維持するため、活動を活発化させる。このなかには、1941年のタイ・仏国境紛争時にタイへと渡り、東北タイで自由タイ運動¹⁹からの働きかけにより、抵抗組織を結成していたウン・サナニコーン(Un Sananikon)を中心とする勢力²⁰、タケークで愛国組織を結成していたシンカポ・シーコート・チュラーマニー(Singkapo Sikhot Chulamani)²¹、そしてカイソーン・ポムウィハーン(Kayson Phomvihān)、ヌーハック・プームサワン(Nuhak Phumsavan)など²²、ベトナムでベトミンと関係を深めていた勢力がいた。これらの独立を求める動きを総称して、ラーオ・イサラ運動と呼ばれるが、実際には「独立」という目標を共にする以外、まとまった指揮系統の下に組織された運動ではなかった²³ [菊池 2002: 160]。

1945年9月15日、ペッサラートはそれまで別個の行政単位であった南部各省をルアンパバーン王国のもとに統一し、ラオス全土に独立を拡大した[菊池 2002: 160-161]。そして1945年10月12日には、ペッサラートを中心に、各地の抵抗勢力が終結するかたちで、ラオスの統一、完全独立、近代的政治の実践を政治目標に掲げ、ラオス臨時人民政府が樹立された[菊池 2002: 161]。このときの政府には、スパーヌウォン(Suphanuvong)やスワナ・プーマ(Suvana Phuma)、ウン・サナニコーン、など、後の左・中・右派の代表的人物がともに参加していた²⁴。しかし間もなく、フランスが圧倒的な軍事力とともに再植民地化に乗り出すと、ラーオ・イサラ勢力は敗北を喫し、1946年4月24日、バンコクに亡命して、亡命政権としてその正当性を主張することになる。

その後、1949年にフランス連合内での協同国として、「ラオス王国」に条件付の独立が認められると、スワナ・プーマ、カタイー・ドン・サソリット(Katay Don Sasorith)、カムマーオ・ウィライ(Khammao Vilai)といった穏健派は、帰国して王国

¹⁸ ペッサラートはルアンパバーンの副王の家系で、フランス留学経験のある数少ないラーオ人の1人。植民地時代はヴィエンチャン理事長官府の官吏で、1945年4月のルアンパバーン王国独立時には、ルアンパバーン王国の首相となっていた。

¹⁹ 第二次世界大戦期、国内外のタイ人により展開された抗日運動の地下組織の総称[赤木 1999: 129]。

²⁰ 王国政府の右派政治家となる。

²¹ シンカポはパテート・ラーオの幹部の1人となる。タケークで愛国組織を結成し、越僑組織との連携によるラオス独立を考えていた[菊池 2002: 158]。

²² カイソーン、ヌーハックはパテート・ラーオのリーダーであり、ラオス人民民主共和国成立後、ともに大統領に就任している。カイソーンは1943年にハノイのインドシナ大学法学部に入学し、ベトミンの活動に参加するようになっていた[菊池 2002: 159]。

²³ ラーオ・イサラ運動については[菊池 2002]に詳しい。

²⁴ スパーヌウォンはラオス愛国戦線(パテート・ラーオ)の議長、スワナ・プーマ(中立派)は、王国政府首相を経験した。臨時政府ではスパーヌウォン外相、スワナ・プーマは公共事業・運輸相、ウン・サナニコーンは経済相に就任している。マハー・シラーは大臣就任の打診があったが辞退し、教育省の顧問となっている[Maha Sila 2004: 66]。

政府へと参加した²⁵[Stuart-Fox 1997: 74]。一方、スパーヌウォンら強硬派は、王国政府はフランスの傀儡にすぎないと徹底抗戦を主張し、カイゾンやヌーハックら、ベトナムのラオス人抵抗勢力に合流した。そして1950年8月にはベトナムの支援のもと、ラーオ・イサラ全国大会が開催され、新組織ネーオ・ラーオ・イサラの結成と抗戦政府の樹立が決定される。これが「パテート・ラーオ」と呼ばれる、ラオス左派勢力となり、1953年にラオス王国が完全な独立を達成しても²⁶、この対立が解消されることはなかった。以後、ラオスは1975年まで「30年闘争」ともいわれる、長い内戦の時代に突入していくこととなる。このとき、王国政府の背後には米国を中心とした西側陣営が、パテート・ラーオには旧ソ連、北ベトナム、中国などの社会主義陣営が控え、ラオス内戦はさながら、東西冷戦の代理戦争としての様相を呈していった。

2-6 ラオス内戦—「30年闘争」と分裂するラーオ語

「30年闘争」とも呼ばれるラオス内戦は、1975年12月2日の社会主義革命に至るまで続き、ラオスの国家建設を著しく遅らせることとなった。王国政府とパテート・ラーオがそれぞれの支配領域で、個別に国家建設を進めるという構図は、あらゆる事象において、国内で統一した政策をとることを困難なものとしていた。そして言語に関しても、王国政府とパテート・ラーオで異なる正書法が採用されるなど、政治的な分裂が、ラーオ語の分裂をも引き起こすという事態を招いていたのである。しかし一方で、ラーオ語を「つくる」にあたって、両者がともにタイ語からの「独立」を強く意識していたこともまた、事実であった。

タイは戦後、1954年9月には東南アジア集団防衛条約に参加し、東南アジア条約機構(SEATO)の本部をバンコクに誘致するなど、西側諸国との関係を強めていた[村嶋 1999: 438]。さらにベトナム戦争では、タイの空港を米軍が戦略基地として利用し、パテート・ラーオの解放区へも攻撃を行うなど、経済援助を見返りとした、米国への軍事協力を実施していた。したがって、王国政府にとって、タイは同盟国であったが、パテート・ラーオにとって、タイはまさしく反共を掲げ、アメリカへの軍事協力を行う「敵」であった。しかしながら、王国政府にとっても、タイに対する感情には複雑なものがあつたことが、ラーオ語をめぐる一連の議論から浮かび上がってくる。

サムヌアとポンサーリーを中心に、北部ベトナム国境沿いの山岳地帯を支配領域とするパテート・ラーオと違い、メコン川流域の都市部を中心とした王国政府の

²⁵ カターイは後に王国政府首相となる。カムマーオはラーオ・イサラ臨時政府の首相であった。

²⁶ 1946年に暫定協定が結ばれ、フランス連合内での立憲君主国としてのラオスの統一が承認された。これにより、ルアンパバーン国王が「ラオス王国」の国王となった。チャムパーサク王国の王位を望んでいたブン・ウム(Bun Um)は生涯のラオス王国の監察長官の身分と引き換えに、チャムパーサク王国の独立要求を取り下げた[Stuart-Fox 1997: 66]。

支配領域では、メコン川をはさんでタイと対峙し、タイ語の影響をより受けやすい状況にあった。開発政策を推し進め、著しい経済成長を遂げつつある「旧支配者」タイの姿は、ようやく自らの国家を獲得した王国政府の人びとにとって、大きな脅威でもあったのだろう。内戦という状況下、また内陸国という地理的な条件も重なって、政治的・経済的にタイに依存せざるをえないという関係は、一步間違えれば「ラオス」が「タイ」へと吸収されかねない危険性を孕んでいることは、かつての東北タイの例が証明していた。したがって、タイの脅威を退け、国家としての「ラオス」の独立を維持していくためには、「ラオス人」が「タイ人」とは異なる存在であることを明確に示し、その政治的な独立を正当化しておく必要があったのである。その際、タイに対する「ラオス」の独自性を主張するうえでの切り札とされたのが、ラーオ語とラーオ文字であった。こうした事情のもと、王国政府においてもラーオ語をタイ語とは異なる言語としてつくりあげ、言語面での「旧支配者」からの独立を揺るぎないものとしておこうとする試みが、なされていく。

このように、フランス植民地支配によって、言語上の境界線が引かれて以降のラーオ語の歴史は、いかにしてラーオ語とタイ語の間に、言語上の国境線を維持していくかというものであった。前近代において、ラーオ人の諸王朝がすべて、タイの支配下に置かれていたという「歴史」は、現在のタイの発展状況と相俟って、タイを警戒すべき「旧支配者」として、ラオスの人びとに認識させるには十分であったのだろう。ここでは言語の独立と政治的な独立は表裏一体の関係におかれ、国家としてのラオスの独立維持には、ラーオ語の「独立」は不可欠なものとされたのである。そしてこれはまた、フランス語に対しても同様であった。

以上の歴史的背景を踏まえたうえで、次章ではまず、植民地時代のラーオ語をめぐる動きをみていくこととする。

第3章 フランス植民地時代(1893-1945)

フランスの植民地支配は、メコン川を政治的な国境線のみならず、言語の「国境線」へと変化させた。そうしたなか、19世紀末より、シャムがタイ語・タイ文字の普及をとおして、メコン右岸のラーオ人の「タイ人化」を進めていたことは、すでに述べたとおりである。一方フランスも、ラーオ語をシャム語とは明確に異なる言語として「つくりあげる」ことで、シャムの失地回復要求を退け、メコン左岸、すなわち「ラオス」の植民地支配を正当化しようとしていた。そしてこのことは、ラオスでは国民語をつくるための基礎となる部分が当初、支配者であるフランス人によって担われることを意味していた。フランスは、ラーオ語を衰退させた原因をシャムとの戦乱に求め、消滅寸前のラーオ語をシャムから守る「保護者」として自らを描き出し、植民地支配の正当化を図った。その際、注目されたのは、ラーオ語の正書法をシャム語の正書法と差異化することであった。

本章ではラーオ語の正書法をめぐる動きを中心に、フランス人からラーオ人へとラーオ語を「つくる」作業が受け継がれていくさまを、みていくことにしたい。ラーオ語の正書法をめぐるのは、植民地時代以降、様々な立場から多様な意見が出されてきた。それらを大きくまとめると、発音するとおりに綴るべきだとする音韻型の正書法、パーリ語、サンスクリット語からの借用語に関しては、そのもとの形を綴りに反映させるべきであるとする語源型の正書法の2つに分けられる。特に前者は、語源型の正書法を採用しているタイ語の正書法との差異化を意識した方法といえるが、しかし後者にしても、決してタイ語の存在を意識していないわけではなかった。ここでは前提として、最初に正書法の各方法について具体例を示して解説したあと、それぞれの方法の背景に隠された諸事情をさぐっていくことにしたい。

3-1 ラーオ語正書法とタイ語正書法

まずは語源型正書法と音韻型正書法について、ラーオ語とタイ語の正書法を比較しながら、解説していくこととする。ラーオ語とタイ語の語彙には、純ラーオ語(Kham Lao Doem)、純タイ語と呼ばれるもとの語彙と、主としてパーリ語、サンスクリット語などからの借用語彙がある²⁷。語源型正書法とは後者、すなわち借用語に関して、もとのかたちを反映させた正書法のことであり、タイ語ではこの方法を採用している。一方、音韻型正書法とは、借用語であれ、純ラーオ語であれ、発音するとおりに綴る方法であり、現在のラーオ語の正書法はこの方法を

²⁷ そのほかクメール語、中国語、ベトナム語からの借用語や英語、フランス語など欧米言語からの借用語がある。

採っている。

ラーオ語とタイ語の表記には、それぞれラーオ文字、タイ文字と呼ばれる独自の文字が用いられている。両文字は非常によく似た形をしており、ラーオ文字には 26 字(27 字)²⁸、タイ文字には 42 字の子音字がある。タイ文字の直接の起源は、13 世紀末にスコータイのラームカムヘーン王によってつくられた、スコータイ文字とする説が有力である²⁹。しかしラーオ文字に関しては、スコータイ文字から派生したとする説や、それ以前に、すでにラーオ文字のもととなる文字が存在していたとする説など様々で、この背景には、タイ文字からラーオ文字が派生したとは考えたくないという、ラオス側のナショナリスティックな感情が隠されている。例えばマハー・シラーは、フランス極東学院の考古学者で、植民地時代にバンコクの国立図書館の館長をしていたジョルジュ・セデス(George Coedès)が著書『タイ文字の歴史 *Tamnan Akson Thai*』のなかで、ラームカムヘーン王以前に、異なる様式のタイ文字が存在したと記しているのを引き合いに出し、次のように述べている。

ラーオ文字の歴史について、未だにはっきりしたことはわかっていない。しかししたしかなことは、我々ラオス国民 *Sat Lao* は、昔から、少なくとも何百年、あるいは何千年も昔から（タイのラームカムヘーン王以前から）自らの文字をもってきた国民であるということである[Sila 1995:4-5]。

そして「それゆえ、我々は我々の国民が国民の文字 *Nangsue Pacham Sat* を持っていることを誇りに思うべきである」として、ラーオ文字がタイ文字よりも古い文字であることを強調している³⁰[Sila 1995: 5]。ラームカムヘーン王の碑文については、近年、モンクット王による偽造とする説も出ており、タイ文字とラーオ文字の歴史について、実際にはまだ不明な点が多い。しかしいづれにせよ、タイ文字もラーオ文字もさらにさかのぼれば、古代インドのブラフミー文字を起源としており[町田 2001: 7]、それが東南アジア大陸部へと伝播する過程において、独自に発展を遂げてきたものであるということではできるだろう。

タイ文字の子音字がラーオ文字より 16 字も多いのは、タイ語の表記に必要な文字以外に、サンスクリット語とパーリ語のもとの音に対応させるための同音異字が多く存在しているためである[表 3-1]。

²⁸ 純ラーオ語、パーリ語、サンスクリット語からの借用語に用いられる文字数は 26 字であるが、現在、欧米語の表記に関して、1975 年以降廃字となっていた /r/ の子音字を復活させる傾向にある。

²⁹ 1292 年の銘のある、スコータイのラームカムヘーン王の碑文が、現存する最古のタイ文字とされ、碑文には、ラームカムヘーン王がタイ文字をつくったことが記されている。

³⁰ しかし実際にはセデスは原タイ文字(Akson Thai Doem)の存在に言及しているものの、スコータイ文字からラーオ文字、シャム文字、トンキン文字が派生したとの説をとっており[Coedès 2507(1964)]、マハー・シラーの仮説の論拠にセデスを引用することには無理がある。

[表 3-1] ラーオ文字・タイ文字対応表

	国際音標	ラーオ	タイ		国際音標	ラーオ	タイ
1	k	ກ	ก	15	p	ປ	ป
2	kh	ຂ	ข	16	ph	ຜ	ผ
3	kh	ຄ	ค ข	17	f	ຝ	ฝ
4	ŋ	ງ	ง	18	ph	ພ	พ ภ
5	c	ຈ	จ	19	f	ຟ	ฟ
6	s	ສ	ส ศ ษ	20	m	ມ	ม
7	s	ຊ	ช	21	y	ຍ	ย
8	ɲ	ຍ	ย ญ	22	r	ຣ	ร
9	d	ດ	ด ฎ	23	l	ລ	ล พ์
10	t	ຕ	ต ฏ	24	w	ວ	ว
11	th	ຖ	ถ ฐ	25	h	ຫ	ห
12	th	ທ	ท ฑ ฒ ฒ	26	ʔ	ອ	อ
13	n	ນ	น ฌ	27	h	ຮ	ฮ
14	b	ບ	บ				

* 8の/ɲ/はタイ語には存在しない子音である。この音はタイ語ではふつう、/y/に対応するため、ここではタイ文字 **ຍ ญ** を入れた。例) 「難しい」ຍາກ/*yáak*/ (ラーオ語) ยาก/*yáak*/ (タイ語)。このほか、タイ文字にはラーオ文字の子音字に対応しない、/ch/を表わす子音字 **ช ฉ ฌ** がある。これはラーオ語では/s/に対応することが多い。例) 「象」ຂ້າງ/*sáang*/ (ラーオ語) ช้าง/*cháang*/ (タイ語)。

例えば、ラーオ語でもタイ語でも「銀行」は“タナカーン”という。これはパーリ語の *dhana* (財) と *agāra* (家) を合成して出来た語である。現在、ラーオ語では発音のとおり *thanaakhaan* と綴るのに対し、タイ語では *dhanaagaar*、すなわち *dhana+agaar* と綴り、表記から語源の音を辿ることができるものとなっている[表 3-2]。また「動物」は両言語ともにサンスクリット語の *sattva* (衆生) からの借用語“サット”である³¹。しかしラーオ語では *sat* と綴るのに対し、タイ語では *satv* と綴り、語末の文字を黙音字とすることで、ここでも語源の形が残されている。サンスクリット語 *ācārya* (阿闍梨) を語源とする「教師」「アーチャー」も、ラーオ語では *aacaan* であるが、タイ語では *aacaary* となり、末子音字 *r* と語末の黙音字にやはりもとの形が残されている³²。

³¹ パーリ語では *satta* というが、タイ語ではサンスクリット語の音が綴りに残される形となっている。

³² パーリ語では *ācariya* という。

るため、文脈から意味を判断する必要がある。しかしラオスにおいても、現在の正書法に統一されるまでには、語源型正書法を支持する勢力、音韻型を支持する勢力、その折衷型のような方法を支持する勢力など、様々な意見が存在していた。

[表 3-4]

	ラーオ語	タイ語
動物	สัตว์	สัตว์
正直	สัตย์	สัตย์

現在のラーオ語の正書法は内戦期、パテート・ラーオが解放区で用いていた正書法を、革命後に新政権が全国へと普及させたものなのである。

それでは、次節ではまずはフランス人が、どのようにラーオ語とタイ語の関係を序列化し、自らを「保護者」として位置づけていったのか、みていくことにする。

3-2 フランス人による「ラーオ語」認識—言語の序列化

3-2-1 フランス人によるラーオ語出版物

1880年代に入り、新たにアンナンとトンキンを保護領としたフランスが、植民地拡張政策に乗り出すと、シャムとの間で熾烈な領土争いが繰り広げられていく。シャムとの国境交渉を有利に進めようとしたフランスは、国境調査のためのミッションをラーオ地域へと派遣し、多分野に渡る膨大な調査報告書が作成された。将来の植民地化を前提とした、この一連のミッションにおいて、言語や碑文、年代記などに関する調査も実施され、1890年代には、立て続けに4冊のラーオ語の辞書が出版されている。

筆者の知る限り、フランス人によって編纂された、最も古いラーオ語辞書は、ハノイのイエンプー通訳学校(Collège des Interprètes de Yên-Phu)の校長であったトーピン(Taupin)が³⁵、1891年にサイゴンで出版した『ラーオ語小辞典 *Petit Vocabulaire Laotien*』である。トーピンは、1887年から88年にかけての数ヶ月間、ラーオ語の学習とコラート平原についての情報収集のため、ウボンに滞在していた³⁶[Ivarsson 2008: 36]。1893年には、この辞書の第二版が『フランス語・ラーオ語小辞典 *Vocabulaire Franco-Laotien*』とタイトルを変え、ハノイで出版されている。タイトルに「フランス語」という言葉が含まれていないものの、初版もフランス語・ラーオ語の辞典であり、ともにラーオ文字ではなく、ローマ字による表記が

³⁵ トーピンの身分は第二版出版時(1893年)のものである。筆者が入手した初版には「前書き」のページが欠落していたが、第二版に初版の前書きがそのまま引用されており、そこには1889年サイゴンと記されている。

³⁶ ウボンは現在の東北タイ南部にある。

採用されていた。第二版では語彙のほか、ウボンからサーラーワン、アッタプー、チャムパーサクなど、ラオス南部における交易や通貨単位、物価などについての調査資料、市場でのフランス人とラーオ人の会話例などが増補されていた。

出版年は1894年とトーピンより3年遅れるが、ほぼ同時期に編纂されたものとして、オーギュスト・パヴィエ(August Pavie)のミッションに参加していた薬剤師、マッシー(Massie)による『ラーオ語辞書 *Dictionnaire Laotiene*』がある³⁷。これはパリで出版された、パヴィエの『インドシナ探検：報告書と資料 *Exploration de L'Indo-China: Mémoires et Documents*』という報告書集の第2巻で、1889年から90年にかけての、ルアンパバーン滞在中に編纂されている[Massie 1894: 1]。序文によると、収録語彙は約1300語で、この辞書もすべてローマ字で表記されていた。

翌1895年には、エストラード(Estrade)による『辞書とガイド：フランス語・ラーオ語 *Dictionnaire et Guide Franco-Laotiens*』がトゥールーズで出版された。エストラードは1893年5月にラオスに入り、通訳も辞書もないなかで自らが苦勞をした体験から、辞書の編纂を思い立ったことを記している[Estrade 1895]。この辞書の表記には、クオックグー(quoc ngu)に改良を加えた独自のローマ字表記と³⁸、手書きのラーオ文字の両方が用いられ、一部の語彙ではマッシーの表記が採用されていた³⁹ [Estrade 1895: 19]。この辞書以降、フランス人による辞書類には、ラーオ文字の表記とローマ字表記が併記されるようになる。エストラードの身分は不明だが、この辞書が官吏や入植者に役立てば光榮であると記していることから[Estrade 1895: 3]、彼が植民地官吏であったことが推測される。

一方、この地域へと布教に訪れた宣教師たちも、ラーオ語の辞書を編纂している。1904年にはフランスの外国宣教師協会(Société des Missions Étrangères)の宣教師キュアツ(Cuaz)が『フランス語・ラーオ語小辞典 *Lexique Français-Laocien*』を、1912年には同じく外国宣教師協会の宣教師ギニャール(Guignard)が『ラーオ語・フランス語辞書 *Dictionnaire Laotien- Français*』を出版した。キュアツは1906年に『フランス語・ラーオ語会話教本 *Manuel de Conversation Franco-Laocienne*』も出版しているが、これにはラーオ文字は用いられず、彼が「ラオスのクオックグー(Quoc Ngu Laocienne)」とよぶ、ローマ字表記が使われている。クオックグーとは本来、ローマ字表記のベトナム語のことで、ベトナム語では「国語」を意味する。しかし、当時のフランス人は原住民語のローマ字表記をすべてクオックグーと呼んで

³⁷ オーギュスト・パヴィエはフランス人探検家官僚。フランス・シヤム間の領界問題調査の指揮をゆだねられ、1887年から95年までのあいだに3次のミッションを率いて探検調査に従事し、他分野に渡る膨大な記録を残した一方、ラーオ地域のフランス領化にいたる政治に関与した[飯島 1999: 351]。

³⁸ ローマ字表記に関しては「アンナンのクオックグー quoc-ngu Annamitie」を改良したものとして、「クオックグー」という表現を用いた説明がなされている[Estrade 1895: 3]。

³⁹ エストラードはその際、マッシーの表記を「我々の発音に合わせず、そのまま書き写すことにした」と記しており、彼がルアンパバーン以外の土地に滞在していたことが推測される[Estrade 1895: 19]。

いたようで、このほかにも、シヤムのクオックグーなどの表現が見られる。これらはキュアツの『フランス語・ラーオ語小辞典』以外すべて、香港にあった外国宣教師協会のナザレ印刷所(Imprimerie de Nazareth)から出版されている⁴⁰。

辞書以外では、1917年にベトナム人植民地官吏であった、ピエール・レ・キ・フォン(Pierre Le Ky Huong)による『ラーオ語講座 *Essai de Cours de Langue Laotienne*』がヴィエンチャンで出版されている。レ・キ・フォンはラオス理事長官の通訳で、ラオスの出版所の所長であった[Ivarsson 2008: 131]。インドシナの原住民教育向上審議会のメンバーでもあり、ラーオ語の教科書作成にも携わるなど、植民地政庁のラーオ語標準化において、重要な役割を果たした人物の1人であった。この『ラーオ語講座』は、30課からなり、第1課は文字の紹介、それ以後の課では各課に語彙と文例の紹介、それらを使った翻訳の練習問題などが含まれている。

1924年には、ラオス理事長官府官房長のローラン・メイエ(Roland Meyer)が、『ラーオ語講座 *Cours de Langue Laotienne*』をヴィエンチャンで出版している。メイエがラーオ語に堪能であったことは、メイエのもとで当時通訳を務めていた、プーミー・ウォンウィットが、自伝に記している[Phumi 1987: 17]。メイエの『ラーオ語講座』には、語彙集のほか、ラーオ語とフランス語を対照させた、手紙の文例なども掲載されていた。

こうして1920年代前半までに、宣教師やフランス植民地官吏によって、フランス人向けのラーオ語辞書や学習書の編纂が進められていった。そうしたなか、1937年になると、フランス国立東洋現用語学院(Ecole Nationale des Langues Orientales Vivantes)のラーオ語講師を務めていたオスピタリエ(Hospitalier)による、フランス人による初めての文法書『ラーオ語文法 *Grammaire Laotienne*』がパリで出版されている。オスピタリエは11年間、ラオスに滞在した経験を持ち、その間、1897年から1902年までインドシナ総督であったポール・ドゥメール(Paul Doumer)にラーオ語文法の出版を勧められたという[Hospitalier 1937: i]。オスピタリエは、「冠詞 article」や「限定形容詞 *adjectifs determinatifs*」など、フランス語の文法範疇を参照として、ラーオ語の分析を試みた。言語学者のエンフィールドは、オスピタリエの文法書を「70年たった今なお、それを凌ぐものが出ていない、素晴らしい功績」と評価している[Enfield 2007: 9]。オスピタリエはこのほか、『ラーオ文字 *L'Écriture Laotienne*』(1932年)という小冊子も出版している。これらの著作にはラーオ文字の活字が用いられているが、『ラーオ語文法』には、それを鑄造するために、長い時間を要したことが書かれている。

⁴⁰ ナザレ印刷所については、

[http://en.wikisource.org/wiki/Catholic_Encyclopedia_\(1913\)/The_Church_in_China](http://en.wikisource.org/wiki/Catholic_Encyclopedia_(1913)/The_Church_in_China)、を参照した。Cuaz(1904)のみ外国宣教師協会印刷所発行となっているが、発行地は同じく香港となっている。

3-2-2 ラーオ語とタイ語の序列化

このように 19 世紀末より、植民地化の過程と歩を一にするかたちで、フランス人によるラーオ語の辞書や学習書が編纂されてきた。これらを見てみると、初期の段階から、フランスがラーオ語とタイ（シャム）語の類似性を強く意識していたことがわかる。そうしたなか、フランスが両言語の関係を規定するうえで、とくに注目したのが、ラーオ語とタイ語の表記システムの違いであった。

シャムは長い時間をかけて、文字と正書法の修正を行ってきており、現在のようになつたのは、今からおよそ 350 年前の、アユタヤ朝のナライ王時代 (1656-88)だといわれている[鈴木 2001: 186]。20 世紀の初頭までには、タイ語の正書法は語源型をベースにある程度固定され、ラーオ文字には存在しなかった声調符号や、語源型の表記に不可欠なカランと呼ばれる黙音符号、パーリ語、サンスクリット語に対応させるための子音字の増補などがなされていった [Ivarsson 2008: 128]。とくにモンクット王（ラーマ 4 世王：1851-1868）が、タイ語の標準化に強い関心を抱いていたことから、教科書の編纂などもすすみ、20 世紀初頭には教育局から辞書類も出版されていた[Ivarsson 2008: 128]。そしてさらに、19 世紀半ば以降、西洋人によるタイ語の辞書や文法書の編纂も相次ぎ、これらの著作は西洋人たちの目に、タイ語を固定化された、規範的な言語としてみせていた⁴¹ [Ivarsson 2008: 128]。

一方、18 世紀にはランサーン王国が 3 王国へと分裂し、それらラーオ人の王国が、最終的にはすべてシャムの支配下におかれたという歴史は、ラーオ文字に、タイ語と同等の「発展」を遂げることを許さなかった。王朝権力によって、統一が進められたタイ語と異なり、フランスが植民地支配に乗り出した 19 世紀後半、ラーオ語の表記に統一した規範は存在せず、各自が好き勝手の綴りで表記していた。そしてこうした差異が、フランスが、ラーオ語をタイ語に比して「劣った言語」と見なす視点へとつながっていったことは、辞書類の記述からも明らかとなる。以下、フランス人の著作から、フランスがラーオ語とタイ語の関係をどのように規定していったのか、分析していく。

ラーオ語とタイ語の関係について、トーピンは初版の序文において、次のように述べている⁴²。

いずれにせよ、人種の共通性(*la communauté de race*)を否定することはできない。二つの言語の音種(*variotonie*)⁴³、それらのほぼ完璧な類似はまぎれもない事実であ

⁴¹ 例えば、モンクット王とも親交があったフランス人、パルゴワ (Pallegoix) 司教が 1850 年に『タイ語文法 *Grammatica linguae Thai*』を出版している。

⁴² 筆者が入手した初版には、前書きの箇所が欠落していたが、第二版に「初版の前書き」がそのまま掲載されており、以下はそこからの引用である。

⁴³ *variotonie* の訳語については、フランス極東学院ヴィエンチャン支部長のミシェル・ロリヤール

り、そのことが人種の共通性を疑いもなく証明している。あるいは〔言語の類似は〕二つのうち、一方の民族(peuples)が何千年もの間、もう一方の支配下におかれていたということを証明しているのかもしれない。しかしながら、我々にはアンナンの例がある。アンナンは、長きに渡る中国への従属と、支配者の表記体系、風習や慣例を採用したにもかかわらず、彼らの母語をほとんど全く混じりけのない、純粋なものとして保っている。(私は、俗語について言っているのである。)

今日、その違いが多く、点から十分に明らかなものとなっている、シャム人とラーオ人の二つの国民(nation)への分離は、表記システムを採用した後に起こったように思われる。ラーオ文字のアルファベットはすべて、取るに足らない違いはあるものの、シャム文字の中に見出される。後者〔シャム人〕が、その子音字の数を著しく増やしたか、さもなければ、ラーオ人が奇妙にも、その数を減らしたということであろう。私はむしろ、後者の仮説に傾いている [Taupin 1893: ii]。

Quoi qu'il en soit, on ne peut nier le communauté de race: La variotomie des deux langues, leur similitude presque complète sont des faits, qui l'attestent indubitablement; à moins qu'il ne soit prouvé que l'un des deux peuples a été sous la domination de l'autre pendant des milliers d'années; encore avons-nous l'exemple des Annamites qui, malgré leur longue sujétion à la Chine, malgré l'adoption du système d'écriture, des mœurs et des usages de leurs dominateurs, ont conservé leur langue maternelle presque pure de tout mélange. (Je parle de langue vulgaire).

Le séparation des Siamois et des Laotiens en deux nations dont les différences sont aujourd'hui assez tranchées sous beaucoup de rapports, paraît s'être fait après l'adoption d'un système d'écriture. Toutes les lettres de l'alphabet laotien se retrouvent, avec des différences graphiques insignifiantes, dans celui des Siamois. Ces derniers ont notablement augmenté le nombre de leurs consonnes, ou bien les Laotiens ont singulièrement réduit les leurs. Je pencherais plutôt vers cette dernière hypothèse.

トーピンは言語の類似性を根拠に、ラーオ人とシャム人が同一の起源を持つと断定している。ここで興味深いのは、トーピンがシャム語とラーオ語の関係を、比較的対等なものか、むしろラーオ語優位なものとして記述しているように思われることである。例えば、この続きの箇所ではトーピンは、シャム文字にはラーオ文字にはない声調記号があること、子音字の数がラーオ文字の倍近く存在することについて、「体系的な考え方を欠いた学者 un savant manquant absolument de l'esprit méthodique」によるものであると、否定的な評価を下している⁴⁴ [Taupin 1893: iii]。そしてそれに対し、ラーオ語は大いに実用的であると、肯定的とも取れる表現を用いている。

しかしこうしたトーピンの評価は、植民地時代にあつては、むしろ例外的なもの

(Michel Lorrillard)博士にご教示いただいた。

⁴⁴ 植民地時代初期のラーオ文字には、現在のラーオ文字にはある声調記号が存在しなかった。

のであった。例えばエストラードは、「ラーオ語を話すことは、シャム語を話すこととほぼ同じである。ラーオ語とシャム語は非常によく似ている。このことは、二つの民族(peuple)が同一起源であることを知っていれば、全く驚くに値しない Parler laotien, c'est presque parler siamois, les langues laotienne et siamoise ayant entre elles de grandes affinités; cela n'étonne nullement, connaissant l'origine commune des deux peuples」 と[Estrade 1895: 10]、トーピンとほぼ同様のことを述べている。しかし、

ラーオの知識人たちについていえば、彼らの言語はその起源からほとんど変化していない。文字に関して、はっきりと修正が施されてきたシャム語とは大いに異なっている。事物の運命的な作用によって、最も教養のない、貧しいところへと追いやられてしまった。ラーオ語は母なる人種〔シャムのこと〕の進歩との結びつきを全くもたない[Estrade 1895: 10]。

Au dire des lettrés laotiens, leur langue a très peu changé depuis son origine; il n'en est pas de même de la langue siamoise, qui s'est sensiblement modifiée quant à l'écriture. Repoussé, par l'action fatale des choses, vers les parties les plus incultes et les plus pauvres, le Laotien ne s'est nullement associé aux progrès de la race mère:

として、同一起源にあっても、シャム語はその表記に改良を加え、発展を続けてきたのに対し、ラーオ語は何の進化もせず、起源のままにとどまっていると、2つの言語を通時的に比較し、ラーオ語をシャム語の下位においている。このときエストラードは、シャム人をラーオ人にとって「母なる人種」とまで呼び、ラーオ語とシャム語の優劣関係を、そのままラーオ人とシャム人の「人種」的な優劣関係へと変換している。

キュアツにおいては、こうしたラーオ語とシャム語の優劣関係が、さらに顕著なものとなる。キュアツはラーオ語とシャム語の関係について、「ラーオ語は、シャム語の方言か、むしろパトワ(patois 俚言)でしかない Le laocien n'est qu'un dialecte, ou plutôt un patois siamois」 と、もはやラーオ語が「言語」ではなくシャム語のパトワ、すなわち方言以下の存在でしかないとする [Cuaz 1904: xi v - x v]。そして「たとえ、シャム語とラーオ語が根源において、一つの言語であったか、あるいは二つの姉妹言語であったとしても、一方は時間とともに大いに進歩したのに対し、他方は退化の一途をたどってきた si le siamois et le laocien étaient, dans le principe, une seule et même langue ou deux langues sœurs, l'une a progressé beaucoup en vieillissant, tandis que l'autre n'a fait que dégénérer」 と、キュアツにおいても両言語の「発展」の度合いが通時的に比較されている[Cuaz 1904: xii]。キュアツはラーオ語が「パトワ」である根拠として、

ラーオ語とシャム語、すなわちマンダリン(mandarin)の関係は、非常に密接であ

る。10のうち、せいぜい3語がタイ・ラーオ語〔ラーオ語のこと〕に固有のものである。それらはとりわけ、鳥、植物、魚など、自然の事象についての語に見出される。ラーオ語をシャム語のパトワとしている、その他すべての相違は、子供のような方法で発音される語において、いくつかの母音と子音が変質したり、あるいは削除されていることからくるものである[Cuaz 1904: xi]。

Les rapports du laocien avec le siamois ou langue mandarine sont beaucoup plus étroits. Trois mots à peine sur dix sont particuliers au Thai Lao; et on les trouve surtout dans les termes d'histoire naturelle: oiseaux, plantes et poissons. Les autres différences qui font du laocien un patois siamois, proviennent surtout de l'altération ou de la suppression de certaines voyelles et consonnes, dans les mots prononcés à la manière des enfants....

と、ラーオ語とシャム語の発音の違いを挙げ、ラーオ語を、シャム語が「子供のような方法」で発音されたものと蔑んでいる。キュアツのいう、母音と子音の変質や削除とは、「はじめに」で言及したような、頭子音/r/がラーオ語では/h/か/l/になるもの、さらに“プラー”/plaa/「魚」のような、タイ語の二重子音が、ラーオ語では“パー”/pǎa/と脱落するものなどを指しているものと思われる。キュアツはシャム語が、ラオスの教養のある人や貴族たちにとってのマンダリンとなっているとし、このラーオ語辞書は、彼が前年に出版したフランス語・シャム語辞書の補足でしかないと述べている⁴⁵ [Cuaz 1904: v]。

一方、キュアツの辞書から8年後、1912年に出版された辞書において、ギニャールは、ラーオ語もシャム語も、シャン(Shan)語などと共に⁴⁶、同じタイ諸語のひとつであるとして、両言語を対等な関係においている[Guignard 1912: i]。ギニャールはさらに、シャムにおいてはラーオ人がタイ(Thay)人と呼ばれ、その言語は単に「タイ(Thay)語」として扱われることを指摘する[Guignard 1912: ii]⁴⁷。そしてこの原因のひとつとして、タイ系諸民族に対するヘゲモニーを確立しようとする、長年に渡るシャムの膨張主義的な野心に言及している[Guignard 1912: ii]。イヴァルソンは、ギニャールがラーオ語の声調を6、シャム語の声調を5と区別したことを重視し、これにより、ギニャールがラーオ語とシャム語の境界線を明確化し、ラーオ語に独立した「言語」としての基礎を与えたとする[Ivarsson 2008: 130]。そして、ギニャールの辞書を、「ラーオ語のシャム語の従属的位置からの解放の重要なシンボル」と位置づけている[Ivarsson 2008: 130]。

たしかに、キュアツやエストラードに比して、ギニャールはラーオ語とシャム語を対等に扱っている。しかしながら、ピエール・レ・キ・フォン(1917)やローラ

⁴⁵ キュアツは1903年に『フランス語・シャム語辞書 *Essai de Dictionnaire Francais-Siamois*』をバンコクで出版していた。

⁴⁶ シャン語とはビルマ(ミャンマー)のシャン州を中心に居住する、タイ系民族シャン族の言語。

⁴⁷ ギニャールはタイ系民族を tai ではなく thay と表記している。

ン・メイエ(1924)など、ギニャール以降に出版された著作をみてみれば、ラーオ語とシャム語の序列は決して覆されてはおらず、ギニャールの辞書を「解放のシンボル」とするのは時期尚早である。しかしまた一方で、レ・キ・フォンやメイエにおいては、ラーオ語とシャム語をただ序列化するだけではなく、そこに「保護者」としてのフランスの役割が追加されるという、新たな変化が見出される。

実際、キュアツのようにラーオ語をシャム語のパトワとしてしまうことは、民族的な同一性を主張しての、シャムの膨張主義的要求にとって、都合のよい根拠を準備してしまうことといえた。そのため、シャム語とラーオ語を別々の「言語」として認めたいうえで、フランスのもとでのラーオ語の「復興」を強調する方が、植民地支配を正当化するうえでも、好都合であったのであろう。

次項では、こうした新しい傾向について、メイエの著作を中心に分析していくことにする。

3-2-3 ラーオ語の「再建」と「保護者」フランス

1893年にフランス・シャム条約が結ばれ、メコン左岸がフランス植民地となった後も、シャムの「失地」回復への思いは、消え去ることはなかった。こうしたシャムの動きに対し、フランス側が警戒心を抱いていたことは、ギニャールがシャムの膨張主義的傾向に言及していたことから、明らかであろう。そうしたなか、フランスは次第に、シャムの脅威から「ラオス」を守る「保護者」としての役割を強調するようになる。言語に関しても、ラーオ語を現在の「退化」した状態へと追いやった要因を、シャムとの戦乱の歴史に求め、「保護者」フランスのもとでの、ラーオ語の「再建」というシナリオが描き出されていく。

レ・キ・フォンは、ラーオ人とシャム人が遠い過去においては、同一の言語を話していたが、その言語が、ラオスにおいては原初のままにとどまったのに対し、シャムでは改良されてきたとして、ここでもタイ語とラーオ語の通時的な比較がなされている⁴⁸[Le Ky Huong 1917: 1]。そしてシャムによって、ラーオ人の知識層が殺されたり、捕虜としてバンコクに連れ去られたことにより、『シンサイ』や『リントーン』、『チャムパー・シートン』などの文学作品で使われている土着の表現を、もはや理解できるものがいなくなったとして⁴⁹、ラーオ語の「没落」を、知識人の不在という点から説明している[Le Ky Huong 1917: 2]。こうした状況に対し、レ・キ・フォンは、「植民地当局が、ラーオ人の知性を発展させるため、この言語〔ラーオ語〕の「復興」に関心を注ぐことを願う Il serait à souhaiter que l'Administration se préoccupât de <faire revivre> cette langue. Ce serait rendre service au peuple laotien pour son

⁴⁸ 序文からの引用であるが、序文にはページ数が書かれていないため、便宜的に序文の1ページ目という意味で1と記した。序文は3ページから成る。

⁴⁹ いずれもラーオ語の文学作品である。

développement intellectuel] と述べ、フランスのもとでのラーオ語の「復興」を訴えている [Le Ky Huong 1917: 2]。レ・キ・フォンはここで、彼がこれ以前に書いた著作に関して、「シャム語の表現を用いすぎている」との批判を受けてきた、ということについても記している [Le Ky Huong 1917: 2]。この批判がラーオ人によってなされたのか、フランスによるものなのかは不明だが、ラーオ語からシャム語の影響を排除しようとする動きが、1917 年以前から見られるようになっていたことがうかがえる。

一方、メイエにおいては、「保護者」フランスの役割がより明確に示されているのみならず、ラーオ語とシャム語の序列化がインド・ヨーロッパ諸語との関連から説明されている。以下、少々長くなるが、メイエの著作を分析していくこととする。

「ラーオ語は、インドシナの言語のなかで、もっとも単純で容易な言語である *La langue laotienne est la plus simple et la plus facile des langues indochinoises*」これはメイエが、『ラーオ語講座』冒頭の民族誌において、述べた言葉である [Meyer 1924: 1]。「もっとも単純で容易な言語」とは、ラーオ語に対する、彼のどのような評価を表しているのであろうか、メイエの記述を簡単に紹介してみたい。

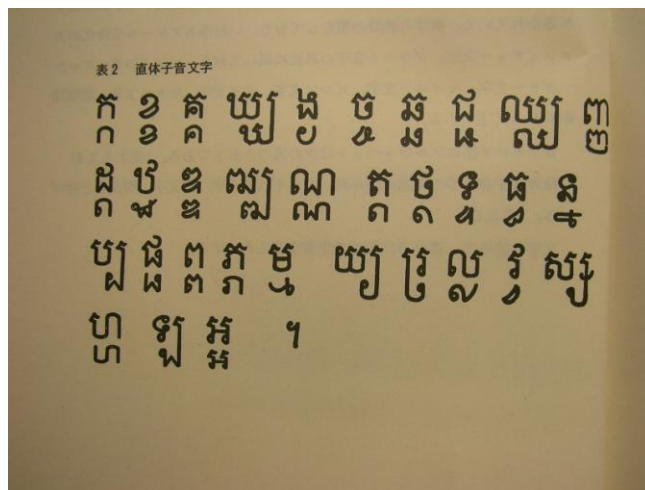
メイエはインドシナ半島について、アンナン山脈が中国世界(東斜面)とインド世界(西斜面)を分ける分水嶺となっていることを述べ、「西斜面、すなわちインド側の斜面には、一つの際立った集団が集まっている。すなわち、インド・ヨーロッパ文明の諸民族の後衛に忍従している、ラオス、シャム、ビルマ、カンボジアである *Le versant occidental, ou versant indien, réunit dans une frappante unité de famille: le Laos, le Siam, la Birmanie et le Cambodge* [太字原文], *arrière garde résignée des peuples de civilisation indo-européenne*」 [Meyer 1924: 1]。「〔東斜面を見た後で〕インドシナの脊椎、アンナン山脈を再びとおると、我々はただちに、ヨーロッパを、あるいは少なくとも我々、西洋の人種と文明の発祥地であるインドをより近く感じる *repassons la chaîne annamitique, épine dorsale de l'Indochine, et nous nous sentirons tout de suite plus près de l'Europe ou tout au moins, de l'Inde, berceau de nos civilisations et de nos races d'Occident*」 [Meyer 1924: 2]として、東斜面、すなわち中国文明の影響を受けたベトナムに対して、ラオス、シャム、ビルマ、カンボジアへの愛着を示している。ヨーロッパでは 19 世紀以降、比較言語学が発達するなか、「他者」の言語に対する「我々」の言語、つまりインド・ヨーロッパ諸語の優位性を構築する、ヨーロッパ中心主義的な言語観が発展していた。こうした言語理論は「我々(ヨーロッパ)」と「他者(植民地の支配者)」の関係を「比較」から「優劣」の関係へと変換し、植民地主義の正当化へと貢献していくことになる [カルヴェ 2006]。メイエの西斜面への親近感は、ひとえにこれらの地域が、インド・ヨーロッパ諸語の「発祥地」とされるインド文明の影響を受けてきた、という理由による。彼が東斜面を「本来の意味での黄色の世界、すなわち我々インド・ヨーロッパ人の精神にとっては不可解な極東 *le Monde-Jaune proprement dit,*

l'Extrême-Orient impénétrable à notre mentalité indo-européenne」[Meyer 1924: 1]と差別的に表現していることから、そうした当時の思想の影響を読み取れよう。

メイエは、西斜面についてもインド文明からの影響の濃淡を基準に序列をつけ、クメール帝国時代に、仏教をはじめとするインド文明を直接取り入れたカンボジアを頂点に、クメールを経由して、それらを間接的に取り入れた、シャムとラオスをその下においた。そして言語に関して、「言語と文字の豊かさについて、例えば宗教文学、道徳文学の遺産のような、パーリ語、サンスクリット語の起源の保存についていえば、カンボジアはシャムの2倍、ラオスの3倍豊かである。すなわち、もしクメール語の豊かさを係数3で表わすならば、シャム語は2、ラーオ語は1と表わせるだろう。Pour l'abondance de la langue et de l'écriture, pour la conservation des origines pâlies et sanscrites, comme du patrimoine littéraire religieux et moral, le Cambodge est encore deux fois plus riche que le Siam et trois fois plus riche que le Laos. C'est dire que si la richesse de la langue Khmère était représentée par le coefficient 3, celle de la langue siamoise le serait par le coefficient 2 et celle de langue laotienne par le coefficient 1」とした[Meyer 1924: 3]。

ここでは、とりわけ「言語の豊かさ」が「文字の豊かさ」、「パーリ語、サンスクリット語起源の保存」とともに語られている点に注目したい。クメール語にもタイ語、ラーオ語と同様に、多くのパーリ語、サンスクリット語起源の借用語が含まれている。クメール文字でサンスクリット語を表した最古の碑文は5世紀のものと推測されており[峰岸 2001: 349]、クメール文字は、13世紀にスコタイ文字ができるずっと以前から、サンスクリット語の表記に使われていた文字であった[写真3-1]。

[写真 3-1] クメール文字



出典：[和泉 1988: 14]

したがって当然、クメール文字にはパーリ語とサンスクリット語に対応した33の子音字があり、今日のカンボジア語の表記にも、語源型の正書法が用いられてい

る。メイエは正書法に直接言及してはいないが、「文字の豊かさ」を挙げていることから、パーリ語、サンスクリット語という、インド系言語に対応した文字数を持つか否かが、彼が言語の序列を決定する際の、ひとつの判断材料となっていた、ということができるだろう。

ラーオ語を最下位においたことについて、メイエはフランスがラオスの植民地化を開始した 1893 年までには、「ラオス」は内乱や外的の侵入によって、その起源、言語、文字、宗教や伝統を忘れ去った、子供の状態に陥っていたとして、ラーオ人の諸王国の独立喪失とラーオ語の衰退を重ね合わせて説明している [Meyer 1924: 3]。そして「フランスは、再建すべき過去の遺物を寄せ集め、消えかかった一つの言語の最後のアクセントを集めるために、時宜にかなってやって来たのだ *La France est venue à temps pour ramasser les vestiges d'une passé à rebâtir, pour recueillir ses derniers accents d'une langue près de s'éteindre*」と「衰退」したラーオ語の「再建者」としてのフランスを描き出し、「それゆえにラーオ語はインドシナの言語のなかで、もっとも単純で容易な言語なのである *C'est pourquoi la langue laotienne est la plus simple et la plus facile des langues indochinoises*」と締めくくっている [Meyer 1924: 3]。

以上の内容から、メイエの「もっとも単純で容易な言語」という評価が決して肯定的なものではないことがわかる。メイエにおいては、ラーオ語の現在の状態は、仏教を中心とした、インド文明の影響を受けて栄えた、過去の繁栄からの衰退の結果であり、シャム語、カンボジア語に比しての文字の少なさ、正書法の単純さは、ラーオ語の「衰退」の表れなのであった。

このように、メイエにおいては、シャム語とラーオ語の関係は、カンボジア語も含めた、「語族」という言語学的な分類の壁を超えて、インド・ヨーロッパ語族の「揺籃の地」である、インド文明との関係からその優劣が決定されていった。これに対して、先にみたように、その他のフランス人の著作においては、タイ語とラーオ語の 2 言語に限定しての記述が主流であった。彼らがメイエと同様の考えのもと、2 言語を序列化したのかは不明である。しかしフランス人のあいだで、ラーオ文字がタイ文字より少ないこと、正書法の規範が定まっていないことが、ラーオ語とタイ語の優劣を決定する主要因となっていたということは間違いないだろう。それでは、フランスはラーオ語をどのように「再建」していこうとしていたのか。次節では、正書法をめぐる議論を検討していくこととする。

3-3 ラーオ語正書法論議

3-3-1 議論の開始

これまでに見てきたように、植民地時代、フランス人の間ではラーオ語をタイ語よりも「遅れた言語」とする認識が広く共有されていた。ラオスに対して「愚民政策」を採ったフランスは、ラーオ人への教育には不熱心で、ラーオ語の標準化にも

なかなか着手しなかった⁵⁰。しかし 1917 年に、6 年間の初等教育が一部実施されると、教科書編纂の必要からようやく、ラーオ語正書法の統一へと関心が向けられるようになる。レ・キ・フォンやメイエにおいて、フランスの「保護者」としての役割が強調されるようになったのも、こうした政策上の変化が影響していたのであろう。そしてフランス植民地政庁の主導のもと、ラーオ語正書法統一へ向けた会議が開催されていく。

ラーオ語の正書法が本格的に議論されるきっかけとなったのは、1918 年にルアンパバーンの弁務官メリエール(Mellier)がラーオ文字に替え、シャム(タイ)文字のラーオ語表記への使用を提案したことによる[菊池 1997b: 90]。ラーオ語とタイ語は、ほぼ同じ音韻体系であることから、シャム文字でラーオ語を表記することは不可能なことではなかった。メリエールは、すでに活字の存在した、シャム文字の採用こそが、教科書をはじめとしたラーオ語書物出版のための、もっとも簡便で経済的な方法であると主張したのであった[菊池 1997b: 90]。

この提案に対して、ヴィエンチャンの理事長官府の官吏であったペッサラートは、シャム文字の採用はラーオ文字のみならず、ラーオ語、ラーオ文学の消滅につながると強く反対し、あくまでもラーオ文字による正書法の確立を主張した[菊池 1997b: 88-89]。ペッサラートはルアンパバーンの副王の家系で、フランス留学経験のある数少ないラーオ人の 1 人であった。のちにラーオ・イサラ(自由ラオス)運動を主導していくことともなる彼にとって、シャム文字でラーオ語を表記するなど、耐え難いことであったのだろう。ペッサラートにとってラーオ語、ラーオ文学は「ラオス人の魂」であり、それをシャム文字で表記することは、ラオスの「シャム化」につながるものと考えられた[菊池 1997b: 88]。

こうした認識が、フランス側にも共有されていたであろうことは、ラーオ語正書法会議への参加を求められた、フランス極東学院所属の考古学者で、当時バンコクの国立図書館長をしていたジョルジュ・セデスが、ラーオ語の標準化を「シャムの政治的影響からラオスを守るためのプロジェクト」としたことからもうかがえる[Ivarsson 1999: 71]。フランスにとってもラーオ文字の維持は、ラーオ語とタイ語の境界を明確化し、シャムの脅威からラオスを守る「保護者」として、フランスの植民地支配を正当化するための、重要な切り札であったのであろう。そしてこうした流れのもと、1918 年以降、フランス植民地政庁により、ラーオ語正書法を確定するための会議が幾度となく開催されていく。ラーオ語正書法をめぐるのは、植民地時代をとおして様々な意見が出されたが、それらは大きくわけて 1) タイ語のようにインド系借用語について、もとのかたちを綴りに反映させるべきである(語源型)、2) 発音とおりに綴るべきである(音韻型)、3) ローマ字化、という 3 つの意見に集約できる。以下にその 3 つの特徴をみていくことと

⁵⁰ フランスは現地人官吏としてはベトナム人を採用したため、ラーオ人向けの教育制度の整備に積極的ではなかった。

する。

3-3-2 語源型正書法と仏教教育の近代化

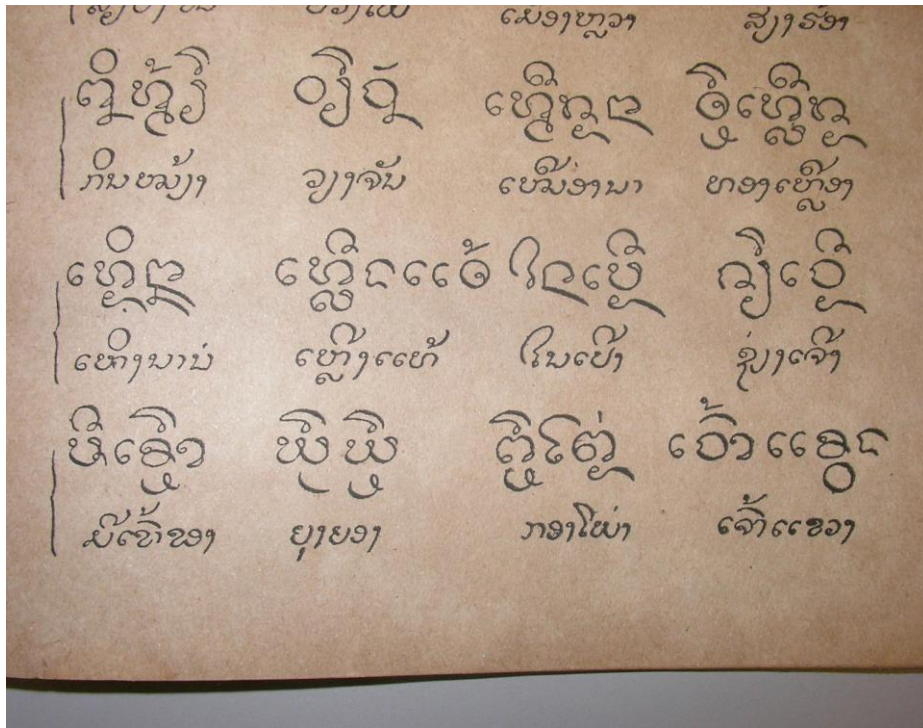
語源型の正書法を支持したのは、仏教高等教育を受けたものたちであり、その中心となったのが、先述のマハー・シラー・ウィーラウォンであった。マハー・シラーは1905年、東北タイ、ローイエットのラーオ人の家に生まれ、バンコクで高等教育を受けたのち、1930年に25歳でヴィエンチャンへと渡った[矢野 2002: 109]。マハー・シラーはラオスへ渡る前には東北タイの寺院でパーリ語の教師をしており[Maha Sila 2004: 44]、こうしたタイでの経験が、ラーオ語正書法に対する彼の考え方に少なからぬ影響を与えることになる。

マハー・シラーはラオスに渡ると間もなく還俗し、1931年にはペッサラートの指示により、仏教協会付属のパーリ語学校の教師に就任している[Maha Sila 2004: 46]。かつてヴィエンチャンは、この地域の仏教教育の中心地として栄え、シャムやカンボジアの近隣上座仏教国からも多くの僧侶たちが留学してきていた[Ivarsson 2008: 120]。しかし1827～28年にかけてのアヌ王による戦乱の結果、ヴィエンチャンが徹底的に破壊されると、かつての伝統は廃れ、ラーオ人の僧侶たちがバンコクへと留学するようになっていた[Ivarsson 2008: 120]。仏教協会は、こうした上座仏教をとおしてのシャムと「ラオス」の関係を断ち切ろうとしたフランスが、ラオスにおける仏教の復興を目的として設置したものであった[Ivarsson 2008: 123-124]。仏教協会にはパーリ語学校のほかに図書館が設置されており、ペッサラートが図書館の館長を務めていた[Sila 1995: 30-31]。

パーリ語学校とはいっても、マハー・シラーの着任当初、学校には教科書もカリキュラムも存在せず[Maha Sila 2004: 46]、生徒数もわずか5名に過ぎなかった[Sila 1995: 31]。そのため、まず何よりも教科書を編纂する必要に迫られたマハー・シラーは、ペッサラートにタム文字の使用をやめ、ラーオ文字でパーリ語を表記できるよう、ラーオ文字に14の子音字を加えることを提案した[矢野 2002: 109]。ラーオ人の間では従来、俗語（ラーオ語）の記述にはラーオ文字が、聖典言語であるパーリ語の記述にはタム文字が用いられてきており⁵¹、仏典を読むためにはタム文字の知識が必須であった。同じインド系の文字ではあっても、ラーオ文字とは系統を異にするタム文字を読むには特別な学習が必要であり、このことはラーオ人の僧侶たちにとって、大きな負担となっていたのである[写真 3-2]。

⁵¹ しかしこの区分は絶対的なものではなく、タム文字でラーオ語を記したものも存在する。

[写真 3-2] タム文字とラーオ文字



上段がタム文字、下段がラーオ文字で同一の語を表わしている。1行目左から二つ目は「ヴィエンチャン」

出典：[Phanya Luang Maha Sena 1957: 37]

マハー・シラーは子音字を加えれば、ラーオ語の表記にパーリ語の語源を正確に表わすことが可能となり、同音異義語の区別が容易となること、仏教教育制度の確立に必要な、パーリ語教科書や教理教科書の出版が容易となり、僧侶がタム文字学習の負担から解放されること、タム文字の知識のないものにも、広く仏教教義を普及させることができることなどを挙げ、文字の追加は聖俗両方の領域にとって有益であると主張した[Sila 1935]。

マハー・シラーが教育を受けたシャムでは、19世紀末以降、チュラロンコーン王(ラーマ5世王)の異母弟ワチラヤーン親王によって、教法試験制度の成立を核に、近代的な仏教教育制度が整備されていた[石井 1975]。そうしたなか、文字に関しても、かつてはパーリ語の記述にはコーム文字と呼ばれる文字が用いられていたのが⁵²、タイ文字によってパーリ語を記述するようになり⁵³ [Sila 1995: 30]、タイ語、タイ文字による教理教科書や経典のタイ語訳などが、多数出版されていた[石井 1975]。これら一連の改革により、シャムでは僧侶たちの学習が飛躍的に効率化しただけではなく、パーリ語の知識のない人びとでも、タイ語で仏教の教理につ

⁵² コーム文字とはクメール人が用いていた文字である。

⁵³ マハー・シラーによると、ワチラヤーン親王が、コーム文字の使用を中止し、以後タイ文字のみでタイ語とパーリ語、サンスクリット語を表記するようになったということである [Sila 1995: 30]。

いて学習することが可能となり、仏教の「世俗化」も進んでいた。そしてこうしたタイ語、タイ文字による教科書は当時、バンコクへと留学していたラーオ人の僧侶たちによってラオスにも持ち込まれ、ラーオ人の僧侶たちがタイ語の教科書を用いて、仏教の学習をするという事態を招いていた。ラーオ人の僧侶にとって、バイラーンと呼ばれる、貝葉文書に手書きのタム文字で書かれたパーリ語経典を読むより、タイ語、タイ文字による教科書や解説書と呼んで学習するほうが、はるかに容易であったことは疑いの余地がないであろう。そうしたなか、ラオスにおいて仏教教理の学習＝タイ語学習ともなりかねない状況がみられるようになっていたのである。1951年に仏教高等教育を受けるため、ヴィエンチャンへと移り住んだマハー・ブンニョック・セーンストーン(Maha Bunnyok Saensunthon)氏も、氏の地元のチャムパーサク県では当時なお、タイ語によるパーリ語や教理教科書のみを用いていたことを記している[Maha Sila 2004: 18]。

[写真 3-3] 追加された 14 の子音字

ຕົວບາລີ	ຕົວລາວຕື່ມ ໃໝ່	ຕົວບາລີ	ຕົວລາວຕື່ມ ໃໝ່
ข	ฃ	ฅ	ฆ
ฉ	ง	จ	ฉ
ฉ	ช	ซ	ฌ
ช	ซ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ
ฌ	ฌ	ฌ	ฌ

การตั้งพยัญชนะ ๑๔ ตัวนี้เข้าใบคำ

1,3 行目がタム文字、2,4 行目がタム文字に対応する追加されたラーオ文字。出典：[Sila 1935: viii]

マハー・シラーはこうした、仏教をとおしてのタイ語の影響を遮断し、ラオスにおける仏教教育の近代化のためにも、ラーオ文字に 14 の子音字を追加する必要があると考えたのである[写真 3-3]。マハー・シラーの提案は、1932年、ペッサラートを議長に開催された正書法会議のなかで採用され、1935年には仏教教会から、マハー・シラーによる『ラーオ語文法』が出版される[Sila 1935: 31-34]。しかしながら、この方法は 14 の子音字の追加に加えて、黙音字符号や特別な末尾子音字の使用など、大衆が学ぶには複雑すぎるとして、公教育では採用されず、仏教教会内での使用にとどめられた[矢野 2002: 110]。

このように、語源型の支持者たちにとっての「正しい」ラーオ語正書法とは、ラオスにおける仏教と仏教教育制度の近代化を視野に、ラーオ文字でパーリ語を記述できるようにすることを前提としたものであった。シヤムを含め、カンボジ

ア、ビルマ、スリランカなどの他の上座仏教国においてはすべて、聖俗同一の文字が使われており、これらの国々に遅れをとらないためにも、ラーオ文字と同様の機能を備えることが、不可欠と考えられたのであろう。しかし一方で、この 14 の文字の追加に対して、強硬に反対する勢力があった。次に、音韻型正書法の支持者たちについてみていくこととする。

3-3-3 音韻型正書法—序列の逆転

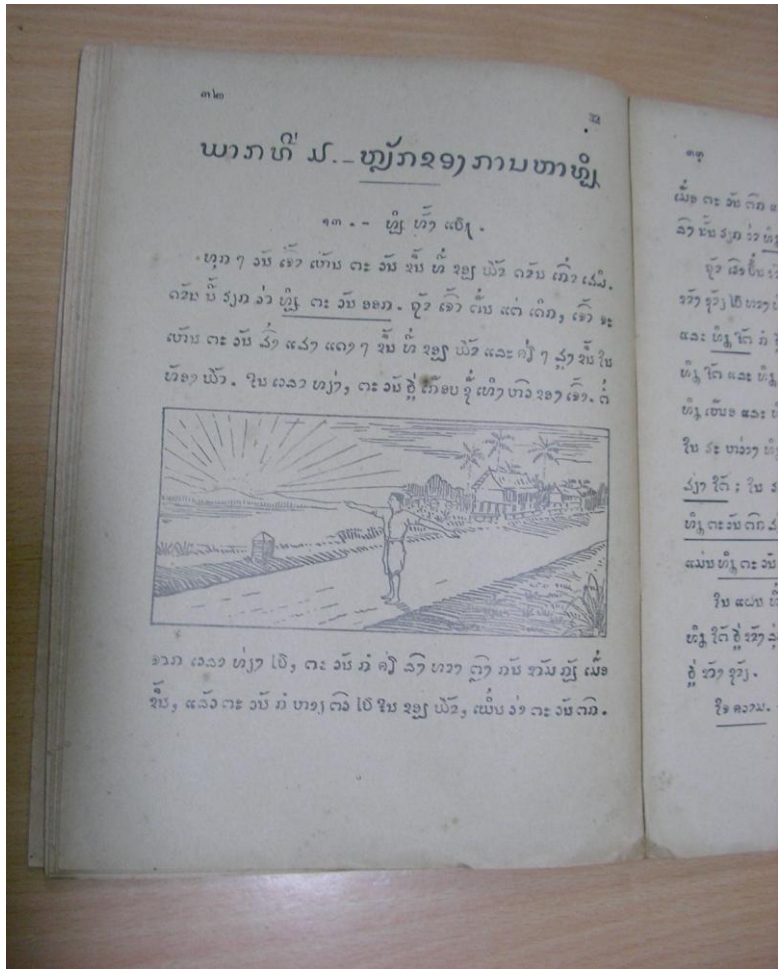
発音どおりに綴るといふ音韻型の正書法を支持したのは、主としてフランス式の世俗教育を受けたものたちであった。「発音どおり」とはいつても、実際にどの程度発音にしたがうかという点に関しては、植民地時代をとおしてかなりの揺れがあった。したがって本論文においては、それぞれが支持した方法が完全に発音に沿ったものではなかったとしても、その主張に「発音どおりに綴る」という意図が明確に見出されるものはすべて、音韻型と呼ぶこととする。

1918 年以降、ラーオ語正書法に関する会議が開催されるようになっても、正書法の統一はなかなか達成されなかったようである。例えば、数字に関して、1934 年に出版された地理の教科書を見てみると、一冊の教科書のなかに、ラーオ文字の数字とタイ文字の数字の二種類が混在するなど、表記が混乱していた様子が見えがえる[写真 3-4][写真 3-5]⁵⁴。そうしたなか、1938 年から 39 年にかけて開かれた、一連の委員会において、音韻型を押し声が優勢となっていく。このときの委員会では、マハー・シラーとペッサラートが先の仏教協会による正書法を支持したのに対し、教育の普及のため、出来る限り発音に即した、簡易な正書法を採用すべきだという意見が多数派を占め、フランス側もこの時点では、音韻型の正書法に賛成していた。激しい議論の末、最終的に後者の意見が採用され、1939 年 8 月 9 日の理事長官布告により、ラーオ語正書法が正式に決定された[菊池 1997b: 84]。

残念ながら、筆者はこの布告文を入手できていないため、決定された正書法の詳細は不明である。しかし、先行研究に記された上述の委員会での議論の経過や、当時の出版物に見られる表記から、音韻型を原則とした正書法が採用されていたことは間違いないものと思われる。

⁵⁴ 1930 年代ごろまで、ラーオ数字、タイ数字の両方が用いられていることがあったようである。キューアツとギニャールの辞書ではラーオ数字で書かれていたが、エストラード、メイエにおいてはタイ数字が使われていた。教科書類にもタイ数字のもの、ラーオ数字のもの両方が見受けられる。例えば、地理教科書と同年に出版された小学 2 年の読解の教科書には、すべてラーオ数字が使われていた。

[写真 3-4] 1934 年版地理教科書



左上ページ数の 3 がタイ数字、第三部の「3」〔太字部分〕はラオス数字で書かれている。

出典：[Service Local de L'Enseignement 1934a: 32]ハノイ国家図書館蔵

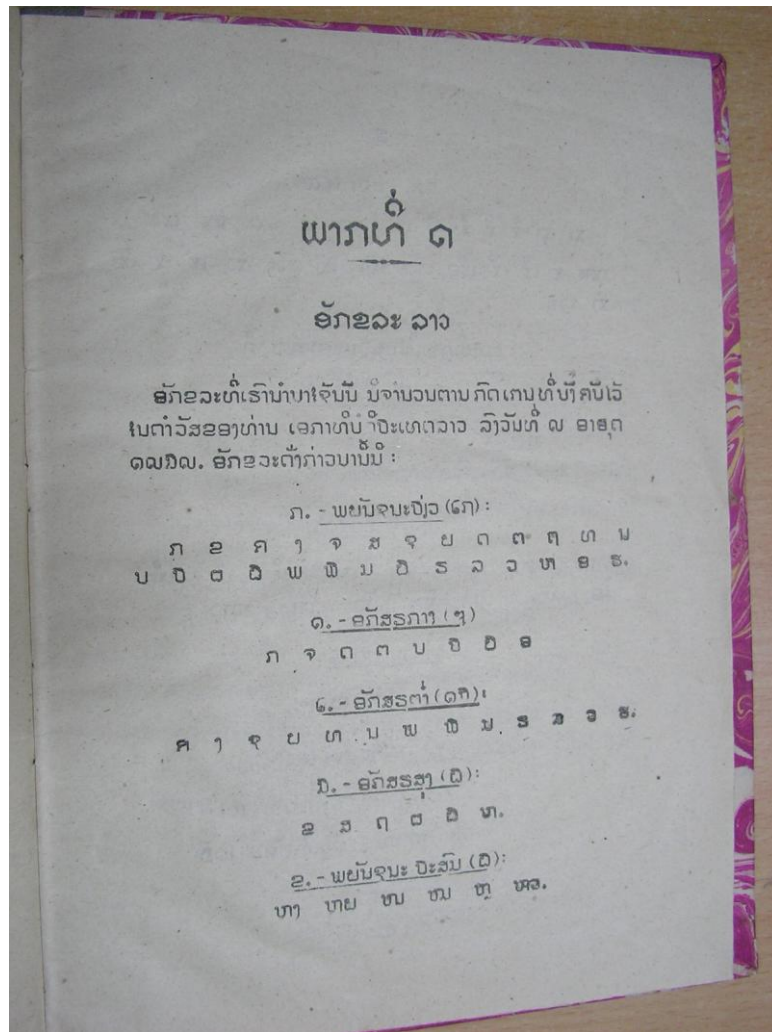
[写真 3-5] 上がラーオ数字、下がタイ数字 出典：[Phitsanu 2002: 30]

ຕົວເລຂລາວ

໑	໒	໓	໔	໕
໑	໒	໓	໔	໕
໖	໗	໘	໙	໐
໖	໗	໘	໙	໐

1944年に『ラーオ・ニャイ』から出版された『ラーオ文字と正書法 *Alphabet et Orthographe Lao/ Akkhala lae Sakotkham nai Phasa Lao*』という小冊子には、39年の布告で決定された文字体系が掲載されており、それまで、さまざまなバリエーションが存在したのが、/r/の子音字を含めた27の子音字、マイトー、マイエークという2つの声調符号、母音符号と、この布告によって、現在の文字体系がほぼ固まったことがうかがえる[写真3-6][写真3-7]⁵⁵。

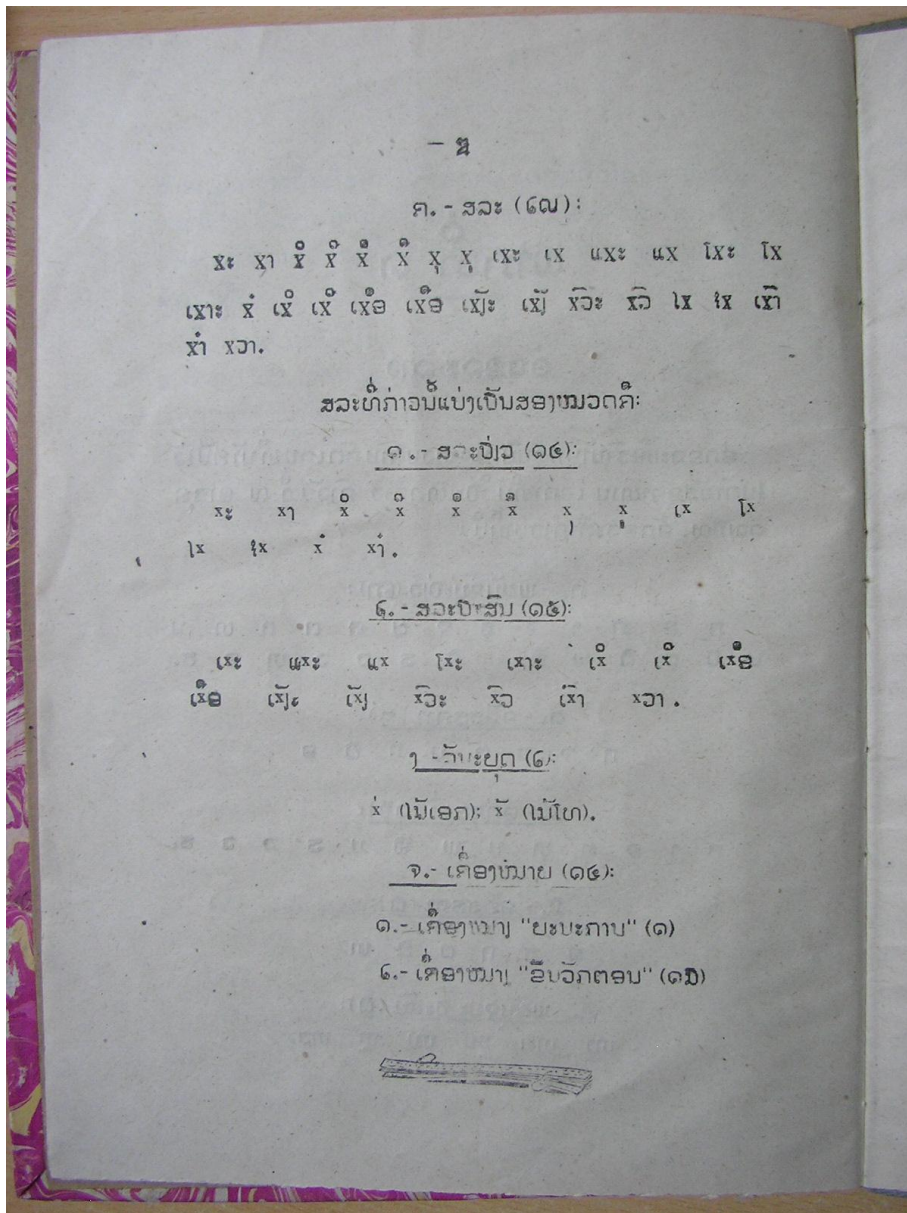
[写真3-6] 子音字の表



出典：[Lao Nhay 1944:7] ハノイ国家図書館蔵

⁵⁵ この布告には黙音字符号は含まれていなかった。

[写真 3-7] 母音符号、声調符号、その他の記号



出典：母音符号と声調符号、その他の記号[Lao Nhay 1944:8]

1944年にラオス文学委員会により正書法が議論された際にも、「正書法は最も簡単なものでなければならない。それゆえに発音にしたがって綴らなければならない」と明記されており[Lao Nhay 1944: 9]、時期によってどの程度発音に沿わせるかに揺れがあるものの、44年ごろまでには「音韻型」が「正しい」ラーオ語正書法の原則として受け入れられるようになっていたといえることができるだろう。

音韻型が優勢となった要因としては、語源型の正書法の難解さとともに、ラーオ人エリートの間で、語源型の正書法がタイ語の正書法を真似たものと認識されていたことが挙げられる。例えば、仏教協会の『ラーオ語文法』では、パーリ語・

サンスクリット語 *nagara* (都市) を語源とする“ナコーン”(都)を、*ngr* とタイ語と全く同一の方法で綴っている[表 3-5]。この綴りは母音符号を付すことなく、*ngr* の 3 文字の子音字のみで *nakhoon* と読ませるもので、タイ語正書法のなかでも、とくに語源の形を維持したものといえる⁵⁶。現在の正書法と比べて、これがいかにタイ語の正書法と類似したものであるかは、表をみれば明らかであろう。

[表 3-5]正書法比較

	仏教協会(語源型)	現在(音韻型)	タイ語
都	นຄຣ / <i>nakhóɔn</i> /	ນະຄອນ/ <i>nakhóɔn</i> /	นคร / <i>nakhóɔn</i> /

こうした正書法に対して、例えば 1936 年に出版された、ラーオ語とフランス語の 2 言語による『ラーオ語の音節 *Syllabaire Laotien: Baep Son An Phasa Lao*』の前書きにおいて、小学校長であった著者ターオ・ボン(Thao Bongk)は、

繰り返し繰り返し、ラーオ文字の改革の問題があった。ある人びとは、現在用いられているラーオ文字のアルファベットは不十分で、“正しく”言語のすべての語を書き写すことができないと考えている。その結果、彼らはシャム文字であれ、タム文字であれ利用して、それを完全なものとすることを提案している。またある人びとは、ラーオ語の正書法は正確な規則を欠いていて、大いに欠陥のあるものとなっており、もはや言葉の語源的要求に答えることができず、言語の文学的発展にとって障害となっているのだとする [Thao Bongk 1936: ii]。

A différentes reprises, il a été question de réformer l'écriture laotienne. Les uns trouvent que l'alphabet laotien, tel qu'il est actuellement en usage, est insuffisant et ne permet pas de transcrire <correctement> tous les mots de la langue; ils proposent, en conséquence, de la compléter à l'aide soit de caractères siamois soit de caractères <tham> (pâli). Les autres prétendent que l'orthographe laotienne, faute de règles précises, est devenue très défectueuse et ne répond plus aux exigences étymologiques des mots, mettant ainsi obstacle au développement littéraire de la langue.

と、マハー・シラーが追加した文字の一部が「シャム文字」であると指摘している⁵⁷。ターオ・ボンは、ラーオ語の正書法が無秩序な状態にあることを認めただけで、その要因をラーオ語に及ぼされてきたシャム語の影響に求めている。そのため、こうした状況を改善し、ラーオ語の明確な規範を確立しなければ、「我々のラ

⁵⁶ タイ文字でパーリ語を記す場合、短母音 a は省略され、子音字のみで *ngr* と表記するという決まりがある。したがって *ngr* は見かけ上、パーリ語、サンスクリット語を記す場合と全く同じということになる。仏教協会の正書法では *ṅ/kh* はパーリ語の *g* に対応するため、ここでは *ngr* とした。

⁵⁷ ターオ・ボンはフランス語版では「シャム文字」、ラーオ語版では「タイ文字」と呼んでいる。

一オ語は消滅し、伝統にもとづいた国家の発展も全くなくなってしまいうだろう」として、語源型の正書法の採用は「ラオス」の存在自体を危うくするものであると警告している⁵⁸[Thao Bongk 1936: ㄱ]。

そしてそのうえで、

ラーオ文字のアルファベットはよく考えられているほど貧弱なものではない。現在、使用されているもので、我々の言語の必要性を十分に満たしているものと考えている。正書法が規則を持つことで、価値を増すことは事実である。しかし、盲目的にシャムの正書法にしたがう必要は全くない。もっともよい表記とは、もっとも単純で容易に学習できるもの、つまりもっとも純粹に音声に沿ったものではないだろうか。一般大衆の間に知識を普及させるという実際的な関心において、万人の理解できる表記をもつことは好ましくないことであろうか[Thao Bongk 1936: ii - iii]。

L'alphabet laotien n'est pas aussi indigent qu'on a tendance à le croire. Tel qu'il est actuellement en usage, nous estimons qu'il suffit largement aux besoins de notre langue. Il est vrai que l'orthographe gagnera à être règlementée, mais point n'est besoin pour cela de l'assujettir aveuglement aux règles de l'orthographe siamoise. La meilleure écriture n'est-elle pas la plus simple, la plus facile à apprendre, c'est-à-dire celle-là même qui se rapproche le plus de la phonétique pure? Dans l'intérêt pratique de la divulgation du savoir parmi les masses populaires, n'est-il pas préférable d'avoir une écriture à la portée de tous?

と問いかけ、ラオス独自の方法、すなわち音韻型によってラーオ語の正書法を確立すべきであるとの見解を示している。もっとも、この本の中でターオ・ボンが用いている表記は、文字の追加はなされていないものの、黙音符号や特別な末尾子音字が用いられているなど、語源的な要素を残したものではあった。しかしながら、パーリ語を表記することができないために、ラーオ文字を不完全とする語源型支持者の意見を「シャムの正書法にしたがう必要はない」と退け、ラーオ語を表記するには、既存の 27 字のラーオ文字で十分であるとする⁵⁹。この主張はまた一方で、先にみたような文字の少なさゆえに、ラーオ語をタイ語の下位におくという、言語の「序列」に挑戦するものであったとも捉えることができるだろう。ターオ・ボンは、ラーオ語の規則を説明していくなかで、先のメイエの著作を参照している箇所があり、フランス人の著作に接していたことがわかる⁶⁰[Thao

⁵⁸ ターオ・ボンはフランス語とラーオ語の両方で前書きを書いており、内容がほんの少しだけ、異なるものとなっている。ここは、ラーオ語版からの引用である。

⁵⁹ ターオ・ボンは /r/ の子音字を含めている。

⁶⁰ トーピンがシャム語の正書法が複雑すぎる点を批判したことについても言及している[Thao Bongk: iii]。

Bongk: 22]。このことはフランス式の教育を受け、フランス語を解するようになったラーオ人エリートの中から、フランス人によってつくられた言語の「序列」を逆転させようとする動きが登場してきたことを意味しているともいえよう。さらに完全な音韻型正書法の支持者というわけではないが、ターオ・ボンと同様の試みは、ヴィエンチャンの印刷所の所長であった、カタイー・ドン・サソリット(Katay Don Sasorith 以下、カタイー)においても見出される。

1943年、タイの大タイ主義に対抗してラオス刷新運動が展開されるなか、その推進役を務めていたカタイーは、『ラーオ文字と表記法 *Alphabet et Écriture Lao*』と題した小冊子を出版している。フランス語で書かれたこの小冊子のなかで、カタイーは、ラーオ文字とタイ文字がともにスコタイ文字を起源とし、歴史のある時点までは並行に進化を続けてきたこと、しかしその進化が、ラオスにおいては規範が固まった時点で止まったのに対し、タイでは改革が行われ続けたため、2つの文字への分裂が生じたと説明している[Katay 1943]。その際、カタイーはラームカムヘーン王が、実際はラーオ人であったと主張し、ラーオ文字こそがスコタイ文字の直系の子孫で、タイ文字はそこから派生したに過ぎないのだとする。カタイーは、ラームカムヘーン王の碑文のなかでラーオ語の否定辞 *bo* を用いて、

*muea kon lai sue thai ni bo mi*⁶¹

(これ以前にタイ文字は存在しなかった)

と記されているのを根拠に、王がタイ人であったらタイ語の否定辞 *mai* を用いて“マイ・ミー” *mai mi* としたはずであると主張した[Katay 1943: 8]。

そして、タイが文字を増やし、語源型の正書法を持ったことを、「パーリ語に夢中になった学者たちの仕業 *l'œuvre de savants férus de pali*」「一つの言語が同時に、民衆の現在の必要と文献学者諸氏の—それも互いに矛盾した—好みを満たすことはできない *Une langue ne peut satisfaire en même temps les besoins présents d'un peuple et les préférences –contradictoires– de M.M. les philologues*」と[Katay 1943: 12]、否定的な「進化」として捉え、それに対して「ラーオ文字は、すべての極東のなかでもっとも合理的でもっともよく整理された土着の文字である *L'écriture lao est l'écriture autochtone la plus rationnelle et la mieux ordonnée de tout l'Extrême-Orient*」としている[Katay 1943: 13]。カタイーはこのとき、タイ文字とラーオ文字の同一起源を認め、ラーオ文字がその文字数を減らしてきたとの仮説をたてた、トーピンの説にも言及している⁶²。

ターオ・ボンもカタイーも、その著作をフランス語で記していることから分かる通り、フランス語に精通したエリートたちであった。そうした新しいエリ

⁶¹ カタイーは独自のローマ字表記で記しているが、ここではフォントの関係から、本書で採用している表記に改めた。

⁶² トーピンについては 3-2-2 を参照のこと。

ートたちが、文字の少なさをいわば逆手にとって「序列」の逆転を図る、ここに来て文字の少なさは、タイ語に対するラーオ語の優位を確立するための切り札へと、変貌を遂げることになったのである。

しかし一方で、ここでカターイが「極東のなかで」と限定していることをまた、見逃してはならないだろう。カターイは、「私は世界について言うのではなく、すべての極東地域について述べているのである *je ne dis pas du monde, mais de tout l'Extrême-Orient*」と続けており[Katay 1943: 13]、このことは、世界を見渡せばラーオ文字以上に、合理的でよく整理された文字が存在していると、彼が考えていたことを意味している。そしてカターイにとってのそれは、ローマ字であった。ラーオ文字を合理的なものとして評価しつつも、実際にカターイが最も望んでいたのは、ラーオ語のローマ字化だったのである。ラーオ語のローマ字化は 1942 年以降、ひとつの勢力として、浮上してくることになる。それでは次に、植民地期の正書法をめぐるもうひとつの立場として、ラーオ語のローマ字化をめぐる動きについて、みていきたい。

3-3-4 ローマ字化をめぐる一文字ナショナリズムの高まり

ローマ字化を支持したのも、フランス留学経験者を含めた、世俗教育を受けたものたちであった。政府印刷所の所長という、カターイの職業に象徴的にあらわれているように、彼らがローマ字化を支持した一番の理由は、印刷上の簡便さであった。ローマ字化を支持する声は、1932 年の仏教協会での正書法会議の際にすでに存在したが[Sila 1995: 32-33]、実現に向けた動きが本格化するのには、ラオス刷新（ラーオ・ニャイ）運動期であり、『ラーオ・ニャイ *Lao Nhay*』新聞の編集に参加した、ラーオ人エリートたちによって推進された。

『ラーオ・ニャイ』新聞は、1941 年 1 月 25 日に創刊された初のラーオ語紙で、1 日と 15 日の、月 2 回の発行であった。当初は、フランス語とラーオ語の 2 言語から成ったが、43 年 1 月に *Le Nouveau Laos* というフランス語紙が創刊された後は、ラーオ語のみとなった⁶³。ヴィエンチャン、ターケーク、サワンナケート、パークセー、サーラーワン、シエンクワン、ルアンパバーン、ファイサーイ、ポンサーリーに特派員がおり、各地の読者に情報の提供を呼びかけていたことから、地理的には、比較的広範囲で読まれた、全国紙であったといえることができる [Lao Nhay 1943. 2. 1]。読書からの投書欄に記された職業をみると、教師や官吏などのエリート層が中心で、植民地時代をとおして、ラーオ人でフランス式の教育を受け、そのような役職に就くことができたものはごくわずかであった。例えば、1930 年にラオス全体で、初等教育 1～6 年の全生徒数は 4529 名であったが、その

⁶³ *Le nouveau Laos* はフランス語を解するエリート向けであることが、最後のフランス語版、1942 年 12 月 15 日付の『ラーオ・ニャイ』紙上に書かれていた[Lao Nhay 1942. 12. 15]。

うち、ラーオ人は 2396 名、最終学年の 6 年生では 171 名中 90 名となり、そのうちラーオ人で初等学校修了試験に合格できたのは、わずかに 15 名であった⁶⁴[Lueam 1969: 8]。そして中等学校にいたっては、同年、最終学年である 4 年生にラーオ人の学生数は 5 人に満たなかったという⁶⁵ [Lueam 1969: 8]。したがって、全国紙とはいっても、その流通範囲は都市部エリート層の、非常に限られた範囲にとどまっていたものと思われる。発行部数は 1942 年 9 月 1 日の時点で、4500 部で、1943 年 5 月 15 日付以降は 5600 部に増加している⁶⁶[Lao Nhay 1942. 9. 1][Lao Nhay 1943. 5. 15]。

『ラーオ・ニヤイ』に、最初にローマ字化に関する記事が掲載されたのは、1942 年 8 月 1 日のことであった。「ラーオ文字」と題された記事のなかで、ラーオ人の 1 グループによって、ラーオ語のローマ字対照表が作成されたこと、それを試験的に『ラーオ・ニヤイ』に掲載していくことが発表された[Lao Nhay 1942. 8. 1]。

1943 年 11 月にはインドシナ総督ドクー(Decoeux)が、ラオス理事長官宛に、ラーオ語のローマ字化を出来る限り迅速に進めるよう、手紙を送っている[菊池 1997b: 83]。その後、1943 年 12 月 15 日と 1944 年 1 月 1 日の合併号では、カンボジアでシアヌーク国王が、1943 年 12 月 1 日以降、ローマ字表記を採用するとの布告を出したことに触れ、ラオスも遅れをとってはならないとして、近日中にローマ字表記法を決定するための会議を開催するとの記事が見られた[Lao Nhay 1943. 12. 15 et 1944. 1. 1]。そして 1944 年 7 月 3 日から 6 日にかけて、フランス極東学院インドシナ民族研究部門のリーダーであった、レヴィー(Levy)を議長として会議が開催され、ラーオ語のローマ字化の方法が決定された。この決定を受けて、同年 9 月 20 日に理事長官布告が出され、ここに、ラーオ語のローマ字化の実施が公式に宣言される[Lao Nhay 1944. 10. 1]。翌 10 月 1 日、15 日付の『ラーオ・ニヤイ』では、決定されたローマ字化の方法と、理事長官布告の概要が掲載されており、布告の内容は以下のようなものであった。

ラーオ語のローマ字表記は、ラオス国における公文書、行政文書、学校教科書
のみに用いられる。1945 年 1 月 1 日以降、公式に実施されなければならない。今
後、ラオス国の小・中学生は、ローマ字表記のラーオ語をラーオ文字と同時に学
習することになる[Lao Nhay 1944. 10. 1 et 15]。

⁶⁴ ラーオ人以外の生徒の大半は、現地人官吏としてラオスに派遣されていたベトナム人の子弟であった。

⁶⁵ 植民地時代をとおして、ラオスにはヴィエンチャンにフランス式の 4 年制の中等学校であるコレージュ・パヴィ(Collège Pavie)がつくられたのみで、ラーオ人の生徒が進学するにはハノイ、プノンペン、サイゴンなどのリセに留学する必要がある。またコレージュ・パヴィの生徒の大半はベトナム人で、1930 年代をとおして、わずかに 52 名のラーオ人卒業生を出したにすぎず、そのうちベトナムに進学できたのはごく一部であった[Stuart-Fox 1997: 52]。コレージュ・パヴィは 1950 年にリセに格上げされたが、その後も 3 年間はバカロレアの受験のためには、ベトナムのハノイに行く必要があった[Lueam 1969: 9]。

⁶⁶ 限られた読者層のなかで 5600 部がすべて配布されたのかは少々疑問が残る。

ローマ字表記の使用が、公文書と教科書に限定されていること、さらにローマ字表記とラーオ文字を同時に学習するとされていることから、この布告がただちにラーオ文字の完全な放棄を意味するものではなかったことがわかる。実際、最初にローマ字化の記事が登場してから、実施まで約 2 年の歳月を要したことから推測されるように、ラーオ語のローマ字化には、「国民の文字の放棄 abandonner l'alphabet national」であるとする、根強い反対の声が存在していた[Katay 1943: 16]。ルアンパバーン国王やペッサラートも強硬に反対しており [Ivarsson 2008: 198]、布告の内容はそうした懸念に配慮した結果でもあったのだろう。『ラーオ・ニヤイ』でも再三に渡り、ローマ字化がラーオ文字の放棄につながるものではないことが説明されていた。先述の 1942 年 8 月 1 日の記事においても、ローマ字化の利点を語ったあとで、

ラーオ文字を変えることについて、どうか誤解しないでください。これはラーオ文字を捨てて、他の民族の文字と入れ替えるということではありません。もし、我々の先祖から受け継がれた遺産を捨て去るといふのなら、ラーオ・ニヤイも〔ローマ字の〕試用に協力したりしません。なぜなら、私たちはラオス人 *Hao Pen Lao* であり、今後も我々のラーオ文字を守っていかなければならないのです[Lao Nhay 1942. 8. 1]。

と付け加えられていた。

ローマ字化をめぐるこうしたやりとりからは、正書法の議論が続けられるなか、ラーオ人の中で、ラーオ文字を取り替え不可能な「我々の遺産」であるとする、「文字ナショナリズム」が高まっていたことが見て取れよう。ここでは「我々の言語」であるラーオ語を書く文字は、「我々の文字」であるラーオ文字でなくてはならなかったのである。ローマ字化支持者は、ラーオ文字の維持を繰り返し明文化することで、こうした声をなだめようとした。カタイーも先述の小冊子のなかで、伝統的な文字を捨て去るのではなく、大衆向けの表記法と文化的な表記法の 2 種類の表記法を採用すべきであり、その際、大衆向けの表記法としてもっともふさわしいのがローマ字表記である、と文化的な表記法としてラーオ文字を維持していくと説明している[Katay 1943: 17]。しかしカタイーの提案するこの方法は、ベトナムのチュノムのように、将来的にラーオ文字を大衆からかけ離れた、古典文学などに限定されたいわゆる「博物館の文字」へと追いやる可能性を秘めたものといえた[写真 3-8]。

[写真 3-8] ラーオ文字・ローマ字対照表



出典：『ラーオ・ニヤイ』新聞（1942年10月1日付）ベトナム社会科学院図書館蔵。

左がローマ字表記、右がラーオ文字表記。挿絵としてタイプライターを打つ女性が描かれている。

その後、ローマ字化が布告のとおり、実施されたのかは不明である。しかし、1945年3月には日本軍の仏印処理が実行されており、フランスにローマ字表記を普及させていくだけの時間が残されてはいなかった。そして日本軍のもと、ルアンパバーン国王が名目上の独立を果たした際に首相となったのはペッサラートであり、彼がローマ字化に反対していたことはいうまでもないであろう。

3-4 語彙の問題—新語と正書法

『ラーオ・ニヤイ』では、1942年8月1日にローマ字化に関する記事が初めて登場して以降、10月15日付までの約2ヶ月に渡り、ラーオ文字・ローマ字対照表が掲載され、読者の意見を募っていた。しかし、ローマ字化をラーオ文字の放棄とする強い抵抗にあい、10月15日付を最後に、翌43年の12月15日までの約1年間、ローマ字化の記事は見られなくなる。その間、『ラーオ・ニヤイ』紙上では、ローマ字化に代わって、新語と正書法の問題が話題の中心となっていく。この間の議論からは、ラーオ人エリートたちが、タイ語からの独立をはかりつつ、ラーオ語の近代語化をすすめるようとしていた様子をうかがうことができる。

1942年11月15日付の「語彙の説明」という記事では、

我々は読者の方々のなかに、それらの語彙に慣れ親しんでいないがゆえに、理解するのが難しい方がいるであろう、語彙やイディオムを使わなくてはなりません。しかし我々は、それらの語彙やイディオムの使用は不可欠であると考えています。なぜなら、それらを用いなければ、ラーオ語を単なる話し言葉に留めてしまうことになるからです。語彙が不足しているために、時代遅れで、文書を上手に書くことが出来なくなってしまいます[Lao Nhay 1942. 11. 15]。

と、言語の近代化のためには、新語の使用が不可欠であることを訴えている。『ラーオ・ニヤイ』では以後、新語解説のコーナーが毎号設けられることとなり、第1回目となった11月15日付では、「文化 *vatthanatham*」「経済 *setthakit*」「歴史 *pavatsat*」「集会所 *samoson*」「世紀 *satavat*」「温度計 *taeknomaet*」などの語彙が取り上げられていた[Lao Nhay 1942. 11. 15]。これらの語彙をみると、フランス語の *Thermomètre* を取り入れた「温度計」以外、パーリ語・サンスクリット語をもとに、タイで新しく作りだされたものであった。そのため、これらを採用することは、タイ語を取り入れることになるとの抵抗が存在したようである。そうしたなか、1942年11月12日には、ヴィエンチャンの宣伝局において、宣伝局長のロップ(Robbe)司令官が議長をつとめ、ラーオ語とラーオ語の表記についての、一連の問題を解決するための会議がもたれている。会議にはラーオ・ニヤイ期に結成されたラオス文学委員会(Comité littéraire Lao/ Khanakammakan Aksonsat Lao)のメンバーである、マハー・ブンファン(Maha Bounhouang)、ターオ・ニューイ(Thao Nhoy)⁶⁷、パニャー・クン(Phagna Khoum)、マハー・プーミー(Maha Phoumi)、ソムチン・ピエール・ギン(Somchin Pierre Nginn 以下、ギン)、カタイー、ウンファン(Ounheuang)、クアン(Keuong)に加え、議長のロップのほか、コヴィーユ(Coville)とレヴィーという2人のフランス人が参加していた⁶⁸[Lao Nhay 1942. 12. 1]。

会議ではロップとレヴィーが、『ラーオ・ニヤイ』の編集者がタイ語の語彙を借用し、タイ語風に綴っているとの批判が高まっていることを指摘している[Lao Nhay 1942. 12. 1]。先にみたように、新語解説コーナーで取り上げられた語彙の大半が、タイ語経由の借用語であったことに加え、その表記をみると、黙音符号や特別末子音字を用いた、タイ語に近い方法が採用されていた。こうしたことが、一部の読者たちの目に『ラーオ・ニヤイ』が、ラーオ語のタイ語化を促進しているように見せていたのであろう。これに対し、『ラーオ・ニヤイ』編集長のギンが、純粹に発音に沿いすぎた正書法はかえって不便であるとして、彼らが「簡略化された語源型正書法(*l'orthographe étymologique simplifiée/Sakot Kham Tam Khao Mun Yang Ngai*)」と呼ぶ正書法の利点を説明し、最終的に、この方法で新語を表記する

⁶⁷ のちに王国政府の教育相となった、ニューイ・アパイのことと思われる。

⁶⁸ レヴィーの身分は3-3-4を参照のこと。コヴィーユの身分は不明だが、翌12月15日付では宣伝局長となっている[Lao Nhay 1942. 12. 15]。ここでの人名のローマ字表記は同日付の『ラーオ・ニヤイ』フランス語版による。

ことで合意がなされた [Lao Nhay 1942. 12. 1]。またこのとき、新語の採用にあたって、政治・経済・社会用語についてはパーリ語・サンスクリット語から、科学技術用語についてはフランス語からと、分野別にフランス語とパーリ語・サンスクリット語の両方から借用することが、決定されている[表 3-6][Lao Nhay 1942. 12. 1]。

[表 3-6] 新語解説コーナーに掲載された語彙の例

	ラーオ・ニヤイ	ラーオ語	タイ語
文化	<u>ວັທະນະທັມ</u>	ວັດທະນະທຳ	วัฒนธรรม
経済	<u>ເສດຖະກິຈ</u>	ເສດຖະກິດ	เศรษฐกิจ
集会所	<u>ສະໂມສອນ</u>	ສະໂມສອນ	สโมสร
世紀	<u>ສະຕະວັສ</u>	ສະຕະວັດ	ศตวรรษ
温度計	<u>ແຕກໂນແມຕ</u>	ແຕກໂນແມດ	
歴史	<u>ປະຫວັດສາສຕຸ້</u>	ປະຫວັດສາດ	ประวัติศาสตร์

* 「ラーオ・ニヤイ」の項目の下線部が語源を表わそうとしたと思われる部分。「ラーオ語」、「タイ語はそれぞれ現在の正書法である。 出典：『ラーオ・ニヤイ』1942年11月15日付により筆者が作成。

同年12月15日付の「ラーオ語正書法についての会議」という記事を見ると、『ラーオ・ニヤイ』のメンバーの間では、完全に発音に沿った正書法を採用することは、パーリ語・サンスクリット語からの借用自体を否定するものと受け止められていたようである[Lao Nhay 1942. 12. 15]。そこで彼らは、ラーオ語の発展のためには借用が不可欠であることを理由に、語源型でも音韻型でもない、中道の方法として「簡略化された語源型正書法」の採用を正当化しようとした。しかしながらこの方法は、文字の追加こそされないものの、黙音文字の使用などの語源的要素を残したタイ語の表記に近いものであったため、タイ語の影響を懸念する人びとの間に反発を招くこととなっていった[表 3-7]。

ラーオ語正書法については、その後、1944年2月にも宣伝局長ロシェ(Rochet)を議長に会議が開かれている[Lao Nhay 1944: 5]。その報告書として出版された小冊子では、「簡略化された語源型正書法」という表現は姿を消し、「正書法はもっとも簡単なものでなければならない、それゆえに発音どおりに綴らなければならない」と書かれている[Lao Nhay 1944: 9]。このとき、同音異義語に関してのみ、例外的に特別末子音字の使用が認められたものの、黙音文字の使用はもはやみられない。例えば、「語」を意味する“サップ”は42年の正書法では ສັພທ໌ と黙音字が使われていたが[Lao Nhay 1942. 11. 15]、44年の方法では、特別末子音字が用いられているものの、ສັພ とほぼ発音どおりに綴っている。会議には、ニューイ、ギン、カターイ、クアン、マハー・プーミー、ウンファンなど、42年の会議に出

席したメンバーに加え、プーミー・ウオンウィット、パニャー・カムマーオ⁶⁹、ウーロット・スワンナウオン(Urot Suvannavong)、ペン・ポンサワン(Pheng Phongsavan)、パニャー・クンピラーワン(Phanya Khunphilavan)、ブランシヤール・ドゥ・ラ・ブロス(Blanchard De La Brosse)らが参加していた。

[表 3-7] 『ラーオ・ニャイ』に掲載された「簡略化された語源型正書法」の例

意味	訂正前	訂正後	ラーオ語	タイ語
複合子音字	ຫຼ	ຫຍ	ຫຍ	หย
いつも	ເສມີ	ສເມີ	ສະເພີ	เสมว
時代	ໄສມຍ໌	ສໄມຍ໌	ສະໄໝ	สมัย
魅力	ເສນຫ໌	ສເນຫ໌	ສະເໜ	เสน่ห์
クメール	ຂເມຣ	ຂເມຣ	ຂະເໝນ	เขมร
慶祝する	ເສີມ, ເສລິມ	ສເລີມ	ສະເຫຼີມ	เฉลิม
食べる（王語）	ເສວີຍ	ສເວີຍ	ສະເຫວີຍ	เสวย
探し求める	ແສວງ	ສແວງ	ສະແຫວງ	แสวง
殿下	ເສດັຈ	ສເດັຈ	ສະເດັດ	เสด็จ
発表する	ແສດງ	ສແດງ	ສະແດງ	แสดง
繁栄する	ເຈີນ, ເຈລິນ	ຈເລີນ	ຈະເລີນ	เจริญ
フランス	ຝູ່ງ	ຝລັ່ງ	ຝລັ່ງ	ฝรั่ง
成功する	ສຳເລັຈ	ສຳເຫຼັຈ	ສຳເລັດ	สำเร็จ
調査する	ສຳລວຈ	ສຳຫຼວຈ	ສຳຫຼວດ	สำรวจ
軽視する	ປະມາທ	ປະໝາທ	ປະໝາດ	ประมาท
利益・効果	ປະໂຍຊ	ປະໂຫຍຊ	ປະໂຫຍດ	ประโยชน์
文	ປະໂຍຄ	ປະໂຫຍຄ	ປະໂຫຍກ	ประโยค
話・歴史、記録	ປະວັຕ	ປະຫວັຕ	ປະຫວັດ	ประวัติ

出典：『ラーオ・ニャイ』（1942年12月1日付）をもとに筆者が作成。訂正前・訂正後とは『ラーオ・ニャイ』に掲載されたものを写したものである。「訂正前」はあくまでも、『ラーオ・ニャイ』の基準によるものであり、それ以前にすべてが「訂正前」の正書法で綴られていたということではない。ラーオ語、タイ語の欄はいずれも現在の正書法である。

42年からの方針転換の理由は不明だが、参加者の1人であったプーミー・ウオンウィットの自伝には、彼が正書法会議に参加した際⁷⁰、語源型、音韻型、ローマ字化の3つに意見が分かれて激しい論争が繰り広げられたのち、最終的に黙音

⁶⁹ ヴィエンチャン省の知事であった。

⁷⁰ プーミーは会議の日付を書いていないため、いつ行われた会議なのかは不明である。しかしプーミーは「簡略化された語源型正書法」という言葉を用いておらず、44年の正書法会議の可能性が高い。

文字符号を用いない、音韻型の正書法が採用されたと記されている [Phumi 1987: 25-26]。プーミーはこのなかで、ローマ字化を「フランスが手下を使ってラーオ文字を消し去ろうとした」と、語源型を「タイの方法」 [Phumi 1987: 26]と、それぞれフランスとタイの影響を受けた方法と切り捨てている。そしてそれに対して、音韻型を「ラーオ人の話し言葉にしたがった昔からの方法」として、発音どおりに綴る方法こそが、ラーオ語の「伝統的な」方法であると、自らが音韻型を支持した理由を述べている [Phumi 1987: 26]。プーミーは、この会議とともに音韻型を支持した人物として、ギン、ボン・スワンナウォン (Bon Suvannavong)、ターオ・ケン (Thao Ken) らの名を挙げている。彼らは皆、後に王国政府の文学委員会・アカデミーのメンバーとなる人物であり⁷¹、一方プーミーは、パテート・ラーオの言語政策の中心人物となった。すなわち、内戦期に左右両派において、ラーオ語形成を担うことになるものの多くが、1940年代には同じ会議に参加して、音韻型の正書法を支持していたことになる。こうしたことから、植民地時代末期までには、音韻型の正書法を、ラオス独自の伝統的な方法とする立場が有力なものとなっていった、ということができるだろう。

一連の正書法会議に、フランス人が参加していたこと、またラオス刷新（ラーオ・ニャイ）運動自体、フランスの指導下でおこなわれたことをかんがみれば、この時期のエリートたちの言語ナショナリズムは、反植民地ナショナリズムというよりは、フランスによって仕組まれた、反タイ・ナショナリズムというべきものであった。そしてその末に、「つくりだされた」のが、音韻型をラオス独自の正書法とする思想であった。これらの会議に、フランス人がどのように関わったのか、限られた資料から知ることは難しい。しかし、ロシェがカタリーの『ラーオ文字と表記法』に寄せた序文において、

フランス人である私にとって、この大きな問題〔正書法問題のこと〕について、私の意見を述べようとは思わない。そのうえこの問題について、私は全くの無知である。ラオス人であるあなた方、あなた方だけが解決でき、また解決しなければならない問題なのである。あなた方のそれぞれがよく考え、責任を持たなければならない [Katay 1943: 2]

Il ne m'appartient pas à moi, Français, de donner mon avis sur ce grave problème, problème dont je suis, d'ailleurs, tout à fait ignorant. C'est vous, Laotiens, et vous seuls qui pouvez et devez le résoudre. Que chacun de vous réfléchisse et prenne ses responsabilités.

と述べているように、具体的な正書法の規則を定めるにあたっては、ラーオ人の

⁷¹ 文学委員会とアカデミーは、王国政府でラーオ語の標準化を担った機関である。

自主性がある程度、尊重されたものと思われる⁷²。

こうして、フランスの支配下、音韻型の正書法をラオス独自の方法とすることで、タイ語に対するラーオ語の独立が、おぼろげながらも確立されていった。一連の作業は、「保護者フランス」のもとで進行したものであったとはいえ、ターオ・ボンとカタイーが、ラーオ語とタイ語の序列を逆転させたように、これはフランスによって与えた枠組みを、そのまま引き写したものではなかった。そしてこの思想は、その後、しばしのローマ字化の期間を経て、王国政府とパテート・ラーオの左右両派へと受け継がれていくことになる。

3-5 国民の言語、国民の文字、ラオス国民

植民地時代のラーオ語をめぐる、一連の動きを追ってみると、方法は違っていたが、3つの立場がそれぞれ、ラーオ語を時代の要求にあった、発展した言語につくりあげていこうとしていたこと、その際に、タイ語との差異化を意識していたことがわかる。

語源型の支持者は、仏教と仏教教育の近代化を視野に、文字を追加してラーオ語にタイ語と同等の機能を与えることで、仏教をとおしてのタイ語の脅威に対抗しようとした。一方、音韻型の支持者は、タイの語源型正書法、文字の多さを「後ろ向きの進歩」として否定的に捉え、「昔から」ラーオ語が採用してきた音韻型の正書法こそが、合理的で大衆への教育普及にも適した方法であると考えた。そしてローマ字化支持者は、ローマ字化によって、ラーオ語書物の出版・印刷が容易になること、外国人がラーオ語を学習する際の負担が軽減すること、ローマ字を表記に採用している、世界の発展した国々の知識を習得しやすくなることなどを主張した。これはまた、語源型・音韻型の支持者が主に、タイ語との比較から、ラーオ語の発展を考えていたのに対し、ローマ字化支持者は、タイ語を越えてフランス語をはじめとする、インド・ヨーロッパ語族の諸言語をも視野に入れての発展を考えていたということであったともいえよう。ローマ字化支持者たちが、メイエにみられたような、インド・ヨーロッパ中心主義的言語観の影響を受けていたかどうかは定かではない。しかしローマ字化が、タイ語との差異を明確化するだけでなく、少なくとも見かけ上、ラーオ語をフランス語に、そしてインド・ヨーロッパ諸語に近づけるものであると考えられていた可能性は否定できない。

フランスは結局、植民地時代をとおして、統一されたラーオ語の正書法を確立することには失敗した。しかしながらローマ字化がその後、王国政府においても、パテート・ラーオにおいても、採用されることがなかったことから分かります。植民地時代をとおして、ラーオ人エリートの間で確実に、ラーオ語を国民語、ラ

⁷² 1942年の正書法会議でもギンたちが用意した正書法案を検討するかたちで、議論が進められていたことが『ラーオ・ニャイ』に記されている[Lao Nhay 1942. 12. 1]。

一オ文字を国民の文字とする意識が育っていた。音韻型正書法をめぐる議論のなかでは、各地の方言差をどうするかという問題も提起されており、「ラオス」全体を覆う均質な国民語として、ラーオ語を「つくる」必要性が感じられるようになっていたのである[Lao Nhay 1943. 7. 1]。そして音韻型が主流となるなか、フランスによって「つくられた」ラーオ語とタイ語の序列は逆転され、「合理的な」文字体系をもつラーオ語の優位が強調されるようになる。

このことをよく示しているものとして、ここでタイのピブーン首相がおこなった、タイ語の正書法改革に関する、『ラーオ・ニャイ』の記事を紹介してみたい。ピブーンは1942年5月、13の子音字を廃字とし、さらにいくつかの母音符号を削除して、タイ語正書法の簡略化を断行した⁷³。この改革を伝える記事において、『ラーオ・ニャイ』では、次のような言葉が述べられていた。

私たちはこの〔文字改革の〕ニュースを歓迎したいと思います。それはこの改革が、私たちの祖先が、学習に容易な文字を持つことに、大いなる利益を見越していたことを示すものである、ということによるものではありません。私たちが嬉しく思うのは、この文字の問題は、タイ政府が、私たちラーオ・ニャイが不必要に学習を難しくするだけの、文字の追加に反対してきたのと同じ路線に同意しているということの意味しているからです[Lao Nhay 1942. 6. 15]。

これは第一に、タイ語でさえも、文字の簡略化が実施されたということを引き合いに出し、根強い語源型支持者を牽制しようとしたものと考えられる。しかしまた、彼らの喜びの理由ではないとしながらも、「私たちの祖先が、容易な文字をもつことに大いなる利益を見越していた」とのことばには、文字数の削減＝進歩という発展の道筋を自明視し、タイ語に対するラーオ語の「進歩性」を示そうとする明確な意図が見出されよう。

タイ語を上位、ラーオ語を下位におく言語の序列は、タイの脅威からラオスを守る、「保護者フランス」の役割を明確化し、フランスがその植民地支配を正当化するのに好都合のものであった。これに対して、ラーオ人エリートたちが序列を逆転させたことは、ラーオ人の言語ナショナリズムが「保護者フランス」のもとを離れ、ひとり立ちをはじめたことを意味していた。そしてタイ語との差異化、すなわち「否定的同一化」をとおして、ラーオ語の形成をすすめるなか、エリートたちは次第に「ラオス」の国民語として、ラーオ語を意識するようになっていたのである。

それではラーオ語を共有する、「ラオス国民」とは誰であったのか。「ラオス」の領域には、ラーオ語を母語としない、多数の少数民族が存在しており、『ラーオ・

⁷³ しかしこの改革は、ピブーン失脚後、第二次大戦終了前に後を継いだクアン・アパイウォン内閣が「タイ文化の伝統を乱すもの」として、もとに戻したため、短命に終わった[富田 1997: 13]。

ニャイ』には少数民族の人びとを描いた挿絵も見られた。ラーオ人のエリートたちが、彼らの存在をどのように認識していたのであろうか。例えば、1942年12月1日付の『ラーオ・ニャイ』には、ラオス北部、ファイサーイのプーカー村での教育について、以下のような記事が掲載されていた。

〔村の学校で〕ラーオ文字の読み書きのできる生徒たちは15名いる。そのうち、ラーオ族が3名（女2名、男3名）ルー族が男3名、カー・クウェーン族が9名（女3名、男6名）であった[Lao Nhay 1942. 2. 1]。

ルー族とは、タイ・ルー(Tai Lue)族とも呼ばれる、ラーオ族と同じタイ(Tai)系の民族であり、カー族とは、モン・クメール系の諸民族につけられた蔑称で、彼らは昔からラーオ族より低い身分におかれ、差別的な扱いを受けてきていた。この学校では、ラーオ族の生徒数を、その他の民族の生徒数が上回っていたことになり、ごく一部であろうが、ラーオ族以外の子供たちに対しても、ラーオ語の教育がおこなわれていたことがわかる。記事ではさらに、モン・クメール系の人びとが少しずつ、ラーオ族の風習を取り入れ、ラーオ語を用いるようになってきていることが書かれ、いつの日か、彼らが「ラオス人」へと変身を遂げることを願う、と締めくくられていた[Lao Nhay 1942. 12. 1]。

また、1943年1月1日付の「国家の復興 *Kan Fuenfu Pathet*」という記事では、

他の民族の子供たちに我々の言語と宗教を学ばせることは、彼らが原則を身につけることだけではなく、彼らが我々の国民を愛し、その結果彼らが将来、ラオス国民となるように導くことになるのである *Khao Ko Cha Kaipen Sat Lao Nai Anakhot*[Lao Nhay 1943. 1. 1]。

として、森の人びと（当時、ラーオ族以外の諸民族を差別的にこう呼ぶことがあった）の子弟を、公立学校や寺院学校で勉強させるようにとしている。この2つの記事から、エリートたちが、ラーオ族以外の人びとでも、ラーオ族の風習や言語を身につけることによって、将来「ラオス国民」へと転身できるという、ラーオ族への同化、「ラーオ化」による国民形成を意図していたことが読み取れる。「ラオス国民」になるためには、ラーオ語の習得は必須とされ、そしてここにラーオ語＝ラオス国民＝ラオス国家の一致を目指す言語ナショナリズムの萌芽をみることができよう。

しかしながら、現実はその簡単にはいかなかった。ラーオ・イサラ運動の過程で、左右両勢力への対立が生まれたラオスでは、独立後も政治的な対立は解消されず、王国政府、パテート・ラーオの双方が異なる理想のもとに国家建設を進めることとなった。そしてこのことは、「ラオス」全体で統一した言語政策を採ること

を困難とさせ、言語面における「内戦」が繰り広げられるという事態を招いてしまったのである。

次章では、右派王国政府における国民語形成を、正書法や教育制度の問題を中心にタイ語、フランス語との関係からみていくことにしたい。

第4章 ラオス王国政府

ラオス王国は、1949年に条件付の独立を認められた後、1953年のフランス・ラオス友好条約の締結をもって、完全な独立が達成された。これにより、ラーオ語はいよいよ、国民語として発展していくための「国家」を獲得したことになる。しかしながら、対外的には領土問題など、隣国タイとの間に微妙な問題を抱え、対内的には少数民族問題に加え、かつてルアンパバーン、ヴィエンチャン、チャムパーサクの3王国へと分裂していたという歴史的背景を要因とした、地域主義に根ざした対立が強く残るなど、国家建設の前途には難題が山積していた。ラオス史研究者である、スチュアート・フォックスが、独立直後のラオスには「いかなる想像の共同体も存在しなかった」と述べているように[Stuart-Fox 1997: 60]、政治的な独立を達成したものの、国家建設の担い手となる「ラオス国民」とは誰なのか、その内実をこれからつくっていかなくてはならない、という段階にあったのである。そして共通の歴史など、他に決定的なシンボルを求めるのが困難ななか、ラーオ語を国民統合の求心軸として、ラオス国民＝ラーオ語の一致を目指す一連の作業が開始されることになる。

これらの作業には、ラーオ語正書法の統一や近代語彙の整備など、標準化によってラーオ語を均質な国民語へとつくりあげていこうという、コミュニケーション手段としてのラーオ語の整備に関わる側面と、国民がラーオ語を共有することに何か特別な価値を見出し、取り替え不可能な「国民語」として認識していくための、言語イデオロギーを構築する側面という、2つの側面が存在していた。そしてラーオ語の形成と普及をとおして、「ラオス国民」としての国民意識を醸成するよう、企てられていたのである。

しかし、フランスが植民地時代にとった「愚民政策」は、こうした動きに暗い影を投げかけることとなった。植民地時代をとおして、ラーオ人で中等教育以上の教育を受けることができたものはごくわずかであったという事実は⁷⁴、ラオスには独立後の国家建設を担う人材が著しく不足している、ということの意味していた。そして教育に関しても、教師不足を理由に中等教育以上では、フランス語を教授言語としたカリキュラムが採用され、公用語としてもフランス語が重用されたことから、フランス語はエリート層と一般の人びとを隔てる、社会階層分化の要因となっていた。当時、エリート政治家たちは、ラオスの共産化を恐れてつぎ込まれた、アメリカの経済支援を私的に流用して私腹を肥やしており、賄賂や汚職の絶えない政治家たちへの、人びとの不満は日ごとに高まっていた。そうしたなか、彼らの特権的地位の象徴でもあったフランス語を排除し、フランス語とタイ語という、新旧支配者の言語からの言語的独立を求める動きが王国政府の人

⁷⁴ 3-3-4を参照のこと。

びとの間で活発化していく。

本章では王国政府において、タイ語とともに、フランス語からの言語的独立をはかりつつ、ラーオ語が国民語としてつくられていくプロセスを、みていくこととする。

4-1 ラーオ語標準化へ向けて—ラオス文学委員会の設置

4-1-1 1949年の国王令

王国政府では、1947年発布の王国憲法において、ラーオ語がフランス語と並んで公用語とされたことにより[Katay 1953: 100]、ラーオ語に初めて、法的な地位が与えられることになる。翌1948年には、ラーオ語正書法の基本的な規則を協議するため、ラオス文学委員会(Khanakammakan Aksonsat Lao)が開かれ、そのときの決定をもとに、1949年に国王令第10号が出された。国王令では、1) ラーオ語の文字体系、数字、記号、その使用法に関しては、添付の表において規定されているとおりである。2) ラーオ語、そして外国語からの借用語に関しては、土地の発音にしたがって書くこととする。3) タム文字は昔の方法を使用すると規定され[Kasuang Mahat Thai 1949.1: 21]、発音どおりに綴るという方法が、ラーオ語の正書法として正式に採用されることになった。先述の1944年の正書法会議報告書である『ラーオ語の文字と正書法』に見られる正書法と、1) で言及されている添付の表とを比較してみると、例えば末子音字のみに使われる「脚」と呼ばれる文字の使用をやめるなど、より発音に沿った方法が採用されていることがわかる。しかし一方で、語中の音節に限って語源を表わすための特別な末子音字の使用を認めるなど、語源的な要素が完全に排除されたわけではなかった。また国王令では、タム文字の使用が認められたことから、語源型正書法支持者の意見は、完全に退けられるかたちとなった。

4-1-2 ラオス文学委員会

1949年の国王令をもとに、ラーオ語の標準化を進めていくための機関として、1951年8月27日の総理大臣令第207号により、ラオス文学局(Kong Vannakhadi)とラオス文学委員会(Khanakammakan Vannakhadi Lao)が設置された[Vannakhadisan no.1. 1953. 8: 7]。この委員会はラーオ語では「カナカムマカーン・ワンナカディー・ラーオ」といい、ラーオ・ニャイ期と1948年に設置された文学委員会が「カナカムマカーン・アクソンサート・ラーオ」とされていたのと、名称が異なっている。しかしながらフランス語では、どちらもComité Littéraire Laoとされていることから、本論文ではすべて「ラオス文学委員会」と訳すこととした。「ワンナカディー」も「アクソンサート」もほぼ同義であるが、前者が文学作品そのものを指すのに

対し、後者は現在のラオス国立大学の文学部がカナ・アクソンサート（カナは学部の意）と呼ばれているように、広義には、哲学、言語学なども含めた、自然科学・社会科学以外の学問を指す。

文学局と文学委員会は教育省の管轄におかれ、1951年の総理大臣令には、将来的にはこれらをフランスのアカデミー・フランセーズのような、アカデミーへと昇格させることを目標とすることが記されていた[Vannakhadisan no.1. 1953. 8: 7]。

委員会の定員は 25 名とされ、創設時のメンバーは委員長がクー・アパイ(Ku Aphai)、副委員長がプイ・パンニャー(Phui Pannya)、委員兼書記がマハー・シラー・ウィーラウォン、委員がボン・スワンナウォンとソムチン・ピエール・ギンの 5 名であった。彼らは教育大臣によって任命され[Vannakhadisan no.1. 1953. 8: 7][Rasabanditsapha Lao 1972a: 18]、マハー・シラー以外は、1948年の文学委員会に参加していた。その後、1952年7月の委員会会議で、ニューイ・アパイ(Nhouy Aphai)⁷⁵、マハー・プーミー・チッタポン(Maha Phumi Chitthaphong)⁷⁶、ヌーハック・シッティモラダー(Nuhak Sitthimorada)、ケーンの4名が新たに委員となり、さらに同年10月の会議では、宣伝局長であったクアン・パトゥムサート(Keuong Pathumusat)が委員に承認された⁷⁷[Rasabanditsapha Lao 1972a: 18-19]。1953年には、委員会の改編が行われ、委員長がギン、副委員長がボン・スワンナウォン、マハー・シラーが書記となり、クー・アパイ、プイ・パンニャーはそれぞれ、名誉委員長と名誉副委員長となった[Rasabanditsapha Lao 1972a: 19]。その後1959年までに、タイ・ケーオ・ルアンコート(Tai Kao Luangkhot)、スパン・ブランシャール・ドゥ・ラ・ブロス、プーウォン・ピムマゾン(Phuvong Phimmason)、クン・ピラーワン(Khun Philavan)が加わり⁷⁸、合計14名となったが、定員の25名に達することはなかった [Rasabanditsapha Lao 1972a: 20]。

メンバーの大半は、1940年代の正書法会議に参加しており、名家出身でフランス式の世俗教育を受けたエリートたちであった。例えば、初代委員長のクー・アパイは、チャムパーサック県の出身で、植民地時代にはサイゴンとプノンペンで教育を受けた後、フランスのル・アーブルの商業学校(École Commerciale)にも留学していた[Stuart-Fox 2001: 164]。1941年から47年までチャムパーサック県の知事を務め、47年から49年には教育衛生大臣、その後も国王審議会の議長、1960年には首相も経験するなど、要職を歴任している[Stuart-Fox 2001: 164]。プイ・パンニャーはルアンパバーンの貴族であり、ボン・スワンナウォンもヴィエンチャン

⁷⁵ 1942年、44年の正書法会議に参加していたターオ・ニューイと同一人物と思われる。

⁷⁶ 同じく42年、44年の正書法会議に参加していたマハー・プーミーと同一人物と思われる。

⁷⁷ 同じく42年、44年の正書法会議に参加していたクアンと同一人物と思われる。

⁷⁸ タイ・ケーオ・ルアンコートは教育局長、スパン・ブランシャール・ドゥ・ラ・ブロスは芸術局長、プーウォン・ピムマゾンは総理大臣府に所属していた。なお、スパン・ブランシャール・ドゥ・ラ・ブロスは植民地時代に正書法会議に参加した、ブランシャール・ドゥ・ラ・ブロスと同一人物と思われる。また、クン・ピラーワンも44年の会議に出席していたパンニャー・クンピラーワンと同一人物であろう。

の名家出身の政治家で、植民地時代にはハノイとフエで教育を受け、独立後には教育相をはじめとする、政府の要職に就いている[Stuart-Fox 2001: 38]。ニューイ・アパイは、クー・アパイの弟で、ベトナムとフランスへの留学経験があり、王国政府の教育衛生大臣などをつとめた。そしてギンは、カンボジア人通訳とラーオ人の母親の間に生まれ、サイゴンとパリへの留学も経験していた[Stuart-Fox 2001: 219]。ギンが 1940 年代の正書法会議で、中心的な役割を果たしていたことは、前章でみたとおりであり、王国政府時代には、ヴィエンチャンのリセのラーオ語教師となっていた。

このように、文学委員会の主要メンバーたちのほとんどが、フランス式の教育を受けた、高いフランス語能力をもつ、政治家や政府高官といったエリートたちであった。そうしたなか、東北タイ出身で、バンコクで仏教高等教育を受けたというマハー・シラーは、他のメンバーたちと教育的バックグラウンドを異にしていた。マハー・シラー以外には、マハー・プーミー・チッタポンが、出家経験者であることを表わす「マハー」の称号を持っていたのみで、文学委員会のメンバーは、フランス式の世俗教育出身者によって、圧倒的多数が占められていたのである。

4-1-3 『文学(ワンナカディーサーン)』

1951 年 8 月に設置された文学委員会であったが、その後約 2 年間、実質的な活動はほとんどおこなわれていなかったようである。『文学』創刊号の「編集長の言葉」では、運営に必要な予算が獲得できなかったことと、文学局専属の職員を確保できなかったことの 2 点を、その理由として挙げている[Vannakhadisan no.1 1953.8: 3]。そしてようやく、必要な予算と人員を確保し、活動を開始した文学委員会の情報を国民にしらせるため、1953 年 8 月に、文学委員会の機関紙として『文学(ワンナカディーサーン) *Vannakhadisan*』が創刊された[Vannakhadisan no.1 1953.8: 3]。『文学』は 1953 年 8 月の創刊から、1955 年 1 月の第 9 号まで、約 2 年にわたって発行された。創刊号では、毎月 1 日発行の月刊誌とされていたが、第 2 号以降は 2 ヶ月に 1 度の発行となった[Vannakhadisan no.2 1953.10: 2]。発行部数は、第 2 号の時点で 1000 部と記されており[Vannakhadisan no.2 1953.10: 2]、バンコクとヴィエンチャンの二箇所の印刷所で印刷されていたようである⁷⁹。編集長はマハー・シラーで、委員会による会議での決定事項として、ほぼ全号にラーオ語文法や行政用語、ラーオ語辞書編纂に向けた語彙表などが掲載されていた。目次をみ

⁷⁹ 『文学』は、バンコクとヴィエンチャンの二箇所で印刷されたいたようで、同じ号であっても、出版所がバンコクの出版所とヴィエンチャンの出版所の、2 種類の版が存在する。出版所が違うだけで、ページ数や内容は同一であるが、7 号と 8 号について、表紙に記されたヴィエンチャン版の発行年月が 1954 年 7 月と 12 月であるのに対し、バンコク版はどちらも 1958 年 10 月となっている。内容などから判断して、バンコク版がミスプリントであると思われる。

ると毎号、マハー・シラーによる記事が圧倒的に多く、マハー・シラーが中心となって、雑誌が製作されていたとすることができる。第4号と第7号には、編集部からラーオ語正書法について、読者から意見が寄せられた旨を報告する箇所があり、その内訳はルアンパバーンの図書館長1名、役人1名、医者1名、ヴィエンチャンの役人2名、タケークの役人1名であった[Vannakhadisan no. 4 1954.1: 1-2][Vannakhadisan no.7 1958.10: 33-35]。ヴィエンチャン以外に、ルアンパバーン、タケークからも投書が届いていることから、『文学』が都市部に限定されてはいるものの、地方でも読まれていたことが推測される。

文学委員会は、1970年にアカデミーに昇格されるまで存続したため、『文学』から知ることができるのは、必然的に委員会の初期の活動ということになる。しかし1961年までには、文学委員会からラーオ語の辞書と文法書が出版され、1963年の終わりには、書記のマハー・シラーが辞任するなど、ラーオ語標準化に向けての主要な動きは、むしろ初期の段階に集中していた。したがって『文学』は、文学委員会によるラーオ語標準化プロセスを明らかにすることができる、数少ない貴重な資料ということができるだろう。以下、『文学』の分析を中心に、その他文学委員会の出版物などから、委員会の活動を追っていくこととする。

4-1-4 文字ナショナリズム—「文明的な」ラオス国民とラーオ文字

前章でみてきたように、植民地時代末期までには、エリートの間でラーオ語を我々の言語、ラーオ文字を我々の文字とする、言語・文字ナショナリズムが育ちつつあった。自前の国家を獲得した今、それがどのように発展していったのか、まずは創刊号に寄せられた委員長ギンの言葉から探っていきたい。

文字とは、話し言葉を記すためのものである。〔中略〕ラーオ文字もまた、ラーオ語を記すために用いられるものである。

文字は国民の起源であり、旗であり、すなわち国民であることの象徴であると考えられる。文明を持つすべての人類は、自らの話し言葉を記すための文字をもたなくてはならない。どの国民であれ、自らの話し言葉を記すための文字を持たない国民は、起源のない、旗のない、つまり国民であることの象徴をもたない国民であり、すなわち文明のない国民とみなされる。

我々、ラオス国民は古くから独自の文字をもっている *Sat Lao Hao Pen Sat Thi Mi Tua Akson Pen khong Ton Eng Matae Buan*。それゆえに、しっかりとした土台をもった、真にひとつの国民であると考えられる *Ching Nap Va Pen Sat Thi Mi Hakthan Mankhong Nap Pen Sat Nueng Thae*[Vannakhadisan no.1 1953.8: 1]。

ここではラーオ文字の存在が、ラオス国民が「ひとつの国民」であること、と

りわけ「文明的な国民」であることの証とされ、ラーオ文字＝ラーオ語＝ラオス国民の一致を宿命的なものとする、強い文字ナショナリズムが読み取れよう。ラーオ文字の維持は、「ラオス国民」をその他多くの、文字をもつ国民とともに「文明的な国民」へとカテゴライズし、ラーオ語、ラオス国民の存在に「威信」を与えるものとされていった。近代ヨーロッパにおいては、書記言語の有無が、その言語の価値を決定するうえでの決定的な要素となっていたが、ギンの言葉からはそうした、ヨーロッパ的な言語観の影響もうかがえる。しかし一方で、こうした「文字至上主義」は、その多くが文字をもたない、国内の少数民族に対するラーオ族の圧倒的優位を確立し、ラーオ族中心の国民形成を正当化するのに、好都合なものでもあった。植民地時代末期には、少数民族をラーオ族に同化させていくことで、「ラオス国民」へと統合していくという思想がみられたが、ギンの言葉からは、王国政府においてもラーオ族中心という方針が、何ら変わることがなかったことがわかる。

ギンはさらに、

そのほかにも、文字には多くの恩恵がある。〔中略〕何千年も昔の人の話したことを、我々が覚えていられるのも、文字とともにあるからである。それゆえ、文字とはすべてのものが学び知らなければならないものであり、最低でも、自らの国民の文字 *Nangsue haeng Sat* を学ばなければならない[Vannakhadisan no.1 1953.8: 1]。

と続け、文字の恩恵により、何千年も昔の人の言葉を知ることができるとして、ラーオ文字に「現在」と「過去」のラーオ語をつなぐ、媒介者としての役割を与えている。

何千年も昔のラーオ語と、現在のラーオ語が「同じ」ラーオ語であるのは、ひとえにそれがラーオ文字で書かれているからであり、ラーオ文字は、ラーオ語に過去からの通時的な一体性をもたせるための動かぬ証拠とされていった。これはまた、はるか昔より継承されてきたラーオ語、ラーオ文字の継承者として、「ラオス国民」の存在に歴史を与えることともなり、ラオス国民となるためには、国民の「遺産」であるラーオ文字の学習が必須とされたのである。したがって、こうした「遺産」の放棄につながる、ローマ字化は、筆者の知る限り王国政府時代をとおして、公式に議題にのぼることはなかった。

しかし現実のラーオ語はというと、いまだ正書法の統一や語彙の整備もなされておらず、「文明的な」言語と言うには、ほど遠い状況にあった。創刊号の「編集長の言葉」でマハー・シラーは、植民地時代以来の語源型/音韻型の対立が依然として続き、「各自が好き勝手に記述している」という、当時の状況を書いている[Vannakhadisan no.1 1953.8: 5-6]。ラオス文学委員会は、そうしたラーオ語の混乱し

た状況を克服し、「文明的な」言語へとつくりあげていくために、設置されたのであった。

4-1-5 文学委員会の任務—言語の独立と国家の独立

文学局と文学委員会の任務は、1951年の文学委員会設置に関する総理大臣令において、1)教科書の編纂や教育向けの古典文学作品についての協議、2)ラーオ語文法、言語、正書法の研究、3)外国文学の翻訳・翻案、4)言語や文字に関する書物の出版、5)ラーオ語正書法の規則を定める、6)ラーオ語辞書の編纂、7)年度ごとに文学委員会の定めたテーマにしたがって、懸賞作品を募集する、と規定された[Vannakhadisan no.1 1953.8: 8]。そしてこのうち、5)と6)、正書法の決定と辞書の編纂が、最優先次項とされていた[Vannakhadisan no.1 1953.8: 5][Sila 1961b: ๓-๔]。前項で紹介した、創刊号冒頭「委員長の言葉」の続きの箇所では、

〔ラオス文学委員会の〕任務は、現在、発展中である国家の状況にしたがって、ラーオ文字とラーオ語を広く発展させ、復興していくことである。国家の運命 *Sok Sata khong Pathaet Sat* が、もし不幸なものとなってしまったら、国家の文字と言語もまた、貧しい、悲惨なものになってしまうだろう。どの時代であれ、国家が独立して、繁栄しているときには、文字と言語もまた、独立したものでなければならぬ。このことはラオス王国憲法第6条で、「ラーオ語は公用語である」と規定されていることから明白である。憲法の通りに実施していくために、ラオス文学委員会は設置されたのである[Vannakhadisan no.1 1953.8: 1-2]。

と述べている。「国家の運命がもしも、不幸なものになってしまったら、国家の文字もまた、貧しい、悲惨なものになってしまう」とは、シャム、ついではフランスの支配下におかれていたという「ラオス」の歴史を示したものであるといえよう。政治的独立を達成した今、再び外国の支配を被らないためには、言語のうえでもラーオ語の独立を明確なものとしておかななくてはならない。ここには、言語と国家の独立を一連托生のものとみる、強い言語ナショナリズムが読み取れる。こうした主張は『文学』において繰り返し見られ、例えば第5号の「編集者前書き」でも、

ラーオ語は使うのに十分ではない、ラーオ語は存在しない、ラーオ語は欠陥が多い、ラーオ語はフランス語と同等の明晰な言語ではない・・・、このような発言は、我々がラオスの役人の間で、ほとんど毎日のように耳にすることである。そして我々も、ほぼ同意できるものである。なぜならば、我々のラーオ

語は約 200 年もの間、放っておかれたままであったためである。発展のための改良も加えられず、ラーオ語は使うのに十分ではなく、発展して広まってもいない[Vannakhadisan no.5 1954.3: 1]。

と、18 世紀末以来の、ラーオ人の 3 王国の独立喪失と、ラーオ語の衰退を重ね合わせて説明している。そして、

〔ラオスが独立を達成した今〕ラーオ語、そしてラーオ文字は真のラオス人 *Khon LaoThae* にとって十分に有益なものである。なぜなら我々は、ラーオ語を話すことで、老若男女すべてのものが理解しあうことが出来るし、どこでもラオスに住むすべての者たちに、短い期間のうちに学ばせることができるからである。他の国民の言語、文字の場合、それが特によいものであったとしても、それを我々の住民たちに話させ、学ばせ、はっきりと理解させることはできない。もしそうさせることができたとして、そしてそれが採用されてしまったならば、我々の国民の言語は消滅しなければならない。そしてついには、我々の国民も〔言語と共に〕気づかぬうちに消え去ってしまうことになるだろう[Vannakhadisan no.5 1954: 2-3]。

として、「ラオス国民」の独立維持には、言語の独立が不可欠との見解が示されている。

18 世紀以降の政治的な独立の喪失によって、ラーオ語が「衰退」した『文学』で繰り返されたこの「ラーオ語衰退のシナリオ」は、植民地時代にフランスによってつくられたものでもあった。しかしここでは、フランスはもはや「保護者」ではなく、シャムとともに、ラーオ語を衰退に追いやった当事者となっている。そうしたなか、ラーオ語の「独立」が再び脅かされることのないよう、ラーオ語の標準形をしっかりと定め、その存在を「可視化」しておくこと、すなわち規範となる辞書と文法書の編纂が、文学委員会にとって、第一の任務とされたのである。

4-1-6 ラーオ語正書法を巡る攻防

文学委員会では、1953 年 5 月と 7 月に、ラーオ語正書法を決定するための会議が開かれ、1949 年の国王令に沿って、発音どおりに綴ることを原則とした正書法を採用することで合意がなされた[Vannakhadisan no.1 1953.8: 25]。『文学』第 1 号と第 2 号には、そのときの会議で決定された規則が「ラーオ語正書法の規則 *Lak Kan Khian Phasa Lao*」として掲載されている。しかし、その後も議論は続けられたようで、第 3 号以降、ラーオ語文法の連載が開始され、1954 年 12 月には文学委員会から『ラーオ語文法 1・文字論 *Vainyakon Lao 1: Akkharavithi*』が出版された

[Vannakhadisan no.8 1954.12: 46]。『文学』に掲載された「ラーオ語文法」をみると、文字数は *r* の子音字を含めた 27 字で、黙音文字符号は用いられていないものの、多音節語の語中の音節に特別末子音字を使用して、一時再読をするもの、見かけ上の二重子音を用いての低子音の高子音化など、一部に語源的な要素も残されていた[表 4-1]。

[表 4-1] 『文学』にみられる正書法

	文学委員会	ラーオ語	タイ語
時代	ສໄມ /samǎy/	ສະໄໝ /samǎy/	สมัย /samǎy/
政府	ຮັທບານ /latthabǎan/	ລັດຖະບານ /latthabǎan/	รัฐบาล /rátthabaan/
人口	ພົນເມືອງ /phónlamuǎŋ/	ພົນລະເມືອງ /phónlamuǎŋ/	พลเมือง /phonlamuwaŋ/

* ラーオ語、タイ語は現在の正書法。下線部が一時再読文字として用いられた特別末子音字。「時代」は最初の音節の短母音符号 **Xɛ/a** が書かれておらず、第 2 音節では発音の通りなら高子音 **ɰ/m** を用いるべきところが、低子音字 **ɰ/m** が使われている。

正書法に関して、『文学』では委員会の決定事項を掲載する一方、第 1 号から一貫して、ラーオ語正書法についての読者の意見を募集していた。その結果、第 7 号までの間に 6 名の読者から意見が寄せられ、第 7 号に「ラーオ語正書法についての意見」と題した特集が組まれるに至る。それらの意見は、新たに文字を追加するかどうかという点で異なる以外は、語源型の正書法を支持するものであり、「発音どおりに綴る」という方法は、ラーオ語の価値を貶めるものだとして、文学委員会への不満が表明された。このうち、プノンペンのパーリ語学校への留学経験のあるマハー・ウワンと司法省の役人であったマハー・サオは、文字を追加し、パーリ語とラーオ語の両方をひとつの文字で表記できるようにすれば、教科書の印刷にも便利であり、世俗世界と宗教世界の団結を強めることになる、と植民地時代のマハー・シラーと同様の理由を述べていた[Vannakhadisan no.7 1954. 7: 33-34]。残りの 4 名は文字を追加せずに、黙音文字符号や特別な末子音字を用いての語源型正書法を支持しており[Vannakhadisan no.7 1954. 7: 35-37]⁸⁰、ラーオ・ニャイ期に見られた「簡略化された語源型正書法」に近い方法を支持していたといえる。

彼らは、語源を表わした表記にすれば、ラーオ語とラーオ文字を発展させることができ、同音異義語の区別もつけやすくなること、また、フランス語や英語にも発音と綴りが一致しない例があることから、語源型の正書法が決して、難解な

⁸⁰ 文学委員会では特別末子音字の使用を多音節語の語中の音節に限っていたが、彼らは語末の音節においても使用するべきだとした。

ものではないということを主張した[Vannakhadisan no.7 1954. 7: 35-37]。そしてさらに、語源型こそが伝統的な方法で、1926年に国王が書いた年代記のなかでも、語源型表記が採用されていたと、国王を引き合いに出し、その正当性を訴えている[Vannakhadisan no.7 1954. 7: 35-37]。

こうした意見に対して、委員長のギンが第9号に「ラオス語正書法についての文学委員長の言葉」と題した記事を掲載し、読者の意見を否定はしないと断ったうえで、文学委員会としての見解を述べている。その内容を要約すると、以下のようになる。

1. 語源の形を残して綴ることで、即座にその語のもとの意味を知ることができるというのは、何の根拠ももたないため、これを規則とすることはできない。
2. 多くのものが、タイ語の正書法はすべて、インド系借用語のもとの形にしたがって書かれていると考えているようである。その結果、*ching* (真実) *tamluat* (警察官) *sivilai* (文明) といった、パーリ語・サンスクリット語起源ではない語に対してまで、タイ語のように、黙音字や特別末子音字を用いて綴っている⁸¹[表 4-2]。語源にしたがった正書法を決定するのは困難で、タイ語の方法を丸写しする以外には解決の道はなく、辞書や文法書を編纂するのも難しくなってしまうだろう。
3. 文学委員会が思うのは、ラオス語正書法の規則はすでにある。現在、それを間違える人には2つのパターンがあるように思われる。一つは、フランス語や英語を学んだ人で、彼らはしばしばそれらの言語をラーオ語に混ぜて用いている。もう一つは、パーリ語、サンスクリット語をタイ語の教科書で学習した人であり、彼らは黙音字符号を用いて、タイのように綴り、そしてその方法こそが正しいものだと思っている。これらの意見はどちらも、ラーオ語正書法の規則に採用するのは不適切であると考えられる。
4. 語源にしたがって、黙音字符号などを用いた正書法が大昔から見られると言う意見は、真実ではないと思う。たかだかつくられて20年から30年ほどの教科書などを、古典ということはできない⁸²。
5. 文学委員会は、以上の理由から、昔から用いられてきた、発音にしたがって綴るという方法に同意する[Vannakhadisan no.9 1955.1: 2-3]。

⁸¹ *ching* と *tamluat* はクメール語、*sivilai* は英語の *civilize* を起源とする。

⁸² 1920年代ごろから編纂されはじめた植民地時代の教科書では、既存のラーオ文字に黙音字符号などがつかわれた、語源を残した正書法が採用されているものもあり、そのことを指しているものと思われる。王国政府時代に入っても、当初は植民地時代の教科書がそのまま用いられていた。

[表 4-2] ギンの指摘

	読者の傾向	ラーオ語	タイ語
本当に	ຈຶ່ງ /cǐŋ/	ຈິ່ງ /cǐŋ/	จริง /ciŋ/
警察	ຕຳຣວຈ /tǎmlùat/	ຕຳຫຼວດ /tǎmlùat/	ตำรวจ /tamrùat/
文明	ສິວິໄລຍ, ສິວິໄລຽ /siwiláy/	ສິວິໄລ /siwiláy/	ศิวิไลซ์ /siwilay/

* 「文明」は必要のない **ຍ/ຽ** (末子音では/y/)が語末に黙音字として付されている点が、例えばタイ語で「タイ」を **ໄທຍ**と綴る場合と同じであると指摘している。(ຍがあってもなくても発音上変わりはない)

ギンの言葉からは、当時、とりわけ仏教教育を受けた人の間で、語源を表わしたタイ語の正書法こそが、「正しい」方法であるという認識が広く共有されていたことがわかる。事実、ラーオ語正書法について投書した6名のうち、4名は名前に「マハー」や「ティット」といった、出家経験者であることを示す称号がつけられていた。そうしたなか、ギンは文学委員会が、「発音どおりに綴る」正書法を支持する理由として、①ラオス全土で統一した正書法の確立が急がれる中、語源型の規則を定めるのは難しく、時間の無駄であり、発音どおりに綴る方法が容易で分かり易い方法であること、②教育に簡便であること③ラオス政府が伝統的な方法として、その有益性を認め、すでに国王令において宣言されたものであることを挙げている[Vannakhadisan no.9 1955.1: 3-5]。とくに①については、タイのピブーンの文字改革や⁸³、トルコの文字改革の例を持ち出し、「世界各国でもその正書法を簡易化する努力がなされてきた」として、ラオスにおいても簡易な方法で、正書法を統一させることが何よりも重要であるとした[Vannakhadisan no.9 1955.1: 3-5]。そして、発音どおりに綴るというのは無秩序で混乱をまねくものではなく⁸⁴、定められた規則にもとづいて書く方法だということ、また読者のような、3、4ヶ月ですべてを習得できるような、簡単すぎる方法ではなく、深く学ぶためには長い年月を要するのだということ、自らのラーオ語教師の経験と絡めて説明し、音韻型によってラーオ語正書法は統一されていくだろうとの見解を述べていく[Vannakhadisan no.9 1955.1: 3-5]。

文学委員会は、その後も「発音どおりに綴る」という方針を変えることはなく、1961年には音韻型の正書法による『ラーオ語文法』全4巻と『ラーオ語辞書』が文学委員会から出版されている。

もっとも、先に述べたように、文学委員会によって採用された正書法は、完全

⁸³ ピブーンの文字改革については、3-5を参照のこと。

⁸⁴ 音韻型に反対する読者には、発音どおりに綴ることを、無秩序に、それぞれの話し言葉をそのまま記す方法との認識するものがいた。

に発音に沿ったものではなく、一部に語源的要素を残したものであった。実際、植民地時代以来、音韻型の正書法を主張するものの間でも、どの程度発音に沿わせるべきかについては、意見の違いがかなりあり、完全に発音にしたがわせるのは、ラーオ語の発展を妨げるとの声も多かった。ギンを含め、文学委員会のメンバーの多くが、植民地時代の正書法会議に参加していたことを考えれば⁸⁵、こうした思想が、文学委員会にも引き継がれていたということができるであろう。

ギンと読者のやり取りをみていると、読者と文学委員会がともにラーオ語を近代化し、時代の要求に応えられる、発展した言語としていく必要性を強く感じていたこと、そしてその際に、依然としてタイ語の存在を意識していたことがうかがえる。しかし一方で、双方が考える「発展した言語」には差異があり、それがそのまま両者の主張に反映されていった。すなわち、タイ語の教科書によって仏教教育を受けたものたちは、タイ文字のようにラーオ文字でパーリ語を記述できるようにし、ラーオ語の表記にインド系借用語のもとの形をとどめることが、ラーオ語、ラーオ文字の発展にとって必要であると考えた。それに対して、文学委員会は「発音どおりに綴る」という方法こそが、伝統的なラオス独自のものであると同時に、合理的で学ぶのにも容易であると主張し、発展した言語は簡易であるべきことを、外国の例を挙げて説明した。そして一部の読者のタイ語かぶれを批判し、ラーオ語とタイ語の間に、視覚的によりはっきりした差異を示す方向でのラーオ語正書法の改革を目指した。

このような意見の対立は、王国政府の支配領域において、この後もずっと続くこととなる。マハー・シラーは1973年に出版した『ラーオ文字の歴史』の前書きのなかで、「1948年にラオス文学委員会（カナカムマカーン・アクソンサート）が設置されてから、それがラオス文学委員会（カナカムマカーン・ワンナカディー）となり、現在はラオス・ロイヤルアカデミーとなった。しかしながら、ラーオ語の正書法はいまだ、はっきりと統一されていない」と述べており[Sila 1995: 1]、1970年にラオス文学委員会がラオス・ロイヤルアカデミーへと昇格されても、正書法をめぐる対立は続いていたことがわかる。

こうして、『文学』創刊号で見られた主張とは裏腹に、文学委員会の正書法は決定的な規範とはなりえず、植民地時代以来の、ラーオ語正書法をめぐる対立が解消されることにはならなかった。しかしながら支持する方法は違っていても、文学委員会と語源型の支持者たちが、ともにタイ語からのラーオ語の「独立」をはかろうとしていた点で一致していたということは明らかであろう。

次節ではこうしたなか、イデオロギーにおいて、どのようにラーオ語の「独立」が試みられていたのか、そのひとつとしてラーオ語の「歴史」をつくる側面に注目していきたい。

⁸⁵ 3-4 を参照のこと。

4-2 ラーオ語の「歴史」—「ラーオ語族 Sakun Phasa Lao」の形成

これまでにみてきたように、植民地時代をとおして芽生えた、ラーオ語を我々の言語、ラーオ文字を我々の文字とする言語・文字ナショナリズムは確実に、王国政府へと受け継がれていた。そして音韻型の正書法が公式に採用されるなか、「文字の少なさ」こそが、タイ語に対するラーオ文字の合理性、進歩性の証であるとするような思想も見られるようになっていた。語源型支持者に対する反論のなかで、ギンがピブーンの文字改革に言及していたのは、タイ語でさえ、一時期は文字を減らす方向で改革をおこなおうとした、ということを示すことで、文字の少なさ=進歩という発展の構図を、読者に改めて示そうとしたものと捉えることができるだろう。しかし現実のラーオ語はというと、正書法の統一もままならないなか、いち早く標準化を進めていたタイ語の影響に絶えずさらされているという状況にあった⁸⁶。すなわち、国家を獲得して政治的な独立を達成しても、言語面での国境が脅かされるという状態が依然として続いていたのである。

そしてこうしたラーオ語の現状に関して、「ラーオ語が現在の衰退した状況に陥ってしまったのは、シャム、フランスの支配下におかれ、政治的な独立を喪失してしまっていたから」という説明がひとつの「決まり文句」となっていたことは、先の『文学』のギンやマハー・シラーの記事に見たとおりである。このレトリックを成立させるためには当然、ラーオ語が過去において「豊かな言語」であったこと、ラーオ語が「復興」すべき偉大な「過去」を持つ言語であることが前提となる。そしてこれは、偉大な「過去」を持つ以上、ラーオ語は決して「劣った言語」ではなく、「復興」さえすれば、タイ語やフランス語と対等な言語となり得る、という意識につながるものでもあった。

それでは王国政府において、ラーオ語にどのような「歴史」がつけられていたのであろうか、この点について、マハー・シラーが1959年9月に教育省の機関紙『教育（スクサーティカーン）*Sueksathikan*』の創刊号に「ラーオ語」と題した興味深い記事を掲載している。『教育』とは、1959年9月に1）教育の推進、2）様々な学術知識の普及、3）国内外の学生の活動や教育関係の役人たちの活動報告を目的に創刊された、教育省発行の月刊誌であった⁸⁷ [Sueksathikan no.1 1959.9]。発行部数は不明だが、中学校の入学試験や教育省内での人事異動についての記事なども掲載されており、教師を中心に、広く全国の教育関係者に読まれていたものと思われる⁸⁸。マハー・シラーが文学委員会を去ったのは、1963年末であることから、この時点では、彼はまだ文学委員会の書記を務めていたことになる。以

⁸⁶ 新聞や雑誌の記事に、タイ語の影響を懸念する記事が多くみられていた。

⁸⁷ 「論説部」「学術部」「ニュース」の3部からなり、「論説部」には、教育や一般的な知識に関する論説が、「学術部」には教育学やカリキュラムに沿った教授法が、「ニュース」には、教育省、学校、教育関係の役人に関するニュースなどが掲載されていた。

⁸⁸ 教育省の下部組織であった文学委員会に関する記事が掲載されている号もあった。

下に、記事の内容を紹介していくこととする。

4-2-1 ラーオ語、ラーオ族の「起源」 — 「ラーオ語族」

マハー・シラーをはじめ、ラーオ族の誕生とその後の移住・拡散について、当時主流となっていたタイ (Tai) 系民族の「南下説」になぞらえて、以下のように説明している。

〔中略〕どの民族でも、近くに住めば、その民族の言葉を借用した。それゆえ、我々のラーオ語は広く分岐していき、地域ごとに異なる発音になっていった。例えば、インドのアッサムにいるものたちは、アホム人となり、ヒンドゥー語を取り入れた。ビルマ北部におり、ラーオ・ギアオ、あるいはタイ・ニャイと呼ばれるものたちは、ビルマ語を取り入れた。そして東部へと下っていったもの、すなわち、黒タイ、赤タイ、白タイたち、あるいはベトナムのシブソーン・チュータイたちは、ベトナム語を取り入れて使っている。ナーン川、チャオプラヤー川へと南下したもの、すなわち今日のバンコクのタイ *Thai Bangkok Thuk Van Ni* たちはコーム族 (古代クメール) の近くに住んだので、クメール語を混ぜて用いた。それゆえに、ラーオ語の発音と語彙は変わっていったのである [Sueksathikan no.1 1959.9: 2]。

これはタイ (Tai) 系民族が故地であるアルタイ山脈から南下し、長い時間をかけてそれぞれの居住地へ定住したという、タイ系民族の「南下説」に拠ったものと考えられる⁸⁹。ここでいう、アホム、ギアオ (シャン)、黒タイ、白タイ、などはタイ系の民族に含まれる人たちであり⁹⁰、マハー・シラーの「仮説」は、これらタイ系の民族はすべて、もとは「ラーオ族」であり、移住の過程で他民族との接触をとおして、民族名と言語が変容を遂げていったのだとするものであった。彼はその根拠として、数詞、親族名称、身体名称などの基礎語彙の一致を、例を挙げながら説明し、

〔これらの基礎語彙は〕ラーオ語族のもともとの語彙である *Kham Dang Doem khong Sakun Phasa Lao*。それゆえタイ Thai、ルー、クーン、ギアオ、カムティー、アホム、ニョーイ、トー、ヌンなど様々な名前と呼ばれる多くの民族は、真のラーオ族の人びとなのである *Khon Sat Lao Doi Thae*。なぜなら今日なお、これらの語彙を用いているのだから [Sueksathikan no.1 1959.9: 3-4]。

⁸⁹ 「南下説」については、第2章を参照のこと。

⁹⁰ アホムはインドのアッサム、ギアオ (シャン) はビルマ、黒タイ、白タイはベトナム、ラオスを中心に居住している民族である。

と主張している。マハー・シラーが「ラーオ語族」と呼んでいることに顕著に現れているように、この「仮説」にしたがえば、ラーオ語はタイ(Tai)系諸言語の「祖語」、その話者であるラーオ族はタイ系諸民族の「起源」ということになる。すなわち現在、ラーオ語の独立にとって脅威となっているタイ(Thai)語も、もとをたどればラーオ語なのであり、これはタイ語に対してラーオ語の「純粋性」、ないしは「真正性」を主張するうえでも有効なものともいえた。マハー・シラーにとって、「バンコクのタイ」は、クメール族と接触することによって変容したラーオ族の一支流なのであり、ある意味「ラーオ族としての独立」を失った人たちともいえた。そしてこの「バンコクのタイ」の扱いをめぐって、マハー・シラーは終始苦悩することになる。

4-2-2 ラーオ語の「歴史」—「没落」と「復興」

マハー・シラーがつくりだしたラーオ語とラーオ族の「起源」は、ラーオ族がタイ系諸民族の起源であるという、いわば「ラーオ系民族」の創出にもつながるような、一種、膨張主義的なものではなかった。マハー・シラーは続いて、ラーオ語はラーンサーン王国時代には、仏教の伝来とともに、パーリ語、サンスクリット語から多くの語彙を取り入れ、大いに発展していたが、18世紀後半以降、シヤムとフランスの支配下におかれたことでその発展は止まり、没落の一途をたどってしまったという、ラーオ語の繁栄と没落の「歴史」を語る[Sueksathikan no.1 1959.9: 7-8]。

そしてラーオ語の「復興」に関して、「我々はラーオ語を復興しなくてはならないか」という小見出しを設け、次のように述べている。

私が冒頭で述べたように、ラーオ人とは大民族であり *Khong Lao Pen Khon Sat Nyai*、多くの人間がいる。しかし現在、ばらばらに散らばり、それぞれの場所に住んでいる。すなわち、インドのアッサムに行ったものたちは、インド人になってしまったし、ビルマのシャン州のラーオ・ギアオたちは、ビルマ人となってしまった。いまだ中国の雲南省にとどまっているものたちは、中国人となりつつある。ライチャオへ行ったものは、ベトナム人となろうとしており、そしてタイのイサーンにいたるものは、タイ人となってしまった。なぜなら、彼らは他民族の植民地となり、支配者の言語と文字を学ばなくてはいけなくなったからである [Sueksathikan no.1 1959.9: 9]。

ここでは先の、ラーオ族から他のタイ系民族への分岐が、さらにタイ系民族から他国民へという、「国家」の枠組みを前提としての、他国民への「同化」に変化

を遂げている。マハー・シラーは「同化」の一番の要因として、それぞれの所属する国家、すなわちインド、ビルマ、中国、ベトナム、タイでの「支配者」の言語と文字の強制を挙げており、ここでも言語と民族の独立が不可分のものとして示されている。

そして、

〔現在〕真のラーオとして、すなわち独立したラーオとして *Pen Lao Thae Khue Lao Mi Ekarat*、どの民族の植民地にもならずに残っているのは、我々のラオス王国のみである。そして、このいまだに独立を保っている我々のラオス王国こそが、あちこちに散らばった多くのラーオ人たちの心臓 *Mak Hua Chai* なのである。〔中略〕まさしく、我々ラオス王国の人間こそが、多くのラーオ人たちの遺産を消滅から守る保護者なのであり、そして我々が守っていかなくてはならない、遺産の最も大切なものが、ラーオ語とラーオ文字なのである。私がこのようにいうのは、言語は何よりもサート〔民族、国民〕であることを示す、シンボルだからである *Phasa Tho Nan Pen Khueangmai Sat Di Kwa Yang Uen*〔Sueksathikan no.1 1959.9: 9〕。

と述べている。マハー・シラーは、彼のいうところの「ラーオ系民族」のなかで、唯一自前の国家を有する、ラオスの「ラーオ人」だけが真のラーオ族であるとし、その根拠を独自の言語と文字の維持に求めている。ラーオ文字とラーオ語は「ラーオ系民族」の共有の遺産となり、それらの維持はラオス国民の独立を保証するだけではなく、「偉大なラーオ族」の直系の子孫であるという権威を、ラオス国民の存在に与えることにもなった。そしてこの「遺産」を守り、「復興」していくことは「保護者」であるラオス国民の使命となり、それができなければラオス国民もまた同化の危機にさらされ、「ラーオ系民族」の消滅につながると考えられたのである。マハー・シラーは「例えば〔中略〕インドのアッサムのラーオ族がインド人となってしまったように、ラオス国民を消してしまわないためにも、ラーオ語を発展させていかなくてはならない」とも述べており〔Sueksathikan no.1 1959.9: 10〕、ラーオ語が維持できなければ、ラオス国民もまた消滅してしまうという、彼の強い焦りが読み取れる。

もっとも、例えばタイ系民族のなかに、黒タイ、タイ・ルーなど独自の文字をもつものが少なくないことを考慮すれば、マハー・シラーの「仮説」が矛盾に満ちたものであることは明らかである。黒タイ、タイ・ルーはラオス王国にもおり、文字・言語が民族であることのシンボルだとするならば、彼らにラーオ文字を使用させることをどう解釈すればよいのか、マハー・シラーは全く説明していない。そしてこうした矛盾の最たるものが、「タイ(Thai)語」、「タイ族」、「タイ国民」、すなわち「バンコクのタイ」の扱いであろう。

4-2-3 タイ人は「ラーオ系民族」か？

マハー・シラーは先に、「バンコクのタイ」はラーオ族から分離した一派で、もとをたどればラーオ族であるとの「仮説」を展開していた。しかし一方で、「ラーオ系民族」のインド人、中国人、ビルマ人、ベトナム人への「同化」とともに、イサーンのラーオ人のタイ(Thai)人への「同化」に言及しており、あたかもタイ人が全くの「他民族」であるかのように扱っている。さらにラオス王国を「ラーオ系民族」の唯一の独立国家とすることは、タイ(Thai)族が主要民族であるタイ王国の存在を無視することにもなり、「国家」という枠組みを持ち出した途端、タイ人、すなわち「バンコクのタイ」は、「ラーオ系民族」の外に置かれることになる。

そもそも、マハー・シラーのこの大ラオス主義的な「仮説」は、タイに対抗するためにつくられたものであることは明らかである。タイにおいても、1938年に首相に就任したピブーンが、大タイ主義と呼ばれる汎タイ主義を主張し、それに対抗する形でラオス刷新(ラーオ・ニャイ)運動が起こったことは、第2章ですでにみた⁹¹。マハー・シラーの一種、膨張主義的な「仮説」の背景には、独立後もなおタイ語の脅威が続くなか、ラーオ語とラーオ族、ラオス国民の独立を起源にまで遡り、正当化しようとする、多分にナショナリスティックな意図が見て取れる。

こうしてマハー・シラーは、ラーオ語に「ラーオ系諸語」の「祖語」であり、共有の「遺産」であるとする、偉大な「過去」をつくりあげた。『教育』が教育省の機関紙であったこと、そして文学委員会書記という、掲載時のマハー・シラーの身分を考えれば、この言説が王国政府において、一定の影響をもつものであったことが推測できる。実際、タイに関する扱いが異なるものの、ラーオ語をタイ系諸民族語の起源とする記事が、当時の新聞などにおいても見受けられる。

しかしながら、マハー・シラーのこの「仮説」は、タイ語にのみ向けられたものではなかった。そこには控えめながらも、フランス語重視の王国政府エリートたちに対する批判とも思われる記述が含まれていた。

4-2-4 マハー・シラーと王国政府エリート—教育的バックグラウンド

マハー・シラーは、過去に大いに繁栄したラーオ語が没落してしまった原因について、次のように述べている。

〔ラオスが独立を失っていた間〕ラーオ語は拡大が止まっただけではなく、没落の一途をたどってしまった。ラーオ族の人びとが、自身の言語と文字がしっかりとしたものとなるよう、研究をしてこなかったからである。そして支配民族の

⁹¹ 2-4を参照のこと。

言語と文字の学習へと向かってしまった。支配民族の言語と文字を誰よりも先に学んだものの多くは、ラーオ族の指導者であった支配階級のものたちであった。支配階級のものたちが、他の民族の言語と文字を好むようになってしまい、自民族の言語と文字を振興しなくなったとき、被支配階級の人たちが、それに追従しないようにすることがどうしてできようか。そして自らの言語をどのようにして、進歩させていくことができようか[Sueksathikan no.1 1959.9: 8-9]。

マハー・シラーのこの言葉には、フランス語重視の王国政府エリートたちに対する、彼の強い不満が表わされているといえよう。かつては大いに繁栄していたラーオ語が、現在、衰退してしまったのは、ラーオ語が「劣った言語」であるからでは決してなく、支配階級のものたちが、ラーオ語の復興に必要な注意を払ってこなかったから、これはまた、文学委員会の他のメンバーたちへと向けられた言葉でもあった。

マハー・シラーは、タイ・仏国境紛争時、1941年1月にタイの呼びかけに応じてタイに渡り、帰国したのは、49年のラーオ・イサラ亡命政権解散後のことであった⁹²。したがって、彼は48年の文学委員会には参加しておらず、国王令の方法自体、フランスの支配下で、フランス寄りのものたちが話し合ってきたものという認識をもっていた。そのため、49年の国王令にしたがう姿勢を保持していた文学委員会に対しては、ずっと不満を抱いていたようである。『文学』第5号に掲載された、1953年5月14日の会議の報告書には、会議でマハー・シラーとヌーハック・シッティモラダーの2名が語源型正書法を支持したが、その他の委員が全員、国王令にしたがって音韻型を支持したため、マハー・シラーの意見は却下されたことが書かれている[Vannakhadisan no.4 1954. 1: 33-34]。

マハー・シラーは『文学』の記事の大半を執筆していたほか、1961年に出版された『ラーオ語辞書』と『ラーオ語文法』にいたっては、他の委員が公務で多忙であったため、マハー・シラーが1人で編纂したものであった⁹³ [Sila 1961b: iv]。ラーオ語に関する深い知識をもち、文学委員会の仕事をほぼ一手に引き受けていたにもかかわらず、仏教教育を受け、フランス語能力のないマハー・シラーの発言力は、政治家や高級官僚中心の他のメンバーに比して弱いものであった。マハー・シラーをはじめ、仏教関係者が文学委員会の正書法に反発していたことのひとつには、こうした、実社会における教育バックグラウンドを要因とした不平等があった。そうしたなか、マハー・シラー1人に辞書や文法書の編纂を任せ、公務においてはフランス語を使い続けるエリートたちに対して、マハー・シラーの不

⁹² 一連の事件については2-4、2-5を参照のこと。マハー・シラーは途中、1945年10月のラオス臨時人民政府樹立時には帰国していたが、翌年フランスが再植民地化を果たすと、亡命した臨時人民政府とともに、再びタイへと渡っている。

⁹³ 辞書の序文には他の委員が公務などで多忙であったため、マハー・シラー1人で編纂し、1961年の会議で委員たちの承認を受けた後に出版されたことが書かれている[Sila 1961a]。

信感は募っていく。そして 63 年には文学委員会を脱会すると、新聞や雑誌などにおいて、積極的に委員会や政府の姿勢を批判するようになる。

4-3 言語による階層分化

4-3-1 『サート・ラーオ』新聞と言語ナショナリズムの昂揚

マハー・シラーは、1963 年に文学委員会を去ると、当時の有力ラーオ語日刊紙であり、一時期自らも顧問を務めていた『サート・ラーオ (ラオス国民) *Sat Lao*』新聞などに、語源型正書法を支持する記事を、頻繁に執筆するようになる。

『サート・ラーオ』は、1963 年に政治家のインペン・スリニャータイ (Inpaeng Sulinyathai) によって創刊された、王国政府時代に国内で最も読まれていた日刊紙であった⁹⁴。64 年 9 月 12 日の一周年記念号には、副首相のプーミー・ノーサワン (Phumi Nosavan) やウン・サナニコーンら、著名な政治家たちも祝辞を寄せていた。発行部数は、1970 年 11 月 24 日の時点で、約 5000 部であった⁹⁵ [Sat Lao 1970. 11. 24]。独立後、小学校の就学率は上昇しており⁹⁶、また政治家の汚職や腐敗、社会的不平等を批判する投書なども多数寄せられていることから、『ラーオ・ニャイ』のようなごく一部のエリートだけではなく、比較的広範囲の読者層に読まれていたものと考えられる。

マハー・シラーは『サート・ラーオ』紙上に、文学委員会を辞めた理由として、はっきりと「ラーオ語正書法に関する意見の対立」があったことを書いており [Sat Lao 1964.7.3]、正書法の問題を中心に、文学委員会の方針を時に激しい調子で批判していった。こうしたマハー・シラーの態度に対しては、文学委員会からマハー・シラーが国王令 10 号に則った正書法を破壊しようとしているとの手紙が同紙に届き⁹⁷ [Maha Sila 2004: 11]、さらに、文学委員長のリンも反論の投書を寄せるなど [Sat Lao 1964. 2.7]、正書法をめぐる小競り合いが続いていた。そして 1969 年には、7 月から約 5 ヶ月に渡り、ラーオ語正書法に関する読者の意見を募る「民衆の声 *Pasamati*」というコーナーがもうけられ、マハー・シラーら有識者ととともに、広く一般の読者を巻き込む形で、正書法論議が展開されていった⁹⁸ [写真 4-1]。

⁹⁴ ラオス国立大学文学部ラオス語専攻、ブアリー・パパーパン (Buali Paphaphan) 先生のご教示による。このほか、日刊紙としては『ピトゥプーム *Pituphum*』などがあった。

⁹⁵ 1970 年 11 月 24 日の読者からの質問に答えるコーナーで、発行部数は 1 日約 5,000 部、社員数は約 50 人と答えている [Sat Lao 1970. 11. 24]。

⁹⁶ 1945 年から 47 年の 2 年間で、初等学校の学生数はラオス全土で 11,000 人から 31,000 人に増加し、1968 年には 185,724 人となった。この時点での就学率は約 50% であり [Lueam 1969: 47-48]、地方や山岳地域と都市部ではかなりの格差があったことが考えられる。

⁹⁷ マハー・シラーの自伝に寄せられた、マハー・シラーの娘であるドゥアンドゥアン・ブンニャウオン (Duangduean Bunnyavong) 氏の前書きによると、1963 年 12 月 13 日付で手紙が掲載されたのだという [Maha Sila 2004: 11]。筆者は 1964 年以降の『サート・ラーオ』しか入手できなかったため、確認できなかったが、筆者が入手した『サート・ラーオ』にも文学委員会からの手紙に言及している箇所があった。

⁹⁸ 69 年当時、少年僧としてパーリ語学校で学んでいたラオス国立大学文学部ラオス語専攻長のブア

ປະຊາກະຕິ ການຂຽນພິພິດຂອງຊາວ

ທ່ານ ສ. ສແວງເຫັນວ່າຄວນສັກດາມສຽງ ບໍ່ຄວນໃຫ້ມີການອອກປະຊາກະຕິໃບເຮືອງນີ້

△ ຕໍ່ຈາກສບັດອ່ອນ △ ລາວເຮົາ ພວກນີ້ໄດ້ຮັບການ
ນັ້ນ ບໍ່ດຽວນີ້ໄດ້ຕົກທອນມາ
ເປັນກິດເກນຂອງຊາວຫມູ່ມູນລາວ
ຍາຈະເວດແລ້ວ ທ່ານຈະສົງ
ເກດເຫັນໄດ້ຈາກ ແບບຂອນຕ່າງ
ຮອງອຸກອຸງໂງ່ຮຽນ ຕັ້ງແຕ່ຊຸມ
ປະຖົມສຶກສາ, ນັບ ຍົນສຶກສາ, ອຸ
ດົມສຶກສາລາດລອດເຖິງສະຖາບັນ
ສຶກສາຈຸນສູງ ຕ່າງໂງ່ຮຽນເຂົ້າ
ກໍໃຊ້ ວິທີສະກັດຕາມສຽງ ກນ
ຫງນັ້ນແລະວິທີນີ້ ກໍໄດ້ເຜີຍໃຊ້
ນາທລາຍປີແລ້ວ ດ້ວຍ ຈາດສົມ
ດັ່ງກ່າວນີ້ຂ້າພະເຈົ້າຄິດວ່າ ຄົງ
ເປັນການຍາກທີ່ ສຸດທີ່ຈະປ່ຽນ
ແປງ ຖ້າຫາກປະຊາກະຕິຕົກລົງ
ເລືອກເອົາ "ວິທີສະກັດຕາມເຕົ້າ
ມູນເດີມ" ເປັນແບບຂອນຕໍ່ໄປ
ອີກປະການນຶ່ງ ເອົາຄືນອາເພີ
ໄດ້ວ່າ ຜູ້ທີ່ກ່າວນາຄິດຂອງ
ຊາດໃນຂອນຕໍ່ໄປ ນັ້ນກໍຄົງຈະ
ແມ່ນພວກນັກຮຽນ ນັກສຶກສາ
ນັ້ນເອງພວກທີ່ມີສ່ວນຮ່ວມຮຽນ
ສະກັດຕາມເຕົ້າມູນ ສ່ວນຫລາຍ
ແມ່ນພວກທີ່ເຄືອ
ບວດເປັນພຣະ ເພາະພວກເພີ່ມ
ເຕີ້ລ້ານນຸ້ງຈັກພາສາປາລີແລະ
ສັນສະກອດຕີ ຊຶ່ງສອງພາສານີ້
ເປັນຜູ້ໃຫ້ກຳເໜີດ ແກ່ພາສາ

ລາວເຮົາ ພວກນີ້ໄດ້ຮັບການ
ສນັບສນຸນ ຈາກພວກທີ່ຮຽນ
ພາສາລາວ ໄດ້ພັກະເຕີມເປັນ
ຢ່າງດີ
ສາມາດ ວ່າວນ ວ່າ ພວກທີ່
ຮຽນພາສາໄດ້ຂຽນອອກພວກ
ນີ້ບໍ່ໄດ້ຮັບການສຶກສາຢ່າງເລິກ
ຊຶ່ງ ໃນດ້ານ ວິຊາ ພາສາລາດ
ລາງຄົນກໍຍັງບໍ່ຮູ້ວ່າ ຕົວສະ
ກັດຕາມເຕົ້າມູນຂອງ ຕົວສະ
ກັດພິເສດແມ່ນຫຍັງ? ແລະນັ້ນ
ມີຫມໍ້ທີ່ຢ່າງໃດ? ຕົວຢ່າງ ສົມ
ແລະ ສົມ .ອິຕຸ ແລະ ອິດ ເປັນ
ຫຍັງເພີ່ມ ຈຶ່ງຂຽນ ສົມ ລາງ
ເທື່ອກໍຂຽນ ສົມ ລາງເທື່ອ ອີຕຸ
ລາງເທື່ອອິດ
ຖ້າຈະພິຈາລະນາແບບຕົ້ນໆ
ເຮົາຈະເຫັນໄດ້ວ່າ ການຂຽນ
ແບບ "ສະກັດຕາມເຕົ້າມູນ
ເດີມ" ນີ້ຖືກຕ້ອງດີ ເພາະຖ້າ
ຈະຂຽນ "ສົມ" ຢ່າງເປັນເອກ
ສົມຄຳດຽວ ບາງສ່ວນເຮົາ
ອາດຈະເຂົ້າໃຈ ຫລາຍຫມາຍ
ຂອງຄຳວ່າ "ສົມ" ຄົນຕາຍ
ແລະສົບທີ່ສຸດແຂ້ວ ໄວນັ້ນພິດ
ໄປ ດັ່ງນັ້ນສົບຄົນຕາຍເພີ່ມຈຶ່ງ
ຂຽນ "ສົມ" ສຳຫລັບ ອີຕຸແລະ

ອິດ" ກໍໃຊ້ນັ້ນດຽວກັນ ເພີ່ມຄົງ
ຄິດວ່າມັນເປັນການບໍ່ສົມ ວນ
ທີ່ຈະຂຽນຄຳ ດັ່ງກ່າວນີ້ລັກນີ້
ເພາະແຕ່ລະຄຳນັ້ນ ມີຄວາມ
ສາມາດແຕກຕ່າງກັນ ແຕ່ຖ້າຈະ
ນາພິຈາລະນາ ເບິ່ງຄັກໆແລ້ວ
ເຫັນວ່າວິທີ ສະກັດຕາມເຕົ້າ
ເດີມນີ້ ຜິດຈາກສະໄໝຂອງ
ໄວຍະກອນລາວຢ່າງທີ່ສຸດໂດຍ
ສະເພາະ ກ່ຽວກັບ ການສະກັດ
ລາງນັ້ນເອົາຕົວ ມະກັດ ພິເສດ
ນາສະກັດ ຫ້າຍພວກໆກໍມີໂດຍ
ບໍ່ຄຳນຶ່ງເຖິງກິດເກນຂອງຫລັກ
ໄວຍະກອນລາວແຕ່ຢ່າງໃດເລີຍ
ໃນພາສາລາວ ຕົວສະກັດຕາມ
ເຕົ້າມູນເດີມນີ້ຢູ່ ຕົວ ກ. ງ. ບ. ບ.
ມ. ມ. ດ. ວ. ແລະມີຫມໍ້ທີ່ໃຊ້ສະ
ກັດຫ້າຍພວກເຊັ່ນນັ້ນ ສຳຫລັບ
ຕົວສະກັດພິເສດນັ້ນ ມີທັງຫມົດ
13 ຕົວ : ຂ. ລ. ຈ. ສ. ອຸ. ຕ. ຖ. ທ. ສ.
ປ. ຟ. ພ. ອ. ລ. ຕົວສະກັດພິເສດ
ນີ້ສະກັດໄດ້ແຕ່ກາງຄຳ ຕົວຢ່າງ
ອັຕຸບາລຕົວ ຖ ແມ່ນຕົວສະກັດ
ພິເສດ ໃຊ້ແຫນ້ນດົວ ມັນຫ້າ
ຫມໍ້ເປັນຕົວ ສະກັດຂອງພະ
ບາງຫມໍ້ ແລະເປັນພະຍົມຊະນະ
ຕົວອອກສຽງ ຂອງພວກຫລັງ
▲ ອ່ານຕໍ່ສບັດຫມໍ້ ▲

Cool Clean Consulate

ຄຸນຄ່າ ເປັນໃຈ ໃນເມື່ອທ່ານສຸບຢ່າຂອງຄູລເລດ
ຊີປະສົມດັ້ງສ ມັງໂຕນ ຂອງຄູລເລດມີຮິດສວດ ຈຸ່ນ

**ອິນຊຽງສວດສຸ່ແຫນມາຍພ້ອມແຕ່ຜູ້ດຽວ
ໃນປະເທດລາວ**

コーネル大学図書館蔵

一般紙である同紙に、ラーオ語に関する記事が多数掲載されていたという事実からは、王国政府の人びとの間で、言語ナショナリズムが高まっていた様子がうかがえる。例えば「ラオスの独立を守る Kan Haksa Ekarat Lao」という読者からの投書では、

ラオスの独立を守る方法は、人を集めて軍人にし、敵が侵入しないようにすることだけではない。話し言葉、書き言葉、すなわち国民の伝統、風習、文化のすべてを守らなければならない。なぜなら、ラオスは独立し、ラオス人は主権を獲得したのだから [Sat Lao 1964. 9. 17].

と、ラオスの政治的独立のためには、言語の独立が不可欠であるとの認識が示さ

りー・パーパン先生も、「民衆の声」に語源型を支持する投書を送ったということである。

れている。投書のタイトルにも、「国民語 *Phasa khong Sat*」という表現が使われたものが多くみられ、読者の間で、ラーオ語がラオスの「国民語」として、もはや自明の存在となっていたことがわかる。

ラーオ語に対する読者の懸念は、正書法の問題にとどまらず、王国政府のフランス語への依存や、タイ語語彙の流入にも向けられていた。文学委員会でのマハー・シラーの立場に、顕著に表れていたように、王国政府におけるフランス語の重用は、フランス語能力を要因とした、社会階層の分化を引き起こしていた。そうしたなか、王国政府の政治家たちの間で横行していた、汚職と賄賂への不満とあいまって、特権階級の象徴ともなっているフランス語の追放と、公務でのラーオ語の使用を求める声が強まっていく。1966年4月20日には、当時の編集長であったポン・チャンタラート(Phon Chanthalat)が「国民語の使用における障害 *Upasak Kan Sai Phasa Khong Sat*」という記事のなかで、国民のわずか20%が解するに過ぎないフランス語が、各省庁の公務で使用されていることを「愛国主義の欠如」と批判し、高位のものたちがフランス語を重視するあまり、国民語であるラーオ語が、必要な関心が払われることなく、捨て去られてしまっていると嘆いている[Sat Lao 1966. 4. 20]。そしてさらに、ラオス国営ラジオ放送での、フランス語放送の多さへの不満を述べた投書においては、フランス語のわからない田舎の住民は、フランス語放送がはじまると、直ちにチャンネルをタイのラジオに切り替えてしまっているとして、政府のフランス語への依存が、人びとをタイ語の影響にさらす一因となっている点が指摘されていた[Sat Lao 1966. 6. 24]。

4-3-2 ラオス・ロイヤルアカデミー

こうした、民衆の間での言語ナショナリズムの昂揚に押されるかたちで、1968年8月14日の内閣閣議において、すべての省庁でラーオ語を公用語として用いることが決定された[Sat Lao 1968. 8. 20]。69年9月には、教師や専門家、各省庁の代表などが参加して、教育省の主催によるラーオ語に関する会議が開かれ[Sat Lao 1969. 9. 17]、そして1970年、国王令第72号により、文学委員会がラオス・ロイヤルアカデミー（ラーサバンディットサパー・ラーオ *Rasabanditsapha Lao*）へと昇格された[Rasabanditsapha Lao 1972a:17]。文学委員会が実権を伴わない、いわば名誉職のようなものであったのに対し、アカデミーは国王令によって、芸術、文化、言語の領域において、最大の権限をもつ機関とされた[Rasabanditsapha Lao 1972a: 22]。アカデミーの議長には、そのまま文学委員長のギンが、副議長にはボン・スワンナウォンが就任し、タイ・ケーオルワンコート、クアン・パトゥムサート、パニャー・ブンスー・サナニコーン(Phanya Bunsu Sananikon)の計5名が初代執行部に名を連ねていた⁹⁹ [Rasabanditsapha Lao 1972a: 26-27]。メンバーの定員

⁹⁹ パニャー・ブンスー・サナニコーン以外の4名は文学委員会からのメンバーであった。

は最大で 25 名とされ、44 歳以上のもので言語、文学、芸術、文明において影響力をもつ、確たる業績のあるものから選ばれることとされた[Rasabanditsapha Lao 1972a: 23]。1970 年 5 月のアカデミーの会議において、文学委員会時代からのメンバー 8 名に加え¹⁰⁰、新たに 13 名のメンバーが選出され、1971 年 5 月にはさらに 2 名が加わり、計 23 名となった[Rasabanditsapha Lao 1972a: 23-26]。これらのメンバーをみると、文学委員会と同様、その大半が貴族や高位者であることを示す、「パニャー」「ピア」「チャオ」の称号を持った、高級官僚や名家出身のエリートたちであった。

アカデミーでは、執行部の会議を 2 ヶ月に 1 度の年に 6 回、全体会議を 4 ヶ月に 1 度の年 3 回開催することとされていた。筆者が入手することのできた、1971 年度の議事録と、1973 年 7 月の全体会議の議事録をしてみると¹⁰¹、古典文学作品の出版、ターン、ナーン、ターオ、ナーイ、などの敬称の使用法¹⁰²、1961 年にマハー・シラーが編纂した文学委員会の『ラーオ語文法』の改訂、新ラーオ語辞書の編纂、技術用語、専門用語集の編纂などが議題に上がっていた[Rasabanditsapha Lao 1973]。『ラーオ語文法』は、ボン・スワンナウォンが中心となって改訂がなされ、アカデミー版として、1974 年までに文字論・品詞論・統語論・韻律論の 4 巻すべてが出版された[Rasabanditsapha 1970; 1972b; 1974a; 1974b]。このときの改訂でも 1949 年の国王令を原則とするという方針が変わることはなく、例えば第 1 巻の文字論では、多すぎる例文を削除することなどが、議事録に書かれていた[Rasabanditsapha Lao 1971: 11]。技術用語・専門用語についても、言語学、法律、地理、生物、経済、数学の各分野について、フランス語・ラーオ語・英語の語彙集のかたちで小冊子が出版されたが[Rasabanditsapha Lao 1972c]、ラーオ語辞書については、準備は進められていたものの、出版には至らなかったようである。このほか、文学委員会の正書法が決定的な規範とならなかったことの反省からか、会議ではアカデミーが、教科書をはじめとする出版物を検査し、アカデミーの正書法に違反するものについては、出版を差し止めること[Rasabanditsapha Lao 1973: 22]、また商店の看板や道路標識に誤った綴りが用いられている場合は、書き直させることが決定された [Rasabanditsapha Lao 1971][Rasabanditsapha Lao 1973]。

こうして、アカデミーがラーオ語正書法統一の徹底をはかるなか、正書法をめぐる混乱はついに解決するかに見えた。しかし 1974 年 8 月末から 9 月上旬にかけてヴィエンチャンで、中学教師たちによりラーオ語カリキュラムについての会議が開かれた際には、ラーオ語正書法の規則が明確でない点が再び指摘されている

¹⁰⁰ 1963 年末にマハー・シラーが辞任したほか、死去したメンバーもあり、アカデミー昇格時点での旧文学委員会メンバーは 8 名となっていた。

¹⁰¹ 1971 年度の議事録は、執行部会議、全体会議両方の議事録が一冊のパンフレットにまとめられたものであったが、1973 年のものは 7 月の全体会議の議事録のみをまとめたものであった。

¹⁰² いずれも名前の前につける敬称である。当時はその使用法に明確な規則がなかった。

¹⁰³[Kongsammana Phasa Lao 1974: 12]。アカデミーから『ラーオ語文法』の第1巻『文字論』が出版されたのは1972年のことであり、このことは、出版から2年が経過しても、アカデミーの定めた正書法はいまだ決定的な規範とはなりえていなかったことを意味している。

そしてまた、アカデミーの行った『ラーオ語文法』の改訂について、大いに不満を持っていたのがマハー・シラーであった。マハー・シラーはアカデミーのメンバーには選出されてはおらず¹⁰⁴、一連の会議には参加していなかった。『ラーオ語文法』以外にも、アカデミーは文学委員会時代にマハー・シラーが編纂した古典文学作品である『シンサイ物語』などに無断で改訂を加えており、マハー・シラーは大いに失望していたという[Maha Sila 2004: 12]。マハー・シラーにとって、アカデミーの行った改訂は「改悪」とうつり、ラーオ語よりもむしろフランス語に堪能ともいえる、エリート中心のアカデミーに、ラーオ語の問題を任せることに不安を覚えたのであろう[Maha Sila 2004: 12]。そうしたなか、1972年、マハー・シラーはラーオ語とラーオ語による執筆活動の振興と発展、社会批判を目的とした雑誌『パイ・ナム *Phay Nam*』を創刊した。

4-4 雑誌『パイ・ナム』

『パイ・ナム』は、1972年6月、マハー・シラーを編集責任者、その娘のダーラー・カンラニャー(Dara Kanranya)を副責任者として創刊された月刊誌であり、1975年12月2日のラオス人民民主共和国の成立が間近に迫った、75年10月の第38号に至るまで、3年あまりにわたって刊行された。編集関係者、執筆者はマハー・シラーの親族が中心で、主要メンバーは8名であったが、そのほかにも懸賞作品の応募を受け付けるなど¹⁰⁵、一般の読者からの投稿記事も多数掲載されていた。投書欄を見てみると、ヴィエンチャン、パクセー、ルアンパバーン、サワンナケート、サイニャブリー、ホアコーン、タケークなど、国内各地に加え、インドやタイ、フランス、アメリカといった留学生を含む、海外在住のラオス人からも投書が届いていた¹⁰⁶。年齢層も中高生から大人まで幅広く、1974年の第23号発行時点で、定期購読者の数はほぼ1000人に達していたという[Phay Nam no.23 1974.4: 12]。ラオス国立大学文学部ラオス語専攻の先生方によれば、『パイ・ナー

¹⁰³ 4月に第3次連合政府が成立しており、第5章で詳述するパテート・ラーオの正書法がヴィエンチャンに入り込んだことにより、混乱が深まっていた可能性がある。

¹⁰⁴ 自伝に寄せられたドゥアンドゥアン・ブンニャウオン氏の前書きから、マハー・シラーは革命間近にアカデミーのメンバーとなったようであるが[Maha Sila 2004: 13]、正確な時期は不明である。

¹⁰⁵ 1958年生まれで、70年代にヴィエンチャンのリセの学生であった、ラオス国立大学文学部ラオス語専攻のセーンファー・ホーラーヌパーブ(Saengfa Holanuphab)助教授も、『パイ・ナム』の懸賞に自作の短編小説を応募し、掲載されたことがあるとのことである。

¹⁰⁶ これは海外で販売されていたことを意味するものではなく、すべて国内の親戚や友人から送られたものであった。国内に関しては、サワンナケート、パクセー、ルアンパバーンでは販売されていたようだが、そのほかは定期購読者として直接編集部注文し、入手していたようである。

ム』は、『プアン・ケーオ *Phuean Kao*』、『ピム・ラーオ *Phim Lao*』と並ぶ、当時の3大人気雑誌のひとつであったということである¹⁰⁷。

『パイ・ナム』の主な目的は、ラーオ語による執筆活動を振興し、ラーオ語を国民語としてひとり立ちできるように、支援していくことにあり、ラーオ語文法やラオスの歴史、文化に関する記事、短編小説などが掲載されていた。そして同時に、汚職や賄賂が横行し、貧富の差や社会的不平等が拡大する一方であった当時の王国政府の世相を反映して、社会批判をもう一つのテーマとして掲げていた。創刊号に書かれた、マハー・シラーの説明によると、「パイ・ナム」という雑誌名自体、ラーンサーン王国の建国者とされるファー・グム王が、ウィエンカムに攻め込む際、城壁の役割を果たしていた竹林（パイ・ナム）に黄金の矢を放ち、欲に目がくらんだ人びとに竹林を切り倒させることで、征服を成し遂げたという逸話からとったものであるという[Phay Nam no.1 1972. 6: 52]。ここには、国家全体の利益よりも私利私欲に走るといふ、王国政府の特権階級を風刺する意味が込められていた。

『パイ・ナム』ではこうした方針のもと、1975年10月の廃刊直前の2、3号を除くほぼすべての号において¹⁰⁸、政治・社会問題について辛辣な批判が展開されていった。言語問題に関しては、主としてフランス語に依存した教育制度のもたらす弊害、タイ語の影響が取り上げられ、ここからは、先の『サート・ラーオ』の記事でもみられたように、公用語としてのフランス語の維持とタイ語の影響がさまざまな社会問題を引き起こしていたことが浮き彫りとなる。

以下、まずは世俗教育・宗教教育という2つの教育制度について、それぞれにおいてフランス語の存在がどのような問題を生じさせていたのか、『パイ・ナム』の記事から、検討していく。

4-4-1 世俗教育とフランス語

ラオス王国憲法において、ラーオ語が国民語と規定されていることについて、役所の机の下に積まれた書類から察するに、まだあまり進んでいるとはいえない。下級の役人から高級官僚に至るまで、外国語の書類、とくにフランス語のものがまだまだ多くみられ、ラーオ語のものはその半分にも満たない。いくつかの省庁では、フランス語である必要のない回覧板までもが、いまだにフランス語で書かれている。彼らの言い分というのは、一緒に仕事をしているフランス人がいるから、ということなのだが¹⁰⁹ [Phay Nam no.8 1973.1: 41]。

¹⁰⁷ 『プアン・ケーオ』は筆者が唯一入手できた号が1970年の発行で2年度目と記されていることから、1969年創刊と思われる。『ピム・ラーオ』については、入手することができなかった。

¹⁰⁸ 1975年8月のパテート・ラーオのヴィエンチャン進駐以降、統制が厳しくなり、自由な批判をすることが難しくなったものと思われる。この点について、詳しくは第5章で述べることにする。

¹⁰⁹ 正確には、憲法では「国民語」ではなく、「公用語」と規定されていた。

これは『パイ・ナム』の執筆陣の1人、マハー・チャン・イントゥピラート(Maha Chan Inthupilat) (以下、チャン)の言葉である。チャンはヴィエンチャンのリセ(ウィタニャーライ・ヴィエンチャン)のラーオ語教師で¹¹⁰、「マハー」の称号からも分るとおり、マハー・シラーと同じく仏教教育の出身であった¹¹¹。『パイ・ナム』では「パーサー・パー・シア *Phasa Pha Sia*」という言語についてのコラムを担当しており、上の一節もそのコラムに書かれていたものであった¹¹²。チャンの言葉からは、1970年にアカデミーが設置されても、かつての支配者の言語である、フランス語の下位におかれるという、ラーオ語の置かれた状況に何ら変化は見られなかったということがわかる。『サート・ラーオ』新聞においても、この問題に関する投書は頻繁に見られ、電気料金の請求書や車のナンバープレートまでもがフランス語で書かれていることを嘆き[Sat Lao 1971. 2. 27][Sat Lao 1966. 11. 10]、ラオスは本当に独立を達成したのかと問いかけるものも見受けられた。チャンが教鞭をとる、ヴィエンチャンのリセの教授言語も、一部の科目を除いてすべてフランス語で、チャンが「フランス語と英語を知っていると、多くの人は満足する。〔彼らは〕それらの言語が神の言語で、自身のラーオ語はミミズ程度のものだとみなしているかのようである」と評しているように[Phay Nam no.13 1973. 6: 40]、1970年代に入ってもなお、エリートたちはもっぱらフランス語のみを重用していたのであった。

『パイ・ナム』第8号に掲載された「ラーオ文字を学んでどうするのか *Hian Pai Het Nyang To Lao*」という、巻頭コラム「ナム・パイ *Nam Pai* (竹のとげ)」の1項目は、こうしたエリートたちの態度に警鐘を鳴らしたものであった。「ナム・パイ」とは、マハー・シラーの息子で作家のパーナイ(パーキアン・ウィーラウオン *Pakian Viravong*)が、“キアンカム(黄金の矢)”というペンネームを用いて、毎号、巻頭に連載していた時事問題を扱ったコラムであった¹¹³。

第8号の「ナム・パイ」は、全体が4つの項目から構成されており、そのうちのひとつが先の「ラーオ文字を学んでどうするのか」であった。ここでパーナイは、公立小学校がカリキュラムを改訂して、ラーオ語を全科目の教授言語としたのに対し、公立中学校の入学試験は依然としてフランス語で行われているとい

¹¹⁰ 王国政府の中等教育は、前期中等学校4年、後期中等学校3年の7年生で、前・後期両方の課程を備えた学校をフランス式にリセ、ラーオ語ではウィタニャーライと呼んだ。チャンが所属していたのはウィタニャーライ・ヴィエンチャン(リセ・ヴィエンチャン)であった。

¹¹¹ 「マハー」とは、仏教学の試験の3級以上に合格した僧侶の名に冠して用いるものであり、現俗しても「マハー」と呼ばれる。『パイ・ナム』第2号で、チャンは1950年ごろにタイのバンコクから帰国したことを書いており[Phay Nam no.2 1972. 7: 61]、仏教教育を受けるため、タイに留学していたことが推測される。

¹¹² このコラムのタイトルについては後述する。

¹¹³ パーナイはドゥアンチャムパー(*Duang Champa*) (ダーラー・カンラニャー)と並ぶ、『パイ・ナム』の2大人気作家でもあり、詩や短編小説なども多く掲載されていた。なお、パーナイもペンネームであり、彼は2つのペンネームを使い分けていた。

う、小学校と中学校の間での教育カリキュラムの不整合を問題としている¹¹⁴[Phay Nam no.8 1973.1: 7]。王国政府の教育制度では、小学校 6 年、中学校は前期中等学校 4 年、後期中等学校 3 年の 6・4・3 年制がとられ、中等学校には普通科とともに師範学校、職業訓練校などが存在した。前・後期両方の課程を備えた中等学校はフランス式にリセ、ラーオ語ではウィタニャーライと呼ばれ、いずれの中学校も入学するためには、入学試験に合格する必要があった。パーナイによると、公立小学校のカリキュラムが改正されても、私立の小学校の授業はフランス語でおこなわれていたため、中学入試に際して、公立小学校の卒業生は私立小学校の卒業生にかなわず、結果として進学之道が閉ざされてしまうという問題が生じていたのだという[Phay Nam no.8 1973.1: 7]。タイトルの「ラーオ文字を学んでどうするといふのか」はここにきて、「勉強したとしてもどこの入学試験に合格することもできないといふのに！ *Hian Lao Ko Seng Khao Sai Bo Dai*」と続いていくこととなる[Phay Nam no.8 1973.1: 7]。当時、カトリック系中心の私立小学校に入学できたのは、高級官僚など富裕層の子供たちに限られており、彼らはこぞって、自らの子弟を私立学校へと入学させていた[Phay Nam no.8 1973.1: 7]。パーナイは、

もしも、我々の国民の教育世界がこの先もずっとこのままであるならば、現在、ふたつの階層へと分離が進みつつある我々のラオス社会は、さらにその差異を広げていくであろうことは疑いの余地がない[Phay Nam no.8 1973.1: 7]。

として、小学校卒業の段階ですでに、フランス語能力の有無が社会的上昇の鍵を握るといふ状況を憂えている。そして初等教育と中等教育のカリキュラムの不整合や、私立と公立の小学校で異なるカリキュラムが採用されるという、統一性を欠いた政府の教育政策を批判している[Phay Nam no.8 1973.1: 7: 8]。

少し数字が古いが、1962 年の統計をみると、公立小学校の最終学年（6 年生）の全生徒数 5769 名中、中学校の入学試験を受験したのが 3130 名、そのうち合格者は 205 名であった。入試の全合格者数は 645 名であったが、そのうち私立小学校の出身者が 440 名で、実に全合格者の 3 分の 2 以上を、私立小学校の出身者が占めていたことになる[Khamphao 1994: 93]。62 年は王国政府の教育改革が実施された年であり、このときの改革では、公立小学校の 4 年生以上において、フランス語の科目を教えることが決められていた[Sueksathikan no.20 1962.8: 65]。しかし一方で、教師不足を補うために僧侶を積極的に採用するという方針がとられていたことから、全国で一斉にフランス語の教科を導入するのは事実上、不可能であったことは想像に難くない。62 年の教育改革の特集号であった『教育』第 20

¹¹⁴ パーナイは何年の改革か、具体的に書いていないが、おそらく後述する 1962 年の教育改革をさすものと思われる。

号において、当時の教育・芸術大臣であったニューイ・アパイも¹¹⁵、地方の小学校ではラーオ語のみで教育がおこなわれていることを、中等教育でフランス語を教授言語とすることに伴う問題として認めていた¹¹⁶[Sueksathikan no.20 1962.8: 65]。パーナイの記事からは、62年の時点で問題となっていた状況が、それから10年の年月が過ぎても、何ら改善されていなかったことがわかる¹¹⁷。

パーナイは次の「以前からの問題、以前より大きな問題 *Panha Kao Nyai Kwa Kao*」と題した項目においても、同様の問題を今度はアメリカの援助のもと、実験的に設立された「ファー・グム総合中等学校」（以下、ファー・グム学校）のケースから論じている¹¹⁸ [Phay Nam no.8 1973.1: 7: 8]。ファー・グム学校とは、1967年に政府のラオス国民語開発プロジェクトにより[Kommatthanyomsueksa 1972: iv]、アメリカの国際開発局（USAID）の援助によって創設された、前期中等学校4年、後期中等学校3年からなる総合学校であった[Khamphao 1994: 94-95]。ファー・グム学校では、外国語以外のすべての授業をラーオ語で行う新カリキュラムが採用され、小学校卒業後の進学先をより多くの子供たちに提供することが期待されていた。ファー・グム学校は十分な資金のもとで、毎年その規模を拡大し、ヴィエンチャン以外にも、サワンナケートやパクセー、ルアンパバーンなどに分校が設置されていた[Khamphao 1994: 94-95]。

しかしパーナイの記事からは、ファー・グム学校の試みも、言語による社会階層分化の決定的な解決策とはならなかったことがわかる。パーナイは、1973年当時、ファー・グム学校の一期生が卒業するには至っていないことを断ったうえで、近い将来、卒業生が進学を希望した場合、医学校、法律行政専門学校、師範学校などの高等教育機関は、すべてフランス語で授業が行われており、ファー・グム学校の卒業生には、どこにも進学先がないであろうと危惧している[Phay Nam no.8 1973.1: 9-10]。すなわち、ファー・グム学校の創設により、ようやくラーオ語で中等教育を受ける機会が開かれても、卒業生が進学を希望した場合、初等教育から中等教育への進学の場合と同じ問題が待ち受けていたのである。そしてまた卒業生が就職を希望したとしても、政府が公務員として雇える人数には限界があることから、

¹¹⁵ ニューイは文学委員会のメンバーでもあった。

¹¹⁶ ニューイはここで、「フランス語は世界の文明につながる道であり、ラーオ語にはない知識へといざなってくれるものであるため、フランス語の使用をやめることはできない」と説明している。

¹¹⁷ 1962年には教育改革が行われている。この内容を報告した『教育』20号の教育改革特集号では、当時の教育芸術大臣であったニューイ・アパイが、地方の初等学校では、ラーオ語のみで教育をおこなわれていることを問題として認識しながらも、中等教育以上でのフランス語の使用をやめることはできないと述べている。さらに62年の教育改革では、小学4年生からフランス語の授業を導入することとされたが、状況が許すなら3年生から導入してもよいとされており、地方と都市部の小学校でフランス語教育のレベルに相当の差異があったものと思われる。

¹¹⁸ ファー・グム学校はラーオ語ではウィタニャーライ・ファー・グムというが、リセとは呼ばれていなかったため、ここでは「総合中等学校」とした。

はっきりしていることは、数年後に我々の国民の教育世界は行き止まりにぶつかるといことである。もしも我々の国民の教育開発計画が、このままの方針でいくのであれば、将来、ラオスの子供たちは“失業者 *Te Fun*”という職に就くために、一生懸命勉強しなくてはならなくなる、ということの意味している[Phay Nam no.8 1973.1: 10]。

として、フランス語偏重のカリキュラムを早急に改革しなければ、社会的不平等が深刻化の一途を辿るであろうと警告している。

これらの記事からは、中等教育以上の教授言語はフランス語中心という、王国政府の教育制度が、小学校卒業時という人生の早い段階で、将来の社会的上昇の機会を決定するという状況を生み出していたことがわかる。中等学校に進学することのできた、一部エリートにしか理解できないフランス語によって、国の公務がなされ、電気料金の請求書に至るまでフランス語で書かれるという事態が、人びとの間で大きな不満を引き起こしていたことは、先にみた『サート・ラーオ』の記事などからも明らかであろう。パーナイの記事には、10号の投書欄に読者からも賛成の意を表する投書が届いていた。そしてこうした不満はまた、世俗教育と並立するもう一つの教育制度であった仏教教育の出身者においても共有されていたものであった。次に仏教教育とフランス語の関係についてみていくこととする。

4-4-2 仏教教育とフランス語

王国政府においては、教育省管轄の世俗教育制度のほかに、仏教教育制度があり¹¹⁹、聖・俗 2つの教育制度が並立して存在していた。国内には世俗教育の小・中等学校に相当する、初等・中等レベルのパーリ語学校があり、パーリ語学校では世俗学校とは異なる、仏教科目中心のカリキュラムが採用され、全科目ラーオ語による教育が行われていた。したがって、最高教育機関であった仏教専門学校(Sathaban Sueksa Phutthasasana)を修了した場合、パーリ語や仏教教義について深い知識を身につけることができる一方、フランス語に関して世俗学校出身者に匹敵する、十分な能力を得ることは難しかった。そうしたなか、1970年代に入ると、パーリ語学校の僧侶や少年僧たちにフランス語や世俗科目を教えるべきかどうかということが、新たな問題として持ち上がっていた。

実際、パーリ語学校とはいっても、生徒たち全員が生涯仏門に入るというわけではなく、特に地方出身の貧しい家庭の子供たちが教育を受けるため、一時的に

¹¹⁹ 仏教教育制度は時期により、宗教省のみが管轄していたり、宗教省と教育省が共同で管轄していたりした。1972年の時点では仏教専門学校のみが、教育省の管轄で、小・中のパーリ語学校は宗教省の管轄であったことが教育省の国会報告書に記されている[Lueam 1972: 20]。仏教専門学校卒業者は世俗の後期中等学校卒業者に相当する学歴とみなされた。

出家をしている例も少なくなかった。そのため将来、学業を終えて還俗したときに、少しでも良い職業に就けるようにと、僧侶たちの間で外国語学習への要求が高まり、民間の語学学校に通うものも出てきていた [Sat Lao 1967. 9. 26]。『パイ・ナム』第 10 号の「教義の世界 *Lok Tham*」のなかで、チャンはケー・カイセーンというペンネームを用いて、この問題について「僧侶や少年僧は世俗科目を学ぶべきか? *Chao Hua lae Chua Khuan Hian Visa Fai Lok Bo*」というテーマを設けて論じている [Phay Nam no. 10 1973. 3: 59-64]。

チャンによると当時、僧侶や少年僧が世俗科目を学ぶと、信者が功德行為によって得られるはずのブン（徳）が減ってしまうのではないかという声が存在しており、この記事はそうした人びとの疑念に答えるかたちで書かれたものであった。チャンは最初に、世俗教育と仏教教育の歴史を振り返ったあと、問答形式により記事を進めていく。ひとつ目の「僧侶たちに仏典だけを学ばせ、世俗科目を全く学ばせないでおくことはできるか」という問いに対しては、それは可能であるが時代遅れだと答えている [Phay Nam no. 10 1973.3: 62]。そして時代とともに価値観が変化し、人びとの知識が多様化していくなか、宗教教育もそれに対応していかなければ、やがて僧侶は見下され、人びとは信仰をやめてしまうだろうとの懸念を示している [Phay Nam no. 10 1973.3: 62]。チャンは「他人を教え、信仰させるようにするということは、何の話をしていても互いに分かり合えるということではなければならない。すなわち、彼らと対等の知識をもっていなければならない」と述べ [Phay Nam no. 10 1973.3: 62]、人びとが僧侶の教えを聞き、信仰を寄せるようにしていくには、僧侶と世俗の人びとが「対等な」知識をもつ必要があることを強調している [Phay Nam no.10 1973. 3: 62]。そしてそのために、第一に必要と考えられた知識がフランス語であることは、ふたつ目以降の問いから明らかとなる。

ふたつ目の問いは「僧侶や少年僧にとっては必要なものではないから、フランス語や英語を学ぶべきではないのではないか」として、僧侶の外国語学習の是非を直接問うたものであった。この問いに対して、チャンは外国人に布教する際や、宗教国際会議に参加するためにも必要であると、僧侶がフランス語や英語を学ぶ必要性を簡潔に述べている [Phay Nam no. 10 1973.3: 62]。しかしながら、この問いに対するもっと重要な答えは、むしろ最後の「僧侶たちで世俗科目を学ぶ必要があるものについて、なぜ還俗させて勉強させないのか。というのも、信者たちが彼らに四事（衣服、飲食、住居、医薬）を寄進したとしても、宗教科目だけを学んでいる僧侶に寄進したのと同じだけの徳を積めないのではないかと懸念するからなのだが」に対する答えのなかに見いだされる [Phay Nam no. 10 1973.3: 63]。

この答えは要約すれば、その大半が世俗学校に通うことのできない、貧しい家庭出身の僧侶や少年僧たちに寺院で教育を受けさせて、宗教と世俗の両方に関する知識を十分に持たせてやれば、彼らが出家を続けた場合は仏教にとって利益となるし、還俗しても、能力と道徳を兼ね備えた役人として国家の利益となる。し

たがって、寄進をおこなって、彼らに勉強の機会を与えるよう支援していく行為は、当然徳を生むものである、というものであった[Phay Nam no. 10 1973.3: 63]。そしてこの回答を述べていくなかで、チャンはとくにフランス語と英語に関して、仏教学校出身者が外国語をしっかりと身につけていれば、彼らが役人となっても世俗学校出身者に馬鹿にされることはないであろうと、僧侶が外国語を学ぶ必要性を説明している[Phay Nam no. 10 1973.3: 63]。

仏教教育の最高教育機関であった、仏教専門学校修了者は制度上、世俗の後期中等学校修了者と同等の学歴となるにもかかわらず、フランス語能力が十分ではないため、実社会においては、世俗学校出身者に見下されてしまう。チャンの言葉からはこうした、王国政府において仏教教育出身者がおかれた不利な状況が浮かび上がってくる。このような不平等が、世俗教育出身者と仏教教育出身者の間に埋めようのない、大きな溝をつくっていたことは、先にみた文学委員会でのマハー・シラーの立場からも明白であろう。そしてまさにここに、語源型・音韻型の正書法をめぐる対立の根源があった。次にこのことがより明確にあらわれているものとして、タム文字の採否をめぐるアカデミーとマハー・シラーのやりとりをみていくこととする。

4-4-3 タム文字か、ラーオ文字か—「国民の文字」をめぐる

これまでに見てきたとおり、植民地時代以来、マハー・シラーをはじめとする語源型支持者は一貫して、ラーオ文字の追加を主張してきた。これは第一に、タム文字の使用をやめ、ラーオ文字でパーリ語を表記できるようにすることで、仏教教科書をとおしてのタイ語の影響を遮断し、「ラオス仏教」の近代化をはかることを目的としたものであった。しかしタイ語の脅威への対抗という理由とともに、もうひとつ重要であったのは、ラーオ文字を用いることで、タム文字の知識のない在家者にも仏教教義を普及させ、仏教の「世俗化」を進めていくことであった。そしてこうして、世俗教育と仏教教育の間の交流をはかることで、この2つの教育制度の間に出来た「深い溝」を埋めることが目指されたのである。マハー・シラーは先に紹介した、1973年出版の『ラーオ文字の歴史』のなかで、文字を追加する根拠のひとつとして、次のようなことを述べている。

最も重要なことは、同じ国家に住む国民で、同じ宗教、伝統風習、憲法を崇拝し、同じ政府のもとにいるものたちは、ひとつの**国民**〔強調原文〕の文字を用いるべきであるということである *Sing Samkhan Thi Sut Ko Maen Khon Sat Diao Kan Yu Pathet Diao Kan Naphue Sasana Hitkhong Papheni lae Kotmai Diaokan Yu Tai Amnat Latthaban Diao Kan Khuan Tong Sai Tua Nangsue khong Sat Pen Tua Diao Kan*。同じ国民において、二種類の文字をもつべきではない。それは国民のなかで、異

なる意見をもつようにさせてしまうものである。仏教教育ではタム文字を使い、世俗教育ではラーオ文字を使うという、二種類の国民の文字を学ばなければならないという教育は、時間の無駄である。〔中略〕もしも現在、時間の無駄で、たいした利益をもたらさないタム文字の学習に時間を割くのであれば、その時間を今日拡大し、好まれている外国の文字の学習に割くほうがよい。なぜならそれらの外国の文字は、世界中のあらゆる知識への扉を開くことのできる、すばらしい鍵となるからである[Sila 1995: 38]。

マハー・シラーにおいて、国民が宗教と世俗で 2 つの文字—タム文字とラーオ文字—を用いるということは、仏教知識と世俗知識の交流を妨げることであり、タム文字は、いわば国民の分裂の象徴とみなされていた。ラーオ文字を追加すれば、世俗学校の学生が仏教について学習するのも容易になり、仏教学校においては、タム文字学習の時間を節約し、その分を外国の文字の学習（フランス語のことであろう）に当てることができるようになる [Sila 1995: 38]。マハー・シラーが最も力点をおいたのは、世俗知識と仏教知識の交流であり、聖俗における文字の統一は、2 つの教育制度間の「溝」を埋め、国民統合を進めていくためにも、不可欠なものと考えられたのである。

もっとも、タム文字の放棄につながるマハー・シラーの意見には、タム文字を「聖なる文字」と考える人びとからの反発があった[Sila 1995: 37]。マハー・シラーはそれに対して、タム文字は「仏の教えを記すことのできる唯一の文字」ではなく、タイ文字やクメール文字と同様、ラーオ文字でも仏典を表わすことができるのだと説明し、世俗と仏教、両方の教育発展のために文字改革が必要であると訴えている[Sila 1995: 37-39]。マハー・シラーをはじめ、語源型の支持者は保守的な「伝統主義者」という観点から評価される場合が多いが[Enfield 2007]、このようなラオス仏教近代化を視野に入れてのタム文字の放棄という側面を考慮すれば、むしろ革新的な主張であったととらえることもできる。

しかしマハー・シラーのこの考えは、アカデミーのエリートたちには受け入れられなかった。1973 年 7 月 2 日から 7 日にかけて開催された、アカデミーの全体会議の議事録には「宗教省の許可にもとづいた仏典の翻訳」という議題があり、そこには文字の問題に関して、以下のような記述が見られた。

宗教大臣は、1973 年 6 月 21 日に布告第 137 号第 2 項を出し、古いタム文字と新しく作られた文字、さらにタイ文字を含んだ 41 文字を用いることとした。この行為は、国王令第 10 号に対して正しくないものである。なぜなら、二種類のラーオ文字を同時に持つことを意味しているからである [Rasabanditsapha Lao 1973: 17]。

これは仏典の翻訳に当たってタム文字ではなく、41 字のラーオ文字の採用を認めた、宗教大臣布告に対する、アカデミーの反対意見を表明したものである。ここでいう 41 文字とは、仏教協会の『ラーオ語文法』（1935 年）において、採用されていた文字と同一の、まさにマハー・シラーが支持していた方法であった。マハー・シラーは 1963 年に文学委員会を脱会したあと、66 年には宗教省の非常勤職員となるなど、宗教省との関係が深く、布告にはマハー・シラーの意向が反映されていたことが推測できる。議事録では、この 41 字をタイ文字からのもの 3 字、タム文字 10 字、ラーオ文字 27 字、新しく作られたもの 2 字に分類したうえで表にして示し[写真 4-2]¹²⁰、この布告が 27 字の文字数と、タム文字の使用を規定した、1949 年の国王令を破るものであると批判している¹²¹ [Rasabanditsapha Lao 1973:19-20]。

アカデミーがラーオ文字の文字数を 27 字と定めている以上、宗教大臣の布告はラオス国内に 27 字と 41 字という、二種類のラーオ文字が併存することを意味していた。議事録では、

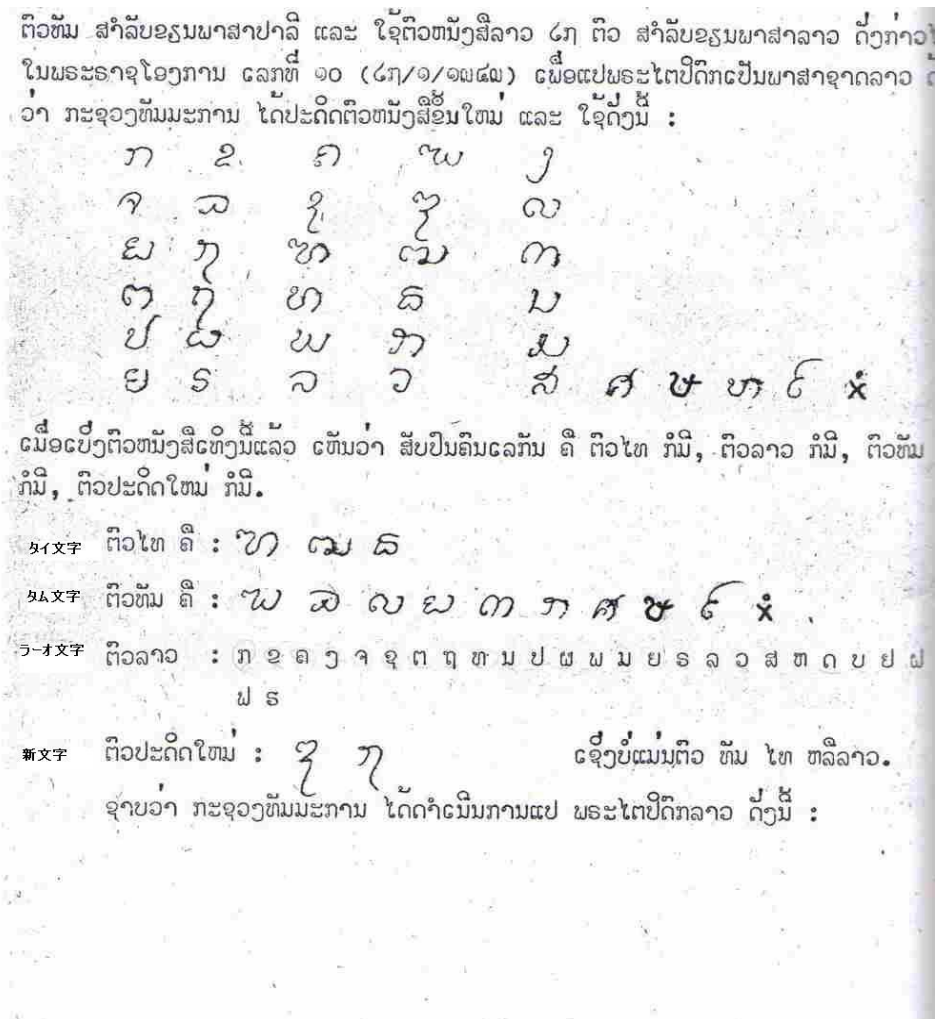
〔宗教大臣の布告を認めれば〕ラーオ語が二種類の文字、二種類の文法〔語源型と音韻型ということ〕を持つことになるだろう。ラオス人の心情や考え方も分裂してしまうことになるだろう。ラオス国民の統一を達成することはできないだろう [Rasabanditsapha Lao 1973: 20]。

として、文字の追加はラオス国民の分裂を引き起こし、アカデミーの定めた正書法とタム文字を「破壊」する行為であると、宗教省の方針を強く非難している。そして 49 年の国王令を根拠に、宗教大臣が布告を取り下げるよう要求している [Rasabanditsapha Lao 1973: 21]。

¹²⁰ ここで新しく加えられた文字数の合計が 15 になるのは、パーリ語では子音字とみなされるが、ラーオ語では母音符号に分類されるものがひとつ含まれていたためである。

¹²¹ 植民地時代には、ターオ・ボンも仏教協会が追加した文字にタイ文字が含まれていることを指摘していた。

[写真 4-2] アカデミーの議事録より



出典 : [Rasabanditsapha 1973: 18] 教育科学研究所蔵

マハー・シラーはタム文字とラーオ文字という、二種類の文字の使用が国民統合の障害となっているといい、一方、アカデミーは二種類のラーオ文字の使用は、ラオス国民の分裂をもたらすのだとする。マハー・シラーとアカデミー、両者の意見は平行線をたどり、溝は埋まるどころか、深まるばかりであった。マハー・シラーの理想は、聖俗で 27 字と 41 字の文字数を使い分けることではなく、アカデミーが 41 字のラーオ文字の採用に同意し、ラーオ語の表記についても、語源型の正書法を採用するというものであった。しかし議事録からもわかるとおり、アカデミーは国王令にもとづいた、27 字の文字数による音韻型正書法を断固として維持する方針を貫いていた。

1973 年の宗教大臣布告が出される以前にも、語源型正書法による仏教関係の出版物はみられ、1965 年 10 月 20 日の『サート・ラーオ』には、『プッタウオン Phutthavong』という仏教系雑誌の表記に対して、文学委員長がラジオで批判した

ことに触れた投書も見られた¹²²[Sat Lao 1965. 10. 20]。またマハー・シラーも、66年に宗教省の非常勤職員になると、語源型正書法によって『パセークカム仏縁起』、『パケーオ仏縁起』などを編纂して、宗教省から出版していた¹²³ [Maha Sila 2004: 11-12]。こうした事実からは、正書法をめぐる語源型/音韻型の対立の背後に、世俗/仏教、ないしは教育省/宗教省という対立の構図が存在していたことが、はっきりと見て取れる。

一方、タム文字の使用をやめ、その学習時間をフランス語に当てることで、仏教学校出身者の不利な立場を克服しようとしたマハー・シラーの方針は、世俗教育間での不平等を解決するものとはみなされなかった。中等学校以上への進学がかなわなかった世俗小学校の卒業生は、音韻型の正書法のみを習得しており、パーリ語の知識のない彼らにとってマハー・シラーの方法は、むしろ仏教教育に力点をおきすぎた意見ともうつつっていた[Sat Lao 1969. 11. 20]。

こうして、教育における世俗/仏教という対立の構図がラーオ語の統一に暗い影を落とすなか、タイ語の影響は容赦なく、ラーオ語のなかに侵入し続けていた。植民地時代に見られた、新語にタイ語の語彙を使用するか否かという問題に限らず、映画やラジオなどの新しい媒体をとおして、日常的な語彙にまで、タイ語の語彙が多々見られるようになっていたのである。アカデミー、マハー・シラー双方ともに、タイ語の影響を懸念していたが、しかしここでも、一筋縄ではいかなかった。すなわち、何がラーオ語でタイ語かという語彙の選定にあたって、双方の意見がしばしば一致しなかったのである。以下に、この問題について、『パイ・ナム』に連載されたチャンのコラムを中心にみていくこととしたい。

4-5 ラーオ語か、タイ語か—否定的同一化

4-5-1 新しい娯楽とタイ語

これまでにみてきたように、植民地時代以来、タイ語はつねにラーオ語の「独立」を脅かすものとして、意識されてきた。1960年代に入ると、『サート・ラーオ』新聞においても、タイ語のラーオ語への影響を危惧する記事が頻繁に見られるようになる。

1966年2月15日付の『サート・ラーオ』には、政府のフランス語の重用とラー

¹²² この件について、1965年10月発行の『教育』4号に掲載された、同年8月22日の文学委員会の会議議事録においても、『ブッタウォン』の表記に対して、抗議をした旨が記されている [Sueksathikan no.4 1965.10-12: 32] (『教育』は1965年にリニューアルされた際、号数が再び1号からはじめられた。4-2で取り上げられた1959年9月発行の『教育』創刊号から数えて4号目ということではない) もっとも、当時、仏教関係以外の出版物でも語源型の表記が見られ、投書者はとくに文学委員会が『ブッタウォン』だけを攻撃対象としたことに疑問を抱いていた。文学委員会が仏教関係者を語源型表記を用い、正書法の混乱を招く元凶として、認識していたことがうかがえる。

¹²³ 『パセークカム仏縁起』と『パケーオ仏縁起』は、アリニャウオンサー僧により、16世紀に著されたものである。

オ語への無関心な態度が、タイ語の流入を招いているとする読者からの投書が掲載されている。そのなかで筆者は、タイ語の侵入経路として、1) 映画、2) モーラムルアンと呼ばれる民謡、3) 商品の宣伝広告の3つを主なものとして挙げている[Sat Lao 1966. 2. 15]。映画は当時、新しい娯楽として人びとの間で人気を博していたようで、『サート・ラーオ』にもヴィエンチャン市内の映画館の上映広告が、毎日のように掲載されていた。しかし上映された映画はというと、インド映画やハリウッド映画、日本映画、タイ映画などの外国の映画が中心で、これら外国映画の上映がラーオ語ではなく、タイ語で行われていたのが問題となっていたのである。この投書の翌年、67年には内務省により、映画におけるタイ語の使用をすべて禁止し、ラーオ語に改めるよう各映画館に通達が出されている[Sat Lao 1967. 7. 24]。この通達に対しては、『サート・ラーオ』に読者からも賛同の声が寄せられており、その一つを紹介すると、

私は映画でのラーオ語の使用を支持します。どこから来た映画であれ、有声映画以外は、ラーオ語を使わなくてはならない¹²⁴。そうすれば、ラーオ語によって、ラオスらしさの復興を助けていくことができるだろう。なぜなら現在、ラーオ語は著しく、タイ語のなかに沈み込んでしまっているように思われるから。〔中略〕それはまるで、ラオスを一生懸命にタイのイサーン〔東北タイ〕のようにしているかのようだ[Sat Lao 1967. 8. 3]。

と記されていた。ここからは映画がタイ語の重要な侵入経路と認識されていただけでなく、ラーオ語をタイ語の影響から守らなければ、ラオスも東北タイのようにタイに吸収されてしまうという、強い言語ナショナリズムが読み取れる。いまやタイ語の影響は、仏教教育の教科書にとどまらず、映画やラジオ放送、新聞やラジオの宣伝広告といった新しい媒体をとおして、かつてない勢いで、ラーオ語のなかへと侵入してきていた。出版物だけを見ても、1960年の段階で、毎月約40000部ものタイ語の新聞や雑誌がラオス国内に流通していたという[Pickerell 1960: 90]。『サート・ラーオ』の記事からは、ラーオ語の「独立」が維持できなければ、国家としてのラオスの独立も喪失してしまうという強い危機感が、王国政府の人びとの間で、共有されるようになっていた様子がうかがえる。

そしてこのように、タイ語の影響が深刻化するなか、『パイ・ナム』においてはチャンが、ラーオ語へのタイ語の影響を戒め、正しいラーオ語の使い方を紹介することを目的として、先述のコラム「パーサー・パー・シィア」を連載していた。

¹²⁴ 当時、ラオスで上映された映画は無声映画が多く、映画館には男女1名ずつの弁士がいて、映画の内容を解説していた。その際、タイ語で解説が行われていたのが問題となっていたのである。

4-5-2 「パーサー・パー・シィア」

(1) タイ語の影響

このコラムのタイトルについて、“パーサー”とは「言語」を、“パー”は「導く」、「シィア」は「失う」をそれぞれ意味している。したがって直訳すれば、「言語が喪失を招く」とでも翻訳できるであろうか。創刊号に記されたチャンの説明を読むと、そこにはラオス国民の言語であるラーオ語を正しく使うことができなければ、ラオス国民を喪失へと導いてしまうことになるだろうという、深い意味がこめられていたことが分かる[Phay Nam no. 1972.6: 41]。チャンはタイ語の影響について、

言語も水の流れと同じである。誰の言語であれ低い位置にあったり、弱っていたりすれば、より高い位置にあたり、強力であったりする言語によって簡単に飲み込まれてしまうだろう。高いところにある水が流れてきて、低いところの水を溢れさせてしまうように。現在、タイ文字とタイ語がラーオ文字とラーオ語を溢れさせてしまっている〔中略〕[Phay Nam no. 1972.6: 41]。

と記しており、ラーオ語がタイ語に飲み込まれてしまうのではないかという危機感を水の流れにたとえて描写している。

このコラムでチャンはほぼ毎号、ラーオ語のなかに侵入しているタイ語の語彙を示し、正しいラーオ語の表現を紹介している。創刊号においては、とくに「百」“ホーイ” ສ້ອຍ/*hǒy*/がタイ語の影響で“ローイ” ລ້ອຍ/*lǒy*/ (タイ語は/*rǒy*/) となるような、頭子音の/h/が/l/に変化する問題について取り上げられていた¹²⁵。ここでは例えば、「学校」“ホーンヒィアン” ໂຮງຮຽນ/*hóoy hían*/が“ローンリィアン” ໂລງຮຽນ/*lóoy lían*/ (タイ語は/*rooy rian*/) に、「商店」“ハーンカーイコーン” ຮ້ານຂາຍຂອງ/*hán khāy khǒy*/が“ラーンカーイコーン” ລ້ານຂາຍຂອງ/*lán khāy khǒy*/ (タイ語は/*rán khāy khǒy*/) にといった、頭子音のみが変化したものに加え、語彙自体が取り替えられてしまったものとして、「初めて、初回」“タンヘーク” ຕັ້ງແຮກ/*táphêek*/、“トウアタムイット” ເທື່ອທຳອິດ/*thuathám?ít*/が“ティーレーク” ທີ່ແລກ/*thii lêek*/ (タイ語は/*thii réek*/) に、「合わせる、合計する」“ホーム” ໂຮມ/*hóm*/が“ルアム” ລວມ/*lúam*/、あるいは“フアム” ຮວມ/*húam*/ (タイ語は/*ruam*/) になってしまっているものなど、いくつかの具体例を挙げて紹介されていた[Phay Nam no.1 1972.6: 41-42]。この/h/と/l/の問題に関して、チャンはさらに第2号でも、

¹²⁵ この問題については「はじめに」0-2を参照のこと。

国営ラジオ放送のアナウンサーはみな、男性、女性を問わずホーイということ
ができないし、ホームということもできない。数字の 100 をローイと発音し、ホ
ーイについては、彼らはルアム（タイの発音）をフアムになおして発音している
¹²⁶[Phay Nam no.2 1972. 7: 59]。

と、国営ラジオ放送のアナウンサーまでもが、正しい発音が出来ておらず、タイ
語のように発音していると嘆いている。このほかにも、例えば「足す」「トゥーム」
ຕຸ້ມ/*tuum*がタイ語の“プーム” ພູ້ມ */phəəm/*（タイ語は*/phâəm/*）に変化している
こと、またラーオ語では本来、「勝利」を意味するはずの“ペー” ພ້າ */phéə/*（タイ
語は*/phéə/*）がタイ語の影響により「負ける」と正反対の意味となってしまうとい
ふことなどが挙げられていた¹²⁷[Phay Nam no.2 1972.7: 60-61]。“ペー”に関しては
『サート・ラーオ』に掲載された、タバコの広告のなかで、

ヤーニー・ミー・ロットサート ボー・ペー・ヤー・ターンパテート

ຢາມີມິຣິດຊາດ ບໍ່ແພ້ຢາຕ່າງປະເທດ

[このタバコは外国のタバコに負けないぐらいにおいしい]

と書かれているのが、本来のラーオ語の意味では、「このタバコはおいしい。外国
のタバコには勝つことはできない」と意味不明なものになってしまうとして、こ
の広告を書いたものは、自分がメコン右岸に 있다고考えていて¹²⁸、だからタイ語
の言い回しをそのまま写してしまったのだろうと皮肉を述べている [Phay Nam
no.2 1972.7: 60]。『サート・ラーオ』においても、“ペー”の意味について、同様の
指摘をする投書がしばしば見られ、タイ語の影響が極めて日常的な語彙にまで及
んでいたこと、そしてそうした状況に人びとが脅威を感じていたことがわかる。
このような傾向に対して、チャンは「ラオス人がタイ語を読み聞きすると、それ
がラーオ語の語彙や言い回しでどう言うのか全く考えることなしに使ってしまっ
ている」と述べ [Phay Nam no.18 1973. 11: 55]、ラーオ語の語彙について考えること
なく、そのままタイ語を取り入れてしまっているという、人びとの態度を戒めて
いる¹²⁹。

¹²⁶ これはもとのラーオ語“ホーム”が、タイ語“ルアム”の影響を受けて“フアム”に変化した
ということを行っている。

¹²⁷ “ペー”はラーオ語では「勝つ」を意味し、タイ語では「負ける」を意味するという、正反対
の意味を持つ語である。

¹²⁸ メコン右岸とはタイのことである。

¹²⁹ このほか 18 号の「パーサー・パー・シニア」においても、作家などが「呼吸する」「嘆息する」
「視線」「近眼の人」などの語彙や言い回しに、タイ語のものを用いているのがよく見られるとし
て、これらについてタイ語とラーオ語の対照表が掲載されていた [表 4-3] [Phay Nam no. 18 1973.11:
56]。このほかにも同コラムの各号で、様々なタイ語がラーオ語に侵入していることが指摘されてい
る。

[表 4-3] チャンの指摘した作家などに見られるタイ語語彙の影響(注 129)

	ラーオ語(チャン)	作家などの傾向	タイ語
呼吸する	หັนใจ /hǎncǎy/	หายใจ	หายใจ /hǎycaj/
嘆息する	หັนใจไหญ่ /hǎncǎypay/	ถอนหายใจ	ถอนหายใจ /thwǎnhǎycaj/
視線、視力	แสงตา /sǎngtǎa/	สายตา	สายตา /sǎytaa/
近眼の人	คนแสงตาสั้น /khónsǎngtǎasǎn/	คนสายตาสั้น	คนสายตาสั้น /khonsǎytaaasǎn/

出典：[Phay Nam no. 18 1973. 11: 55-56]をもとに作成。

(2) 新語の問題とアカデミーへの批判

「パーサー・パー・シィア」では、人びとの日常の言語使用にとどまらず、アカデミーへの批判も見られた。第 10 号の同コラムでチャンは、「ラオス・ロイヤルアカデミーのラーオ語 *Phasa Lao Khong Rasabanditsapha*」という項目を設けて、アカデミーが情報宣伝省の新聞に連載していた語彙の定義について、その間違いの多さを指摘している。例えば何月何日の「日」を意味する“ワンティー” *vanthii* について、アカデミーが 2 音節目の *thii* にマイエークと呼ばれる声調符号をつけていることについて、

この語をみたとき、非常に頭が痛くなった。ラオス・ロイヤルアカデミーとはいったい何人であるのか。ラーオ語とタイ語、ラーオ語のイディオムとタイ語のイディオムの区別もつかないとは。[中略] 考えてみれば哀れなことである。彼らはタイ語、タイ語のイディオムを使いたくないのに、知らず知らずのうちにラーオ語をタイ語にしてしまっている[Phay Nam no.10 1973. 3: 43]。

と記している。ここでチャンは、ラーオ語では本来、日付を表わす *vanthii* では、第二音節には声調符号をつけるべきではないのに、タイ語のようにアカデミーが声調符号をつけていたことを批判している[表 4-4]¹³⁰。チャンは、このほかにも、「人」を意味する“プー” *phuu* はラーオ語の発音を表わすには、声調符号はマイトーではなく、マイエークを用いるべきであるのに、アカデミーがタイ語の影響を受けてマイトーを用いていることなどを指摘していた¹³¹[Phay Nam no.10 1973.

¹³⁰ 先の紹介した 1973 年のアカデミー全体会議の議事録においても、ワンティーにはマイエークがつけられていた。

¹³¹ 「人」を意味する“プー”はマハー・シラーが編纂した文学委員会の辞書ではマイエークが使

3: 41]。

[表 4-4]

	アカデミー	チャン	タイ語
日付	ວັນທີ /wánthii/	ວັນທີ /wánthii/	วันที /wanthii/
人	ຜູ້ /phùu/	ຜູ້ /phuu/	ผู้ /phúu/

「日付」は、アカデミーとタイ語にはタマイエークと呼ばれる声調符号´がついている。

「人」は、アカデミーとタイ語は声調記号にマイトー³、チャンはマイエークを付している。

現在は「日付」はチャン、「人」はアカデミーの綴りが用いられている。

チャンが「彼らはタイ語、タイ語のイディオムを使いたくないのに」としているように、アカデミーにおいても当時、必死になってラーオ語とタイ語の語彙を区別しようとする試みがなされていた。チャンの言葉は、そうしたアカデミーの態度を皮肉るものであったのだろう。例えば同じ号のなかで、チャンはアカデミーが「雨季を僧院で過ごすこと」を意味する、“パンサー” ພັນສາ/*phánsǎa*/はタイ語（タイ語は/*phansǎa*/）で、“ワットサー” ວັດສາ/*watsǎa*/がラーオ語である（タイ語は/*wátsǎa*/）、と“パンサー”と“ワットサー”を区別したことに触れている[Phay Nam no.10 1973. 3: 43]。これに対してチャンは、“パンサー”はサンスクリット語の *Varsa* を“ワットサー”はパーリ語の *Vassa* を起源とし、ともにラオス、タイ両国において昔から使われてきたのだから、“パンサー”をタイ語であるから使わないなどというのは誤りであるとしている[Phay Nam no.10 1973. 3: 43-44]。また、このコラムには何号か、マハー・シラーが担当したものがあつたが、例えば 23 号で新語の問題について、マハー・シラーは、アカデミーがタイ語との差異化をはかるため、「学長」を意味する“アティカーンボーディー” ອະທິການ ບໍດີ/*athikǎanbǔddī*/を（タイ語は/*athikaanbǔddii*/）“アティカーンパディー” ອະທິການ ປະດີ/*athikǎanpadī*/と言い換えたことについて、言及している¹³²[Phay Nam no. 23 1974. 4: 14-15]。日本においても明治時代以降、漢語を用いて近代語彙がつくられたように、タイ語の近代語彙はパーリ語、サンスクリット語をもとにつくられており、“アティカーンボーディー”もその一つであった。マハー・シラーは、

タイ語のなかにはパーリ語、サンスクリット語を起源とする語が数多く、ラオ

われていた。しかし、アカデミーの出版物にはマイトーが用いられていることから、アカデミーが変更したものと考えられる。

¹³² 1973 年 7 月のアカデミー全体会議の議事録においては、“アティカーンボーディー”が使われていることから、『パイ・ナム』23 号が出される 1974 年 4 月までの間に変更されたものと思われる。しかし、残念ながら詳しい経緯は不明である。

スよりも発展しており、パーリ語やサンスクリット語を取り入れる方法や規則に至るまで、タイは指導者なのである。例えば、我々が日常に用いている大臣 *Ratthamonti*、政府 *Ratthaban*、国会 *Ratthasapha*、国連 *Sahapasasat*、国会議員 *Phuthaen Rasadon* [中略] のような語があるが¹³³、これらはすべてパーリ語やサンスクリット語をもとにつくりだされたものなのだから、それらをタイ語だといって嫌悪し、使用しないなどということはすべきではない[Phay Nam no. 23 1974. 4: 14]。

として、パーリ語・サンスクリット語起源の語に関しては、無理にタイ語と区別しようとせず、そのまま用いるべきであると、アカデミーの方針を批判している。“アティカーンパディー”に関しては、チャンも 32 号で、その造語法が不適切であると批判していた。チャンによると、“アティカーンボーディー”のもとのかたちはパーリ語で *adhikārapati* となる。パーリ語の語尾 *pati* は、ラーオ語に取り入れる際にはふつう、“セーナボーディー” *seenaaboodii(senāpati)* 「総大将」、 “アティカーンボーディー” *athiboodii(adhipati)* 「首長」のようにすべて“ボーディー”と直しており、チャンは“アティカーンボーディー”だけを変更するのは適切ではないと批判した[Phay Nam no.32 1975. 1: 27]。

このように、マハー・シラーとチャンはともに借用語に関して、ラーオ語には存在しない語彙、とりわけパーリ語、サンスクリット語を起源とする近代語彙に関しては、容認すべきだという考えを持っていた。しかし一方で、パーリ語・サンスクリット語起源ではない新語を、そのままタイ語から借用することには激しく抵抗していた。例えばチャンは、「ダム」を意味する語として“クアン” *ເຂື່ອນ /khuən/* が使われていることについて、これはタイ語 (*/khuən/*) であり、ラーオ語には農耕用の小さな灌漑ダムを意味する“ファーイ” *ຝາຍ/fǎay/* があるのだから、ナムグム・ダムのような大きなダムを表わすときは¹³⁴、それに「大きい」あるいは「政府の、王室の」を意味する“ルワン” *ໝວງ /lŭaŋ/* をつけて、“ファーイ・ルワン” *ຝາຍໝວງ /fǎay lŭaŋ/* とすべきだとしている[Phay Nam no.2 1972. 7: 61]。

タイ語と区別するため、本来の造語法に合わない、“アティカーンパディー”などという語をつくり出す一方で、“クアン”ではそのままタイ語を取り入れてしまう。仏教教育を受け、パーリ語に通じていた彼らにとって、このようなアカデミーの方針は、容認し難いものであったのであろう。そしてこの背景には、先の“ワァンティ”や“プー”のケースとともに、エリート中心のアカデミーメンバーたちの、ラーオ語能力に対する、彼らの不信感が隠されていた。

エリートのラーオ語能力に対しては、第 10 号の巻頭コラム「ナム・パイ」において、パーナイも特に留学経験者のラーオ語能力を疑問視し、彼らが帰国後公務に入る前に最低でも週 3 時間、さらに外国から留学帰りのものには、仕事に入

¹³³ 大臣、政府、国会、国会議員の語でマハー・シラーは原文で s/r の子音字を使っている。

¹³⁴ ナムグム・ダムとはヴィエンチャン県にある水力発電用のダムのことである。

る前に最低 6 ヶ月間、1 週間に 5 時間のラオス語の勉強を義務付けるべきだとしている[Phay Nam no.10 1973. 3: 9-10]。

フランス語による世俗教育を受けてきたエリートたちは、十分なラーオ語に関する知識をもたないにもかかわらず、タイ語との差異化を図ろうとして、かえってラーオ語の「タイ語化」を促進してしまう。マハー・シラーやチャンにとっては、アカデミーの行為、王国政府のエリートたちの行為こそが、ラーオ語、ひいてはラオスを「パー・シァ」、喪失へと導くものと考えられたのであろう。

4-6 王国政府の言語ナショナリズム

我々は、独立した国民である *Hao Pen Sat Ekarat*。憲法においても、ラーオ語は公用語であるとされているとおり、いつかラーオ語が真の国民語 *Phasa khong Sat Thae* となる日が来なければならない。〔中略〕そしてすべての公文書が、ラーオ語で書かれる日が来なければならない[Phay Nam no.1 1972.6: 56]。

これは、『パイ・ナム』創刊号に書かれた一節である。ここにはラーオ語が国民語として意識されながらも、現実にはまだそれが達成されておらず、いまだ理想の段階にしかないという、王国政府の状況が語られている。

本章で見てきたように、ラーオ語はラオス国民の独立のシンボルとされ、タイ系民族語の祖語であるという「大ラオス」主義的な、ラオス国民の存在に威信と歴史的な一体性を与えるような、イデオロギーがつくられていた。しかし現実には、タイ語とフランス語という、新旧支配者の言語のまえに、いまだその「独立」を達成できておらず、いわば「砂上の楼閣」ともいうべき存在であった。上記の一節に、「現在のように口先だけで行動が伴わないのとは違って」と付け加えられているのが、印象的である。これはまさしく、国民語としてラーオ語を称揚する一方で、現実にはフランス語を用い、ラーオ語による教育制度の確立にも消極的であった、王国政府エリートたちの態度を指したものであった。当時、よい職業につくためにはフランス語能力は必須であり、このことはまた、王国政府にあってはラーオ語が、社会的上昇につながる言語とはなりえていなかった、ということの意味していた。そのため、富裕層の人びとは自らの子弟に競って、フランス語を学ばせ、ラーオ語の学習を省みなくなると同時に、言語能力を要因とした、社会階層の分化を招くという、悪循環に陥っていたのである。そしてこうしたフランス語への依存が、世俗教育における不平等のみならず、仏教/世俗という教育バックグラウンドの相違に根ざした知識層の対立を激化させ、正書法や語彙の問題の解決を困難なものとしていった。

一方、このような、ラーオ語の標準化をめぐる混乱は、タイ語のラーオ語への侵入を助長することにもつながっていった。宗教教育のテキストにとどまらず、

映画やラジオなどの新しい娯楽の普及とともに、タイ語は数字の「百」や、「学校」などの日常的な語彙にまで入り込み、ラーオ語の独立を絶えず脅かすものとなっていた。読み、書き、話すためには長い学習時間を必要とするフランス語とは違って、とくに学習をしなくても理解が可能であったタイ語の影響は、メコン川を挟んで対岸から届く、ラジオの電波や出版物などをおして、子供からアカデミーのメンバーに至るまで、ラオス人の言語生活全般に及んでいた。チャンが「国の違う親戚」の言語と呼んでいたように[Phay Nam no.2 1972.7: 59]、「外国語」というには近すぎる関係にあるタイ語との線引きは、現在に至るまで、ラーオ語の存在にとって複雑な問題を投げかけるものとなっている。

しかしながら、こうした上位言語としてのフランス語の存続と、圧倒的なタイ語の影響にさらされるなか、王国政府の人びとの間に、ラーオ語を取り替え不可能な「我々の言語」であるとする、国民語意識が確実に芽生えてきていた。『サート・ラーオ』や『パイ・ナム』には、一般の読者からも、ラーオ語正書法や語彙へのタイ語の影響、政府のフランス語偏重に対する懸念など、ラーオ語に関する投書が多数届いており、このことは人びとがタイ語・フランス語との比較・区別をおして、ラーオ語を国民語として認識していくという、「否定的同一化」の過程のなかに、取り込まれていたことを、示すものといえよう。

そしてこうした、王国政府の人びとの言語ナショナリズムを巧みに利用したのがパテート・ラーオであった。パテート・ラーオでは、国民的特徴をもつ教育＝ラーオ語教育という方針のもと、ラーオ語のみを教授言語とする教育カリキュラムの整備がすすめられ、王国政府の教育を「奴隸的・植民地的」とであると激しく批判する、プロパガンダを展開していった。

次章では、パテート・ラーオ側において、革命闘争のなかでラーオ語にどのような役割が与えられていたのか、解放区での教育政策と王国政府へのプロパガンダを中心に、見ていくこととする。

第5章 パテート・ラーオ―「武器」としてのラーオ語

いわば中都市クラスの独立国は通例、固有の民族語をもっている。もっと正確には、むしろ、民族語が国家を作っているといった方がいいのかもしれない。固有の言語なしに、かれらがそのような国家を形成し得るとは考えにくいからである[田中 2003: 144]。

これは田中克彦が、『言語の思想』のなかで述べた言葉である。ここで田中が論じているのは、人口 130 万人で固有の民族語（モンゴル語）を維持している、モンゴル人民共和国（現モンゴル国）であった。しかしながら、それではラオスについて「固有の民族語」とは何かと問うた場合、事情は複雑である。内戦時代のラオスの人口は 200 万人～300 万人であり¹³⁵、規模的にはモンゴルより少々大きめの、「中都市クラスの独立国」であった。しかしながら、そのうち少数民族が約半数を占め[Langer 1971: 3]、さらに山岳部を中心とするパテート・ラーオの支配領域では、ラーオ族は全体の約 2 割ほどであったといわれている[Zasloff 1973: 28]。メコン川流域の、ラーオ族居住区域を中心とした王国政府とパテート・ラーオでは、人口構成が大きく異なっていたのであり、したがってパテート・ラーオにおいては、なぜラーオ語が「固有の民族語」となり得たのか、その過程を追究することが、王国政府以上に重要な意味をもつことになる。本章では内戦期の左派勢力、パテート・ラーオにおける国民語形成を、少数民族の統合過程との係わりから追究し、この問いの答えを探っていくことにしたい。その際、とくにパテート・ラーオの教育政策とプロパガンダに焦点を当て、彼らの国民形成におけるラーオ語の役割を明らかにすることを目指す。

1946 年のフランスの再植民地化により、バンコクに亡命していたラーオ・イサラ亡命政府が 1949 年に解散すると、スパーヌウォンら強硬派は、カイゾンやヌーハックら、ベトナムで抵抗活動を繰り広げていたラーオ人勢力と合流する。そして翌 1950 年 8 月 13 日から 15 日にかけて、ベトミン支配区でラーオ・イサラ全国大会を開催して¹³⁶、前線組織であるネーオ・ラーオ・イサラ（自由ラオス戦線）の結成と、抗戦政府の樹立を決定し、北部ベトナム国境沿いに、解放区の建設をすすめていく。以後、ラオス王国内には王国政府とパテート・ラーオ、2 つの体制が並存することとなり、1975 年の社会主義革命に至るまで、長い内線の時代が続いていった。自由ラオス戦線は、1956 年にネーオ・ラーオ・ハック・サート（ラオス愛国戦線）に改称され、1955 年に結党された、インドシナ共産党の流れを汲

¹³⁵ 1959 年から 61 年の国勢調査では 190 万人、革命後、1985 年の人口は 360 万人であった[Sun Sathiti haeng Sat 2005: 1]。

¹³⁶ ラーオ・イサラ運動の経緯については第 2 章を参照のこと。

むラオス人民党が¹³⁷、ラオス愛国戦線を地下で指導する役割を果たしていた。

パテート・ラーオでは「革命の旗竿のもとに人民をまとめるための、国民意識を植えつける」ため[Kayson 1974: 9]、当初より教育に力点がおかれ、革命の理想に沿った人材の育成が目指されていた[Kayson 1974: 8]。本章ではこのような教育方針が採られるなか、ラーオ語がいかにして、事実上の唯一の国民語としての地位を固めていったのか、コミュニケーション手段としてのラーオ語の普及という側面と、ラーオ語を国民統合の象徴とするような、言語イデオロギー構築の側面の両方から、考察を進めていくことにしたい。

なお、「パテート・ラーオ」とは、直訳すれば「ラオス国家」という意味である。しかしそれが具体的に何を指すかについては諸説あり、研究者の間でも統一がなされていない。本論文では、ラオス愛国戦線、ラオス人民党、人民解放軍及び¹³⁸、これらの組織が結成される以前の左派抵抗運動を含む、ラオス革命勢力の総称として、パテート・ラーオを用いることとする。

5-1 パテート・ラーオのラーオ語教育政策

我々の人民は3つの敵に打ち勝たなければならない。すなわち帝国主義侵略者という敵、貧困という敵、そして後進という敵である。一侵略者を倒すには武器が必要であり、増産には輸送手段の確保と、生産方法の改善が必要である。一そしてこの後進という敵を倒す戦場において、武器と輸送に相当するものは言語である *Aut lae Phahana maen Phasa Khwam Vao*。アメリカとフランスの帝国主義者はすべて、我々の国民と、国民の言語 *Phasa haeng Sat* を見下してきた。これは国民を絶滅させ、我々の言語を消し去って、帝国主義者の言語と文字を振興し、公務と全レベルの学校で用いるためであった[Utama 1969: 21]。

これは1969年、ラオス愛国戦線中央委員会議長スパヌウォンの還暦を記念して刊行された記念文集『スパヌウォン殿下、永遠に *Sadet Chao Supanuvong Mannyuen*』のなかで、当時のラオス愛国戦線中央教育局長、ウタマ・チュラーマニー(Utama Chulamani)が引用したスパヌウォンのことばである。

パテート・ラーオでは、大衆に依拠した革命闘争を遂行していくため、プロパガンダとラーオ語教育が重視された。ここではラーオ語は、帝国主義者の侵略と、彼らによってもたらされた後進状態から国民を救出し、その存在を保証していくための「武器」とされた。

¹³⁷ 1951年2月11日から19日に、インドシナ共産党は第2回党大会を開き、その大会において党を解散して、ヴェトナム、ラオス、カンボジアの3カ国それぞれの革命党を建設することを決定した[瀬戸 2003: 103]。

¹³⁸ ラオス人民党は1972年にラオス人民革命党に改称されている。

本節では、パテート・ラーオの教育政策について、ラーオ語という「武器」の整備プロセスと、さらにその「少数」民族言語との関わりからみていくこととする¹³⁹。手順としては、まず教育政策の展開を、1960年までの萌芽期と以後の2つに区分したうえで概観する。そしてそれを踏まえたうえで、次にラーオ語の整備について、語彙と正書法の問題を中心に辿っていくことにする¹⁴⁰。

5-1-1 ラーオ語教育政策の開始

1950年のラーオ・イサラ全国大会で、抗戦政府と新組織を樹立したパテート・ラーオ勢力は、ベトナム国境沿いに解放区の建設をはじめ、サムヌアに本拠地をおいた。その後、シェンクワンとポンサーリーにも解放区を拡大していき、このことは、1954年5月のディエンビエンフーの戦いにおいて、パテート・ラーオとベトミンの連合軍が、フランス軍に打ち勝つ大きな要因ともなった。萌芽期、パテート・ラーオの教育政策は、第一次インドシナ戦争とその和平協定であるジュネーブ協定、そして1957年11月の第一次連合政権成立に向けての、フランス軍、王国政府軍との戦闘と混乱のなかですすめられていった。

宣伝活動と教育を重視するパテート・ラーオでは、抗戦政府が樹立される以前から、戦区の村々で兵士たちが中心となって、識字教育や小学校建設を行っていた¹⁴¹[Udom 1994: 102]。1947年にはプーミー・ウォンウィチットの指揮する第2戦区において、僧侶のマハー・カムパン・ウィラチット(Maha Kamphan Vilachit)が教育・宗教分野の責任者に任命され[Phumi 1987: 60]、翌48年には、戦区の活動や世界情勢に加えて、詩や歌謡、識字運動や各学校での試験に関する記事などが掲載された新聞『救国 *Ku Sat*』が発行された¹⁴²[Phumi 1987: 63]。そして1949年になると、第1戦区と第2戦区の改編に伴って、新たに教育局が設置され、局長にはウタマ・チュラーマニーが就任している¹⁴³[Udom 1994: 22]。マハー・カムパンとウタマはともにその後、パテート・ラーオの教育・言語政策を担っていくことになる人物であり、1950年に抗戦政府が樹立されると、マハー・カムパンに教育相のスク・ウォンサック(Suk Vongsak)、さらにプーミー・ウォンウィチットやスパ

¹³⁹ ここではラーオ族が圧倒的な多数を占めてはいないという理由から、「少数」と括弧を付した。以下は煩雑さを避けるため、括弧は付さないこととする。

¹⁴⁰ パテート・ラーオの教育政策についてのまとまった文献は、ウドム・シーチャルンの論文[Udom 1994]を除いて皆無に等しい状況にあるため、本節の記述はウドムの論文に拠るところが大きい。ウドムは内戦期のパテート・ラーオ側の一次資料を多数用いており、事実関係について、信頼を置くことができる内容となっている。筆者はウドムが用いた一次資料を探したが、ウドムご本人がすでに他界されていることもあり、残念ながら入手することができなかった。

¹⁴¹ ここで言う「小学校」とは、掘っ立て小屋レベルのもので、嵐が来れば崩壊してしまうようなものであった。

¹⁴² 残念ながら筆者はこの新聞を入手するに至っていない。月に2回発行され、フランス軍の陣営からもってきた印刷機をつかって印刷していたという[Phumi 1987: 63]。

¹⁴³ この段階では、中央教育局はまだ存在しない。戦区の教育責任者のような役職であったと推測される。マハー・カムパンは宣伝・文化局長に就任している[Phumi 1987: 65]。

ーヌウォンらパテート・ラーオ幹部が加わって、ラーオ語についての会合が持たれている[Utama 1969: 22]。

残念ながら、このときの会合でどのような決定がなされたのか、具体的なことは不明である。ウタマはこの会合について、「1950年、殿下〔スパーヌウォンのこと〕は何人かの同志と一緒に〔中略〕ラーオ文字、ラーオ語をどのように改良すれば、ラーオ語が国民語の原則に正しいものとなるか、大衆の原則にふさわしい、大衆が学ぶのが簡単で国民的 *Sat*・大衆的 *Mahason*・科学的 *Vithanyasat* 特徴をもったものとなるか、国民の発音にあったものになるか¹⁴⁴」話し合い、「1950年以降、改良されたラーオ文字は、国民の仕事において大衆に広く奉仕するようになり、救国闘争に奉仕し、生産に奉仕し、敵から勝利を奪うための鋭利な武器の一部となった」としている[Utama 1969: 22]。「国民・大衆・科学」とは、教育以外にも様々な事柄に引用されたスローガンで、ベトナムにおいても1948年の第2回全国文化会議の折、チュオン・チンがおこなった「マルクス主義とベトナム文化」という講演のなかで、ベトナムの新しい文化の方向を「民族化・科学化・大衆化」と規定しているものがみられる[栗原 1988: 4]。ベトナムは、パテート・ラーオの革命闘争の指導的立場にあったことから、パテート・ラーオがベトナムの標語を取り入れたことが推測される。会合についてはウタマのほか、プーミー・ウォンウィットも自伝のなかで「何十年にもわたってラオス人が論争し、合意されていなかったラーオ語の話し言葉と書き言葉の規則が定められた」と述べており[Phumi 1987: 83]、徹底した表音主義による、パテート・ラーオの正書法の原則がこのとき、決定されたものと考えられる¹⁴⁵[表 5-1] [写真 5-1]。

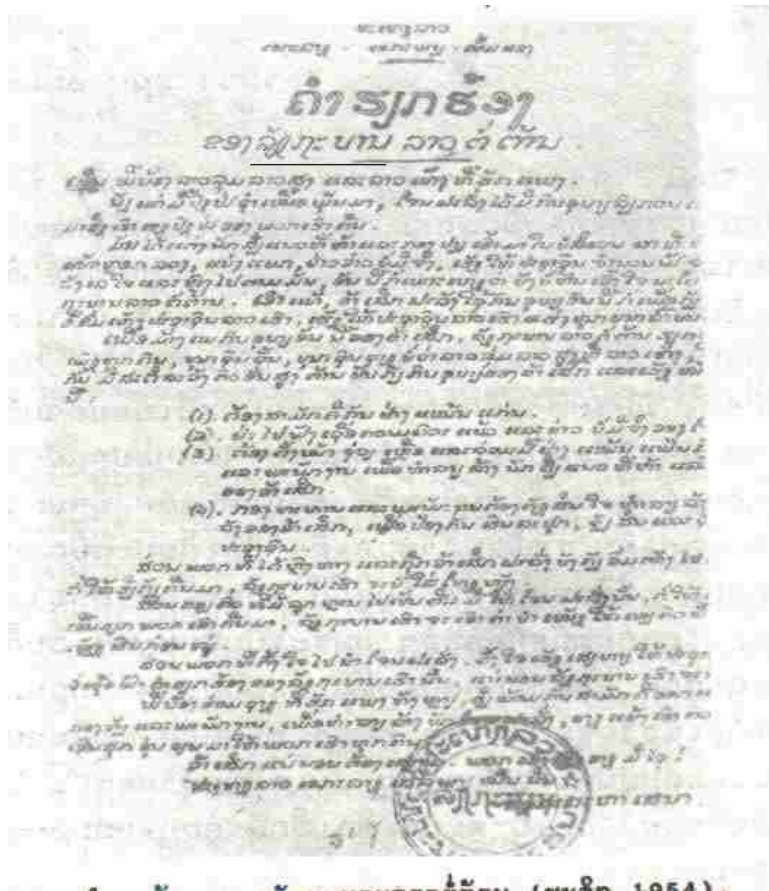
[表 5-1] 正書法比較：王国政府の頭子音字 *s* が *r* の子音字

	王国政府	パテート・ラーオ	タイ語
政府	ຮັຖບານ /latthabǎan/	ລັດຖະບານ /latthabǎan/	รัฐบาล /rátthabaan/

¹⁴⁴ 「国民」について、ラーオ語の原文では「サート」となっていた。サートとはネイションの訳語で、国民、民族、国家などを意味し、時代や文脈によってもその意味合いは変わってくる。パテート・ラーオの文献では、大体において、日本語で国民と翻訳するのが適切と思われる箇所では「サート」、民族と翻訳するのが適切と思われる箇所では「ソン・サート」が用いられていた。そのため、本章ではサートの訳語として民族解放 *Potpoi Sat*、愛国 *Hak Sat* などの定訳があるものを除き、原則として「国民」を採用した。

¹⁴⁵ 現存する当時の文書などを見ても、だいたい1音1文字式となっている。

[写真 5-1] 1954 年の文書に見られる正書法。下線部、*Latthaban*(政府)がすでに、王国政府と異なる、一音一文字式で綴られている。[表 5-1]参照。



出典：[Khanakammakan Sangkhom haeng S.P.P Lao 1989: 161]

王国政府で音韻型を原則とした、国王令が出されたのが 1949 年 8 月であることから、エンフィールドは、パテート・ラーオの正書法は国王令を「厳格に解釈したもの」であるとする[Enfield 2007]。しかし筆者の知る限り、パテート・ラーオ側の資料で、とくに国王令に言及したものは見られず、また第 3 章でみたように、パテート・ラーオにおいて、正書法問題の中心人物であったプーミー・ウォンウィットは、1940 年代の正書法会議に参加して、音韻型の正書法を支持している。したがって、1940 年代頃より、ラオス独自の方法として音韻型の正書法が主流となる流れのなかで、王国政府よりも厳格な表音主義を採る、すなわちタイ語との距離がより「遠い」正書法が、パテート・ラーオにおいて独自に定められたと考える方が適切であろう。

こうして正書法という、ラーオ語による教育制度を築き上げていくうえで必須となる基礎が確立された。後に「第一に教育を *Kan Sueksa Tong Pai Kon Kao Nueng*」

というスローガンが掲げられるように¹⁴⁶[Kayson 1974: 23]、パテート・ラーオにおいて教育は、政治教育、増産活動を効率よく実施していくための大前提とされた。そして 1954 年のジュネーブ協定で、サムヌア(フアパン)¹⁴⁷とポンサーリーの北部 2 県への結集が認められると、この 2 県を解放区とし、そこを拠点に教育制度の整備が進められていく。

萌芽期には、政策面では 1950 年の抗戦政府樹立時に発表された 12 大政治綱領をはじめ、その後の政治決議などにおいて、全レベルでの教育の整備や識字教育、とくに山岳地域の人民に対する識字運動について言及されている¹⁴⁸[Brown and Joseph 1986: 288][Phimmason 2004: 52]。一方、実施面においては、各地で識字運動や学校建設がおこなわれたが、敵の攻撃が続くなか、その作業は困難をきわめたようである[Udom 1994: 104]。チャンティイー・ドゥアンサワン(Chanti Dueansavan)は自伝的小説『人生の道 *Saen Thang haeng Sivit*』のなかで、1950 年代初頭、ベトナムのゲアン省(Nghe An)の、森のなかの学校で、スック・ウォンサックやカムパイ・ブッパー(Khamphai Bupha)、プーミー・ウォンウィットら、パテート・ラーオ幹部の妻たちから教育を受けたことを書いている¹⁴⁹。生徒たちのなかにはモン(Hmong)族の子供たちももっとも多かったといい、ラーオ族(彼はラーオ・ルムと呼んでいる)、カム族の子供たちとともに¹⁵⁰、多民族状況のなか、ラーオ語で教育を受けていた[Chanthi 2002: 92-100]。子供たちは戦乱を避けながら、ラオス側から何日もかけて、この学校へ移動してきており、その道案内を、ラーオ語とモン語に通じたベトナム人義勇兵が務めていた[Chanthi 2002: 95]。そしてこのように、ベトナムとの連携のもとに教育がおこなわれるなか、1954 年末ごろには、ベトナムの無償援助により、タインホア(Thanh Hoa)省カムトゥイ(Cam Thuy)にラオス人学校が建設されている¹⁵¹[Chanthi 2002: 103][Udom 1994: 104]。この学校には、200 人

¹⁴⁶ このスローガンについては、1974 年の第 2 回全解放区教育大会の報告書で、当時ラオス人民革命党書記長であったカイソーンが言及している。

¹⁴⁷ 内戦時代、一部の県では王国政府とパテート・ラーオで異なる県名が採用されていた。サムヌアはパテート・ラーオ側の呼称で、王国政府側では現在と同じ、フアパン県とされていた[Zasloff 1973:53-54]。

¹⁴⁸ 例えば、1956 年 1 月 6 日に開催されたラオス愛国戦線全国大会決議の第 9 項で、「国民の文化と振興と発展、進歩については小・中等教育、成人教育に力を入れなければならない。全民族の人民、とくに辺境の山岳地の人民が幅広く、識字能力を身につけるようにしなくてはならない」とされた[Phimmason 2004: 52]。

¹⁴⁹ 小説のなかでの記述ではあるが、筆者が 2004 年 3 月にチャンティイー氏にインタビューした際、『人生の道』の内容は、すべてチャンティイー氏の経験にもとづくものであると話しておられた。また、カムパイ・ブッパーの妻、カムペン・ブッパーも自伝のなかで、他の幹部の妻たちとともに、ベトナムで教師をしていたことを書いており[Mayoury 1993: 27]、チャンティイーの記述と一致する。

¹⁵⁰ カム族とはモン・クメール系の民族である。

¹⁵¹ ウドム(Udom)は学校の位置をベトナム・ラオス国境近くとしか記していないが、設置された時期、学校の状況などからカムトゥイの学校を指しているものと思われる。チャンティイーの小説には、ウドムもカムトゥイの学校で親しかった友人の 1 人として、実名で登場している[Chanthi 2002: 105]。カムトゥイはチャンティイーの小説ではラーオ文字で Kam Oen と記されているが、ベトナム人元義勇兵で 1947 年から 57 年までの 10 年間、ラオスで活動していたファム・ドゥック・ズオン(Pham Duc Duong)氏に 2006 年 9 月 19 日にハノイでインタビューし、確認したところカムトゥイのことであろうとご教示いただいた。

以上の生徒が学び、算数や地理、科学、作文などの授業とともに、相互批判や増産活動などの時間もあったという[Chanthi 2002: 105-108]。チャンティーは軍隊のように規律の厳しい学校であったと回想している[Chanthi 2002: 105-106]。学校は1957年中に閉校となり、その後生徒たちはラオスへと帰国するか、中国、ベトナム、旧ソ連などの社会主義諸国へ留学している[Chanthi 2002: 107]。学校が解体された理由は不明だが、おそらく1957年11月の第一次連合政府樹立へ向けて、解放区の戦闘状態が緩和されていったこと、また解放区の建設が進み、学校建設の条件が整っていったことなどが原因であろう。その後、サムヌアにはタイピスト養成学校も設置されている[Chanthi 2002: 109-110]。

こうして、1950年代をとおして、パテート・ラーオの教育政策の基礎が少しずつ、整えられていった。次に61年以降、解放区の拡大とともに本格化する教育政策の展開を追っていく。

5-1-2 内戦の激化とラーオ語教育の進展—「武器」の普及

(1) 第一次、第二次連合政権の挫折

国内統一のための総選挙の実施などが定められた、1954年のジュネーブ協定を受け、1957年11月に難産の末、中立派のスワナ・プーマを首相として、第一次連合政府が樹立され、パテート・ラーオ側からは、スパーヌウォンとプーミー・ウォンウィットが閣僚に就任した。58年5月には、連合政権下でおこなわれた国会議員の補欠選挙で、右派政治家たちの汚職への反発から、ラオス愛国戦線と、愛国戦線と協力関係にあった、中立派のサンティパーブ党が勝利を収めた¹⁵²[Stuart-Fox 1997: 102]。このとき、愛国戦線からは、スパーヌウォンが全立候補者中、最高得票を獲得して当選し、国会議長に選出されたほか、ルアンパバーンでは女性候補者カムペン・ブッパー(Khampheng Bupha)が、南部の少数民族居住区域では少数民族出身のシートン・コマダム(Sithong Kommadam)が、それぞれ当選を果たしている[Stuart-Fox 1997: 102]。しかしこの選挙結果に脅威を感じた右派勢力が、プーマに代えて、右派のプイ・サニコーン(Phui Sananikon)を首相に就任させると、連合政権は発足後、わずか8ヶ月で崩壊してしまう。そして59年7月に、プイ内閣がスパーヌウォン、プーミーら、パテート・ラーオ幹部を逮捕すると、国内は再び戦闘状態へと陥っていった¹⁵³[菊池 2003: 165]。

その翌年、1960年5月には、逮捕されていたパテート・ラーオ幹部たちが、看

¹⁵² この選挙に「ラオス愛国戦線」はパテート・ラーオ側の政党として参加していた。選挙では全21議席のうち愛国戦線が9議席、中立派のサンティパーブ(平和)党が4議席、そして残りの8議席を右派と無所属議員が占めた。サンティパーブはキニム・ポンセナー(Kinim Ponsena)が党首を務め、愛国戦線と候補者を競合させない協定を結んでいた[Stuart-Fox 1997: 102]。

¹⁵³ プイ首相はパテート・ラーオが北ベトナムと共謀しているとの理由から、幹部らを逮捕した。

守の協力で脱獄に成功し、サムヌアの根拠地に戻るといった事件が起こった[菊池 2003: 166][Stuart-Fox 1997: 111-112]。さらに同年 8 月 9 日には、極端な右傾化を危惧した王国政府軍のコン・レー将軍がクーデターを起こし、その結果、プーマが首相となって、中立・左派（パテート・ラーオ）の連合政府が成立する[Stuart-Fox 1997: 112]。しかし、12 月にアメリカの援助を受けた、右派のプーミー・ノーサワン将軍が、コン・レー軍を破ってヴィエンチャンを奪回すると、ブン・ウム(Bun Um)が首相となり¹⁵⁴、ラオス王国は再び、親米右派政権となった[Stuart-Fox 1997: 112]。これに対して、中立派と組んだパテート・ラーオは、解放区を拠点に王国政府に対して激しい攻撃を加え、61 年にはラオス全土の四分之三を支配するまでになっていた[Udom 1994: 105]。

その後、長期にわたる停戦交渉の末、1962 年 6 月にプーマを首相として、三派（中立・右派・左派）による第二次連合政府が成立する。しかし翌 63 年 4 月に、中立派閣僚が暗殺されると、第二次連合政府もわずか 10 ヶ月で事実上の崩壊に追い込まれ、中立派は左右に分裂してしまう。そして右派はアメリカやタイ、左派は北ベトナム、中国、旧ソ連をバックにつけ、国内は再び激しい内戦状態へと突入していった[菊池 2003: 166][飯島 1999: 449]。

（2）内戦の激化と解放区の教育政策

こうしてめまぐるしく変化する政治情勢のなか、解放区における教育の指針として、1961 年 9 月 11 日「ラオス愛国戦線の教育政策」が「奴隷的・旧植民地的教育の痕跡をすべて消し去り、革命教育の基礎を築き上げていくために」発表された[Udom 1994: 105]。「奴隷的・旧植民地的」とは、王国政府側のフランス語とフランス人教師に依存した教育制度を指し、「ラーオ語を学校での教授言語として取り入れなければならない」として、ラーオ語を解放区における教授言語とすることが、改めて規定された[Phimmason 2004: 52]。

そして 1963 年の第二次連合政府の崩壊により、右派との対立が決定的となるなか、ラオス人民党中央指導委員会では、教育をより政治・革命運動に追随させ、教育における党の指導的役割を強化するため、1964 年 4 月 10 日、第 2 回ラオス愛国戦線全国大会の開催時に、「教育事業の指導に関する決議」がなされ、これによって党の教育方針が完全に決定された¹⁵⁵[Udom 1994: 106]。「決議」には 4 つの教育指針が盛り込まれ、そのひとつには「[教育を] 現在の基本的な政治上の任務に

¹⁵⁴ 本名はブン・ウム・ナ・チャムパーサク。チャムパーサク王家の最後の皇太子で右派政治家の代表的人物の 1 人である。1911 年生まれで、サイゴンで教育を受けた。ラオス王国の統一のため、王位を放棄し、ラオス王国の監察総監(Inspector-General)の地位を生涯保証されることとなった[Stuart-Fox 2001: 45]。

¹⁵⁵ 愛国戦線全国大会で「教育事業の指導に関する決議」がなされたのかどうか、資料に書かれていないため不明であるが、4 月 6 日から 11 日の大会期間中であることから、おそらく全国大会で決議されたものと推測される。

仕えるようにする。学校は政治思想の問題を第一に据えなければならない」と、教育が政治に奉仕すべきことが明記され、さらに労働、生産活動などの実践活動を組み込んだ、実践的な教育が提唱された[Udom 1994: 106]。この大会では、ラーオ・スーン、ラーオ・トゥンの文字の採用も決定しており¹⁵⁶、「少数」民族の言語に対して、一定の配慮が示される形となった[Utama 1969: 26]。

もっとも、ラーオ・スーン、ラーオ・トゥンに分類される諸民族の大半は、文字を持たない民族であり、彼らが「文字をもつ」ためには、何らかの文字を用いて、それぞれの言語を記すための表記法を創造する必要がある。しかしながら、筆者が「少数」民族語のうち実際に文字化され、教科書が編纂されたのを確認できたのはモン(Hmong)語のみであった。当時の教育関係者へのインタビューでも¹⁵⁷、モン語以外に文字化がなされたという事実を確認することはできず、ウドムの資料においても、1964年のラーオ・スーン、ラーオ・トゥンの文字の採用には触れられているものの、教科書についてはモン語の教科書に言及されているのみである¹⁵⁸。こうしたことから、パテート・ラーオにおいて少数民族語のうち、実際に文字化がなされたのはモン語だけであったか、あるいはその他の言語に関して、表記法が考案されていたとしても教科書編纂など、実際の普及に向けた政策が採られることはなかったと考えて、差し支えないであろう。

パテート・ラーオがモン語の表記をつくるにあたって、採用したのはラーオ文字であった。モン語にはすでに、キリスト教宣教師によるローマ字表記などが存在しており¹⁵⁹、それらの表記法を採用するという選択肢もありえた。そうしたなか、パテート・ラーオがあえて、ラーオ文字による新たな表記法を創造したということは、同じ文字をもちいることで、モン語とラーオ語を視覚的に近づけ、将来のラーオ語学習を容易にしようとする政治的意図があったことも考えられよう。そしてこうした姿勢からも、パテート・ラーオの諸民族語への配慮は、あくまで

¹⁵⁶ ラーオ・スーン、ラーオ・トゥンとは民族名称ではない。ラオスでは1950年代以降、居住区域の高低により、国内の民族をラーオ・ルム（低地ラーオ）、ラーオ・トゥン（中高地ラーオ）、ラーオ・スーン（高地ラーオ）の3分割で呼ぶようになり、ラーオ・ルムにはラーオ族をはじめタイ系諸民族が、ラーオ・トゥンにはモン・クメール系民族が、ラーオ・スーンにはモン・ヤオ語族およびチベット・ビルマ語族が含まれる[安井 2003: 176]。これは、すべての民族に「ラーオ」という呼称をあてはめることにより、ラーオ族中心の国民統合を印象づける狙いがあったともいわれている。

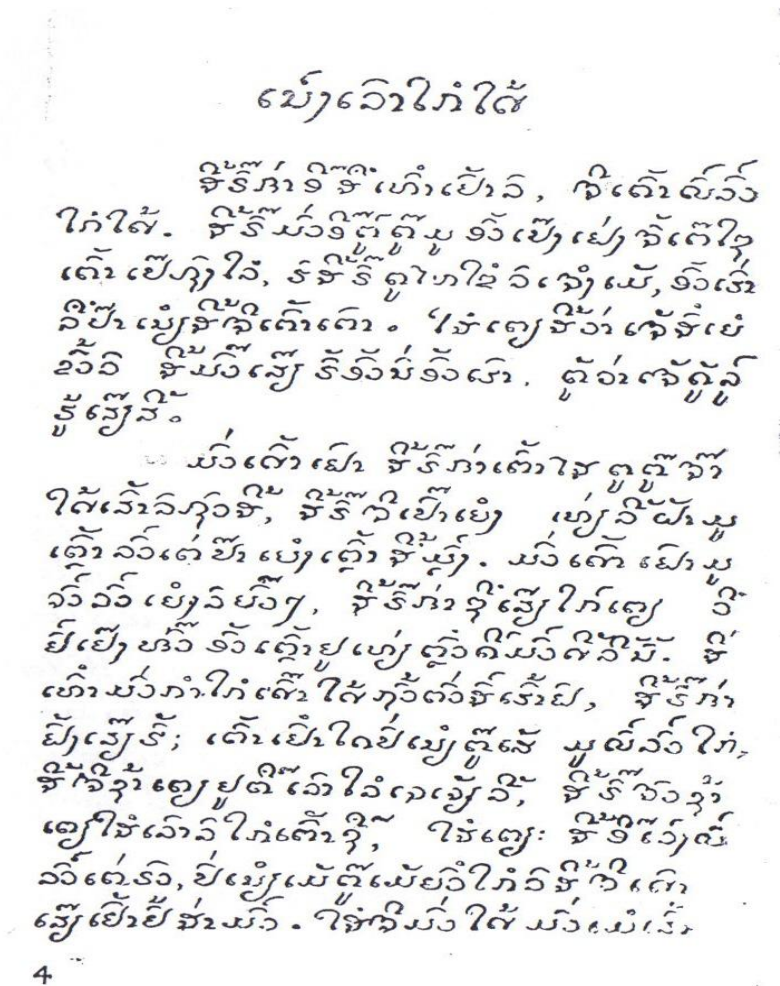
¹⁵⁷ 2006年9月に、パテート・ラーオ側で主に師範教育部門を担当していた、ブンカム・チャルーンスック(Bunkham Chaloesuk)氏、ベトナム人教育専門家団の一員であったグエン・フイ・アイ(Nguyen Huy Ai)氏、ベトナム人もと義勇兵ファム・ドック・ズオン氏にインタビューを行ったが、モン語以外の言語の文字化についての情報を得ることはできなかった。このほか、先のチャンティエー・ドゥアンサワン氏やパテート・ラーオ側の中央教育局の一員であったソムシー・デーサー(Somsi Desa)氏などにもインタビューを行ったが、モン語以外の言語について、新たな情報を得ることはできなかった。

¹⁵⁸ ウドムによると、発行年は不明だが、小学1年の算数の教科書が16000冊印刷されている。筆者も、1970年に発行されたラーオ文字表記のモン語の教科書を一冊入手している。筆者には解読不明だが、数字は見られないことから読解の教科書と考えられる。

¹⁵⁹ ローマ字をベースとしたものだけで、最低5種類の表記法が存在している[Smalley, Chia and Gnia 1990: 158-159]。

もラーオ語の普及を大前提とするものであったということがわかる[写真 5-2]。

[写真 5-2] 『1970 年版モン語教科書小学 3 年?』4 ページに見られるモン語表記



1964 年の「決議」を受けて、各種学校の建設やラーオ語の教科書・カリキュラムの編纂も進み、65 年 7 月には第 1 回全解放区教育大会が開かれ、サムヌアの中央教育局(Phanaek Sueksa Sunkang)から、各県、郡、区の教育部と 4 段階で、解放区全体を網羅する教育網が整備されていった[Udom 1994: 107]。成人向けの識字教育についても 1967 年、フワパン県とシェンクワン県、郡連合 90 のいくつかの村が識字教育の模範村に指定され、15 歳から 40 歳を対象にした識字運動を展開、その結果、同年、フワパン県のナーヒア村とナーカーオ村で識字率 100%を達成している¹⁶⁰[Udom 1994: 107]。識字運動はとくに 68 年以降、第 1 次教育 3 カ年計画の実施とともに活発化し、この時期、ラーオ・スーンの 2 つの区でも非識字者の撲

¹⁶⁰ 内戦時代、王国政府側とパテート・ラーオでは県名が一部異なる県があった。フワパン県はパテート・ラーオ側ではサムヌア県となる。ここではウドムがフワパン県と記していることから、そのままフワパン県を採用した。

滅に成功している[Udom 1994: 110-111]。

こうしてラーオ語は、解放区の教育言語として、諸民族の標準語の地位を着実に固めていった。しかしこれはまた一方で、少数民族語に対するラーオ語の圧倒的優位を確立していく過程でもあった。旧ソ連、北ベトナムなど他の社会主義諸国に倣って、パテート・ラーオの言語政策も、政策上は標準語としてのラーオ語の普及と諸民族語の発展という、2つの軸をベースにすることが謳われてはいた。内戦期、パテート・ラーオの解放区には400人以上ものベトナム人教育専門家団が派遣されており、パテート・ラーオの教育政策は、ベトナムの強い影響のもとにすすめられていたのである¹⁶¹。しかしながら、解放区での識字教育や学校教育の進展は、必然的にラーオ語の地位強化、すなわち「武器」の一本化をもたらすこととなっていった。革命の「師匠」であった北ベトナムにおいては、1960年代、タイー・ヌン語を越北自治区公用語として発展させる試みがなされたが[伊藤2003: 198]、パテート・ラーオでは「少数」民族の自治区が建設されることはなく、彼らの言語に対して、政治的な位置づけを与えるような、試みがなされることもなかった。そして60年代後半、識字運動や学校建設が活発化すると、政策の力点は標準語としてのラーオ語の普及にいつそう、集中するようになっていく[写真5-3]。

[写真 5-3] ベトナム人教育専門家団のグエン・ファイ・アイ氏とカイソーン



Tổng Bí thư Cayxón Phômvihán thăm đoàn chuyên gia giáo dục
Việt Nam-Na Khao - 8/6/1974

前列左端がグエン・ファイ・アイ氏、その右隣がカイソーン[写真：グエン・ファイ・アイ氏提供]

1967年に発表された教育3カ年計画(1968～70)では、「ラーオ語はそれぞれのコミュニティの民族構成にかかわらず、すべてのコミュニティにおいて用いられ、

¹⁶¹ パテート・ラーオの解放区には当時、400人以上ものベトナム人教育専門家団が派遣され、パテート・ラーオの教育政策の実施を補助するなど、パテート・ラーオの言語・教育政策は北ベトナムの強い影響のもとに進められていた。(1963年から75年まで解放区に派遣されていたベトナム人、グエン・ファイ・アイ氏[写真5-3]へのインタビューによる)

広められる」[Langer 1971: 131]が目標として掲げられ、1968年の12大政治綱領では「ラーオ語を全分野、全レベルでの教授言語とする」「我々ラオス国民の標準語と文字の普及を徹底する」[Naeo Lao Hak Sat 1968: 32]と規定された。もっとも、それぞれ前者では「諸民族語教科書の使用」が[Langer 1971: 31]、後者においては「一部民族の文字獲得の支援」[Naeo Lao Hak Sat 1968: 32]が同時に盛り込まれてはいた。しかし実際に、教育の現場で使用され、政治文書が書かれたのはラーオ語であり、ラーオ語だけが唯一の、有効な「武器」となる道を与えられたのであった。

1969年には、パテート・ラーオの軍事的優勢が明白となり、1973年2月21日にはラオス和平協定が締結される。そしてパテート・ラーオの勝利まで秒読み段階となった1974年6月、第2回全解放区教育大会がサムヌアで開催された。この大会では「国民・大衆・科学」の3大原則に則って教育を建設していくことが確認され、ラオス人民革命党書記長のカイソーンは3大原則のうち、「国民」について次のように説明している。

国民的特徴をもつ教育とは、同一の国民であるという意識を醸成し、平等の原則にもとづいた全民族の間の団結と愛情を建設することに焦点を当てなくてはならない。〔中略〕国民的特徴を示すなかで最も重要な要素は国民語 *Phasa haeng Sat* である。我々ラオスの教育は断固として、ラーオ語を第一の乗り物としなくてはならない。それゆえ、生徒たちがラーオ語の正書法を深く学習し、ラーオ語のすばらしさを守る意識をもたせ、国民の言語を少しずつ、活動のすべての領域において十分に豊かな言語としていかなければならない[Kayson 1974: 29-40]。

パテート・ラーオでは、諸民族間の連合の強化と見解の統一が再三にわたって強調されてきたが、ここにきて、ラーオ語はラオス国民を形成していくための事実上、唯一の国民語としての地位を獲得したのであった。ラーオ語を教授言語とする高等教育機関も、1968年に高等学校が開校されたのに続き¹⁶²、1975年1月には、サムヌアに師範大学が創設されている[Udom 1994: 111, 117]。

こうして、ラーオ語という「武器」の使用法を伝授するシステムが、激しい内戦の最中、着々と整備されていった。しかし、このシステムを有効に機能させるためには、当然ながら、ラーオ語自体にその機能を背負えるだけの、能力が備わっていなければならない。次節では教育政策の進展とともに、その背後で進められていた、ラーオ語の整備過程をみていくこととする。

¹⁶² フラパン県とシェンクワン県に開校された[Phimmason 2004: 53]。パテート・ラーオでは「ウドム」と呼ばれる高等学校は3年制であった。パテート・ラーオでは王国政府と異なり、小学校4年、中学校（王国政府のように前期・後期に分かれてはいない）2年、高校3年の教育制度が採られていた。ウドムによると、1971年の段階で2つの高校の全生徒数は、258名であったという[Udom 1994: 113]。

5-2 ラーオ語—唯一の「武器」

これまでにみてきたように、ラーオ語は教育制度の発展とともに、パテート・ラーオが、解放区という一種の「擬似国家」を運営していくうえで必要なあらゆる領域をカバーする、唯一の武器＝国民語としての地位をあたえられていった。しかしながら、第4章までに見てきたように、植民地時代をとおしてラーオ語の正書法が統一されることはなく、近代語彙の整備も不十分で、国民語として国家の事象のすべてを表現するには、ほど遠い状況にあった。そのため、パテート・ラーオではとくに1960年代以降、ラーオ語を教授言語とする教育政策の進展と歩調を合わせる形で、語彙と正書法を中心にラーオ語の整備が進められていく。

5-2-1 ローマ字化の不採用と国民的特徴

パテート・ラーオにおいては、先の1950年の会合がそうであったように、ラーオ語の整備に関するすべての作業が、プーミー・ウォンウィットやスパヌウォンら幹部の強力なリーダーシップのもとに進められ、王国政府で見られたような、正書法をめぐる対立が表面化することはなかった。パテート・ラーオ側にも僧侶は大勢おり、僧侶組織も存在したが、規律が重んじられたパテート・ラーオでは、上層部の決定に逆らうことは許されず、本心では語源型を支持するものがあったとしても、反対意見を述べることは不可能であったのだろう¹⁶³。

また、ベトナムとの関係が非常に密接であったにもかかわらず、パテート・ラーオにおいても、王国政府と同様、ローマ字化が話題に上ることはなかった。植民地時代末期、1944年4月には、自ら考案したローマ字化案をインドシナ総督府に送りつけていたスパヌウォンも[菊池 1997b: 78]、その後二度とローマ字化を提案することはなかった。この理由は不明であるが、プーミーが自伝のなかで、ローマ字化を「フランスの政策」としているように¹⁶⁴[Phumi 1987: 26]、ローマ字はベトナムが表記に採用している文字であると同時に、旧植民地支配者であるフランスの文字でもあった。王国政府のフランス語への依存を「奴隷的・植民地的」と非難し、民族解放闘争を繰り広げているパテート・ラーオにとって、フランス支配の象徴ともいえる、ローマ字を採用することは、自らの方針に矛盾するものとうつつたのであろう。さらに王国政府側には、パテート・ラーオのラーオ語がベトナム語の影響を受けていると批判するものもあり[Phay Nam no.34 1975.3: 26]、「国民的」特徴を強調するパテート・ラーオにとっては、ラーオ語を書く文字は、

¹⁶³ 筆者が2002年から2004年のラオス留学中、パテート・ラーオのもと僧侶組織のリーダーであったマハー・カムタン(Maha Khamtan)氏にインタビューをしたところ、本人は語源型の正書法が好ましいと思っていたが、上層部に反対意見を述べることは出来なかった、と話していた。

¹⁶⁴ 第3章、3-4を参照のこと。

ラーオ文字でなければならなかったのである。実際、パテート・ラーオが重視していた少数民族へのラーオ語の普及、さらには少数民族語の文字化を考えれば、ローマ字化した方が有利であったといえた。にもかかわらず、ラーオ文字の「国民的特徴」を主張し、国民の文字としてラーオ語を維持しようとする姿勢にも、パテート・ラーオのラーオ族中心主義があらわれていたということが出来るだろう。以下、語彙と正書法の順にパテート・ラーオのラーオ語をつくる動きを追っていくこととする。

5-2-2 語彙の整備とスパヌウォン

パテート・ラーオ幹部のなかでも、近代語彙の整備に強い関心をもっていたのがスパヌウォンであった。ベトナム語、フランス語をはじめ多言語に通じていたスパヌウォンは、「我々のラーオ語、ラーオ文字は国民、政治、経済、科学に奉仕し、我々の国家を他の国家と同じように発展させていくことができる」として[Utama 1969: 22]、1947年ごろより戦闘の合間を縫って、語彙の整備に取り組んでいく。当時、スパヌウォンはラーオ・イサラ亡命政府の一員として、バンコクに滞在しており、ラオス北部の戦区とバンコクを往復する多忙な生活を送るなかで、辞書の編纂がすすめられていった[Khamfueang 1969: 18]。

カムフアン・トゥナロム(Khamfueang Tunalom)は、辞書編纂を担当させられたものの1人が、スパヌウォンに、祖国を追われて亡命生活を送るなか、重要なのは国を取り戻すために戦うことではないのかと直訴したのに対し、辞書づくりもまた国家の利益となること、いつか国家建設のためにこの辞書が必要になる日がくることを説明したという逸話を紹介している[Khamfueang 1969: 19]。ここからは、スパヌウォンが初期の段階から、ラーオ語を整備していくことの重要性を十分に認識していたことがうかがえる。彼は政治、科学、学術用語など、必要な語彙をフランス語からラーオ語に翻訳する方法で辞書作りを進め[Khamfueang 1969: 18-19]、1962年には『科学技術用語辞典 *Sapphanukom Vitanyasat*』の初版を出版している[Utama 1969: 23]。残念ながら、筆者はこの辞書を入手するにはいたっていないが、ラーオ語を教授言語とする中等教育以上の学校建設が進むなか、1969年には辞書の第2版が4468語に増補したうえで出版され、これは中学と高校の自然科学分野の教育に十分な語彙数であったということである¹⁶⁵ [Utama 1969: 23]。

このほか、スパヌウォンは『ベトナム語・ラーオ語辞書 *Pathanukom Viat-Lao*』に加え¹⁶⁶、1970年ごろには教育用のラオス地図作成にも携わっており

¹⁶⁵ この辞書については、他の文献でも言及されており、ラオス国立大学文学部ラオス語専攻のブアリー・パパーパン助教授はじめ、多くの人物がその存在を証言していることから確実に存在したということができる。ピムマソンによると、ラーオ語、ベトナム語、フランス語の3言語による辞書であったということである[Phimmason 2004: 52]。

¹⁶⁶ 1960年に初版が出版されたそうだが[Phimmason 2004: 52]、この辞書についても筆者は入手でき

¹⁶⁷[Phimmason 2004: 52-53]、これらの作業にはラオス人だけではなく、ベトナム人義勇兵も参加していた[Phamkhac 2003: 189-194]。また、教育用の地図作成にあたっては、スパヌウォンが、ラオス各地の地名の決定を行っており、その際、「とくにそれぞれの地点、区域、地方の地名は、各地域の人びとの話し言葉に合うようにしなくてはならない。これはデリケートな仕事であり、急ぐべきことではない」と、地域言語への配慮を示している[Phimmason 2004: 53]。このほか、1974年にはパテート・ラーオの僧侶組織のリーダーであった、マハー・カムタン(Maha Khamtan)が、パーリ語・サンスクリット語起源の語彙を解説した、『難解用語解説集 *Pae Sap Nyak*』が出版されている[Maha Khamtan 1974]。これには近代語彙だけではなく、仏教用語を中心とする、昔から使われてきた語彙も含まれていた。

5-2-3 プーミー・ウォンウィチットの『ラーオ語文法』

(1) パテート・ラーオの「ラオス国民」とラーオ語

正書法に関しては、先述の1950年の会合時に大まかな規則が決定されていたものの、その後、王国政府の領域を支配下に入れる形で解放区が拡大するにつれて、改めて「正しい」ラーオ語の規則を示す必要が生じたのであろう。王国政府の正書法は、パテート・ラーオよりも語源的要素を残したものであり、王国政府の領域で教育を受けたものにとって、解放区の正書法は自らが学習してきた方法とは異なるものであった。そして1967年に教育3ヶ年計画が発表され、識字運動も活発化するなか、その教本として出版されたのが、ラオス愛国戦線中央委員会書記長プーミー・ウォンウィチットによる『ラーオ語文法』であった。

この文法書の前書きからは、王国政府と同様、パテート・ラーオにおいても、シャムとフランスの支配による歴史的なラーオ語の「没落」とパテート・ラーオによる「復興」という、「没落と復興のシナリオ」がつくられていたことがわかる。以下、少々長いですが、プーミーの『ラーオ語文法』の前書きをみて、王国政府との違いを検討してみることにはしたい。

世界のすべての国家 *Pathet* はふつう、その国家自身の話し言葉、書き言葉の規則をその言語の規則としてもっている。それは国民 *Sat* の発音 *Samniang*、尊厳 *Saksi*、栄誉 *Kiat* を示すためのものであり、政治、経済面などの独立とともに、自身の国民の文化的独立 *Khvam Pen Ekalat Thang Dan Vatthanatam khong Sat Ton* を示すものである。

我々のラオス国家は、何世紀にもわたる長い間、様々な国民の支配を受けてき

ていない。

¹⁶⁷ この地図は1970年末にハノイで印刷されたということである[Phamkhac 2003: 193-194]。

た。そしてどの国民の支配を受けたときも、その国民は彼らの言語を持ち込み、ラーオ語と混ぜて、ラーオ語の本来の、真実の姿を少しずつ失わせていった。最も重要なのは、我々のラオス国家が、フランス植民地主義者の旧植民地と、アメリカ帝国主義者の新植民地となったこの時期である。やつらは必死になって、ラオス人が彼らの言語を話し、勉強するようにさせ、我々のラーオ語を少しずつ忘れさせていった。

このほか、国境を接する近隣諸国とのかかわりもまた、我々ラオス人のなかでもあまりラーオ語をよく覚えていないものたちに、それらの外国語を持ち込み、ラーオ語と混ぜさせ、そしてすでに退化してしまっているラーオ語を、さらにそのもとの規則からかけ離れたものへと日々、変形させてしまっている。〔中略〕

我々のラーオ語には、話し、書くための統一された規則が存在しないため、我々ラオス人は、いまだラーオ語で本を書き、あるいは翻訳することを好まないし、その勇気もない。これは、文化面における我々ラオス国民の闘争が他の領域に匹敵するほどに強力なものとなっていないという、その原因ともなっている。そしてこのことは、我々のアメリカ帝国主義者との戦いに、少なからぬ悪影響を及ぼしている。〔Phumi 1967: 5-6〕。

プーミーにおいても、政治・経済的な独立と言語の独立は一連托生のものとして語られている。ここでプーミーのいう、「国境を接する近隣諸国」がタイを指すことはその後の箇所からも明らかであろう。『パイ・ナム』でもチャンが「国の違う親戚」と呼んでいたように¹⁶⁸、当時、タイのことを名指しせず、婉曲的な表現を用いることが、王国政府においてもよく見られていた。2段落目と3段落目は、フランス語の重用とラーオ語へのタイ語の影響の深刻化という、まさに第4章でみた王国政府の状況を、批判したものと考えることができる。

ここで注目したいのは、プーミーが用いている「国民・民族」を意味する“サート” *Sat* の指す対象と王国政府側のそれとの違いである。第4章でのマハー・シラーやギンの言葉に見られたように¹⁶⁹、王国政府においてはネイションの訳語である、“サート”が指す範囲は、ラーオ族とせいぜいタイ(Tai)系諸民族に限定された、原初的色彩の濃い意味合いで使われる傾向があり、タイ系以外の諸民族に対して注意が払われることはほとんどなかった¹⁷⁰。一方、パテート・ラーオで“サート”といった場合、1974年の第2回全解放区教育大会でのカイソーンの演説にみられるように¹⁷¹、そのなかには明らかに少数民族が含まれており、パテート・ラーオと王国政府では、同じ“サート”という言葉が指す対象が、微妙に異なるものと

¹⁶⁸ 4-6を参照のこと。

¹⁶⁹ ギンは4-1-4、マハー・シラーは4-2を参照のこと。

¹⁷⁰ 『サート・ラーオ』にはラオス王国には少数民族が存在するが、その数は少ない、とマハー・シラーが書いた記事が見られる〔Sat Lao 1964. 10. 6〕。

¹⁷¹ 5-1-2の(2)で引用した。

なっていたのである¹⁷²。プーミーはここでさらに、「我々のラオス国家」と「国家」“パテート” *Pathet* を前面に出して語ることで、ラーオ語をラーオ族だけの独占物ではなく、多民族からなるラオス国民の共有物とする姿勢を、強く打ち出している。そしてこの差異は、次の箇所からより鮮明となる。

国民の文字 *Tua Nangsue*、言語 *Khwam Vao*、文学 *Vannakhadi* そして文化信条 *Lak Vatthanatham* を守り、復興していくことは、勇敢な祖先から我々へと受け継がれてきた、素晴らしい遺産であり、精神である愛国心 *Nam Chai Hak Sat* を示すことになる。我々がすべての愛国的英雄 *Banda Vilason Phu Hak Sat* たちの血を引くものとしてふさわしいものであること、そして不屈の愛国心をもつものであることを示すため、アメリカとその傀儡の打倒を目指す、救国闘争の時代の我々ラオス人民は皆、ラーオ語を規則に正しく、統一された方法で話し、書くべきである。これは思想と行動において、すべてのものを一致させるためのものでもあり、そうすることはまた、我々ラオス国民の独立を勝ち取り、守るための、我々の愛国心をより強力なものへと改良することでもある [Phumi 1967: 6-7]。

パテート・ラーオで、「愛国的英雄」といった場合、植民地時代にフランスの圧政に対して反乱を起こした、オンケオやコマダムといった、少数民族の首長たちも含まれる¹⁷³。プーミーはラーオ語、ラーオ文字の復興を「愛国心」という「遺産」の継承と組み合わせることで、通時的にも少数民族を共通の「遺産」の継承者として、「ラオス国民」へと統合している。これは王国政府において、マハー・シラーのつくった「歴史」が、大ラオス主義的でタイ系諸民族以外の民族には無関心ともいえる態度をとっていたのと、大いに異なるものであった。そして多民族からなるラオス国民の団結と融合を図り、民族解放闘争を勝利へと導くためにも、「武器」であるラーオ語、ラーオ文字の「復興」と正書法の統一は不可欠のものとしたのである。その際、第一に必要なとされたのが冒頭で述べられたような、ラーオ語から悪しき外国語、すなわちタイ語とフランス語の要素を取り除き、その「もとの姿」を取り戻すことであった。

今回、私がラーオ語文法について研究し、それを執筆するにあたって考えたことは、ラーオ語を国民的 *Sat*、科学的 *Vithanyasat*、大衆的 *Mahason*、進歩的 *Kaona*

¹⁷² 「国民的特徴」という場合の“国民”には、“サート”がつかわれていた。

¹⁷³ オンケオ、コマダムともにモン・クメール系のアラク族の首長であり、1901年ごろよりラオス南部でプー・ミー・ブン（有徳者）の乱と呼ばれる、フランスに対する反乱を率いた。チャンティの『人生の道1』においても、1952年ごろ、ラーオ・イサラ軍の中隊と行動をともにしていた幼少期の筆者が、夜に隊の政治員から、「ラオス史」についての話を聞く場面がある。そこでは政治員がラオス国民の歴史には、多民族の侵略に打ち勝ってきたという精神があることを述べ、19世紀にシャムに対する反乱を起こしたヴィエンチャンのアヌ王とともに、オンケオとコマダムの反乱についても語り聞かせている [Chanthi 2002: 69-70]。

特徴をもつものとしていくことであった。それゆえ、この文法書で使われている、規則や語彙は、純ラーオ語 *Phasa Lao Doem* のものを採用することを第一とした。純ラーオ語にあるものはすべて、それを使い、どうしても見つからないものについては、パーリ語から探して取り入れた。〔中略〕採用された規則や語彙は、高い知識をもつものも、そうでないものも、大衆が容易に理解でき、ラオスの国が進歩しているこの時代に用いるのに便利な、そしてラーオ語文法が、救国闘争とラオスの国家建設を妨げるのではなく、それを支援し、発展させるものとなるようなものである。

このラーオ語文法について、最も私が気をもんでいるのは、ラオスの兄弟たち全員に、考え得る最も簡単な方法で、規則や様々な語を理解させ、使用させることができるかどうか、ということである [Phumi 1967: 7-8]。

プーミーにとって外国語の影響から「解放」されたラーオ語の「もとの姿」とはまさしく、完全に発音に沿った正書法であり、音韻型正書法こそが、ラーオ語に「国民的特徴」をもたせるものと考えられた。しかしプーミーにおいては、起源的な純粋性を強調するだけではなく、その方法が時代にあった「進歩的」なものであるということ、すなわち簡便さ＝進歩という認識が見られ、これはまた大衆への普及に適した、彼らの言う「大衆的な」特徴へとつながるものでもあった。こうした思想のもと、プーミーにとって王国政府の正書法は音韻型、語源型ともにタイ語の影響を受けた、時代遅れで複雑な、悪しき方法でしかなかったのであろう。フランス語についても、王国政府では例えば、第4章で分析した『文学』の表紙において、月名が、ラーオ語の ສິງຫາ /*sǐŋhǎa*/ (8月) とともに、ラーオ文字で ອຸດ /*ʉút*/ とフランス語 *Août* を表記したものが併記されるなど、ラーオ語のなかにフランス語の語彙を混ぜて使うようなことが頻繁にみられた。プーミーの『ラーオ語文法』が目指したのは、まさにこうしたフランス語、タイ語の影響からのラーオ語の「解放」であり、これは現在、救国闘争を遂行している「ラオスの解放」を象徴的に示すものでもあった。それでは次に、『ラーオ語文法』の特徴について、簡単に見ていくことにしたい。

(2) 『ラーオ語文法』の特徴

『ラーオ語文法』に「ラーオ語文法とはラーオ語をラーオ語の発音や方法にしたがって正しく話し、書くための規則である」という方針が表明されているとおり [Phumi 1967: 10]、プーミーは発音に即した、一音一文字を原則とする正書法を定めていった。これにより、実際には発音されないにもかかわらず、王国政府側では用いられていた /r/ の音を表わす子音字や、二重子音字連続形の一部は取り除かれ、例えば王国政府では、“ルアンパバーン” が *luang phrabaang* と表記されて

いたのが、パテート・ラーオにおいては r が取れて、*luang phabaang* と発音どおりに綴ることとされた[表 5-2]。/r/の子音字や二重子音字連続形などは、タイ語正書法において用いられているものでもあり、プーミーの目には、排除すべきタイ語の影響と映ったのであろう。

[表 5-2] 見かけ上の二重子音字連続形

	パテート・ラーオ	王国政府	タイ語
ルアンパバーン	ຫຼວງພະບາງ /lǔaŋphabǎaŋ/	ຫຼວງພຣະບາງ /lǔaŋphabǎaŋ/	หลวงพระบาง /lǔaŋphrabaang/
教師	ຄູ khúu	ຄູ khúu	ครู khruu

しかし一方で、プーミーの前書きからも明らかなおおり、パテート・ラーオにおいては、パーリ語は「外国語」とは考えられていなかった。ベトナムにおいては、1960年代後半に漢語を中心とする外来語彙を純ベトナム語で言い換えるという動きがあったが[今井 2001: 139]、パテート・ラーオにおいては、パーリ語からの借用語は、古くから交じり合ったラーオ語の一部という認識を持っていた。プーミーが重視したのは、「発音どおりに綴る」ということであり、一音一文字の原則を逸脱しない範囲であれば、むしろパーリ語のもとの形を尊重すべきことさえ述べられている。例えば、王国政府ではパーリ語起源の複音節語について、必要に応じて、語中の音節に限って一字再読文字のかたちで、特別末子音字を使用することが認められていた。すなわち、パーリ語の *sukha* を語源とする「健康」“スカパープ”をみると、王国政府では *sukkhaphaap* と 2 文字目の子音字を 1 音節目の末子音と 2 音節目の頭子音として 2 度読むこととされていたのである。これに対してプーミーは、*sukhaphaap* と発音上、一音節目の末子音を取ってしまうことで、表記に語源の形を保持する方針を採っていた [Phumi 1967: 45]。プーミーの発音 *sukhaphaap* は、王国政府と同じように、一字再読をするタイ語の発音 *sukkhaphaap* と異なるものであった[表 5-3]。

[表 5-3] パテート・ラーオのパーリ語

	王国政府	パテート・ラーオ	タイ語
健康	ສຸຂພາບ /súkkhapháap/	ສຸຂະພາບ /sukhapháap/	สุขภาพ /sùkkhapháap/

*__が一字再読文字。語源の形、sukha を王国政府では s を第一音節の末子音、第二音節の頭子音として 2 度読む規則となっている。パテート・ラーオでは第一音節の末子音をなくすことで、一音一文字を保ったまま、sukha の形をそのまま残している。したがって、王国政府とパテート・ラーオで綴りだけではなく、異なる発音が採用されていたことになる。

また、プーミーの『ラーオ語文法』の特徴のひとつに、プーミーがシェンクワン方言によって、ラーオ語の声調規則を説明していることがある¹⁷⁴。これはひとつには、解放区が中心がシェンクワン、サムヌアであったことから、大半の人びとにとって一番馴染んだシェンクワン方言を採用することが、簡潔を第一とした文法書の目的に合っていたということが考えられる。しかしこのことをもって、プーミーがシェンクワン方言を「標準」として、音の面でのラーオ語の統一を図ろうとしていたとは考えにくい。実際、複合母音符号の *ɨx/ay* の説明においては、プーミーはヴィエンチャン方言の発音を「標準語」と呼び、さらに「ルアンパバーンの人びとと黒タイの人びとは [中略]、タイ・プワン、タイ・ヌア、プー・タイ、タイ・ルーの人びとは [中略]」とタイ(Tai)系諸民族や地域名を挙げて、*ɨx/ay* の発音が、各地方や民族によって異なることを併記し、その多様さを容認する姿勢をみせている[Phumi 1967: 26]。もっとも、ここには地域方言とタイ系諸民族語を併記することで、タイ系諸民族語をラーオ語の下位方言におこうとする意図があったとも考えられる。しかし「文字を知るものはまだ知らぬものに教えよう *Phu Hu Nangsue Chong Son Hai Phu Bo Than Hu*」のスローガンのもと[Utama 1969: 27]、子供でさえ、識字教育の教師役を務めることがあったという当時の状況からみても[写真 5-4]、とりあえずは書き言葉におけるラーオ語の「統一」を目指すということが現実的な選択でもあったのであろう。

さらに、この文法書の特徴を語るうえで、もうひとつ忘れてはならないのが、例文の政治性である。例えばクエスチョンマーク“?”の使い方を説明するために使われていた例文をみると、

ラオス人民の敵は誰だ?なぜラオス人民はアメリカ帝国主義者とその傀儡と断固として戦っているのか?やつら [アメリカ] の手先とは誰か?ラオス愛国戦線の政策とアメリカ帝国主義者の違いはどこにあるのか?[Phumi 1967: 17]

と、アメリカ帝国主義者に対する、ラオス愛国戦線の政策の正しさを、学習者に

¹⁷⁴ 東京外国語大学教授、鈴木玲子先生のご教示による。

理解させるようなものとなっている。このほかにも、「私はアメリカの飛行機がどこに落ちたのか知らない」[Phumi 1967: 56]、「ラオス王国政府は3派〔連合政府時の右派・中立派・左派のこと〕からなる」[Phumi 1967: 68]、「人であるなら国を愛することを知らなければならない。愛国心とは、言葉と行動にあらわれるものである。愛国というだけで、現実の行動が伴わないものは、国にとって何の利益ももたらさない」[Phumi 1967: 162]など、政治教育的要素を含む例文が随所にみられ、パテート・ラーオにおいては、文字の学習が政治教育に直結するものであったことがわかる。

[写真 5-4]識字学級で子供が教師を務めている挿絵



出典：[1972年版『道徳小学4年』：86] 教育科学研究所蔵

こうして、プーミーの『ラーオ語文法』は、ラーオ語正書法の絶対的な規範となり、ラーオ語は革命教育の基礎を担う、重要な「武器」となっていった。カイソンも先述の、1974年の全解放区教育大会の報告書で、革命教育の成果として、「ラーオ語の地位を教育文化領域において、国民の標準語へと上昇させ、学習上の受容にこたえるため、科学用語と正書法において成果を挙げたこと」[Kayson 1974: 11-12]と、語彙と正書法の分野において、一定の成果が上がったことを強調している。ここにきて、ラーオ語はパテート・ラーオの支配領域において、国民語として必要な地位と能力を獲得したといえる。しかしながら、この地位を揺るぎないものとするためには、さらにイデオロギー面において、ラーオ語、そしてラーオ族の優位を確立し、多様な人びとがラーオ語の習得に価値を見出すように

していく必要があった。次節ではその一例として、道徳教科書の分析をとおして、パテート・ラーオがラーオ語に付与したイデオロギーと、さらに諸民族の平等が謳われるなか、ラーオ族の優位がいかんにして構築されたのか、解明していきたい。

5-3 ラーオ語が運んだイデオロギー—道徳（クンソムバット）教科書

1960年代後半、学校建設などのハード面に加え、辞書や文法書などのソフト面が少しずつ整っていくと、それに伴ってラーオ語教科書の編纂・改訂が相次いで実施された。1967年の教育3ヵ年計画において、小・中学校でそれまでの5年制と3年制から、それぞれ4年制と2年制に1年ずつ短縮した新しいカリキュラムが採用されると[Langer 1971: 31]、小学校で6教科、中学校で11教科の教科書改訂がおこなわれ、さらに69年から70年の1学年度には、各種学校向けに57種類の教科書が編纂された[Udom 1994: 108, 112]。

本節では1969年から72年にかけて発行された、小学1年から中学2年までの道徳教科書について、その内容の分析をおこなう。発行年はそれぞれ、小学1年が1969年、2年は70年、3年は71年、4年は70年と72年、中学は1、2年ともに71年の発行となっており、パテート・ラーオによって編纂された、初めての道徳教科書であった¹⁷⁵。発行部数は小学1、2年が各8万部、3年が6千部、4年生は初版（70年）が3万部、中学1、2年は各1万部であった¹⁷⁶。

教科書は小学校・中学校ともに読解を中心に構成され、読解で学習した内容を、実践をとおして身につけるようになっていた。読解の内容は、低学年では日常生活・集団生活における行動規範が中心であるが、高学年になると、反米・愛国など、より政治色の濃厚なテーマが主流となる。しかしながら、小学1、2年生の教科書においても、例えば民族衣装を着た生徒とラーオ族の生徒を並置した挿絵を挿入することで、「諸民族の団結」というメッセージを視覚的に投影させるなど、挿絵を利用して内容に政治性を含ませる工夫がなされていた[写真5-5]¹⁷⁷。

¹⁷⁵ 小学1年教科書前書きにラオス愛国戦線によって作成された初めての教科書であることが書かれている[1969年版『道徳小学1年』:3]。ただし、教科名自体は1964年のカリキュラムにすでに見受けられる。

¹⁷⁶ 4年生の72年再版時の発行部数は不明である。4年生以外には再版が存在するのかどうか、確認することはできなかった。

¹⁷⁷ 小学1、2年は表紙にもラーオ族の生徒と少数民族の生徒が協同作業をしている絵が使われていた。

[写真 5-5] 前列右側の女子学生が少数民族の衣装を着ている。



出典：[1970年版『道徳小学2年』：45] 教育科学研究所蔵

また、小学1年の最後の課「指導者を愛する」では、「スパーヌウォンおじさんを愛する」という次のような詩が、本人の写真入りで掲載されていた[写真 5-6]¹⁷⁸。

私はまだ覚えています
 スパーおじさん¹⁷⁹が私たちの教室に来た日のことを
 私たちは拍手でむかえました
 おじさんは手を挙げて私たちにこたえました
 歓声がどっとわきあがりました
 おじさんは明朗で優しくておもしろい
 目は輝いていて白髪が混じっていた
 おじさんが去っていくとき私はとても恋しかった
 たくさんの人が一緒に見送りに行った
 野原の端まで行って戻ってきた

(第28課「指導者を愛する *Hak Than Phu Nam*」) [1969年版『道徳小学1年』：61-62]

¹⁷⁸ スパーヌウォンの話は小学3年生にも見られる。パテート・ラーオの指導者のなかで、個人として教科書に登場するのは、筆者の知る限りスパーヌウォンのみである。

¹⁷⁹ スパーヌウォンのことを、敬愛をこめて「ルン（おじ）・スパー」「スパーおじさん」と読んでいた。

[写真 5-6] 左側の人物がスパークウオン



出典：[1969年版『道徳小学1年』：61] 教育科学研究所蔵

この課の「実践」では、「あなたたちは、よく学び、団結し、勤勉に労働するという、指導者のみなさんの教えにしたがって行動しなくてはならない」と記されており、小学1年の段階から、パテート・ラーオの指導者に従うべきことが教えられていたことがわかる。

本節では道徳教科書と、さらに必要に応じて、プーミーの『ラーオ語文法』などにも言及しながら、分析をおこなっていく。

5-3-1 愛国心形成プロセス、ラーオ語という土台

思想と道徳において、生徒たちを教化すること：生徒たちに国 *Sat*、人民 *Pasason*、労働 *Kan Ok Haeng Ngan* を愛すること理解させ、ラオス愛国戦線への感謝 *Bun Khun* と信頼 *Suea Man* の気持ちを持たせること[1969年版『道徳小学1年』：3]。

これは小学1年教科書に書かれた、道徳の教育目的である。パテート・ラーオが教育政策を実施するにあたって、ベトナムとともに影響を受けたと考えられる中国では、「祖国、労働、科学、人民を愛し、公共財産を愛護する」という「五愛」を基礎とする愛国教育が、1950年代の初頭より始められていた[Ridley, Godwin and

Doolin 1971: 24-26, 36]。1967年には中国広西壮族自治区の南寧市に、「67年学校(ホーン・ヒアン・ホックチェット)」と呼ばれるラオス人学校がつけられるなど¹⁸⁰、パテート・ラーオでは教育政策の実施において、中国からも援助を受けており、パテート・ラーオが中国の「五愛」を手本に道徳カリキュラムを作成したであろうことは、冒頭の引用箇所からも推測されよう。中国では、祖国への愛が「五愛」の根底を成すと考えられ、それは家族や親戚など近親者への愛から村への愛、教師への愛から学校や社会への愛、そして最終的には指導者毛沢東と共産党、新中国への愛というように、身近な存在から段階的に形成されるように企てられていた[Ridley, Godwin and Doolin 1971: 39-40]。段階的な愛国心形成プロセスは、例えばパテート・ラーオ教科書の次の箇所においても明確に見出される。

A. 故郷を愛する気持ちは第一に両親、兄弟を愛すること、親戚を愛すること、現在故郷を建設し、守るために働いている村人たちを愛することである。故郷を愛する気持ちは、さらに美しく豊かな風景を愛し、言語を愛し、国民の勤勉で勇敢な精神を愛さなくてはならない。故郷を愛する心は国を愛する心となり、全ての兄弟民族たちを愛することとなる。(第12課「故郷を愛する *Hak Ban Koet*」)[1971年版『道徳中学1年』: 57]

B. 国を愛することは、我々ラオス人の美しい精神である。愛国心ゆえに、我々の祖先は侵略に打ち勝ってきた。例えばフランス、日本・・・やつらがどんなに強くとも、我々の人民はやつらを我々の愛する地から追い出してきた。〔中略〕愛国心とは、深い愛のひとつである。愛国心ゆえに、我々は美しき我々の国民の歴史を気にかけて、我々の祖先が築き上げた価値ある、崇拝すべき場所—その中には、豊かな言語とすばらしい文学がある—を気にかける。そして愛国心ゆえに、自分の汗と頭脳で国家を豊かで美しいものとするために働いている、労働者を気にかける。〔中略〕愛国心は両親、兄弟、家、田畑、村の親戚たち、労働者を愛し、解放区を愛し、ラオス愛国戦線の指導者を愛し、尊敬し、革命を愛することに至るまで、自分の周りにはいる人間や様々な動物を気遣う心からはじまる。それゆえ、愛国心を養いたければ第一に、生徒たちは家、学校を愛し、そして少しずつ、それ以上のものを愛するようにする。すなわちそれは、国家、人民、新しい社会に対する感情である。(第13課「国を愛する *Hak Pathet Sat*」)[1971年版『道徳中学2年』: 50-51]

上記2つの課は、いずれも家族、親戚にはじまって村、学校、そして国家、新しい社会へという、愛国心発展の道筋を描き出している。ここで注目したいのは、

¹⁸⁰ “ホック”とはラーオ語の「6」、「チェット」とは「7」を意味する。2007年3月の資料収集の際の、広西民族大学ラオス語専攻陶紅副教授のご教示による。

A,Bともに、愛する対象の項目のなかに、「言語」が含まれていることである。その際、とくにBでは、「豊かな言語」を「我々の祖先が築き上げた」ものであるとして、「言語」の存在に「歴史」を与えている。これは先にみた、プーミーの『ラーオ語文法』前書きの「国民の文字、話し言葉、文化信条を愛することは、両親、祖父母、勇敢な先祖たちから我々へと受け継がれてきた、素晴らしい遺産であり精神である、愛国心を示すことになる」というくだりと、共通するものといえよう。すなわち、ここでも「愛国心」を前面に出すことで、「我々の祖先」に少数民族の英雄を取り込み、多民族からなる「ラオス国民」という存在に通時性をもたせている。このとき、「豊かな言語」がラーオ語を指すことは、『ラーオ語文法』の前書きや、本章第1節で概観した、教育政策の経緯からも明らかであろう。こうして、ラーオ語は多民族からなる「ラオス国民」を共時的に建設していくうえでの「武器」であるのみならず、愛国心という「遺産」と掛け合わせることによって、少々強引ではあるが、多様な人びとの間に、遺産の「相続者」として、歴史的な連帯を醸成するような、イデオロギー性をまとうこととなった。「後進」という敵を倒し、解放区という「新しい社会」建設の担い手としてふさわしい「進化」を遂げるためには、その母語にかかわらず、諸民族の共通語であるラーオ語という武器の獲得が求められ、ラーオ語への愛は、いわば愛国心を示す一種のバロメーターとされていったのである。

こうしたイデオロギーのもと、小学1年第1課が次のような内容をもつものであったということは、パテート・ラーオにおけるラーオ語の役割を考察するうえで、示唆的である[写真5-7]。

[写真 5-7]



出典：[1969年版『道徳小学1年』:7] 教育科学研究所蔵

猫はとても怠け者でした
昼間は眠り夜は一晩中遊んでいました
そのため猫は愚かで文字をしりませんでした
友達は「一緒に行こうよ、そうすれば非識字者にはならないから」
と誘いました

(第1課「学び、知る *Hian Chueng Hu*」) [1969年版『道徳
小学1年』:7]

この課の挿絵では、ラーオ語の文字練習ノートとペンを前に昼寝する猫を、困り顔の兎が戒める場面が描かれている。「問い」では(1)なぜ猫は文字を知らないのですか?(2)学校に行けばどのような効果がありますか?と問いかけ、「誰でも学校に行かなければならない。学び、知ることができる」と、学習することの意義を説いている[1969年版『道徳小学1年』:8]。

道徳教科書では、学習することによって後進から脱却する、という進歩の構図が、主要なテーマのひとつとして、様々な事象において展開されていく。この図式のなか、ラーオ語の識字能力は、進歩の起点として、諸民族の平等と団結の方針のもと、解放区建設をすすめていくうえでの必須の条件とされたのであった。ラーオ語の共有は、運命共同体としての国民意識の醸成を促すのと同時に、それによって諸民族が平等に進歩への権利を与えられる、ここでいう平等とは、ラーオ語を共有することによって達成される平等であった。いうまでもなく、ラーオ語を原点とした進歩モデルの追求は、ラーオ族優位のもとでの国民統合を意味した。しかし、ラーオ族がむしろ少数派ですらあるという状況のなか、諸民族を団結させ、ラーオ族を主軸とするラオス国民という集合体へと融合していくためには、さらなる工夫が必要であった。この課題を克服するため、具体的にはどのような団結と融合のイデオロギーが機能していたのであろうか。次節では、とくに諸民族の団結というテーマに焦点をあててみていきたい。

5-3-2 諸民族の団結

前章までに見てきたように、敵対する王国政府がタイ(Tai)系諸民族との連帯を掲げた、膨張主義的な思想を展開する一方で、他の少数民族に対して無関心であったのに対し、パテート・ラーオにおいては、少数民族政策は一貫して重要な問題であり続けた。山岳少数民族の居住区域は革命戦略上、重要な場所を占めており、革命を成功に導くためには、各民族が狭小な民族意識を捨て去り、ラオス国という大家族の構成員である、という意識を醸成していくことが課題とされた[Sunkang Naeo Lao Hak Sat 1972: 2-6]。道徳教科書においても、諸民族の団結というテーマは、ほぼ全学年にわたって繰り返し登場する。教科書では、モン族など、

個々の民族名に言及されるのはまれで、主としてラーオ・ルム、ラーオ・トゥン、ラーオ・スーンの3分割による呼称が用いられていた¹⁸¹。

小学2年第23課「全民族の団結 *Samakkhi Thuk Son Sat*—同じ家族の兄弟のように少数民族の友人を愛しましょう *Hak Mukhu Son Sat Khue Ai Nong Huean Diao*」では、ラーオ・ルムのブンチャンと、ラーオ・スーンのラーオチューの友情が描かれ¹⁸²、各民族が団結し、民族による分け隔てをすることなく、同じ母親から生まれた兄弟のように愛し合いなさいと教えている。そして同時に、「各民族の友人たちの衣食住、言語を馬鹿にしたり、あざ笑ったりしてはいけない」と諸民族の言語や風習を尊重することが付け加えられている[1970年版『道徳小学2年』: 61-63]。

小学3年以上になると、民族の団結は、反米救国の革命イデオロギーと直結して語られるようになる。小学3年第23課「民族の団結 *Samakkhi Son Sat*—解放軍兵士とラーオユーおじさん *Thahan Potpoi lae Lung Lao Yoe*」では、人民解放軍兵士がラーオ・スーンの老人の病気を治療するエピソードが取り上げられ、村びとに礼を言われた兵士に「ラーオ・スーン、ラーオ・トゥン、ラーオ・ルムの兄弟たちは皆、同じラオス国民の兄弟で *Ai Nong khong Sat Lao Diao Kan*、一緒にアメリカを倒すための革命を戦っている。だから僕たちは愛し合わなくてはならない」と語らせている[1971年版『道徳小学3年』: 67-70]。また、小学4年第18課「民族の団結 *Samakkhi Son Sat*—ともに戦う *Huam Su Hop*」では、ラーオ・スーンの村で育った黒タイ族の青年兵士と、彼のことを我が子のように思う村びとたち、村びとを敵の攻撃から守るため、犠牲となった青年兵士の死を描き出し、「アメリカ帝国主義者と傀儡は、侵略と抑圧を容易に実行するため、民族を分裂させようとする。ラオス愛国戦線中央委員会の正しい指導と政策のもと、我々ラオス人民のすべての民族は日ごとに団結を強化し、一致して戦い、民族解放のため、アメリカ帝国主義者を打ち倒す決意をした」として、敵の民族分離政策に対する、ラオス愛国戦線の「正しい」指導という、敵・味方の二項対立を明確に描き出し、一致団結しての革命闘争への参加を強く訴えている[1970年版『道徳小学4年』: 70-74][1972年版『道徳小学4年』: 59-63]。

これら3つの課からは、血縁関係のタームを用いて諸民族の団結を語り、生徒たちに自らが「ラオス」という大家族の一員であるとの認識を植えつけようとする、戦略が読み取れる。家族の成員である以上、一致団結して平和を脅かす敵と戦い、ラオス国という大家族を守らなくてはならない。ここにも、愛国心の段階的な発展プロセスを読み取れよう。

しかし、上述のような「家族愛」を強調したイデオロギーが展開される一方で、教科書には「遅れた」少数民族がラーオ族（ラーオ・ルム）の文化を身につけることで「進歩する」という、対立の構図も見られる。「解放区のある村」と題され

¹⁸¹ 3分割については5-1-2の(2)注156を参照のこと。

¹⁸² 挿絵の服装からラーオチューはモン(Hmong)族と思われる。

た中学1年の読解2の文章では、次のような記述がある。

我々の区には、ラーオ・トゥンが15世帯住んでいる。彼らは、以前は耕作地を求めて移動生活をしてきた。我々の村の人民はラーオ・トゥンの兄弟たちを助けに行き、水田耕作の方法、家を建て、定住する方法を教えた。女性たちも彼らに布の織り方やシンの裾（ティン・シン）の織り方を教えた。（第12課読解2「解放区のある村 *Ban Nueng Nai Khet Potpoi*」）[1971年版『道徳中学1年』：60]

ここでは、焼畑による移動生活をおこなっていたラーオ・トゥンの人びとを定住させ、その女性たちに機織技術を教えたこと、すなわちラーオ族（ラーオ・ルム）の「文化」を教授すること（これにはラーオ文字も含まれるであろう）による、少数民族の進歩の過程が表わされている。もっともこの課の前半部分では、識字学級、労働交換、衛生面の改善、増産、女性の地位向上など、かつては後進に追いやられていた人民が、ラオス愛国戦線の指導のもと、新しい進歩的な生活を獲得したというような、民族に限定されない、「普遍的な進歩」についても述べられている。しかしこの「進歩の語り」のなかに、ラーオ・トゥンのラーオ・ルム化を嵌め込むことで、それを多様な進歩の一項目として「自然に」印象付ける効果があったともいえる。このほかにも例えば、小学4年の第16課「ラオス愛国戦線を愛し、感謝する *Hakphaeng le Hu Bunkhun Naeo Lao Hak Sat*」では、アメリカの支配下にあったときには貧困に喘いでいたラーオ・トゥンの人びとがラオス愛国戦線の指導のおかげで、近代的な（ラーオ族風の）生活を手に入れたという内容が見られた[1970年版『道徳小学4年』：62-65][1972年版『道徳小学4年』52-54]。このなかには、ラーオ・トゥンの村に成人向けの学校が設けられたことも書かれており、ラーオ文字の識字能力の獲得が「進歩」の構図のなかに、しっかりと埋め込まれていたことがわかる¹⁸³。

このように、道徳教科書では、「アメリカ帝国主義者とその傀儡」の民族分離政策に対する激しい批判、それと対抗する形での諸民族の平等と団結、家族愛の延長としての国民意識、相互扶助など、様々な要素を説いていくなか、主軸民族ラーオ族の指導的役割を、生徒たちの間に刷り込ませるように設計されていたのである。そしてこれらの要素を諸民族の間に浸透させ、一致団結して抗米救国闘争へと向かわせる、その「武器」がラーオ語であった。ラーオ語はこうして、解放区における国民統合を土台から構築するための、鋭利な「武器」となっていた。しかしパテート・ラーオにおける、ラーオ語の役割はそれだけには留まらなかった。すなわち、「ラーオ語による教育の実施」、このこと自体がいまだ、フランス

¹⁸³ 1967年に宣伝局から出版された『解放区の建設と保護』という小冊子においても、一部地域でラーオ・スーン、ラーオ・トゥンが水田耕作や機織の技術を身につけたことが紹介されている [Phanaek Kosana Sunkang Naeo Lao Hak Sat 1967: 7]。

語中心の教育制度のもとにあった、王国政府側の学生たちの言語ナショナリズムを昂揚させる、プロパガンダとして利用されることとなったのである。次節では、ラーオ語を利用したパテート・ラーオの宣伝工作について、当時の王国政府の社会状況なども含めて、考察していく。

5-4 プロパガンダとしてのラーオ語教育

ヴィエンチャン、ルアンパバーン、サワンナケートなどの都市部を拠点とし、アメリカ・フランスの援助を受けていた王国政府では¹⁸⁴、パテート・ラーオより人材的にも、予算的にも有利な条件のもとに教育の整備が進められていた。しかしながら独立後、約 20 年が経過しても、王国政府の教授言語は依然として、フランス語が中心で、いまだラーオ語を全レベルの教授言語とするには至ってはいなかった。そしてこのことが、学歴を要因とした社会階層の分化を深刻化させ、政府の教育制度に対して、人びとが不満を募らせていたことは、第 4 章でみたとおりである。もっとも、中等学校の教師になるには、最低でも後期中等師範学校を修了することが求められていた王国政府と¹⁸⁵、戦闘状況のなか、政治思想教育に重点がおかれたパテート・ラーオとでは、教育内容やレベルに大きな差があった。しかし教師不足を理由に、フランス人教師を採用し続け、学校を「リセ」と呼ぶ王国政府において¹⁸⁶、ラーオ語を求める人びとの言語ナショナリズムは確実に高まっていた。本節ではパテート・ラーオが、王国政府の人びとの「言語ナショナリズム」を利用して、どのようなプロパガンダをおこなっていたのか、1971 年にラオス愛国戦線によって出版されたプロパガンダ小説『母語 *Phasa Mae*』を中心に、王国政府側の雑誌など、わずかな手掛かりをもとにさぐっていきいたい¹⁸⁷。

5-4-1 小説『母語』

本章でみてきたとおり、パテート・ラーオでは、抗米救国の革命闘争へと人民

¹⁸⁴アメリカ国際開発局(USAID)の援助によってファー・グム学校のほか、ルアンパバーン、パクセー、サワンナケートの中等師範学校(前期課程と後期課程)ヴィエンチャンの高等師範学校(大学レベル)が設立された [Khamphao 1994: 93-94]。王国政府の小学校教科書のなかには、アメリカがフィリピンで印刷したものもみられた。

¹⁸⁵ 初等学校 6 年終了後に師範中等学校の前後期課程(4 年+3 年)修了者は中等学校 1、2 年生のみの教授資格を得ることができたが、それ以上の学年を教えるには最低でも後期中等学校卒業後、2 年間師範大学で勉強した後、フランスで約 1 年の研修を積む必要があった。それでも教授資格が与えられたのは中等学校の前期課程 4 年のみで、後期課程を含む全学年の教授資格を教えるには、博士号を取得する必要があった [Khamphao 1994: 94]。そのため、高等教育機関の教師の大半がフランス人に占められていたのである。

¹⁸⁶ 例えば 1962 年の教育改革についての文書においても中等学校(リセ)と、ラーオ語の横に括弧付けで「リセ」と記してあった。また、1972 年の段階でも、全中等学校教師のうち、ラオス人教師が占める割合は 10%に過ぎず、90%はフランス人を中心とする外国人教師であった [Lueam 1972: 15]。

¹⁸⁷ 『母語』の発行部数は 1500 部となっている。

を動員するため、初期の段階から、積極的な教育とプロパガンダがおこなわれていた。宣伝部隊の活動は、王国政府の支配領域にも及び、その際に教育、とりわけラーオ語による教育が受けられるということが、ひとつの宣伝材料となっていた¹⁸⁸。ヴィエンチャンの学生、カムディーを主人公とした小説『母語』からは、パテート・ラーオによる言語ナショナリズムを利用した、宣伝活動の一旦をうかがい知ることができる。以下、『母語』の内容を追いながら分析をすすめていく。

カムディーはある夜、寮の部屋で、親友のダーラーに革命に参加するため、解放区へと向かう決心をしたことを告げる。驚くダーラーにカムディーは、ディスコや売春宿で溢れかえった、当時の退廃したヴィエンチャン社会への嫌悪と、それと対照的な解放区の「新しい社会」への憧れを語る[Chaloensai 1971: 4-10]。そして教育に関しても、「我々〔ヴィエンチャンの〕学生たちは、中学生も高校生も腐敗した文化によって洗脳されてしまった。自分の国民語の代わりにフランス語を使い、ラオスへの愛国心を高めるよりも、アメリカを称賛している」[Chaloensai 1971: 6]として、自らの言語、ラーオ語で教育を受けられない状況を嘆いている。カムディーは、用心深く『ラオス愛国戦線 *Naeo Lao Hak Sat*』新聞の「解放区における教育拡大」と題された記事を取り出すと、解放区の教育について、ダーラーに語り聞かせる[Chaloensai 1971: 10]。

「ダーラー、君はもう見たかい。解放区ではラーオ語で教える中学と高校があるんだ。中学1年から高校までだぞ。楽しいだろうなあ。」

カムディーは話しながら、手で涙をぬぐった。

「僕たちはというと、ここではフランス語で勉強しなくてはならない。小学3、4年生から勉強しなくてはならないんだ¹⁸⁹。なんて辛いことだろう。僕は解放区の友人たちの新しい生活に、どうしても出会ってみたいんだ。さらに僕は、人びとが話すのを聞いたのだけど、解放区ではもうすぐラーオ語で教える大学ができるらしい。これこそ、ここでは僕たちが夢見ることすらできないことだ〔中略〕」

カムディーはハンカチを取り出して、溢れる涙をぬぐった。今、彼の顔は輝き、誇りに溢れていた[Chaloensai 1971: 10-11]。

カムディーは、「フランス語重視の王国政府」/「解放区のラーオ語教育」という、おきまりの二項対立のレトリックを用いて、解放区の教育を理想的なものとして語っている。カムディーが解放区へと向かう、第一の動機はラーオ語教育への憧

¹⁸⁸ 『サート・ラーオ』新聞においても、パテート・ラーオからの逃亡者（ラーオ・トゥン、アラク族）が解放区にいけば教育を受けられるという宣伝によって解放区へ向かったが、実際には物資の輸送をやらされたという記事が掲載されている[Sat Lao 1966. 11. 16]。

¹⁸⁹ 1962年の教育改革では、小学4年生以上からフランス語の授業を導入することとされていたが、公立小学校における教授言語はラーオ語であったため、この台詞には若干の誇張があると考えられる。

れであり、ここには彼の強い言語ナショナリズムが表現されている。カムディーはその後、恋人との別れなどの様々な葛藤の末、革命の理想のために解放区の中心地、サムヌアへと向かう。そして物語は2年後、カムディーに続いて解放区へやってきたダーラーとともに、2人がサムヌアの中学校教師となったところで、クライマックスを迎える。

毎日、教室ではカムディーとダーラーが生徒たちに勉強を教えた。生徒たちは片手にアメリカの飛行機の残骸で作られた勉強道具を持ち、片手にチョークを持っていた。彼らは科学や文化、そして国の美しい社会についての知識を、彼らの愛する子供たちに教えていた。しかし彼らは、フランス語、あるいは外国語で教えていたのではない。彼らの両親が彼らの子供のころから教えてきた言葉、ラオスの国民の言語 *Phasa khong Sat Lao* で教えていたのだった [Chaloensai 1971: 23-24]。

5-4-2 ラーオ語教育—もうひとつの「武器」

『母語』が出版された1971年の時点では、パテート・ラーオのプロパガンダは極秘におこなわれていたこともあり、カムディーやダーラーのように、プロパガンダによってパテート・ラーオを支持するようになった学生が、実際にどの程度存在していたのかを正確に知ることは難しい。パテート・ラーオがヴィエンチャンで表立った宣伝活動を実施するようになるのは、1973年2月の和平協定締結以降のことであり、それ以前はもっぱら地下での活動が展開されていた。『母語』においても、寮の部屋でカムディーがダーラーに解放区へと向かう決心を打ち明ける場面で、ダーラーは、カムディーに2、3日前に2人の高校生が王国政府側のスパイによって捕らえられたことを話して注意を促しており、学内で「解放区」という言葉を発するだけでも危険な状況にあったことを示唆している [Chaloensai 1971: 4-5]。しかしながらこの時期、パテート・ラーオのプロパガンダに接し、反米・反右派へと駆り立てられた学生たちが少なからず存在したことは、ブンタノー・ソムサイポン (Bunthanong Somsaiphon) の小説、『ラーン・サーン通りへ *Long su Thanon Lan Sang*』からもうかがうことができる。

1953年にチャムパーサク県の県都、パクセーに生まれたブンタノーは、67年に特待奨学生としてヴィエンチャンの法律行政専門学校に入学している¹⁹⁰ [前田1999: 108]。『ラーン・サーン通りへ』では、ヴィエンチャン在住の地方出身の学生が、パテート・ラーオのプロパガンダに接し、75年5月の反米と右派政権打倒

¹⁹⁰ 前田はブンタノーが1957年に入学したとしているが、彼の年齢から考えて、67年の誤植ではないかと思われる。しかし、法律行政専門学校は、通常は後期中等学校を卒業した後に進学する高等教育機関になるため、ブンタノーが非常に成績優秀であったか、あるいは入学年度はもう少し後（1970年ごろか？）であった可能性も考えられる。

のデモに参加するまでの過程が描かれ、ブンタノーンは前書きで、この作品が 1965 年から 75 年の 10 年間の、実際の出来事にもとづくものであることを記している¹⁹¹ [Bunthanong 1989: 8]。『ラーン・サーン通りへ』には、例えば法律行政専門学校の生徒、ブワパンが寮の友人たちと、ラオス愛国戦線のヴィエンチャン支部にこっそりと出入りし、宣伝映画の鑑賞や小説『2 人姉妹 *Song Ueay Nong*』『革命の光 *Saen Savang haeng Kan Pativat*』といった¹⁹²、パテート・ラーオの革命小説や政治家の著作などを借り出す場面があり、こうした機会をとおして、『母語』がヴィエンチャンの学生たちにも読まれたことが推測される¹⁹³ [Bunthanong 1989: 122-123]。

ブンタノーンによると、愛国戦線の支部などに出入りしていたのは、『母語』のカムディーとダーラーがそうであったように、地方出身の寮住まいの学生が中心であった [Bunthanong 1989: 122-123]。当時、法律行政専門学校の学生には、都市部の富裕層出身の学生と地方出身の学生がおり、両者の間には様々な格差が存在していた。成績をみても、都市の学校ではフランス人教師を雇うことができたため、都市部出身の学生は社会や言語など文系の科目が得意であったのに対し、地方出身の学生はフランス語が苦手、理系が得意であるなどの差異があったという¹⁹⁴ [Bunthanong 1989: 122-123]。そうしたなか、娯楽に関しても、都市部の富裕層の学生は、ナイトクラブなどで夜遊びをするのに対し¹⁹⁵、経済的に貧しい地方出身の学生にとって、誰でも無料で入場することのできた、ヴィエンチャンのソ連文化センター、北ベトナム大使館の野外映画場、ラオス愛国戦線のヴィエンチャン支部は格好の娯楽施設となっていた [Bunthanong 1989: 122-123]。ブンタノーンの記述からは、パテート・ラーオのプロパガンダが、地方出身の学生の、都市部の学生たちへの不満を利用する形でおこなわれていた様子が読み取れる¹⁹⁶。

言語ナショナリズムに関しても、『ラーン・サーン通りへ』には、ブワパンが法律行政専門学校で、ラーオ語の授業を求め、フランス人教師の前で「フランスの脱植民地化の過程にあるラオス国」という演説をラーオ語で行う場面がある。ブンタノーンは、これを「左翼思想 *Hua Iang Sai*」の学生たちによる「反乱 *Khabot*」とある種、皮肉を込めて表現しており [Bunthanong 1989: 72-74]、ラーオ語教育への要求がパテート・ラーオ支持に直結する形で認識されていた状況がうかがえる。

¹⁹¹ しかし、登場人物は架空の人物であることもあわせて記されていた。

¹⁹² 『2 人姉妹』は、スワントーン・ブッパーヌウォンによる、パテート・ラーオの代表的な革命小説である。『革命の光』はチャンティン・ドゥアンサワンの『人生の道 1』の初版時のタイトルである。

¹⁹³ 『母語』においても、カムディーが愛国戦線の事務所で宣伝映画を観て、感銘を受けたことを回想する場面がある [Chaloensai 1971:6-9]。

¹⁹⁴ 不平等との批判を受け、教育省の方針で、地方出身のフランス語があまり得意でない学生用の合格枠が多少は存在しており、そのことを指しているものと思われる。

¹⁹⁵ スチュアート・フォックスによると、当時ヴィエンチャンには 12 以上のナイトクラブがあり、富裕層の子弟のなかには輸入物のビールを飲み、一般的な労働者の月給相当分に当たる、金額を一晚で使うものもいたという [Stuart-Fox 1997: 155]。

¹⁹⁶ このほか、『ラーン・サーン通りへ』には、都市部の学生はテストの成績が悪くても教師に賄賂を渡して、進級できたことなど、学生の間には不平等が存在したことが書かれている。

『ラーン・サーン通りへ』はあくまでも小説であり、当然ながらある程度の脚色が含まれていることを勘案する必要がある。しかしブンタノーン自身、法律行政専門学校在学中、学校発行の新聞や雑誌に短編小説を発表し、1974年に最初の単行本『暗闇の中の光（短編と論文集）』を出版すると、政府から執筆をやめるよう脅迫を受けるなど、反体制的な活動をおこなっていた[前田 1999: 108]。また『ラーン・サーン通りへ』が発表されたのは、革命後 1989 年のことで、『母語』のような、プロパガンダを目的として書かれたものではないことを考えても、多少の脚色があるにせよ、同作が、1974 年 4 月の第 3 次連合政府成立以前の、ヴィエンチャンの様子を知ることのできる、貴重な手掛かりと考えると差し支えないであろう。実際、筆者の入手した法律行政専門学校発行の雑誌『法律行政学校学生会報 *Khaosan Samakhom Nakthammasat Sueksa*』（1972 年発行月不明）においても、「開発」と「援助」の名の下に我々の領土を破壊する外国と[Khaosan Samakhom Nakthammasat Sueksa 1972: 2]、反米的な内容の記事がみられ、また同じく法律行政専門学校の雑誌『プアン・ナックスクサー（学生の友）*Phuean Naksueksa*』の同年 6 月号でも、「サクディナー（封建主義者）」など、パテート・ラーオの影響が想像される表現が見出される。『プアン・ナックスクサー』ではこのほか、「若者と愛国主義」という記事で、フランス語とタイ語の使用を愛国心の欠如と非難し、フランス文化センターがフランスの文字でラオス文字をつぶしたことに対して¹⁹⁷、法律行政専門学校の学生たちが抗議したことを、愛国心の表れであると、称賛しているものもみられた¹⁹⁸ [Phuean Naksueksa no.3 1972.6: 8, 18]。

1972 年は『パイ・ナム』が創刊された年であることを考えれば、アメリカへの批判や、言語ナショナリズム的な主張を、パテート・ラーオの影響のみで説明することはできない。『プアン・ナックスクサー』には、『パイ・ナム』の人気作家であるパーナイや、トン・ウップムン(Thong Upmung)などが特別に記事を寄せており、学生たちが『パイ・ナム』をはじめ、彼らの著作を読んでいたことが分かる。『パイ・ナム』では右派政治家への批判を展開していたものの、政治的には左右どちらにも与しない、中立的な立場がとられていた¹⁹⁹。しかしいずれにせよ、『パイ・ナム』や『サート・ラーオ』でみられたような、1960 年代以降の言語ナショナリズムの高まりを、パテート・ラーオがプロパガンダに利用したということは、『母語』のような小説が書かれたことから明らかであろう。そしてその原因が何であれ、この時期、学生たちが言語ナショナリズムとともに、反米・反右派的な主張を表明するようになったことは、1973 年 2 月 21 日の和平協定

¹⁹⁷ これ以上のことが書かれていないため、具体的には何があったのか不明である。例えば、ラオス語の看板をフランス語で書き換えたなどが想像される。

¹⁹⁸ 執筆者の多くがペンネームを用いているため、ブンタノーンの記事が掲載されているのか、確認することはできなかった。

¹⁹⁹ パーナイがラオス愛国戦線のことを「プワク・パー（森のやつら）」と差別的に記しているものもしばしば見られた。

以降、パテート・ラーオの影響が学生たちの間により広範に浸透していくための土壌を用意したともいえた。

5-4-3 「武器」の行方—中立への期待と挫折

パリでのベトナム和平会談の進展とともに、1972年10月からヴィエンチャンでも和平会談が開始され、1973年2月21日、王国政府とパテート・ラーオとの間で、「ラオスにおける平和回復と国家統一達成についての協定」が調印された[Lao Hak Sat 1973]。この協定では、即時停戦、30日以内の臨時連合政府と政治諮問評議会の設立、連合政府設立後、60日以内のすべての外国軍と基地の撤収、ヴィエンチャン、ルアンパバーンの中立化などが定められた[飯島 1999: 464][Lao Hak Sat 1973][Stuart-Fox 1997: 156]。しかしその後も、右派によるクーデターなどの混乱が続き、結局、第3次連合政府と政治諮問評議会が設置されたのは、協定調印から1年以上が経過した1974年4月のことであった。連合政府の首相には、中立派のスワナ・プーマが就任し、全12名の閣僚のうち、左右両派から5名ずつが選ばれ、残りの2名には中立派が就任した。そして5月には、スパーヌウォンを議長とする政治諮問評議会が全レベルでのラーオ語教育の実施を含む、18大政治綱領（正式名称：ラオス王国の平和、独立、中立、民主主義、統一、繁栄を建設するための綱領 *Khongkan Sang Santiphap, Ekalat, Khwam Pen Kang, Pasathipatai, Ekaphap lae Khwam Vatthanathavong khong Phalasaanachak Lao*）を発表し[Lao Hak Sat 1974]、同年中に、教育省からすべての中学校の教授言語をラーオ語とする布告が出された[Fa Ngum 1975:11]。この時期、解放区においても先述の74年6月の第2回全解放区教育大会が開催され、「国民・大衆・科学」の原則にのっとり、教育制度を整備していくことが確認されている²⁰⁰。

旧王国政府外務省の役人で、革命後に再教育キャンプに送られた後、アメリカに亡命したブンサン・カムケーオ(Bunsang Khamkeo)は自伝のなかで、18大政治綱領の発表以後、パテート・ラーオが各省庁で、役人たちにその内容を説明し、変革の必要を訴えるための大々的な宣伝活動を展開したことを記している²⁰¹[Khamkeo 2006: 56]。ブンサンは役人たちが、発言の権利を与えられたことを歓迎し、パテート・ラーオが公務に参加したことで、「民主主義が機能しているようにみえた」と、パテート・ラーオの活動がとくに中級以下の役人の間で好意的に受け入れられていた様子を描いている[Khamkeo 2006: 56]。社会的な不平等に不満を募らせていた人びとに、平和、統一、中立、民主、独立、繁栄を掲げ、言論の自

²⁰⁰ この時期、ラオス人民革命党の存在はいまだ公にはされておらず、書記長のカイソーン・ポムウィハーンの使用も王国政府側ではほとんど知られていなかった。

²⁰¹ ブンサンはパクサーに生まれ（生年不明）、17歳でフランスへ留学。トゥールーズ大学で政治学の博士号を取得したのち、1973年にラオスへ帰国し、外務省の役人となった。

由などを謳った 18 大政治綱領は熱狂的に受け入れられ²⁰²、ラオス学生協会や労働組合、公務員、宗教団体、女性団体、教師団体などの各種団体が一致団結して、綱領の実施を促すための「21 団体」が結成された[Khamkeo 2006: 56]。「21 団体」の各リーダーは直接、ラオス愛国戦線のヴィエンチャン支部から指令を受けて、工場や学校で政治学習の会合を開催し、人びとは「アメリカ帝国主義者」「新植民地」といった、パテート・ラーオの用語を用いて、公然と反米・反右派の主張を掲げるようになっていく²⁰³[Khamkeo 2006: 56]。学生協会では法律行政専門学校の学生が代表を務め、各学校の学生集会などで政策の説明をおこない、1974 年の秋頃からは、それぞれの学内で抗議活動がおこなわれるようになる[Brown and Joseph 1986: 115]。そしてその際、学生の要求項目のなかで重要な位置を占めていたのが、「国民的特徴をもった教育」、すなわちラーオ語教育であった。例えば、1975 年 1 月から 3 月ごろに発行された、ファー・グム学校の学生協会による雑誌『ファー・グム *Fa Ngum*』には²⁰⁴、「熱病にかかったラーオ語 *Phasa Lao Pen Khai*」という、以下のような記事がみられた。

国民教育は、愛国心の源泉である。我々が他の言語で教育を受け、歴史や地理を他の言語で学び、外国の事柄を学ぶとき、我々の愛国心はいったいどこにあるのであろうか。実際、我々が独立を達成してから、20 年以上がたつのに、我々のラーオ語は今日、強力なウィルスに感染し、熱に侵されて、死にかかった人ようになってしまっている。現在、我々のラーオ語を侵しているウィルスとは、まさに新植民地主義者の傀儡たちである。1962 年に全国でラーオ語の改革があったときには²⁰⁵、帝国主義者の傀儡たちは、ラーオ語の使用を必死になって阻止しようとした。1974 年に、教育省がすべての中学の教授言語をラーオ語とする布告を出したときも同様であった。この布告は、新植民地主義者とその傀儡たちを、大いにあわてさせた。やつらは善良な顔をして、我々の国家に入り込むが、その心は恐ろしく、野蛮で残酷なやつらである[Fa Ngum 1975: 10-11]。

ここでの「新植民地主義者」とはフランスを指し、その他「帝国主義者」、「傀儡」などパテート・ラーオのプロパガンダ用語が多用されていることから、この

²⁰² 綱領には、言論の自由、結社の自由などの自由権、各民族の平等、男女の平等などが含まれていた。1974 年 6 月 20 日にラオス愛国戦線印刷所から出版された綱領解説のための小冊子、『平和建設の綱領』では、とくに自由権に関する第 3 条のところにアンダーラインが付されており[Lao Hak Sat 1974: 13]、自由権の条項が重視されていたことがわかる。

²⁰³ これらの会合には、パテート・ラーオのメンバーも参加したという。

²⁰⁴ 学生協会の下位には、各学校の学生協会があった。筆者が入手した『ファー・グム』雑誌 2 冊のうち、この記事が掲載された号には発行年月日が書かれていなかった。この号の次の号と見られる号が 1975 年 4 月の発行であることや、内容から 1975 年の 1 月から 3 月にかけての時期に発行されたものであると思われる。

²⁰⁵ 1962 年の教育改革を指すものと思われる。しかし、この改革では、中学以上のフランス語を教授言語とすることが定められており、「ラーオ語の改革」というのは事実と異なる。

記事の筆者が、パテート・ラーオの影響を受けていたことは明らかである。そして筆者は、最後に独立、民主、平和、繁栄のラオス国家を建設していくために、フランス語を追放し、ラーオ語の言語的独立を確立していかなければならないと、18 大政治綱領のスローガンを引用して、この記事締めくくっている[Fa Ngum 1975: 11]。『ファー・グム』には、このほか「ラオスにおける大タイシステム *Labop Thai Nyai Nai Lao*」という記事もみられ、そこでは商品の宣伝やラジオ、映画などのタイ語の使用を批判し、タイの外務大臣がラオスを訪れた際、学生たちが「タイは大タイ主義の拡大をやめろ *Thai Chong Yut To Labop Kan Phae Phai Latthi Thai Nyai*」というスローガンを書いたプラカードをもって、迎えたことが書かれ、タイに対しても抗議行動がおこなわれていたことがわかる²⁰⁶[Fa Ngum 1975: 8]。

こうした学生たちのパテート・ラーオへの傾倒に対して、『パイ・ナム』第32号(1975年1月)の「ナム・パイ」では、筆者のウッティン・ブンニャウォン(Uthin Bunnyavong)が²⁰⁷、人びとが何かにつけてパテート・ラーオの「国民・大衆・進歩」のスローガンを口に出すことに苦言を呈している²⁰⁸。ウッティンは、「国民的特徴」に固執するあまり、新しいものは何でも「帝国主義者」のレッテルを貼って否定するものがあるとして、ヒッピーなど、ラオスの文化にそぐわないものはたしかにあるものの、西洋的なものをすべて否定するのは愚かであり、そのようなことをすれば、年号を表わす西暦さえも使用できなくなると批判している[Phay Nam no.32 1975. 1: 4-5]。そしてまたそのような人に限って、長髪でベルボトムジーンズをはき、西洋の音楽を聴きながら、友人たちに「国民的特徴をもたなければいけない」というのではないかと皮肉を述べている[Phay Nam no.32 1975. 1: 5]。長髪にベルボトムジーンズというのは、1960年代から70年代にかけて、都市部の若者の間で流行していたファッションであり、ウッティンの批判が主に、学生たちに向けられたものであることがわかる²⁰⁹。ウッティンは教育に関しても、「まるで、十分な教師と、ラーオ語の教科書が揃っているかのように、迅速かつ完全な国民的特徴をもった教育を求める人がいる」として、全レベルでのラーオ語教育の実現は昔からの悲願であるものの、教師不足で教科書も揃わないなか、すぐには達成できるものではないと、現状を無視した無理な要求を戒めている[Phay Nam no.32 1975. 1: 5]。

ブンサンによると、18 大政治綱領が出されて以降、反パテート・ラーオ的な行動や言動をする人はごくわずかで、「21 団体」を中心とする反米・反右派デモが、市内の各大通りで頻発していた[Khamkeo 2006: 63]。このような状況のなか、ウッ

²⁰⁶ アメリカに軍事協力をおこなっていたタイも攻撃の対象となっていた。

²⁰⁷ ウッティンはマハー・シラーの娘婿でレーン・プー・パーガンというペンネームをもつ、人気作家であった。この号では、パーナイに代わってウッティンが「ナム・パイ」を執筆していた。

²⁰⁸ 国民・大衆・科学のスローガンは、科学のかわりに進歩(カーオ・ナー)が使われることもあり、そちらの方が普及していたようである。

²⁰⁹ 実際、デモに参加した若者たちの写真を見ると、長髪にベルボトム姿のものが目立つ。例えば、[竹内 2004:30-31]。

ティンのような意見を述べることはむしろ危険を伴うものであったとさえいえる。ブンサンも、自らが講師を務めていた法律行政専門学校の生徒たちが、パテート・ラーオの制服を着て、反米を叫び、学内のいたるところに「正義のために闘え！」「反動たちを連立政府から追い出す唯一の道は、銃である」などの落書きがなされていた様子を、中国の文化革命での毛沢東主義者と重ねている[Khamkeo 2006: 63]。

こうして、1960年代以降、王国政府の人びとの間で高まっていた言語ナショナリズムは、次第にパテート・ラーオ支持と強固にむすびつくものとなっていった。1973年から75年という政治的に不安定な時期、パテート・ラーオの掲げた「国民的な」ラーオ語教育というカードは、外国の介入の目に見える象徴となっていたフランス語教育の追放、真の独立したラオスの達成というメッセージとともに、内戦の終了に歓喜する王国政府の少なくない人びとを、パテート・ラーオへと引き寄せる有力な「武器」となっていったのであった。しかしながら、そのような人びとの歓喜は間もなく裏切られることになる。1975年8月23日にパテート・ラーオがヴィエンチャンに進駐し、その主導権が明確となるにつれ、『パイ・ナム』のウッティンにみられたような、批判的な言葉は聞かれなくなる。王国政府高官や軍幹部は亡命するか、サムヌアの「再教育キャンプ」という名の強制収容所に送られ、ヴィエンチャン市民は強制的に、パテート・ラーオの政治集会に参加させられた。出版物の検閲も実施されるようになり[Stuart-Fox 1997: 163]、これは言論の自由を謳った、18大政治綱領に明確に反するものであった。75年10月に出版された『パイ・ナム』最終号(38号)の表紙から「社会批判 *Sangkhom Vichan*」の文字が消え、「愛国主義 *Sat Ninyom*」と入れ替わっていること、その内容がパテート・ラーオを称揚するものとなっていることから[Phay Nam no.38 1975.10]、言論の自由が奪われていた状況がうかがえる。そして12月2日、王政が廃止され、ラオス人民民主共和国が成立すると、平和、統一、中立、民主、独立、繁栄のスローガンから「中立」が消し去られ、社会主義国家の建設がすすめられることとなった。

5-5 パテート・ラーオの言語ナショナリズム

本章では、パテート・ラーオがラーオ族を主軸に据えた国民形成をすすめていくなか、ラーオ語にどのような役割を与えたのか、考察をおこなってきた。

パテート・ラーオでは、大衆に依拠した革命闘争を遂行していくため、当初より精力的な識字教育がおこなわれた。そうしたなか1964年頃より、少なくとも書面上では、ラーオ語の普及と諸民族語の発展の2点を基軸とした政策が採られるようになる。しかしラーオ族以外の言語で文字化され、教科書が編纂されたのはモン語のみであった、という事実からもわかるとおり、現実には諸民族語の保護

(抑圧しないという意味で)に多少の配慮はするものの、それをラーオ語と平等に「進歩」させるといふ、積極的な試みがなされることはなかった。また、黒タイやタイ・ルーなど、独自の文字をもつタイ系民族に関しても、これらの言語による教科書が編纂されることはなく、プーミーの『ラーオ語文法』の説明文には、タイ系民族の言語をラーオ語の下位方言に分類するかのような表現もみられた。実際、彼らが「ラーオ・ルム」に分類されることに顕著に現れているように、ここには、タイ系諸民族をラーオ族に取り込むことで、主軸民族としてのラーオ族の存在を強化しようという、政策上の意図が隠されていたともいえよう。

1960年代後半には教員養成もすすみ、いくつかの県では「少数」民族出身の教師の割合がラーオ族の教師の数を上回るなど²¹⁰[Udom 1994: 112]、「少数」民族への教育体制も整っていった。識字運動も活発化し、68年には高校、75年には大学も設立され、辞書や文法書の整備も進むなか、ラーオ語は唯一の国民語としての地位を確固たるものとしていったのであった。そして74年の18大政治綱領においても、第8項で諸民族の慣習を守ることが述べられる一方、国民教育の拡大、諸民族間の団結と愛国心の強化、ラーオ語をあらゆる学校の教授言語とすることが謳われ[Lao Hak Sat 1974: 17]、ラオスの統一が現実のものとなるなか、ラーオ語が多民族からなる新しい「ラオス国家」を代表する国民語であることは、もはや自明のものとなっていた。

一方、こうした制度面におけるラーオ語の優位、ラーオ族の主軸的役割をイデオロギー面でささえたのが、道徳教科書でみられたような「進歩」のイデオロギーである。教科書では、ラーオ語を「我々の祖先が築き上げた」ものとして、きわめて「曖昧に」少数民族をその継承者へと包含し、ラーオ語を愛することは段階的に、愛国心へとつながるものであるとされていった。ここでは、ラーオ語の識字能力はあらゆる進歩の起点におかれ、民族の平等は、ラーオ語の共有により、平等に進歩を達成するという原理へと転換されていった。そして血縁関係のタームを用いて、諸民族の団結を語る一方で、進歩的なラーオ族の役割を「自然に」認識させ、国民形成におけるラーオ族の指導的役割を、生徒たちの間に刷り込ませるような言説が展開されていった。道徳教科書には反米救国や増産活動、相互扶助といった多様な政治教育的要素が含まれ、ラーオ語はこうした要素を解放区に住む人びとの間に浸透させ、ラーオ族を主軸とした国民形成を図るうえでの、いわばその土台としての役割を付与されていったのであった。プーミーの『ラーオ語文法』でつかわれていた例文の政治性からも、このことは明らかであろう。

また、王国政府に対しては、「ラーオ語教育」それ自体が、1970年代、主として学生やラーオ族中心の都市部住民の間で昂揚しつつあった「言語ナショナリズム」

²¹⁰ 1969年度、ウドムサイ県では全教員数468名に対して、ラーオ・トゥンとラーオ・スーンの教師が328名、ボンサーリー県北部では298名に対し155名、ターワン・オーク県(パテート・ラーオの行政区分による県で、現在のセーコーン県のあたりに存在した)では206名に対して、195名となっていた[Udom 1994: 112]。

に訴える形でのプロパガンダとして利用された。そして内戦の終了と、ラオス統一への期待が高まるなか、パテート・ラーオの掲げる「国民的な」ラーオ語教育は、「奴隷的・植民地的な」フランス語教育との二項対立によって、外国の干渉の排除による真の独立したラオスを熱望していた、ヴィエンチャン市民の心をパテート・ラーオへと引き付ける役割を果たしたのであった。

以上のような過程を経て、ラーオ語はラオスの「固有の民族語」＝国民語として選択され、形成されていった。それは民族解放闘争という状況下、解放区に向けては主軸民族としてのラーオ族の優位性を浸透させ、王国政府に対してはラーオ族の言語ナショナリズムを刺激するという二重の戦略によって、ラーオ族を主軸とする「ラオス国民」を形成していこうとするプロセスでもあった。ここではフランス語、タイ語からの言語的解放が現在、革命闘争を遂行しているラオス国民の解放を象徴的に示すものとなり、パテート・ラーオにおいて、国民語の地位をかつての「支配者の言語」であるフランス語、タイ語が肩代わりすることは、全く不可能なことであったのである。

第6章 言語ナショナリズムの展開

本論文では、植民地時代以降の歴史のなかで、ラーオ語が国民語として形成されていく過程が、ラオスの国民形成にどのように関わってきたのか、明らかにすることを目的に考察を進めてきた。以下に、植民地時代、王国政府、パテート・ラーオの順に本論の内容を振り返り、本論で明らかとなった、言語ナショナリズムの展開を追っていくことにする。

6-1 フランス植民地時代—植民地支配下の言語ナショナリズム

フランスの植民地支配は、ラオスとタイの間に政治的な国境線のみならず、言語上の国境線をもたらすこととなった。19世紀末より、植民地化を円滑に進めるため、フランス人によって辞書など一連のラーオ語出版物が編纂され、そのなかで、タイ語に対してラーオ語を下位におく、言語の「序列」が形成されていった。フランスは、ラーオ語とタイ語の起源的同一性を認めたいうえで、後者は文字の増補や声調符号を付すなどして発展を遂げてきたのに対し、前者は原初の姿のままにとどまっているとして、ラーオ文字の少なさ、書記言語としての未整備を、ラーオ語をタイ語の下位におく根拠として挙げた。そしてこのような、ラーオ語の「衰退」の要因を、ラーオ族の諸王国がシャムの支配下におかれていたという、植民地化以前の「歴史」に求め、「旧支配者」であるシャムの脅威からラオスを守る「保護者」として、ラーオ語の復興・再建に乗り出していく。ここに、タイ語からのラーオ語の言語的独立という、現在に至るまでのラーオ語形成の基本方針が誕生することになる。

フランスが、ラーオ語の近代語化を進めるにあたって第一に着手したのは、ラーオ語の正書法を確立し、ラーオ語をタイ語とは異なる「言語」として、つくりあげていくことであった。そうしたなか、1918年ごろよりフランスの主導のもと、ラーオ語正書法を検討するための会議が開催されていく。植民地時代をとおして、ラーオ語正書法には教育バックグラウンドの相違を背景に、語源型、音韻型、ローマ字化という3つの意見が出され、この対立が解消されることはなかった。しかしながら、仏教を介してのタイ語の影響を遮断しようとした語源型支持者をはじめ、いずれの立場も、ラーオ語のタイ語からの言語的独立をはかろうとした点で一致していたことは、第3章でみたとおりである。

タイ語からの「独立」という枠組みは、タイの失地回復要求を退け、安定した植民地支配を進めようとしたフランスによって編み出されたものであり、その意味で、植民地時代のラーオ人の言語ナショナリズムは、フランスによって仕組まれた、反タイ語・ナショナリズム的色彩の濃いものであった。一見すると、フラ

ンスとの関係がもっとも希薄に見える語源型支持者にしても、仏教協会設置の背景に、仏教を通じてのタイとラオスの関係を断ち切ろうとした、フランスの意図があったことを考慮すれば、彼らの主張がフランスと全く無関係なものではなかったことがわかる。しかし一方で、音韻型の支持者が、ラーオ語とタイ語の序列を逆転させたことに顕著にあらわれているように、議論の進展とともに、ラーオ人の言語ナショナリズムは、次第に「保護者フランス」のもとを離れ、一人歩きを始めるようになる。そして音韻型の優位が明白なものとなるなか、文字の少なさ＝合理性＝進歩という認識から、タイ語に対するラーオ語の優位を確立するような言説が形成されていく。

以上のような経過のもと、フランスの植民地下、タイ語との区別をとおして、ラーオ語の「姿」を実体化するという、否定的同一化による国民語形成の基礎が構築されていった。植民地時代の議論からは、それが当初はフランスの意図によるものであったにせよ、タイ語とのシンボリックな境界を求める意識が、正書法という、コミュニケーション手段としてのラーオ語の機能を決定していくうえで、最重要ともいえる領域に決定的な影響を及ぼしていたことがわかる。ローマ字化に対して、根強い反発の声が存在したことも、このことを明確に示すものといえよう。そしてそうしたなか、エリートたちのあいだに、「ラオス」の領域に住むラーオ人以外の人びとにもラーオ語を普及させ、「ラオス人」をつくっていかうという、ラーオ語＝ラオス国民＝ラオス国家の一致を求める言語ナショナリズムが高まり、こうした動きは王国政府、パテート・ラーオの双方へと継承されていくことになる。

6-2 王国政府一分裂する言語ナショナリズム

王国政府においては、植民地時代末期に音韻型が優位となった流れを引き継ぐかたちで、1949年の国王令によって、「発音どおりに綴る」というラーオ語正書法の原則が決定された。このとき、タム文字の使用が同時に認められたことから、語源型支持者の意見は完全に退けられるかたちとなった。そして1951年に設置されたラオス文学委員会のもと、音韻型をベースにラーオ語正書法の規範が定められていく。

1949年のフランス連合内での協同国としての条件付独立に続き、53年にはラオス王国として、「ラオス」は完全な独立を達成する。このような歴史的流れのなか、旧支配者の言語、タイ語の脅威からラーオ語を守る「保護者フランス」という構図は完全に破綻し、シャム・フランスの支配のもとに衰退を余儀なくされたラーオ語の、「我々ラオス国民」による復興・発展が謳われるようになる。そしてイデオロギー面において、ラーオ語はタイ(Tai)系諸民族語の祖語であり、ラーオ族はタイ系諸民族の起源であるという、ラーオ語、ラオス国民の「偉大な過去」をつ

くりあげ、現実のタイ語の脅威に対抗しようとした。しかしこのようなイデオロギーの形成はまた、「解放」を求める言語ナショナリズムが、膨張主義的な「大言語ナショナリズム」的主張と表裏一体の関係にあることを示している²¹¹。

一方、独立後もフランス語が公用語として残り、中等教育以上の教授言語はファー・グム学校を除き、すべてフランス語が採用されていたという事実は、フランス語のもとに、ラーオ語がいわば「下位言語」としておかれるという事態を招き、国民語としてのラーオ語の前途に暗い影を落とすこととなった。とりわけ教育におけるフランス語への依存は、中等学校進学時の不公平という、世俗教育における不平等とともに、文学委員会でのマハー・シラーの立場にあらわれていたような、仏教教育修了者と世俗教育修了者のあいだに亀裂を生じさせ、国民統合を阻害する大きな要因となっていた。1970年代にアカデミーと宗教省のあいだで繰り広げられた、タム文字かラーオ文字の追加かという議論には、世俗教育と仏教教育という、二つの教育制度のあいだにできた亀裂の深さがうかがえよう。そして世俗/仏教の対立を背景に、音韻型/語源型という正書法を巡る対立が解消されないまま、タイ語の影響は仏教教育の教材だけではなく、映画やラジオなどの新しい娯楽、新聞や雑誌といった出版物をとおして、圧倒的な勢いでラオスへと流入し、人びとの日常の言語生活に影響を及ぼすようになっていた。

しかしこのようなラーオ語をめぐる混乱が、王国政府の人びとのあいだに、次第にフランス語の追放とタイ語の影響からラオスを守り、ラーオ語を真の国民語としていこうという、言語ナショナリズムを醸成させていくことになる。『サート・ラーオ』には、タイ語語彙の流入に対する懸念や、政府のフランス語重視への反感を表明した、一般の読者からの投書が頻繁に届いており、このことは広範な人びとが、タイ語とフランス語の脅威に直面するなかで、ラーオ語を国民語として認識するという、否定的同一化の過程に取り込まれるようになっていたことを示すものといえる。そしてこうした人びとの言語ナショナリズムは、やがて表向きはアカデミーを設置し、ラーオ語の復興を謳う一方で、現実の公務においてはフランス語を使い続ける王国政府エリート政治家たちへの不満となって現れ、パテート・ラーオへと合流していくことになっていった。

6-3 パテート・ラーオー革命と言語ナショナリズム

メコン川流域の都市部を支配領域とする王国政府と異なり、パテート・ラーオにおいては、ラーオ族主体の国民統合にいかにか少数民族を取り込み、多民族からなる「ラオス国民」をつくりあげていくかが、革命闘争を勝利へ導くための、第一の課題となった。そのため、パテート・ラーオの言語政策は、諸民族の共通語としてのラーオ語の形成・普及と「少数」民族語の発展の二大方針のもとにす

²¹¹ 大言語ナショナリズムについては、1-2-3を参照のこと。

められることとなる。もっとも公正を期すために、王国政府においても山岳少数民族地域への学校建設が多少はなされていたこと[Brown and Joseph 1986: 238]、1962年の教育改革では、初等教育の最初の段階で各少数民族の母語による教育の可能性に言及されていたことを述べておく必要があるだろう²¹²[Kasuang Sueksathikan 1973: 16]。しかし王国政府の少数民族地域の学校は、戦闘のなか、1960年代のうちにパテート・ラーオの解放区に組み込まれており²¹³[Brown and Joseph 1986: 238]、62年の教育改革においても、「少数民族学校」についての項目は見られない。少数民族語に関しても、王国政府では、少数民族語の文字化は国民統合の妨げになると好まれず、独自のモン(Hmong)語ローマ字表記を使って布教をおこなっていたプロテスタント宣教師と政府の役人とのあいだに、緊張が走ることもあったという[Smalley, Chia and Gnia 1990:159]。王国政府の小学校教科書にしても、例えば小学4年のラーオ語教科書の挿絵をみると、ラーオ族の日常生活が描かれたもので大半が占められ、少数民族のものは、ラオスの人口構成を紹介した課のなかで、地図のなかに少数民族が描かれたものがわずかにひとつ存在するに過ぎない²¹⁴[写真 6-1][Kasuang Sueksathikan 1966: 155]。

[写真 6-1] 地図のタイの部分には「ラオス人民は多民族から成る」と書かれている。



出典：[Kasuang Sueksathikan 1966: 155]

そこでは、少数民族が山岳地域に居住していること、ラオスの領域に住むものは

²¹² 可能であれば、初等教育の最初の段階（期間などは明記されていない）で、国民語とともに、彼らの母語で学習することが勧められている[Kasuang Sueksathikan 1973: 16]。

²¹³ ウドムによると、パテート・ラーオでは1971年の段階で、フワパン県、シエンクワン県、ルアンナムター県に、少数民族学校が23校あり、生徒数は1230名であったという[Udom 1994: 113]。

²¹⁴ 筆者は王国政府版の「道徳」に相当すると思われる『市民の義務 *Nathi Phonlamueang*』も入手したが、税金制度や憲法などについての説明が中心で、『ラーオ語』の教科書の方が、パテート・ラーオの『道徳』に近い内容であったため、ここでは『ラーオ語』の教科書を用いた。

誰であれ、ラオス国民であることが書かれてはいるが、パテート・ラーオにみられたような、少数民族の文化や言語の尊重が、とりたてて強調されることはなかった[Kasuang Sueksathikan 1966: 155-157]。そしてこうした差異は、パテート・ラーオがつくったラーオ語の「歴史」と王国政府のそれとの違いにもあらわれていた。

先にみたように、王国政府においてはラーオ語がタイ系民族の祖語であるという、ラーオ族を中心としたタイ系諸民族中心のラーオ語の「歴史」が形成され、それ以外の少数民族を通時的に「ラオス国民」に統合しようという努力はみられなかった。これに対してパテート・ラーオでは、ラーオ語の復興を外圧の侵略から戦ってきたという「愛国者の歴史」と結びつけることで、きわめて曖昧に、ラーオ語の継承者のなかに少数民族を取り込む工夫がなされていた。そして「国民・大衆・科学」の3原則のもと、ラーオ語は多様な人びとを後進状態から救い出し、進歩的な生活へと導く「武器」であるとして、ラーオ語による教育制度の整備がすすめられていく。

パテート・ラーオでは、全レベルの教授言語をラーオ語とする政策がとられ、語彙と正書法を中心に、ラーオ語の整備がすすめられていった。ここでは外国の影響、すなわちタイ語とフランス語の影響を排除したラーオ語正書法の確立が目指され、ラーオ語の外国語からの「解放」は現在、民族解放闘争の名のもとに王国政府、アメリカとの闘争を繰り広げているパテート・ラーオの勝利を象徴的に示すものとされていった。しかし『ラーオ語文法』の前書きで、ラーオ語を「国民的・大衆的・科学的・進歩的」なものとすることが述べられているように、パテート・ラーオにおいて音韻型正書法は、ただ起源への回帰ということではなく、「進歩的」なものであると考えられた。プーミーが、1940年代の正書法会議に参加していたことを考えれば、王国政府と同様、ここにも植民地時代の議論からの連続性が見出される。そして識字運動や学校建設など、解放区での教育が拡大するにつれ、ラーオ語は多様な人びとの間に、パテート・ラーオの政治イデオロギーを浸透させ、ラーオ族主軸の「ラオス国民」を建設していくための唯一の「武器」となっていた。

一方、パテート・ラーオは王国政府の支配領域においても、秘密裏に宣伝活動を実施し、その際、解放区でラーオ語による教育がおこなわれているということ、それ自体が格好の宣伝材料となっていた。パテート・ラーオでは、王国政府の教育制度を「奴隸的・植民地的」として非難し、解放区の教育の「国民的特徴」を強調した。中等教育以上のフランス語への依存など、王国政府のフランス語重視に不満を募らせていた王国政府の人びとにとって、「国民的特徴」を掲げたパテート・ラーオのプロパガンダは魅力的にうつったのであろう。現実には、教育内容やレベルに大きな差異が存在したにもかかわらず、学生たちを中心に、パテート・ラーオの支持者は確実に増加し、体制変換へのひとつの原動力となっていっ

た。しかしパテート・ラーオが統制を強めるなか、そうした人びとの熱狂が、最終的には裏切られることとなったことは、第5章でみたとおりである。

おわりに

以上が、植民地時代から 1975 年の社会主義革命までの、ラオスにおける言語ナショナリズムの展開である。最後に、第 1 章で述べた 4 つの視点に立ち返って、本論を総括することにした。

1 点目は、植民地支配下、ラーオ人エリートがフランスによって与えられたラーオ語の評価をどのように克服し、タイ語とラーオ語の地位逆転をはかったか、という点に着目することであった。本論文をとおして明らかとなったことは、植民地時代、フランスによって着手されたタイ語からの言語的独立という方針が、独立後も王国政府、パテート・ラーオの両体制において維持され、現在にいたるまで、ラーオ語形成の根本方針となってきたことである。しかしながら、これはフランスによって与えられた枠組みをそのまま引き写したのではなく、ラーオ人のエリートたちが音韻型正書法の「進歩性」を構築し、そこに独自の伝統を見出すという過程を経てきたものであった。植民地期のラーオ人エリートのナショナリズムを、反植民地ナショナリズムと呼べるかどうかは判断の難しい問題であり、少なくともラオスにおいて、チャタジーのような、植民地支配者に対して、エリートたちが、精神領域における自己（ラーオ語）の優位性を説くということは見られない²¹⁵。ラオスでは、フランスの支配下、フランス語に対する優位ではなく、まずはタイ語に対する優位が構築され、その意味ではフランスの枠組みのなかで発展した言語ナショナリズムであった。とはいえ、序列の逆転にみられたように、ある程度の自主性をもって、ラーオ語の正書法を議論していくなか、エリートたちのあいだに、ラーオ語とそれを共有するラオス国民のイメージが想像され、独立後の本格的な言語ナショナリズムへとつながったとみることはできるだろう。

2 点目は、植民地時代、王国政府、パテート・ラーオのそれぞれにおける、語彙や正書法に関する議論に焦点を当てるということであった。再三にわたって述べてきたように、植民地時代以降のラーオ語の形成は、つねにタイ語からの言語的独立を念頭にすすめられてきた。語源型の支持者は、ラーオ文字でパーリ語を記述できるようにすること、すなわちタイ文字と同等の機能をラーオ文字に与えることで、仏教をとおしてのタイ語の影響を遮断し、ラーオ語とラオス仏教の近代化をはかろうとした。さらに王国政府時代になると、この主張の背景に、世俗教育と仏教教育のあいだの亀裂を修復し、仏教教育出身者のおかれた社会的不平等を克服しようという意図が含まれるようになる。

一方、植民地時代に構築された、音韻型正書法の合理性、進歩性という思想は、王国政府とパテート・ラーオの双方に受け継がれていった。両者の正書法の規則は、同一のものではなかったが、どちらも発音どおりに綴るという方向性が、進

²¹⁵ 1-2-4 で述べたように、チャタジーは言語を精神領域に分類している。

歩的なものであるとの認識をもっていた点では一致していた。そしてプーミーが「健康」「スカパーブ」の発音を変えたことや²¹⁶、アカデミーがタイ語とラーオ語の語彙を区別しようと、様々な試みをおこなったことにみられたように²¹⁷、ここでもタイ語との差異化は強く意識されていた。

実際、内戦時代、映画やラジオなどの新しい娯楽、出版物をとおして、ラーオ語へのタイ語の流入は著しく、とくにメコン川沿いの都市部を支配領域とした王国政府においては、出版語という点では、ラーオ語よりもタイ語のほうが、はるかに流通している状況にあった。そうしたなか、タイ語は、3点目で述べるフランス語の存在とともに、人びとがそれとの比較・区別をとおしてラーオ語を国民語として認識していくという、否定的同一化の触媒として、「ラオス国民」の形成に貢献していくことになる。チャンが執拗なまでにおこなった、タイ語とラーオ語の区別も、実際には言語の境界線など存在しないなか、「ラオス国民」の境界に「ラーオ語」の境界を一致させようとした、必死の試みであったといえよう。そしてこの一連の過程はまた、コミュニケーション手段としての言語の形成が、象徴性への要求によっていかに左右されるものであるかということをも、明確に示すものとなっている。

3点目は、従来のラオスの言語ナショナリズムに関する研究で、ほとんど分析されてこなかった、フランス語との関係に着目した。植民地時代をとおして、ラーオ語を「我々の言語」とする言語ナショナリズムが芽生えてはいたものの、王国政府においては、独立後もフランス語が実質的な上位言語としてとどまり、フランス語能力の有無が社会的上昇の機会を決定するという、言語を要因とした社会階層の分化を引き起こしていた。そして世俗/仏教という、2つの教育制度間の溝が深まるなか、ラーオ語の標準化は遅れ、そのことがタイ語の流入を助長するという、悪循環に陥っていたのである。しかし2点目においても述べたように、こうした状況がフランス語、タイ語という新旧支配者の言語からのラーオ語の言語的独立の達成を目指す、言語ナショナリズムを醸成させ、1960年代ごろより、ラーオ語を真の国民語にしていこうという、言語的要求が高まっていく。この意味で、フランス語もまた、タイ語とともにラーオ語とラオス国民の形成を促す、否定的同一化の契機を提供していたといえることができる。しかし幸か不幸か、フランス語・タイ語からの言語的独立という要求は、これら二国を背後につけた王国政府と闘う、パテート・ラーオと少なくとも言語面において、倒すべき敵を共有することとなり、パテート・ラーオのプロパガンダにとって格好の対象となっていた。

4点目は、パテート・ラーオの国民統合における、ラーオ語の位置づけを検討するというものであった。パテート・ラーオでは、少なくとも書面上、諸民族の共

²¹⁶ 5-2-3の(2)を参照のこと。

²¹⁷ 4-5-2の(2)を参照のこと。

通語としてのラーオ語の形成・普及と諸民族語の発展の 2 点を基軸とした政策がとられていた。しかしラーオ族以外の言語で文字化され、教科書が編纂されたのはモン語のみであったという事実からも分かるように、実質的には共通語としてのラーオ語の普及にもっぱら重点がおかれ、教育政策の進展とともに、ラーオ語は解放区を代表する、唯一の国民語となっていた。そしてさらに道德教育などをおして、多様な人びとのあいだに「進歩的なラーオ族」というメッセージが刷り込まれ、ラーオ語はラーオ族主軸の国民統合を通時的・共時的に支えるものとなっていたのである。

以上の本論の分析からは、タイ語とフランス語という、二つの言語の存在が、否定的同一化というかたちをとって、ラーオ語の形成、そしてそれと同時に、「ラオス国民」意識の醸成を促進していった、ということが明らかとなった。言語は排斥の手段ではない、というアンダーソンの言葉は正しい²¹⁸。しかし包摂的であるがゆえに、ラオスの領域へと流れ込んだタイ語が、何の摩擦も引き起こすことなく、そのまま「ラオス国民」想像の媒体となったわけではなかった。本論で検討した、正書法や語彙に関するさまざまな議論からは、タイ語との接触をおして、ラーオ語の存在を認識し、植民地支配によってつくられた「ラオス」の領域を、ナショナルなものとしてみなしていくという、否定的同一化のプロセスが、国民形成の重要な契機となっていたことがわかる。さらにフランス語の存在もまた、教授言語や公用語など、主として言語のステータスに関わる領域から、ラオス人の言語ナショナリズムを刺激し、否定的同一化を促進する要因となっていた。そしてこの背景には、言語に国民の表象性を求める、強い言語ナショナリズムが存在したということができる。

ラオスの内戦は、結果としてこのような言語ナショナリズムの展開を巧みに利用した、パテート・ラーオの勝利に終わることとなった。もっとも、ここではこのことが、パテート・ラーオ勝利の直接の原因となった、などというつもりはない。しかしいづれにせよ、本論で考察したラオスの事例は、国民の想像に際して、その媒体となる言語が決して「何語でもよい」というわけにはいかないケースが存在することをはっきりと示している。そしてまた、今日グローバル化が進み、「英語帝国主義」という言葉が聞かれるようになる一方で、世界各地で地域言語の擁護や復興を求める動きが頻発しているという事実は、ラオスのケースが決して特殊なものではない、ということの意味している。

1975 年 12 月 2 日、ラオス人民民主共和国が成立すると、ラーオ語は唯一の公用語となり、全レベルの教授言語もラーオ語となった。しかしその一方で、少数民族言語に関しては、内戦期に見られたような、モン語の教科書が編纂されることはなく、かつての二大方針から、諸民族語の発展という項目が、抜け落ちてしまったかのように思われる。75 年以降の歴史からは、社会主義革命の結果のラーオ

²¹⁸ 1-2-3 の引用箇所を参照のこと。

語の「解放」が、少数民族語にとっては「抑圧」とまではいかなくとも、「衰退」へとつながる、プロセスの開始であったといえる状況が、生み出されているのである。そうしたなか近年、内戦後にアメリカへと亡命したモン族によって、モン語で作成された雑誌や辞書、音楽 CD などが輸入され、ヴィエンチャン市内の商店で売られるといった動きもみられるようになっている。またラーオ語に関しても、旧体制（王国政府側）の亡命知識層が、王国政府時代の正書法による辞書や文学作品を編纂し、インターネットをとおして販売するということが起こっている。依然として続くタイ語の影響とともに、このような海外の動きが今後、ラオス国内の言語状況に、どのような影響を与えていくことになるのか、その行方を引き続き見守っていく必要があるようである。

主要参考文献

<邦語文献>

- 赤木攻. 1999. 「自由タイ」石井米雄・高谷好一・前田成文・土屋健治・池端雪浦監修
『新訂増補 東南アジアを知る事典』129-130. 平凡社.
- 天川直子・山田紀彦（編）. 2005. 『ラオス 一党支配下の市場経済化』研究双書 No.
545. アジア経済研究所.
- 綾部恒雄・石井米雄（編）. 1996. 『もっと知りたいラオス』弘文堂.
- アンダーソン、ベネディクト. 1997. 『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』
白石さや・白石隆訳. NTT 出版.
- 乾美紀. 2004. 『ラオス少数民族の教育問題』明石書店.
- 飯島明子. 1999. 「第 I 部第六章 上座仏教世界 第一節 北方タイ人諸王国」、「第 II
部第六章 植民地化の「ラオス」」石井米雄・桜井弓躬雄編『東南アジア史 I 大陸
部』133-156, 347-363. 山川出版社.
- 石井米雄. 1975. 『上座仏教の政治社会学—国教の構造』創文社.
——1999. 「第 II 部第三章 シャム世界の形成」石井米雄・桜井弓躬雄編『東南アジ
ア史 I 大陸部』256-277. 山川出版社.
- 和泉模久. 1988. 『カンボジア語入門』泰流社.
- 伊藤正子. 2003. 『エスニシティ<創生>と国民国家ベトナム—中越国境地域タイ
族・ヌン族の近代』三元社.
- 今井昭夫. 2001. 「ベトナムにおける漢字と文字ナショナリズム—漢字・漢文からロー
マ字表記のベトナム語へ」『ことばと社会』5: 126-143.
- 上田（鈴木）玲子・木口由香. 1998. 「ラオス語とタイ語の基礎語彙対応表（1）」『東京
外大東南アジア学』4: 179-203.
- カルヴェ、ルイ＝ジャン. 2006. 『言語学と植民地主義—ことば喰い詳論』砂野幸稔訳.
三元社.
- 菊池陽子. 1997a 「ラオスの形成—『ラーオ・ニャイ』新聞の分析を通して」『早稲田大
学大学院文学研究科紀要』第 42 輯・第 4 分冊: 25-37.
——1997b. 「フランス植民地期、ラオス語正書法の確定—ラオス・ナショナリズム
の一底流」『史滴』19: 78-91.
——2002. 「ラオスの国民国家形成—1940 年代を中心に」後藤乾一責任編集『岩波
講座東南アジア史 8 国民国家形成の時代』149-172. 岩波書店.
——2003. 「第 6 章 現代の歴史」ラオス文化研究所編『ラオス概説』149-170. め
こん.
——2004. 「1940 年代初期のラオスに対するタイの宣伝活動とフランスの対応」根
本敬編『東南アジアにとって 20 世紀とは何か：ナショナリズムをめぐる思想状況』
23-38. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

- 栗原浩英. 1988. 「ベトナム労働党の文芸政策転換過程（1956～58年）—社会主義化の中の作家・知識人」『アジア・アフリカ言語文化研究』36: 1-26.
- 黒宮一太. 2002. 「E.ケドゥーリー『ナショナリズム』」大澤真幸編『ナショナリズム論の名著50』133-142. 平凡社.
- ケドゥーリー、エリ. 2000. 『ナショナリズム』小林正之・栄田卓弘・奥村大作訳. 学文社.
- ゲルナー、アーネスト. 2000. 『民族とナショナリズム』加藤節監訳. 岩波書店.
- 塩川伸明. 2009. 『民族とネーション—ナショナリズムという難問』岩波新書.
- 鈴木玲子. 1998. 「タイ語とラオ語の語彙比較研究」『アジア・アフリカ文法研究』27: 115-130.
- 2001. 「ラオ文字」町田和彦編著『華麗なるインド系文字』184-185. 白水社.
- スミス、アントニー.D. 1998. 『ナショナリズムの生命力』高柳先男訳. 晶文社.
- 1999. 『ネーションとエスニシティ—歴史社会学的考察』巢山靖司・高城和義他訳. 名古屋大学出版会.
- 瀬戸裕之. 2003. 「第4章 政治」ラオス文化研究所編『ラオス概説』93-124. めこん.
- 竹内正右. 1999. 『モンの悲劇：暴かれた「ケネディ戦争」の罪』毎日新聞社.
- 2004. 『ラオスは戦場だった』クレイ・バッシンジャー英文編集. めこん.
- 田中克彦. 2003. 『言語の思想：国家と民族の言葉』岩波書店. (初版1975、日本放送出版協会)
- 田中稔穂. 2006. 「20世紀初頭のシャムにおける「ラーオ語」の「タイ語」化」『言語社会』1: 159-177.
- 富田竹二郎. 1997. 『タイ日大辞典』めこん.
- トンチャイ・ウィニツチャクン. 2003. 『地図がつくったタイ—国民国家誕生の歴史』石井米雄訳. 明石書店.
- 林行夫. 2000. 『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学出版会.
- 平野千果子. 2002. 『フランス植民地主義の歴史：奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院.
- プーミー・ウォンウィット. 1970. 『人民のラオス』藤田和子訳. 新日本出版社.
- 古田元夫. 1987. 「国家と言語—ヴェトナムを中心に」西川正雄・小谷汪之編『現代歴史学入門』277-309. 東京大学出版会.
- 1991. 『ベトナム人共産主義者の民族政策史—革命の中のエスニシティ—』大槻書店.
- ホブズボーム、E.J. 2001. 『ナショナリズムの歴史と現在』浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳. 大月書店.
- 前田初江. 1999. 「ブンタノーン・ソムサイポン略歴」『アジア文学』4: 108.
- 町田和彦. 2001. 「インド系文字について—この本の楽しみ方—」町田和彦編著『華麗

- なるインド系文字』7-20. 白水社.
- 峰岸真琴. 2001. 「クメール文字」河野六郎・千野栄一・西田龍夫編著『言語学大辞典別巻 世界文字辞典』349-357. 三省堂
- 村嶋英治. 1999. 「第Ⅱ部第八章 タイ近代国家の形成」石井米雄・桜井弓躬雄編『東南アジア史Ⅰ 大陸部』397-439. 山川出版社.
- 安井清子. 2003. 「第6章 民族」ラオス文化研究所編『ラオス概説』171-206. めこん.
- 矢野順子. 2002. 「ラオスの正書法改革に見る文字ナショナリズム—王国政府とパテート・ラーオの二つの体制下における知識人の議論から」『ことばと社会』6: 106-129.
- 2004. 「「ラオス語」の構築—雑誌『パイ・ナム』の分析を中心に」『一橋研究』29(1): 91-111.
- 2007. 「「ラオス国民」の形成と「武器」としてのラーオ語—パテート・ラーオの教育政策とプロパガンダを中心として」『東南アジア 歴史と文化』36: 3-35.
- 2008. 『国民語が「つくられる」とき—ラオスの言語ナショナリズムとタイ語』風響社.
- 山田紀彦. 2003. 「ラオス内戦下の国民統合過程—パテート・ラーオの民族政策と「国民」概念の変遷」竹内進一編『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐる』147-181. 研究双書 No.534. アジア経済研究所.
- 吉野耕作. 1997. 『文化ナショナリズムの社会学: 現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.
- ラオス文化研究所(編). 2003. 『ラオス概説』めこん.
- リーチ、E. R. 1987. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳. 弘文堂.

<英・仏語文献>

- Anderson, Benedict. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London; New York: Verso.
- Baker, Chris and Pasuk Phongpaichit. 2005. *A History of Thailand*. Port Melbourne: Cambridge University Press.
- Brown, M. Alister and Joseph J. Zasloff. 1986. *Apprentice Revolutionaries: The Communist Movement in Laos, 1930-1985*. Stanford: Hoover Institute Press.
- Chatterjee, Partha. 1993. *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. New Jersey: Princeton University Press.
- Christie, C. J. 1979. "Marxism and the History of the Nationalist Movements in Laos" *Journal of Southeast Asian Studies* 10(1): 145-158.
- Cuaz, M.J. 1904. *Lexique Français-Laocien*. Hongkong: Imprimerie de la Société des Mission étrangères.
- 1906. *Manuel de Conversation Franco- Laocienne*. Hongkong: Imprimerie de Nazareth.

- Deutsch, Karl W. 1953. *Nationalism and Social Communication: An Inquiry into the Foundations of Nationality*. New York: The Technology Press of The Massachusetts Institute of Technology and John Wiley & Sons, Inc. London: Chapman & Hall, Ltd.
- Diller, Anthony. 1988. "The Syntax and "National Grammar"." *Language Sciences* 10(2): 273-312.
- 1993. "What Makes Central Thai a National Language?" In *National Identity and its Defenders* edited by Craig J. Reynolds, 87-132. Chaing Mai: Silkworm Books.
- Dodd, William Clifton. 1996. *The Tai Race*. Bangkok: White Lotus. (1st ed. 1923. The Torch Press)
- Dommen, Arthur J. 1971. *Conflict in Laos: The Politics of Neutralization*. New York: Praeger Publishers.
- Edwards, John. 1985. *Language, Society and Identity*. Oxford: Basil Blackwell.
- Enfield, N. J. 1999. "Lao as a National Language." In *Laos: Culture and Society*, edited by Grant Evans, 258-290. Chaing Mai: Silkworm Books.
- 2007. *A Grammar of Lao*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Estrade. 1895. *Dictionnaire et Guide Franco-Laotiens*. Toulouse: Imprimerie G. Berthoumien.
- Evans, Grant. 1999a. "Introduction: What is Lao Culture and Society?" In *Laos: Culture and Society*, edited by Grant Evans, 161-190. Chaing Mai: Silkworm Books.
- 1999b. "Apprentice Ethnographers: Vietnam and the Study of Lao Minorities." In *Laos: Culture and Society*, edited by Grant Evans, 1-34. Chaing Mai: Silkworm Books.
- 1998. *The Politics of Ritual and Remembrance Laos since 1975*. Chaing Mai: Silkworm Books.
- 2002. *A Short History of Laos: The Land in Between*. Chaing Mai: Silkworm Books.
- Fall, Bernard B. 1969. *Anatomy of a Crisis: The Laotian Crisis of 1960-61*. New York: Doubleday & Company, Inc.
- Fishman, Joshua, ed. 1972. *Language and Nationalism: Two Integrative Essays*. Rowley, MA: Newbury House.
- Gellner, Ernest. 1983. *Nations and Nationalism*. Oxford: Basil Blackwell.
- Goscha, Christopher E and Søren Ivarsson, eds. 2003. *Contesting Visions of the Lao Past: Lao Historiography at the Crossroads*. Copenhagen: NIAS Press.
- Grabowaky, Volker, ed. 1995. *Regions and National Integration in Thailand 1892-1992*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Guignard, Théodore. 1912. *Dictionnaire Laotien-Français*. Hongkong: Imprimerie de Nazareth.
- Gunn, Geoffrey C. 1988. *Political Struggles in Laos (1930-1954)*. Bangkok: Duang Kamol Book House.

- Hobsbawm, E. J. 1990. *Nations and Nationalism since 1780: programme, myth, reality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hospitalier, J.-J. 1932. *L'Écriture Laotienne*. Paris: Imprimerie Nationale.
- 1937. *Grammaire Laotienne*. Paris: Imprimerie Nationale.
- Hutchinson, John and Anthony D. Smith, ed. 1994. *Nationalism*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Ivarsson, Søren. 1999. "Towards a New Laos: Lao Nhay and the Campaign for National "Reweakening" in Laos, 1941-45." In *Laos: Culture and Society*, edited by Grant Evans, 61-78. Chaing Mai: Silkworm Books.
- 2008. *Creating Laos: The Making of a Lao Space between Indochina and Siam, 1860-1945*. Copenhagen: NIAS Press.
- Katay Don Sasorith. 1943. *Alphabet et Écriture Lao*. Vientiane: Éditions du "Pathet Lao".
- 1953. *Le Laos: Son Évolution Politique Sa place dans l'Union française*. Paris: Éditions Berger-Levrault.
- Kedourie, Elie. 1993. *Nationalism*. Oxford: Cambridge Mass. (4th expanded ed.)
- Keyes, Charles F. 2003. "The Politics of Language in Thailand and Laos." In *Fighting Words* edited by Brown, Michael E. and Šumit Ganguly, 177-210. Cambridge: The MIT Press.
- Khamkeo, Bounsang. 2006. *I little Slave: A Prison Memoir from Communist Laos*. Washington: Eastern Washington University Press.
- Kloss, Heinz. 1967. "'Abstand languages' and 'Ausbau languages'." *Anthropological Linguistics* 9: 29-41.
- Kohn, Hans. 1944. *The Idea of Nationalism: Study in Its Origins and Background*. New York: Macmillan.
- Langer, Paul F. 1971. *Education in the Communist Zone of Laos*. Santa Monica: The Rand Corporation.
- Langer, Paul F. and Joseph J. Zasloff. 1970. *North Vietnam and The Pathet Lao: Partners in the Struggle for Laos*. Cambridge: Harvard University Press.
- Leach, E. R. 1970. *Political Systems of Highland Burma*. London: The Atholone Press. (1st ed. 1954 G. Bell & Son Ltd.)
- LeBar, Frank M, Adrienne Suddard. 1960. *Laos: Its People, Its Society, Its Culture*. New Haven: HRAF Press.
- Le Ky Huong, Pierre. 1917. *Essai de Cours de Langue Laotienne*. Vientiane: Imprimerie du Gouvernement.
- Massie, M. 1894. *Dictionnaire Laotien*. Paris: E. Leroux.
- Mayoury Ngaosavathn 1993. *Rememberance of a Lao Woman Devoted to Constructing a Nation: Khampheng Boupha*. Vientiane: Lao Women's Union.
- Meyer, Roland. 1924. *Cours de Langue Laotienne*. Vientiane: Imprimerie du Gouvernement.

- Millar, Robert McColl. 2005. *Language, Nation and Power: An Introduction*. New York: Palgrave Macmillan.
- Myhill, John. 2006. *Language, Religion and National Identity in Europe and the Middle East*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Neher, Clark D. 1991. *Southeast Asia in the New International Era*. Boulder: Westview Press.
- Özkirimli, Umut. 2000. *Theories of Nationalism: A Critical Introduction*. Hampshire; New York: Palgrave.
- Phathamavong, Somlith. 1955. "Compulsory Education in Laos." In *Compulsory Education in Cambodia, Laos and Viet-Nam*. by Bilodeau, Charles, Somlith Pathammavong, Lê Quang Hông. Paris: Unesco.
- Pholsena, Vatthana. 2004. "The Changing Historiographies of Laos: A Focus on the Early Period." *Journal of Southeast Asian Studies* 35(2): 235-259.
- 2006. *Post-War Laos: The Politics of Culture, History, and Identity*. Ithaca: Cornell University Press.
- Pickerell, Albert G. 1960. "The Press of Thailand: Conditions and Trends." *Journalism Quarterly* 38: 83-96.
- Ridley, Charles Price, Paul H.B. Godwin and Dennis J. Doolin. 1971. *The Making of a Model Citizen in Communist China*. Stanford: The Hoover Institution Press.
- Smalley, William A, Chia Koua Vang and Gnia Yee Yang 1990. *Mother of Writing: The Origin and Development of a Hmong Messianic Script*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Smith, Anthony D. 1971. *Theories of Nationalism*. London: Duckworth.
- 1995. "Gastronomy or geology? The Role of Nationalism in the Reconstruction of Nations." *Nations and Nationalism* 1(1): 3-23.
- Snyder, Tim. 1997. "Kazimierz Kelles-Krauz(1872-1905): A Pioneering Scholar of Modern Nationalism." *Nations and Nationalism* 3(2): 231-250.
- Spencer, Philip and Howard Wollman. 2002. *Nationalism: A Critical Introduction*. London, Thousand Oaks, New Delhi: Sage Publications.
- Stuart-Fox, Martin. 1997. *A History of Laos*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2001. *Historical Dictionary of Laos*. (2nd ed.) Lanham, Maryland and London: Scarecrow Press, Inc.
- 2002. "On the Writing of Lao History: Continuities and Discontinuities." In *Breaking New Ground in Lao History: Essays on the Seventh to Twentieth Centuries*, edited by Ngaosrivathana, Mayoury and Kennon Breazeale, 1-24. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Taupin, J. 1891. *Petit Vocabulaire Laotien*. Saigon: Imprimerie Rey, Curiol et C.
- 1893. *Vocabulaire Franco-Laotien*. Hanoi-Haiphong: F.-H. Schneider Imprimeur.
- Thao Bongk. 1936. *Syllabaire Laotien: Baep Son An Phasa Lao*. Hanoi: Ideo.

- Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*. Chaing Mai: Silkworm Books.
- Trudgill. 2004. “Glocalisation and the Ausbau Sociolinguistics of Modern Europe” In *Speaking from the Margin: Global English from a European Perspective*. edited by Anna Duszak and Urszula Okulska. Frankfurt, New York, Oxford: Peter Lang. (online article)
- Wright, Sue 2000. *Community and Communication: The Role of Language in Nation State Building and European Integration*. Clevedon: Multilingual Matters.
- 2004. *Language Policy and Language Planning: From Nationalism to Globalisation*. New York: Palgrave Macmillan.
- Zaslloff, Joseph J. 1973. *The Pathetic Lao: Leadership and Organisation*. Lexington: Lexington Books.
3349. 1978. *Iron Man of Laos Prince Phetsarath Ratanavongsa*. translated by John B. Murdoch; edited by David K. Wyatt. Ithaca: Cornell University.

<ラーオ語・タイ語文献>

- B.K. Chaloesai. 1971. “Phasa Mae”(『母語』) In *Phasa Mae*, Lao Hak Sat, 3-24. Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.
- Buakao Chaloenlangsi. 1993. *Kan Pativat Lao lae Vannakhadi Pativat*. (『ラオス革命と革命文学』) Vientiane: Samnak lae Chamnai Puem haeng Lat S.P.P Lao. (初版 1972)
- Bunthanong Somsaiphon. 1989. *Long su Thanong Lan Sang*. (『ランサーン通りへ』) Vientiane: Samoson Nakkhian Num.
- Chanthi Dueansavan. 2002. *Saen Thang haeng Sivit 1*. (『人生の道 1』) Vientiane: Samakhom Nakpaphan. (初版 1965)
- Coedès, George. 2507(1964). *Tamnan Akson Thai*. (『タイ文字の由来』) Bangkok: 705 Khrusapha.
- Humphon Rattanavong. 2004. *Sadet Suphanuvong nai Duang Chai khong Phuak Hao*. (『我々の心の中のスパーヌウォン殿下』) Vientiane: Hongphim haeng Lat.
- Kasuang Mahat Thai. 1949.1 *Chotmai het Ratsakitcha*. (『官報』) no.1
- Kasuang Sueksathikan. 1973. *Khumue Khu Phuea Pativat Tam Lakkan Patihup Kansueksa Kh.S.1962*. (『1962年の教育改革を实践するための教師用手引書』) Vientiane: Kasuang Sueksa.
- Kayson Phomvihan. 1974. *Sapsuem Naeo Thang Kan Sueksa khong Phak, Thang Na Khanyai Phalakit Kan Sueksa*. (『党の教育指針通達、教育の精力的拡大』) Sam Neua: Hong Phim Mittaphap Lao-Chin khong Sunkang Naeo Lao Hak Sat.
- Khamfueang Tunalom. 1969. “Sadet kap Pathanukom Lao.” (『スパーヌウォン殿下と辞書』) In *Sadet Chao Suphanuvong Mannyuen*, Lao Hak Sat, 18-20. Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.

- Khamphao Phonkao. 1994. “Kansueksa Lao nai Lainya Pi 1893-1975.” (「1893年から75年のラオスの教育」) In *Pavat Kan Sueksa Lao*, 21-100. Vientiane: Phanaek Sueksasat-Chittavithanya Mahavithanyalai Sangkhue Viang Chan.
- Khanakhammak Vithanyasat Sangkhom haeng S.P.P Lao. 1989. *Chao Suphanuvong Phu Nam Pativat*. (『スパーヌウォン王子、革命の指導者』) Vientiane.
- Kongsammana Phasa Lao. 1974. *Laksut Phasa Lao khong Kommatthanyomsueksa* (『中等教育局のラーオ語カリキュラム』). Vientiane: Kasuang Sueksathikan Sunkang Khonkhwa Kansueksa haeng Sat.
- Lao Hak Sat. 1973. *Kao Pai Su Santiphap*. (『平和へ』) Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.
- 1974. *Khongkan Sang Santiphap*. (『平和建設綱領』) Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.
- 1975. *Pathet Lao*. (『ラオス国家』) Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.
- Lao Nhay. 1944. *Alphabet et Orthographe Lao: Akkhala lae Sakotkham nai Phasa Lao*. Vientiane: Éditions du “Lao Nhay”.
- Lueam Insisiangmai. 1969. *Kansueksa lae Vatthanatham khong Sat*. (『国民の教育と文化』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan Silapakon Kila lae Nyaovason.
- 1972. *Laingan Kitchakan khong Kasuang Sueksathikan lae Silapakon to Sapha haeng Sat Sokpi 1972*. (『1972年度教育・芸術省活動国会報告書』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan Silapakon Kila lae Nyaovason.
- Maha Khamtan 1974. *Pae Sap Nyak*. (『難解用語解説集』) Sam Neua: Hong Phim Mittaphap Lao-Chin khong Sunkang Naeo Lao Hak Sat
- Maha Sila Viravong. (Sila Viravong) 2004. *Sivit Phu Kha*. (『私の人生』) Vientiane: Hongphim Manthaturat.
- Naeo Lao Hak Sat 1968. *Khongkan Kan Mueang*. (『政治綱領』)
- Phamkhac. 2003. “Phaenthi Pathet Lao Dai Chat Phim Khang Thamit.” (「はじめてのラオス国地図印刷」) In *Thahan Asasamak Viat Nam Suai Kan Pativat Lao nai Pang Songkham*, Kasuang Pongkan Pathet, 189-194. Vientiane: Phiphithaphan-Hosamut Kongthap Pason Lao.
- Phanaek Khosana Sunkang Naeo Lao Hak Sat. 1967. *Tatsinchai Pokpakhaksa lae Sang Khet Potpoi*. (『解放区の建設と保護への決意』) Sam Neua: Hongphim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.
- Phanaek Sueksa Sunkang. 1964. *Laksut Kan Son San Pathom Sueksa*. (『小学校カリキュラム』) Sam Neua: Phanaek Sueksa Sunkang.
- Phanya Luang Maha Sena(Phui). 1957. *Baep Hian Vai Lem Nueng: Hian An Nangsue Tham Khian pen Phasa Lao*. (『タム文字教本1』) Bangkok: Tiranasar Press.
- Phimmason Lueangkhamma. 2004. “Pathan Suphanuvong kap Phalakit Kan Sueksa.” (「スパ

- ーヌウォン大統領と教育の仕事」) In *Pathan Suphanuvong*, Khana Khosana Ophom Sun Kang Phak, 51-56. Vientiane: Hongphim haeng Lat.
- Phitsanu Chanvithan. 2002. *Sane Phasa Lao*. (『ラーオ語の魅力』) Bangkok: Nilubol.
- Phumi Vongvichit. 1967. *Vainyakon Lao*. (『ラーオ語文法』) Sam Neua: Phanaek Sueksa Sunkang.
- 1968. *Pathet Lao lae Kan Tosu Misai khong Pasason Lao Tan Latthi Lamueangkhuen Baepmai khong Amelika*. (『ラオスとラオス人民のアメリカ新植民地主義に対する勝利の戦い』) Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.
- 1987. *Khwam Songcham khong Sivit Hao nai Khabuan Vivat haeng Pavatsat khong Pathet Lao*. (『ラオス国の闘争史における私の人生の記憶』) Vientiane: Sathaban Khonkhwa Vithanyasat Sangkhom.
- Rasabanditsapha Lao. 1970. *Vainyakon Lao Phakthi4 Santhalaksana*(『ラーオ語文法 4 韻律論』). Vientiane: Kasuang Sueksathikan.
- 1971. *Kitchakan Rasabanditsapha Sok 1971-72 Korakada-Mithunaa*(『1971-72 年度 6 月-7 月、アカデミー活動報告』). Vientiane: Rasabanditsapha Lao.
- 1972a. *Rasabanditsapha Lao maen Nyang?* (『ラオス・ロイヤルアカデミーとは何か』) Vientiane. Rasabanditsapha Lao.
- 1972b. *Vainyakon Lao Phak1 Akkharavithi*. (『ラーオ語文法 1 文字論』) Vientiane:Kasuang Sueksathikan.
- 1972c. *Saptekniik Frangset-Angkit-Lao*.(『フランス語・英語・ラーオ語専門用語集』) Vientiane: Rasabanditsapha Lao.
- 1973. *Banthuek Samadsarasabanditsaphaa Khang thi 2 sok k.s. 1973 Tae Vanthi 2/7/73-7/7/73*. (1973 年度第 2 回アカデミー全体会議議事録 1973 年 7 月 2 日～7 日) Vientiane: Rasabanditsapha Lao.
- 1974a. *Vainyakon Lao Phak2 Vaichiviphak*. (『ラーオ語文法 2 品詞論』) (4th ed.) Vientiane: Kasuang Sueksathikan.
- 1974b. *Vainyakon Lao Phak3 Vakhanyasamphan*. (『ラーオ語文法 3 統語論』) (4th ed.)Vientiane: Kasuang Sueksathikan.
- Sahaphan Naksueksa haeng Sat. 1972. *Raingan Kansamma lae Kanpasum Luang Nakhian lae Naksueksa haeng Sat Kangthi 2 Pacham Pi 1972*. (『1972 年第 2 回国立学生協会全体セミナーと会議報告書』) Vientiane: Sahaphan Naksueksa haeng Sat.
- Sathaban Khon Khwa Vatthanatham. 1995. *Kong Pasum To Mon Vithanyasat Kiawkap Phasa Lao*. (ラーオ語についての円卓会議) Vientiane: Kasuang Thalaeng Khao lae Vatthanatham.
- Sila Viravong 1935. *Vainyakon Lao*. (『ラーオ語文法』) Vientiane: Hongphasamut Pathet Lao.

- 1961a. *Watchananukom Phasa Lao*. (『ラーオ語辞書』) Vientiane: Khanakammakan Vannakhadi.
- 1961b. *Vainyakon Lao Phak1 Akkharavithi*. (『ラーオ語文法 1 文字論』) Vientiane: Khanakammakan Vannakhadi.
- 1961c. *Vainyakon Lao Phak2 Vaichiviphak*. (『ラーオ語文法 2 品詞論』) Vientiane: Khanakammakan Vannakhadi.
- 1961d. *Vainyakon Lao Phak3 Vakhanyasamphan*. (『ラーオ語文法 3 統語論』) Vientiane: Khanakammakan Vannakhadi.
- 1961e. *Vainyakon Lao Phakthi4 Santhalaksana*. (『ラーオ語文法 4 韻律論』) Vientiane: Khanakammakan Vannakhadi.
- 1975. *Pavatsat Vanthi12 Tula 1945*. (『1945年10月12日の歴史』) Vientiane.
- 1995. *Pavat Nangsue Lao*. (『ラーオ文字の歴史』) Vientiane: Hosamut haeng Sat. (初版 1973)
- 1996a. *Panyot Khong Vannakhadi*. (『文学の利益』) Vientiane: Hosamut haeng Sat.
- 1996b. *Pāli Veyyākaraṇa/ Grammaire Pālie*. Vientiane: Ministère de l'information et de la Culture; École française d'Extrême-Orient. (Première édition 1938)
- 1997. *Chao Maha Uparat Phetsarat*. (『副王ペッサラート』) Vientiane: Phay Nam Kan Phim.
- Sun Sathiti haeng Sat 2005. *Samluat Phonlamueang lae Thi Yu Asai Pi 2005 Bot Laingan Bueang Ton*. (『2005年国勢調査第一次報告書』) Vientiane: SPP Kan Phim lae Pai.
- Sunkang Naeo Lao Hak Sat. 1972. *Mati khong Sun Kan Naeo Lao Hak Sat Wa Duai Kan Phoemthavi Kan Nam Kan Pativat Nanyobai Son Sat*. (『ラオス愛国戦線中央委員会、民族政策実施における指導力強化についての決議』) Sam Neua: Sunkang Naeo Lao Hak Sat.
- Udom Sichaloen. 1994. “Kan Sueksa yu Khet Potpoi Samai Kan Pativat Sat Pasathipatai 1945-75.” (「民族民主主義革命期の解放区における教育」) In *Pavat Kan Sueksa Lao*, 101-118. Vientiane: Phanaek Sueksasat-Chittavithanya Mahavithanyalai Sangkhue Viang Chan.
- Utama Chulamani. 1969. “Sadet Chao Suphanuvong kap Viakngan Sueksa.” (「スパーヌウォン殿下と教育事業」) In *Sadet Chao Suphanuvong Mannyuen*, Lao Hak Sat, 21-28. Sam Neua: Samnak Phim Chamnai Lao Hak Sat.
- Uthin Bunyavong ed. 1990. *Maha Sila Viravong Sivit lae Phonngan*. (『マハー・シラー・ウィーラウォン、生涯と業績』) Vientiane: Khanakammakan Vithanyasat Sangkhom.

教科書

<植民地時代>

Le Bris, Henri. 1923. *Kunlabut Pathom Sueksa/ Un Peu de Tout Première Lectures*

Instructives. Adaption à l'usage des écoles au Laos par Pierre Le Kyhuong. Hanoi: Imprimerie D'Extrême-Orient.

Service Local de L'Enseignement. 1933. *Manuel de Lecture Cours Enfintin Pour l'Enseignement de La Langue Lue et Youne avec Traduction correspondante en langue Laotienne*. Hanoi: Imprimerie D'Extrême-Orient.

———1934a. *Phumisat San Phiyosueksa Phasa Lao (San Pi Thi Song)/Manuel de Geographie Cours Préparatoire*. Vientiane: Imprimerie de Gouvernement.

———1934b. *Baep Son An Phasa Lao San Phiyosueksa (San Pi Thi Song)/ Manuel de Lecture Cours Préparatoire*. Vientiane: Imprimerie de Gouvernement.

<王国政府>

Kasuang Sueksathikan. 1966. *Baep Hian Phasa Lao Pathom 4*. (『ラオス語小学4年』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan.

———1967. *Baep Hian Nathi Phonlamueang Pathom 5*. (『市民の義務小学5年』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan.

———1972. *Baep Hian Nathi Phonlamueang Pathom 6*. (『市民の義務小学6年』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan.

Kommatthanyom Sueksa. 1969. *Phasa Lao San Matthanyom Sueksa Pithi1*. (『ラーオ語中学1年(ファー・グム学校専用)』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan.

———1972. *Phasa Lao San Matthanyom Pithi4*. (『ラーオ語中学4年(ファー・グム学校専用)』) Vientiane: Kasuang Sueksathikan.

<パテート・ラーオ>

Hong Kan Sueksa Sunkang Naeo Lao Hak Sat. 1969. *Khunsombat P1*. (『道徳小学1年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

———1970. *Khunsombat Hong P2*. (『道徳小学2年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

———1971. *Khunsombat Hong P3*. (『道徳小学3年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

———1970. *Khunsombat Hong P4*. (『道徳小学4年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

———1972. *Khunsombat Hong P4*. (『道徳小学4年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

———1971. *Khunsombat Matthanyom1*. (『道徳中学1年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

———1971. *Khunsombat Matthanyom2*. (『道徳中学2年』) Sam Neua: Hong Phim Sunkang Naeo Lao Hak Sat.

1970 年版モン語教科書（小学 3 年？）

雑誌

Fa Ngum(ファー・グム).

Khaosan Samakhom Nakthammasat Sueksa/Bulletin Bimensuel de L'Association Studiants en Droit et en Administration.

Pathet Lao/ Patrie Lao.

Phay Nam(パイ・ナム).

Phuean Kao(プアン・ケーオ).

Phuean Naksueksa(プアン・ナックスクサー)

Siang khong Naksueksa Visa Khruu/ Echos des Etudiants en Pedagogie

Siang Naksueksa（シアン・ナックスクサー）

Sueksathikan（教育）

Vannakhadisan（文学）

新聞

Lao Nhay(ラーオ・ニヤイ)

Sat Lao（サート・ラーオ）

Pituphum（ピトゥプーム）

謝 辞

本論文は、1998年4月に一橋大学大学院言語社会研究科修士課程に入学して以来、11年間に及ぶ私の研究成果をまとめたものである。本論文を完成させるにあたっては、さまざまな方のお世話になった。

指導教官の糟谷啓介先生には、言語社会学、社会言語学分野の文献講読やゼミでの発表をとおして、有益なアドバイスをいただいた。特に修士1年のときに、「国際交渉のフランス語」という授業において、私の未熟なフランス語能力に忍耐強く付き合い、ご指導いただいたことは今でも強く印象に残っている。本論文の第3章においても、私のフランス語訳の誤りを細かい点まで、丁寧に直してくださった。

浅見靖仁先生には、東南アジア地域研究者としての姿勢を徹底的に教えていただいた。修士2年のときに、ラオス留学を迷っていた私の背中を先生が強く押してくださらなければ、ラオスについて研究を続け、博士論文を完成させることは難しかったであろう。厳しさのなかに誠実さの溢れる先生のご指導のもと、研究を続けることができたのは、私にとって何よりも幸運なことであった。

岩月純一先生には、先生が2001年4月に言語社会研究科に着任されて以降、ゼミや論文指導において、数々の貴重なコメントをいただいた。また、大阪外国語大学名誉教授の吉川利治先生には、研究上のアドバイスとともに、先生が何十年もかけて集められた、数々の貴重なラーオ語資料を提供していただいた。

ラオス留学中にも、多くの方のお世話になった。ラオス国立大学文学部ラオス語・ラオス文学専攻においては、ブアリー・パパーパン(Buali Paphaphan)専攻長、セーンファー・ホーラヌパーブ(Saengfa Holanuphab)先生、キアンケーオ・ヌワンナウォン(Kiangkao Nuvannavong)先生を中心に、専攻の各先生方のご指導を受けた。特に私の指導教官であったブアリー先生は、研究を進めるにあたって、親身に相談に乗ってくださり、まさに私のラオスでの研究活動を導いてくださった人であった。その他、教育科学研究所図書室のブン・イアン(Bun Iang)先生、アムパー・ワンナソーパー(Ampa Vannasopha)先生、国立図書館のプーウィアン・シッティウオン(Phuviang Sitthivong)先生、さらにマハー・シラー・ウィーラウオンの娘であるドゥアンドゥアン・ブンニャウオン(Duangduean Bunnyavong)氏、ヴィエンチャン市内のオントゥー寺、ソップルアン寺の僧侶たちなど、様々な方にご助力いただいた。

ラオス以外では、コーネル大学図書館の司書の方々、ベトナムでインタビューに答えてくださった元義勇兵のファム・ドゥック・ズオン(Pham Duc Duong)氏、教育専門家団長であったグエン・フイ・アイ(Nguyen Huy Ai)氏、ハノイの東南アジア研究所の先生方、中国の広西民族大学ラオス語専攻の陶紅副教授、カムプイ・センスーリン(Kamphui Saengsulin)先生(当時)のお世話になった。またベトナム

での調査では、設楽澄子氏（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）、大泉さやか氏（一橋大学大学院言語社会研究科博士課程）が、通訳を務めてくださった。設楽氏はお忙しい中、本論文の校正も引き受けてくださった。

このほか、ここにとてもすべての人の名前を書くことが出来ないほど、多くの方に支えられ、私は博士論文を完成させることができた。お世話になった皆様全員に心より御礼申し上げますと同時に、今後さらに研究を深めていくことで、これらの人びとにご恩返しをすることが出来ればと考えている。

また、本論文のもととなる研究を行うにあたっては、松下国際財団と日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の支援を受けた。これらの支援がなければ、何カ国にも及ぶ調査を実施することが不可能であったことは言うまでもないであろう。最後に記して感謝の意を表したい。

矢野 順子